

秋田県文化財調査報告書第119集

東北縦貫自動車道発掘調査報告書XI

— 孫右エ門館遺跡・案内 I 遺跡・妻の神 II 遺跡・下乳牛遺跡・西町 I 遺跡・西町 II 遺跡 —

1984・12

秋田県教育委員会

序

東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査は、秋田県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて、記録保存を目的に実施しているものであります。昭和54年度から56年度までは鹿角市が、昭和57年度・58年度は小坂町がそれぞれ調査対象となりました。

本報告書は、昭和55年度に発掘調査を実施した19遺跡のうち、の鹿角市孫右エ門館遺跡・案内Ⅰ遺跡・妻の神Ⅱ遺跡・下乳牛遺跡・西町Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査結果を収録したものです。この報告書が、鹿角地方の歴史解明と文化財保護に広く活用されることを望むものであります。

最後に、この調査に御協力いただきました顧問・専門指導員日本道路公団・鹿角市・同教育委員会はじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和59年12月

秋田県教育委員会

教 育 長 齋 藤 長

例 言

1. 本書は、東北縦貫自動車道建設に伴い消滅する遺跡の記録保存のため、秋田県教育委員会が昭和55年度に発掘調査を実施した19遺跡のうち、追加契約により調査が実施された孫右エ門館遺跡(遺跡番号17)、案内Ⅰ遺跡(同18)、妻の神Ⅱ遺跡(同23)、下乳牛遺跡(同26)、西町Ⅰ遺跡(同27)、西町Ⅱ遺跡(同28)の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載されている6遺跡の所在する鹿角盆地についての地形・地質的な説明は既に刊行されている報告書(東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ～Ⅸ)に詳述しているので参照されたい。
3. 出土した石器・剥片・石片の石質同定は、秋田県立博物館嵯峨二郎学芸主事にお願した。
4. 遺構内から出土した炭化材を試料とする¹⁴Cによる年代測定は、日本アイソトープ協会に依頼した。
5. 遺跡・遺構内の土層、出土遺物の色調の記載には、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』を使用した。
6. 遺物の実測には、画像工学研究所製スケッチグラフ卓上型を活用した。
7. 報告書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1、2万5千分の1及び日本道路公団作成の1000分の1の地形図である。
8. 遺跡の写真撮影には主に次の者があたった。

孫右エ門館遺跡	柴田陽一郎	岩見誠夫
案内Ⅰ遺跡	柴田陽一郎	
妻の神Ⅱ遺跡	船木義勝	小田島幸二
下乳牛遺跡	熊谷太郎	
西町Ⅰ遺跡・西町Ⅱ遺跡	児玉 準	
9. 遺物の写真撮影は担当調査員の指示のもとで主に次の者があたった。

鈴木 功	渋谷 志	熊谷 安	高橋れい子
------	------	------	-------
10. 遺物の実測・採拓・トレース・整理等は、各遺跡担当調査員の他に次の者があたった。

孫右エ門館遺跡	藤井安正	高橋 学	熊谷恵子		
案内Ⅰ遺跡	藤井安正	高橋 学	佐藤雅子		
妻の神Ⅱ遺跡	山崎文幸	栗沢光男	池田洋一	山田美喜子	越後谷晴美
下乳牛遺跡	関 直	石木田正幸	田中和徳		
11. 本報告書収載6遺跡の資料整理に際し、次の諸氏から御指導・御教示を賜わった。記して謝意を表する。

国立歴史民俗博物館教授 岡田 茂弘
鹿角市教育委員会主事 秋元 信夫
青森県埋蔵文化財調査センター主査 成田 滋彦

12. 各遺跡の原稿執筆は次の者があつた。

孫右エ門館遺跡	岩見誠夫	藤井安正	高橋 学
案内Ⅰ遺跡	岩見誠夫	藤井安正	高橋 学
妻の神Ⅱ遺跡	船木義勝	栗沢光男	
下乳牛遺跡	熊谷太郎		
西町Ⅰ遺跡	児玉 準		
西町Ⅱ遺跡	児玉 準		

13. Ⅰの「2 調査経過」本文中、ゴジック表記は、本報告書収載遺跡の調査経過を示す。

目 次

序	
例 言	
I はじめに	1
1 発掘調査に至るまで	1
2 調査経過	3
3 調査の組織と構成	5
4 調査の方法	6
II 遺跡の立地と環境	8

孫右エ門館遺跡

1 遺跡の概観	17
2 調査の方法	17
3 調査の経過	17
4 遺跡の層位	19
5 遺構と遺物	22
6 まとめ	39

案内 I 遺跡

1 遺跡の概観	51
2 調査の方法	51
3 調査の経過	51
4 遺跡の層位	53
5 遺構と遺物	57
6 まとめ	91

妻の神 II 遺跡

1 遺跡の概観	109
---------	-----

2	調査の方法	109
3	調査の経過	111
4	遺跡の層位	115
5	遺構と遺物	115
6	まとめ	173

下乳牛遺跡

1	遺跡の概観	235
2	調査の方法	235
3	調査の経過	235
4	遺跡の層位	237
5	遺構と遺物	238
6	まとめ	266

西町 I 遺跡

1	遺跡の概観	291
2	調査の方法	291
3	調査の経過	291
4	遺跡の層位	291
5	遺構と遺物	293
6	まとめ	297

西町 II 遺跡

1	遺跡の概観	303
2	調査の方法	303
3	調査の経過	303
4	遺跡の層位	303
5	遺構と遺物	306
6	まとめ	312

挿 図 目 次

第1図	東北縦貫自動車道路線上及び周辺遺跡	13・14
-----	-------------------	-------

孫右エ門館遺跡

第1図	地形図およびグリッド配置図	18
第2図	基本層位および浮石堆積図	20
第3図	遺構配置図	22
第4図	S X 001石組炉・S X(U)001・S X(U)002 埋設土器実測図	24
第5図	S X(U)001・S X(U)002埋設土器実測図	25
第6図	遺構外出土土器拓影図(1)	26
第7図	遺構外出土土器拓影図(2)	27
第8図	遺構外出土土器実測図(3)	30
第9図	出土土器実測図	34
第10図	S I 001 竪穴住居跡実測図及び炭化物 出土状況	35・36
第11図	S I 001 竪穴住居跡カマド実測図	37
第12図	S I 001 竪穴住居跡出土土器実測図	38

案内 I 遺跡

第1図	グリッド配置図	52
第2図	Nライン土層図	54
第3図	遺構配置図	55・56
第4図	S I 001竪穴住居跡およびS K 001土壇実測図	58
第5図	S I 002 竪穴住居跡実測図	60
第6図	S I 003竪穴住居跡およびS K 003土壇実測図	62
第7図	S I 004竪穴住居跡およびS K 002土壇実測図	64
第8図	S I 005竪穴住居跡およびS K 004土壇実測図	66
第9図	S I 006竪穴住居跡およびS K 005・007 土壇実測図	68
第10図	S I 006・S K 005・007遺物接合水平分布 および垂直分布図	69
第11図	S K 006・010・013・014土壇実測図	70
第12図	S K(F)015・018フラスコ状ビット実測図	71
第13図	S X(U)001 埋設土器実測図	71
第14図	S I 002・003・006 竪穴住居跡出土土器拓影図	74
第15図	S K 001・005~007・010土壇出土土器拓影図	75
第16図	S X(U)001 埋設土器実測図	76
第17図	S K 010・S I 006・S K 005 出土土器実測図	77
第18図	S I 001・003・006竪穴住居跡・S K 007・010 土壇出土土器実測図	78
第19図	遺構外出土土器実測図	78
第20図	遺構外出土土器拓影図	79
第21図	遺構内・外出土土器実測図(1)	83
第22図	遺構内・外出土土器実測図(2)	84
第23図	S I 007 竪穴住居跡およびカマド実測図	89
第24図	S I 007 竪穴住居跡出土土器実測図	90

妻の神 II 遺跡

第1図	グリッド配置図	110
第2図	遺構配置図	112
第3図	基本層位	113・114
第4図	S I 004 竪穴住居跡および炉実測図	117
第5図	S I 005 竪穴住居跡実測図	119
第6図	S I 025 竪穴住居跡実測図	121
第7図	S I 037・038竪穴住居跡実測図	124
第8図	S X(U)039・040埋設土器実測図	125
第9図	S K 009~012土壇実測図	127
第10図	S K 014~017土壇実測図	129
第11図	S K 018~021土壇実測図	131
第12図	S K 022・023・026・027土壇実測図	133
第13図	S K 028~032土壇実測図	135
第14図	S K(F)033・S K 034~036土壇実測図	137
第15図	S D 008 溝状遺構実測図	138
第16図	S D 013 溝状遺構実測図	138

第17図	S I 025 竪穴住居跡出土遺物実測図	139
第18図	S I 037・038竪穴住居跡出土遺物実測図	140
第19図	S X(U)039・040埋設土器実測図	141
第20図	S D 013 溝状遺構出土遺物実測図	142
第21図	遺構外出土遺物拓影図(1)	143
第22図	遺構外出土遺物拓影図(2)	144
第23図	遺構外出土遺物拓影図(3)	145
第24図	遺構外出土遺物拓影図(4)	146
第25図	遺構外出土遺物拓影図(5)	147
第26図	S I 001 竪穴住居跡実測図	153
第27図	S I 001 竪穴住居跡カマド実測図	154

第28図	S I 002 竪穴住居跡実測図	156
第29図	S I 002 竪穴住居跡カマド実測図	157
第30図	S I 003 竪穴住居跡実測図	159
第31図	S I 003 竪穴住居跡炭化物出土状況図	160
第32図	S I 003 竪穴住居跡カマド実測図	161
第33図	S I 007 竪穴住居跡実測図	163
第34図	S I 006 竪穴住居跡実測図	165
第35図	S I 001 竪穴住居跡出土遺物実測図	166
第36図	S I 002 竪穴住居跡出土遺物実測図	167
第37図	S I 003 竪穴住居跡出土遺物実測図(1)	168
第38図	S I 003 竪穴住居跡出土遺物実測図(2)	169

下乳牛遺跡

第1図	地形図およびグリッド配置図	236
第2図	土層図	238
第3図	遺構配置図	239
第4図	S I 01竪穴住居跡炭化物出土状態図	240
第5図	S I 01竪穴住居跡実測図	241
第6図	S I 竪穴住居跡カマド実測図	242
第7図	S I 01竪穴住居跡出土遺物実測図(1)	244
第8図	S I 01竪穴住居跡出土遺物実測図(2)	245
第9図	S I 01竪穴住居跡出土遺物実測図(3)	246
第10図	S I 01竪穴住居跡出土遺物実測図(4)	247
第11図	S I 01竪穴住居跡出土遺物実測図(5)	248

第12図	S I 02竪穴住居跡実測図	253・254
第13図	S I 02竪穴住居跡カマドーA実測図	255
第14図	S I 02竪穴住居跡カマドーB実測図	256
第15図	S I 02竪穴住居跡カマドC・D実測図	257
第16図	S I 02竪穴住居跡出土遺物実測図(1)	258
第17図	S I 02竪穴住居跡出土遺物実測図(2)	259
第18図	S I 02竪穴住居跡出土遺物実測図(3)	260
第19図	S K(I)01竪穴状遺構炭化物出土状態図・ 実測図	263
第20図	S K 01～03・S K(F)01～03・S K(T)01実測図	265
第21図	S I 01竪穴住居跡残存炭化材概略図	269

西町 I 遺跡

第1図	土層柱状図	291
第2図	グリッド配置図	292

第3図	出土遺物実測図(1)	294
第4図	出土遺物実測図(2)	295

西町 II 遺跡

第1図	グリッド配置図	304
第2図	遺構配置図	305
第3図	S I 001・002・S X 001実測図	307・308

第4図	S K 001～005土壇実測図	309
第5図	S K 006・007土壇実測図	311
第6図	出土遺物実測図	311

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	1	東北縦貫自動車道路線上の遺跡	11
		2	鹿角の中世城館	12
		3	鹿角の周辺遺跡	12

孫右エ門館遺跡

第1表	S X(S)001 石組炉	23	第5表	土器観察表(2)	29
第2表	S X(U)001 埋設土器	23	第6表	出土石器観察表	33
第3表	S X(U)002 埋設土器	23	第7表	S I 001 竪穴住居跡	34
第4表	土器観察表(1)	28	第8表	S I 001 竪穴住居跡出土土器観察表	38

案内 I 遺跡

第1表	S I 001 竪穴住居跡	57	第8表	S K010・S K013・S K014・S K(F)015・ S K(F)018・S X(U)001埋設土器観察表土壙	73
第2表	S I 002 竪穴住居跡	59	第9表	出土石器観察表(1)	80
第3表	S I 003 竪穴住居跡	61	第10表	出土石器観察表(2)	81
第4表	S I 004 竪穴住居跡	63	第11表	出土石器観察表(3)	82
第5表	S I 005 竪穴住居跡	65	第12表	出土石器観察表	84
第6表	S I 006 竪穴住居跡	67	第13表	S I 007 竪穴住居跡	88
第7表	S K001・S K002・S K003・S K004・ S K005・S K006土壙	72	第14表	S I 007 竪穴住居跡出土土器観察表	90

妻の神 II 遺跡

第1表	S I 004 竪穴住居跡	116	第16表	S K020 土壙	130
第2表	S I 005 竪穴住居跡	118	第17表	S K021 土壙	130
第3表	S I 025 竪穴住居跡	120	第18表	S K022 土壙	132
第4表	S I 037 竪穴住居跡	122	第19表	S K023 土壙	132
第5表	S I 038 竪穴住居跡	123	第20表	S K026 土壙	132
第6表	S K009 土壙	126	第21表	S K027 土壙	132
第7表	S K010 土壙	126	第22表	S K028 土壙	134
第8表	S K011 土壙	126	第23表	S K029 土壙	134
第9表	S K012 土壙	126	第24表	S K030 土壙	134
第10表	S K014 土壙	128	第25表	S K031 土壙	134
第11表	S K015 土壙	128	第26表	S K032 土壙	134
第12表	S K016 土壙	128	第27表	S K(F)033 フラスコ状ビット	136
第13表	S K017 土壙	128	第28表	S K034 土壙	136
第14表	S K018 土壙	130	第29表	S K035 土壙	136
第15表	S K019 土壙	130	第30表	S K036 土壙	136

第31表	S D 008 溝狀遺構	138
第32表	S D 013 溝狀遺構	138
第33表	S I 025 竪穴住居跡出土遺物觀察表	148
第34表	S I 037・038竪穴住居跡出土遺物觀察表	148
第35表	S X(U)039・040埋設土器觀察表	149
第36表	S D 013 溝狀遺構出土遺物觀察表	149
第37表	遺構外出土遺物觀察表(1)	150
第38表	遺構外出土遺物觀察表(2)	151
第39表	S I 001 竪穴住居跡	152

第40表	S I 002 竪穴住居跡	155
第41表	S I 003 竪穴住居跡	158
第42表	S I 007 竪穴住居跡	162
第43表	S I 006 竪穴住居跡	164
第44表	S I 001 竪穴住居跡出土遺物觀察表	170
第45表	S I 002 竪穴住居跡出土遺物觀察表	170
第46表	S I 003 竪穴住居跡出土遺物觀察表(1)	171
第47表	S I 003 竪穴住居跡出土遺物觀察表(2)	172

下 乳 牛 遺 跡

第 1 表	S I 01竪穴住居跡出土土器觀察表	249・250・251
-------	--------------------	-------------

第 2 表	S I 02竪穴住居跡出土土器觀察表	261
-------	--------------------	-----

西 町 I 遺 跡

第 1 表	遺物觀察表	296
-------	-------	-----

図版目次

孫右工門館遺跡

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 図版 1 (上) 遺跡遠景 (東 ▶ 西) | 図版 4 (上) S I 001 竪穴住居跡炭化物出土状況 |
| (下) 遺跡近景 (北 ▶ 南) | (下) S I 001 竪穴住居跡西壁炭化物出土状況 |
| 図版 2 (上) 調査風景 | 図版 5 (上) S I 001 竪穴住居跡 (北西 ▶ 南東) |
| (下) S I 001 竪穴住居跡確認状況 (北西 ▶ 南東) | (下) S I 001 竪穴住居跡完掘状況 (北西 ▶ 南東) |
| 図版 3 (上) S X(S)001 石組炉 (東 ▶ 西) | 図版 6 S X(U)001・002埋設土器・遺構外出土土器(1) |
| (中) S X(U)001 埋設土器 (西 ▶ 東) | 図版 7 遺構外出土土器(2) |
| (下) S X(U)002 埋設土器 | 図版 8 遺構外出土器・石器・S I 001 竪穴住居跡出土土師器 |

案内 I 遺跡

- | | |
|---|---|
| 図版 1 (上) 遺跡遠景 (北 ▶ 南、案内 II 遺跡より) | 図版 7 (上) S I 006竪穴住居跡炉 |
| (下) 調査区西側表土排除状況 (南 ▶ 北) | (中) S K 007土壇土器出土状況 |
| 図版 2 (上) 調査風景 | (下) S I 006竪穴住居跡土器出土状況 |
| (下) 調査区西側完掘状況 (南 ▶ 北) | 図版 8 (上) S K 005土壇 (中) S K 006土壇 |
| 図版 3 (上) 調査区西側完掘状況 (東 ▶ 西) | (下) S K 010土壇 |
| (下) S I 001竪穴住居跡・S K 001土壇 (北 ▶ 南) | 図版 9 (上) S K 013土壇 (中) S K 014土壇 |
| 図版 4 (上) S I 002竪穴住居跡土層断面 (西 ▶ 東) | (下) S K(F)018フラスコ状ピット |
| (下) S I 003竪穴住居跡・S K 003土壇 (南 ▶ 北) | 図版 10 (上) S I 007竪穴住居跡 (北 ▶ 南) |
| 図版 5 (上) S I 004竪穴住居跡・S K 002土壇 (北 ▶ 南) | (中)・(下) S X(U)001埋設土器 |
| (下) S I 005竪穴住居跡・S K 004土壇 (北 ▶ 南) | 図版 11 S I 002・003・006竪穴住居跡・S K 001・005・ |
| 図版 6 (上) S I 006竪穴住居跡・S K 005・S K 007土壇 | 006・007土壇出土土器 |
| 確認面 | 図版 12 S I 006竪穴住居跡・S K 005・010土壇・S X(U) |
| (下) S I 006竪穴住居跡・S K 005・S K 007土壇 | 001埋設土器出土土器 |
| 完掘 | 図版 13 S I 007竪穴住居跡・遺構外出土土器・遺構内・ |
| | 外出土土器 |

妻の神 II 遺跡

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------------------|
| 図版 1 (上) 遺跡遠景 (南西 ▶ 北東) | 図版 5 (下) S I 005 竪穴住居跡 (南 ▶ 北) |
| (下) 遺跡遠景 (南西 ▶ 北東) | 図版 6 (上) S I 005 竪穴住居跡土器出土状態 (東 ▶ 西) |
| 図版 2 遺跡近景 (南東 ▶ 北西) | (下) S I 005 竪穴住居跡石組炉 (南 ▶ 北) |
| 図版 3 (上) S I 004 竪穴住居跡石組炉 (南 ▶ 北) | 図版 7 (上) S I 002・S I 025竪穴住居跡 (東 ▶ 西) |
| (下) S I 004 竪穴住居跡石組炉 (東 ▶ 西) | (下) S I 025 竪穴住居跡完掘状態 (東 ▶ 西) |
| 図版 4 (上) S I 004 竪穴住居跡石組炉 (南 ▶ 北) | 図版 8 (上) S I 038 竪穴住居跡石組炉 (北 ▶ 南) |
| (下) S I 004 竪穴住居跡石組炉 (東 ▶ 西) | (下) S I 037・S I 038竪穴住居跡 (東 ▶ 西) |
| 図版 5 (上) S I 005 竪穴住居跡 (西 ▶ 東) | 図版 9 (上) S I 038 竪穴住居跡石組炉 (北 ▶ 南) |

- 図版9 (下) S I 038 竪穴住居跡土器出土状態
- 図版10 (上) S K 009 土壇断面 (南▶北)
(下) S K 010 土壇 (南西▶北東)
- 図版11 (上) S K 011 土壇確認状態 (南▶北)
(下) S K 011 土壇断面 (南▶北)
- 図版12 (上) S K 012 土壇確認状態 (南▶北)
(下) S K 012 土壇断面 (南▶北)
- 図版13 (上) S K 014 土壇確認状態 (南▶北)
(下) S K 014 土壇断面 (南▶北)
- 図版14 (上) S K 015 土壇確認状態 (南▶北)
(下) S K 015 土壇断面 (南▶北)
- 図版15 (上) S K 016 土壇確認状態 (南▶北)
(下) S K 016 土壇断面 (南▶北)
- 図版16 (上) S K 017 土壇確認状態 (南▶北)
(下) S K 017 土壇完掘状態
- 図版17 (上) S K 018 土壇確認状態 (南▶北)
(下) S K 018 土壇断面 (南▶北)
- 図版18 (上) S K 019 土壇確認状態 (南▶北)
(下) S K 019 土壇断面 (南▶北)
- 図版19 (上) S K 020 土壇断面 (南▶北)
(下) S K 020 土壇完掘状態 (南▶北)
- 図版20 (上) S K 021 土壇断面 (南▶北)
(下) S K 021 土壇完掘状態 (南▶北)
- 図版21 (上) S K 022 土壇断面 (南▶北)
(下) S K 022 土壇完掘状態 (南▶北)
- 図版22 (上) S K 023 土壇断面 (南▶北)
(下) S K 023 土壇完掘状態 (南▶北)
- 図版23 (上) S K 026 土壇完掘状態 (南▶北)
(下) S K 027 土壇完掘状態 (南▶北)
- 図版24 (上) S K 028 土壇完掘状態 (北▶南)
(下) S K 029 土壇完掘状態 (北▶南)
- 図版25 (上) S K 030 土壇完掘状態 (南▶北)
(下) S K 031 土壇完掘状態 (南▶北)
- 図版26 (上) S K 032 土壇完掘状態 (南▶北)
(下) S K 034 土壇完掘状態 (南▶北)
- 図版27 (上) S K 035 土壇完掘状態 (北▶南)
(下) S K(F)033 フラスコ状ピット完掘状態
(南▶北)
- 図版28 (上) S X(U)039 埋設土器出土状態
(下) S X(U)039 埋設土器出土状態 (南▶北)
- 図版29 (上) S X(U)040 埋設土器出土状態
- 図版29 (下) S X(U)040 埋設土器出土状態 (北▶南)
- 図版30 (上) S I 001 竪穴住居跡 (西▶東)
(下) S I 001 竪穴住居跡 (南東▶北西)
- 図版31 (上) S I 001 竪穴住居跡 (北▶南)
(下) S I 001 竪穴住居跡完掘状態 (北▶南)
- 図版32 (上) S I 001 竪穴住居跡カマド (北▶南)
(下) S I 001 竪穴住居跡カマド完掘状態
(北▶南)
- 図版33 (上) S I 001 竪穴住居跡断面 (東▶西)
(下) S I 001 竪穴住居跡断面 (北▶南)
- 図版34 (上) S I 002 竪穴住居跡 (東▶西)
(下) S I 002 竪穴住居跡カマド完掘状態
(北▶南)
- 図版35 (上) S I 002 竪穴住居跡確認状態 (西▶東)
(下) S I 002 竪穴住居跡完掘状態 (東▶西)
- 図版36 (上) S I 002 竪穴住居跡カマド断面 (東▶西)
(下) S I 002 竪穴住居跡カマド内土器出土状態
(北▶南)
- 図版37 (上) S I 003 竪穴住居跡炭化物出土状態
(北▶南)
(下) S I 003 竪穴住居跡炭化物出土状態
(東▶西)
- 図版38 (上) S I 003 竪穴住居跡炭化物出土状態
(北▶南)
(下) S I 003 竪穴住居跡 (北▶南)
- 図版39 (上) S I 003 竪穴住居跡カマド (北▶南)
(下) S I 003 竪穴住居跡カマド (北▶南)
- 図版40 (上) S I 003 竪穴住居跡カマド
(下) S I 003 竪穴住居跡カマド完掘状態
(北▶南)
- 図版41 (上) S I 006 竪穴住居跡確認状態 (西▶東)
(下) S I 006 竪穴住居跡完掘状態 (北西▶南東)
- 図版42 (上) S I 006 竪穴住居跡 (北▶南)
(下) S I 006 竪穴住居跡内古銭出土状態
- 図版43 (上) S I 007 竪穴住居跡 (北▶南)
(下) S I 007 竪穴住居跡完掘状態 (東▶西)
- 図版44 (左) S D 008 溝跡確認状態 (東▶西)
(右) S D 008 溝跡完掘状態 (西▶東)
- 図版45 (上) S D 013 溝跡 (南▶北)
(下) 発掘調査風景
- 図版46 S I 025 竪穴住居跡出土土器

- 図版47 S I 037・S I 038 竪穴住居跡出土土器
 図版48 S X(U)039・S X(U)040 埋設土器
 図版49 遺構外出土土器(1)
 図版50 遺構外出土土器(2)
 図版51 遺構外出土土器(3)

- 図版52 遺構外出土土器(4)
 図版53 S I 001 竪穴住居跡出土土器
 図版54 S I 002 竪穴住居跡出土土器
 図版55 S I 003 竪穴住居跡出土土器(1)
 図版56 S I 003 竪穴住居跡出土土器(2)

下乳牛遺跡

- 図版1 1 調査区全景(東▶西)
 2 調査風景
 図版2 1 S I 01 竪穴住居跡(西▶東)
 2 S I 01 竪穴住居跡カマド
 図版3 1 S I 01 竪穴住居跡炭化材検出状況
 2 S I 01 竪穴住居跡西壁炭化壁板材
 図版4 1 S I 01 竪穴住居跡北壁炭化壁板材
 2 S I 01 竪穴住居跡北壁炭化壁板材
 図版5 1 S I 01 竪穴住居跡炭化敷板材
 2 S I 01 竪穴住居跡炭化敷板材・根太
 図版6 1 S I 01 竪穴住居跡遺物出土状態
 2 S I 01 竪穴住居跡環形土師器・皿形木製品
 出土状態
 図版7 1 S I 01 竪穴住居跡炭化櫛出土状態
 2 S I 01 竪穴住居跡炭化ワラ材出土状態
 図版8 1 S I 02 竪穴住居跡(南▶北)
 2 S I 02 竪穴住居跡カマド-A

- 図版9 1 S I 02 竪穴住居跡カマド-B
 2 S I 02 竪穴住居跡カマド-C、-D
 図版10 1 S K(F)01 フラスコ状ビット(北▶南)
 2 S K(F)02 フラスコ状ビット(北▶南)
 図版11 1 S K(F)03 フラスコ状ビット(北▶南)
 2 S K(T)01(南▶北)
 図版12 S I 01 竪穴住居跡出土環形土師器(1~11)
 図版13 S I 01 竪穴住居跡出土環形土師器(12~21)
 図版14 S I 01 竪穴住居跡出土環形土師器(22~32)
 図版15 S I 01 竪穴住居跡出土環形土師器(33~38)・環
 形須恵器(39)・甕形土師器(40・41)
 図版16 S I 01 竪穴住居跡出土甕形土師器(42・44)・鍋
 形土師器(43)・石帯(45)・櫛(46)・皿形木製品
 (47・48)
 図版17 S I 02 竪穴住居跡出土環形土師器(2~15)
 図版18 S I 02 竪穴住居跡出土環形土師器(16)・甕形土
 師器(18~23)・遺構外出土環形土師器(1・2)

西町 I 遺跡

- 図版1 1 遺跡遠景(台地上が西町 I 遺跡)
 2 調査終了後

- 図版2 出土遺物

西町 II 遺跡

- 図版1 1 遺跡遠景(西▶東)
 2 調査開始直後(南東▶北西)
 図版2 1 S I 001・002
 2 S I 001・002・S X 001
 図版3 1 S K 001
 2 S K 002

- 図版4 1 S K 003
 2 S K 004
 図版5 1 S K 005
 2 S K 006
 図版6 1 S K 007
 2 調査終了状況

I はじめに

1 発掘調査に至るまで

昭和32年4月16日付けで公布された『国土開発幹線自動車道建設法』に基き、埼玉県川口市を起点に青森県青森市に至る東北縦貫自動車道川口―青森線の建設計画が策定され、昭和40年11月1日に鹿角市―青森市間、昭和42年11月22日に盛岡市―鹿角市間の基本計画が公表され、高速自動車国道の路線指定を受けている。

翌昭和43年4月1日に鹿角市―青森市間約81kmの第2次施行命令が建設大臣から日本道路公団総裁あてにあったのをうけ、秋田県教育委員会では、埋蔵文化財保護の立場から、文化庁と日本道路公団が交わした覚書『日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書』に基き昭和44年8月鹿角市十和田地区から鹿角郡小坂町の青森県境まで幅4km、延長25kmにわたって、遺跡の分布調査を行い67遺跡を確認、その成果を公表した。

昭和46年6月1日に岩手県二戸郡安代町―鹿角市十和田錦木間約37kmの第5次施行命令が出され、昭和47年11月27日には鹿角市十和田錦木―小坂町小坂間の路線発表も行われた。

秋田県教育委員会では、昭和48年8月に鹿角市八幡平、花輪、尾去沢地内約20kmを4km幅で遺跡分布調査と試掘調査を実施し、46遺跡を確認した。この結果をふまえ昭和51年2月12日に日本道路公団仙台建設局から鹿角市八幡平―鹿角市十和田錦木間21.1kmの路線発表が行われ、昭和52年10月に日本道路公団仙台建設局鹿角工事事務所の依頼により秋田県教育委員会ではこの発表路線上の遺跡分布調査を実施し、32遺跡〔縄文時代17(古代重複3を含む)、古代10(縄文重複3を含む)、中世5(館跡が多い)、その他3(調査不可能であって遺跡のありそうな所)]の存在を確認した。

この結果にもとづき、路線上の遺跡への対処や調査方法について日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会との間に協議がもたれ、これら31遺跡は記録保存することに決定された。

(昭和55年に路線上に新たに2遺跡が発見され、また工事用道路建設に伴い1遺跡が記録保存されることになり、最終的にはこの区間で34遺跡が記録保存されることになった。)

昭和54年2月に日本道路公団仙台建設局から発掘調査依頼書が提出され、秋田県教育委員会では昭和54年度7遺跡(居熊井、湯瀬館、上山田、大地平、堂の上、歌内、上葛岡Ⅲ)、昭和55年度19遺跡(歌内、鳥居平、飛鳥平、北の林Ⅰ、北の林Ⅱ、上葛岡Ⅰ、上葛岡Ⅱ、上葛岡Ⅳ、駒林、中の崎、孫右エ門館、案内Ⅰ、案内Ⅱ、猿ヶ平Ⅰ、妻の神Ⅱ、下乳牛、西町Ⅰ、西町Ⅱ、小豆沢館)、昭和56年度10遺跡(中の崎、猿ヶ平Ⅱ、妻の神Ⅰ、妻の神Ⅲ、乳牛平、室田、案内Ⅲ、柏木森、明堂長根、一本杉)の発掘調査を実施した。

I はじめに

- 註1 昭和47年に旧鹿角郡十和田町、花輪町、尾去沢町、八幡平村が合併して鹿角市となっており、本来ならば当時の町名を用いるべきであろうが、便宜上現地名表示にした。
- 註2 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書——十和田町・小坂町地区——』
秋田県文化財調査報告書第20集 1970（昭和45）年
- 註3 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書——花輪町・尾去沢町・八幡平村地区——』秋田県文化財調査報告書第24集 1972（昭和47）年
- 註4 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書——八幡平～十和田錦木——』秋田県文化財調査報告書第56集 1978（昭和53）年

補註

昭和54年度調査の7遺跡のうち歌内を除く6遺跡については、1981（昭和56）年3月に『東北縦貫自動車道発掘調査報告書I——居熊井遺跡・湯瀬館遺跡・大地平遺跡・上山田遺跡・堂の上遺跡・上葛岡III遺跡——』（秋田県文化財調査報告書第78集）として公表した。

昭和55年度調査の遺跡については、1982（昭和57）年3月に『東北縦貫自動車道発掘調査報告書II——歌内遺跡——』（秋田県文化財調査報告書第88集）、『東北縦貫自動車道発掘調査報告書III——鳥居平遺跡・飛鳥平遺跡・北の林I遺跡——』（秋田県文化財調査報告書第89集）、『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IV——北の林II遺跡・上葛岡I遺跡・上葛岡II遺跡・小豆沢館遺跡——』（秋田県文化財調査報告書第90集）、『東北縦貫自動車道発掘調査報告書V——上葛岡IV遺跡・駒林遺跡・案内II遺跡・猿ヶ平I遺跡——』（秋田県文化財調査報告書第91集）として公表した。

昭和56年度調査の遺跡については、1983（昭和58）年3月に『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI——猿ヶ平II遺跡・室田遺跡・一本杉遺跡・案内III遺跡——』（秋田県文化財調査報告書第99集）、1984（昭和59）年3月に『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII——柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根遺跡——』（秋田県文化財調査報告書第105集）、『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VIII——妻の神I遺跡・乳牛平遺跡——』（秋田県文化財調査報告書第107集）、『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IX——妻の神III遺跡——』（秋田県文化財調査報告書第108集）として公表した。

2 調査経過

発掘調査は、昭和55年4月15日から12月13日まで行われた。

4月14日に鹿角市立花輪中央公民館で発掘調査に従事する作業員希望者に、調査の目的、発掘の仕方と諸注意、勤務内容、賃金等について説明し、班編成を行った。4月15日に、児玉調査員が継続調査の歌内遺跡、小林調査員が駒林遺跡、桜田調査員が小豆沢館遺跡の発掘調査を開始。駒林遺跡は工事用道路予定部分から発掘を開始した。4月16日に岩見調査員が北の林Ⅰ遺跡、4月22日に橋本調査員が飛鳥平遺跡の発掘調査を開始。

5月1日に駒林遺跡の工事用道路部分の調査が終了し、隣接部分の調査を開始。工事用道路部分では遺構の検出なく、縄文土器片の出土のみ、小豆沢館遺跡では、縄文時代のフラスコ状ピット、竪穴住居跡、中世の竪穴住居跡、掘立柱建物跡等を検出したが、重複多く調査は難行した。5月29日工事用重機待機の中で小豆沢館遺跡の発掘調査が終了した。飛鳥平遺跡、北の林Ⅰ遺跡では表土除去も順調に進み、縄文・平安時代の竪穴住居跡が数棟確認された。

桜田調査員が6月1日に北の林Ⅱ遺跡、6月2日に隣接する上葛岡Ⅱ遺跡の調査を併行して担当開始した。6月9日飛鳥平遺跡を調査中の橋本調査員が隣接する鳥居平遺跡の調査を併行して担当開始した。小林調査員は駒林遺跡の調査と併行して6月8日から上葛岡Ⅳ遺跡の調査を担当していたが、6月16日に平安時代の竪穴住居跡3棟を検出して駒林遺跡の発掘調査が終了した。歌内遺跡では、縄文時代のフラスコ状ピット、平安時代の竪穴住居跡の検出が相次いだ。7月22日に、日本道路公団鹿角工事事務所と、用地問題の解決していない発掘調査予定地について協議した。7月30日橋本調査員が中の崎遺跡のグリッド設定に着手。

小林調査員が7月23日から案内Ⅱ遺跡の試掘を開始し、8月6日からは猿ヶ平Ⅰ遺跡の試掘に移動する。8月8日縄文時代の竪穴住居跡3棟を検出して上葛岡Ⅱ遺跡の発掘調査を終了。

8月18日に日本道路公団鹿角工事事務所と今後の発掘調査行程について協議した。8月21日鳥居平遺跡の発掘調査が終了。桜田調査員が上葛岡Ⅰ遺跡の調査を開始。本年度発掘調査追加契約について文化課から指示あり。8月22日に文化課門間光夫参事と富樫泰時学芸主事が追加契約遺跡の現地踏査を行い、調査員と発掘調査方法について協議した。橋本調査員が中の崎遺跡の発掘調査を開始した。8月23日に追加契約遺跡発掘調査につき、日本道路公団鹿角工事事務所と用地等について協議した。8月28日に県立博物館学芸課庄内昭男主事が、鈴木秋良補佐員、花田孝夫補助員と北の林Ⅰ遺跡の発掘調査に合流。8月29日に金沢大学文学部佐々木達夫助教授が北の林Ⅱ遺跡と小豆沢館遺跡出土中世陶磁器を調査のため現地を視察。9月6日に庄内昭男主事と鈴木秋良補佐員、花田孝夫補助員が北の林Ⅰ遺跡の調査から秋田市に帰る。9月9日に財団法人岩手県埋蔵文化財センターの高橋文夫、四ツ井謙吉両技師が北の林Ⅱ遺跡他

I はじめに

の発掘調査を視察。9月10日に東北縦貫自動車道発掘調査の専門指導員である国学院大学小林達雄助教授が各発掘調査遺跡を視察し、調査方法その他を指導。9月11日に県広報課員が『県政ニュース』制作のため北の林Ⅰ遺跡他を取材。9月12日に弘田柵跡調査事務所の船木義勝学芸主事、秋田遺物整理事務所の柴田陽一郎文化財主事、能代発掘調査事務所の熊谷太郎文化財主事と佐々木金正補助員が追加契約遺跡の調査のため来所。熊谷調査員は即日下乳牛遺跡の試掘を開始する。9月16日に縄文時代中期・後期・晩期の竪穴住居跡、土壙、平安時代の竪穴住居跡などを検出した飛鳥平遺跡の調査が終了。船木調査員が妻の神Ⅱ遺跡、柴田調査員が案内Ⅰ遺跡、それに上葛岡Ⅳ遺跡の調査を終了した小林調査員が案内Ⅱ遺跡の発掘調査を開始した。

東北縦貫自動車道発掘調査の顧問である奈良国立文化財研究所坪井清足所長が各遺跡の発掘調査状況を視察し、調査全般にわたって指導。

9月24日に2カ年継続で調査し、縄文時代の竪穴住居跡、フラスコ状ピット、平安時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡を検出した歌内遺跡の発掘調査が終了。9月26日に青森県埋蔵文化財調査センターの北山峰一郎所長と工藤泰博調査第三課長が北の林Ⅱ遺跡他を視察。9月27日に小玉調査員が西町Ⅱ遺跡の発掘調査を開始。中の崎遺跡で排水溝が外部に伸びる平安時代の竪穴住居跡、土師器合口甕棺を検出。10月4日に岩見調査員が猿ヶ平Ⅰ遺跡の発掘調査を開始。

沼山源喜治岩手県北上市史編纂専門主査が中の崎遺跡他を視察。西町Ⅱ遺跡では時期不明の竪穴住居跡が2棟検出されているが遺物はわずかであった。10月18日に児玉調査員は西町Ⅱ遺跡の調査と併行して、丘陵上の西町Ⅰ遺跡の調査を開始。10月後半は降雨が続き調査が難行。

10月25日に縄文時代の竪穴住居跡、土壙、平安時代の竪穴住居跡等を検出した北の林Ⅰ遺跡の発掘調査が終了した。10月28日に明堂長根遺跡の南側に土師器片の散布が認められ、一本杉遺跡（遺跡番号33）とする。

11月8日に妻の神Ⅱ遺跡の調査を担当した船木調査員が弘田柵跡調査事務所へ帰る。案内Ⅰ遺跡、案内Ⅱ遺跡、猿ヶ平Ⅰ遺跡では縄文時代後期の竪穴住居跡、フラスコ状ピットの検出が続く。各遺跡とも午前中は降霜の処理に時間を費やし、調査行程に狂いを生じ始めた。縄文土器片、弥生土器片を出土した西町Ⅰ遺跡の発掘調査が終了。

11月12日に縄文時代の竪穴住居跡を1棟検出した上葛岡Ⅰ遺跡と、時期不明の竪穴住居跡2棟を検出した西町Ⅱ遺跡の調査が終了した。11月25日に乳牛館の一部とも考えられている妻の神Ⅱ遺跡が、縄文時代、平安時代、中世の竪穴住居跡などを検出し調査を終了した。

11月27日に日本道路公団鹿角工事事務所と来年度（昭和56年度）から発掘調査が予定される鹿角郡小坂町地内の路線上の遺物分布調査について協議した。案内Ⅱ遺跡南側の平坦地で縄文土器片と竪穴住居跡の一部が検出され、案内Ⅲ遺跡（遺跡番号34）とする。

12月2日に縄文時代の竪穴住居跡、フラスコ状ピットを検出した案内Ⅱ遺跡の発掘調査を終了。12月3日に秋田大学教育学部新野直吉教授が、北の林Ⅱ遺跡他を視察。下乳牛遺跡を担当する熊谷調査員が能代に、孫右エ門館遺跡を担当する柴田調査員が秋田へ帰る。12月6日に猿ヶ平Ⅰ遺跡の発掘調査を終了。降雪が続くが各遺跡とも遺構上に覆屋をつくり精査続行。

12月12日に小坂町地内の路線内を踏査したが、枯草と積雪が多く、試掘調査を来春に実施して遺跡を確認することにした。孫右エ門館遺跡の発掘調査終了。

12月13日に北の林Ⅱ遺跡、中の崎遺跡、下乳牛遺跡の発掘調査が終了し、昭和55年度の東北縦貫自動車道関係の発掘調査は全て終了した。

3 調査の組織と構成

(職名は発掘調査時)

調査主体	秋田県教育委員会	
調査顧問	坪井清足	奈良国立文化財研究所所長
	芹沢長介	東北大学文学部教授
専門指導員	小林達雄	国学院大学文学部助教授
	林謙作	北海道大学文学部助教授
	須藤隆	東北大学文学部助教授
	桑原滋郎	宮城県多賀城跡調査研究所第一科長
	藤沼邦彦	東北歴史資料館考古研究科長
調査担当者	岩見誠夫	文化課社会教育主事 北の林Ⅰ遺跡・猿ヶ平Ⅰ遺跡担当
	船木義勝	弘田柵跡調査事務所学芸主事 妻の神Ⅱ遺跡担当
	熊谷太郎	文化課文化財主事 下乳牛遺跡担当
	桜田隆	文化課文化財主事 小豆沢館遺跡・北の林Ⅱ遺跡・上葛岡Ⅰ遺跡 上葛岡Ⅱ遺跡担当
	柴田陽一郎	文化課文化財主事 案内Ⅰ遺跡・孫右エ門館遺跡担当
	児玉準	文化課文化財主事

I はじめに

歌内遺跡・西町Ⅰ遺跡・西町Ⅱ遺跡担当

橋本 高史 文化課文化財主事

飛鳥平遺跡・鳥居平遺跡・中の崎遺跡担当

小林 克 文化課文化財主事

駒林遺跡・上葛岡Ⅳ遺跡・案内Ⅱ遺跡担当

調査補佐員 栗沢 光男、藤井 安正、関 直、山崎 文幸、
三ヶ田 俊明、鈴木 秋良

調査補助員 阿部 明人、石木田 正幸、小田島 幸二、神田 公男、
北川 恵一、児玉 昭彦、児玉 悦郎、児玉 均、
佐々木 金正、佐藤 幸夫、田中和 徳、畠山 圭、
花田 孝夫、松岡 忠仁、米村 博美

事務補助員 佐藤 順子、金沢 万里子

調査協力 庄内 昭男 秋田県立博物館学芸課主事

利部 修 立正大学大学院院生

高橋 学 東北学院大学文学部学生

調査協力機関 鹿角市教育委員会 秋田県東北縦貫自動車道対策事務所 鹿角市建設部建設課高速道路対策室

4 調査の方法

(1) 発掘区の設定

東北縦貫自動車道の調査では、路線内の遺跡地に5m×5mのグリッドを設定して発掘を行う。グリッド設定基準線は、歴史時代の遺跡は方位に合わせ、他は日本道路公団の設置した任意二本の中心杭を結ぶ線を設定基準線とし、路線の進行方向に沿わせる。

(2) 測量と実測

地形や遺構状況に応じて、遺り方測量、平板測量、航空写真測量の方法をとる。遺構の実測の縮尺は1/20、遺構配置図は1/200、堅穴住居跡のカマド、石囲炉などの平面図、断面図、土層断面図は1/10を原則とするが、必要に応じて任意の縮尺も活用する。

(3) 遺構発掘と遺物のとりあげ

遺構の発掘は4分割法を原則とし、平面、断面、層序、レベル、遺物の実測はセクショントレスターに記入し、水系高は標高を記入する。

遺物の取りあげは、1点1袋、1括1袋とし、遺跡名、グリッド名、遺物の種類、層位、出

土年月日の記入された遺物カードを同封する。

遺構・遺物記号は、平城京発掘調査で実施しているものを参考に定めたものを使用する。

記号	遺構・遺物	記号	遺構・遺物	記号	遺構・遺物
SA	柵列・柱列	SK(I)	竪穴状遺構	RC	炭化物
SB	建物跡	SK(P)	ピット	RM	金属製品
SC	廊	SK(S)	墓	RN	自然遺物
SD	溝・堀・濠	SK(T)	T-Pit 溝状土壌	RO	骨角製品
SE	井戸跡	SL	河川	RP	土製品
SF	築地・土塁	SM	道路・橋・階段	RQ	石製品
SG	苑池	SX	その他	RT	貝製品
SH	広場	SX(F)	焼土遺構	RU	人骨
SI	住居跡	SX(P)	捨場	RV	紙・布製品
SK	土壌	SX(S)	配石(集石・立石・組石) ストーンサークル	RW	木・竹製品
SK(F)	フラスコ状ピット	SX(U)	土器埋設遺構	RY	その他

(4) 写真撮影

写真撮影には35ミリサイズのカメラ2台と、6×4.5サイズ(または6×9サイズ)のカメラ1台を使用し、モノクローム、カラーリバーサルの各フィルムを装填して撮影するが、モノクロームフィルムによる撮影時には、撮影データ(被写体、撮影方向、撮影日等)を撮影後に一方向につき露出・絞りをかえて3枚の撮影を原則とする。また、ポラロイドカメラを日誌や遺構の検討、打合会に活用する。

(5) 遺物整理と実測

- ① 出土遺物は遺物台帳に記入し、写真や実測図とのスムーズな活用をはかる。
- ② 土器の内面実測が必要と思われるものは、4分割方法を取り、左 $\frac{1}{2}$ に外面、右 $\frac{1}{2}$ に内面および断面を記載する。実測図には輪積痕、文様、調整痕を主として記載する。
- ③ 大破片の実測は、土器の中心線を算出し180度回転して作図する。
- ④ 破片の拓本は、土器の外面を左に置き、中央に断面、右に内面図を表す方法をとる。
- ⑤ 石器の実測は、原則として第三投影図法をとる。

II 遺跡の立地と環境

秋田県の北東隅に位置する鹿角は、東に八幡平を介して岩手県と境を接し、北には青森県八甲田山系を控え、年間平均気温花輪9.4℃、年間平均降水量月168mmを測り、積雪量概して少なく、年間を通じて昼夜の温度隔差の大きい内陸型気候を示す地である。

奥羽山脈中に形成された地溝盆地である鹿角盆地は、八幡平から北流する米代川、十和田から南流する大湯川、小坂川の三本の河川流域に開けた沖積地と、複合扇状地及び東部、西部の両山岳地帯からなっている。盆地を流れる米代川、大湯川、小坂川の三本の河川には、東西の両山岳地帯から多くの小侵蝕谷を伝わって小河川が流れ込み、沖積面よりも70~80m程高位にある標高200m前後の山岳地裾野の段丘を開析している。そして、こうした小河川の間は、さらに小さな沢筋によって区切られる場合が多く、それらの沢筋によって分断された舌状の台地が、群となっていくつか連なって存在する。

鹿角盆地は多くの遺跡をその中に抱えている。それらの遺跡は前述の標高200m前後の段丘面に立地し、その段丘が多くの小侵蝕谷によって開析されているため、遺跡は多くの小河川によって分断された個々の段丘に群在する。盆地内で特に遺跡の集中する箇所をあげれば、熊沢川と米代川の合流地点南東の長嶺地区、米代川に西流して注ぎ込む歌内川が開析する大里地区、同じく米代川支流である富士川周辺の産土神地区、米代川、大湯川、小坂川の合流地点南側の神田地区、同じく北側の瀬田石地区、小坂川に注ぎ込む荒川の周辺等がある。また、盆地中央部東側の風張台地も広範囲に遺跡が点在する。

鹿角では旧石器時代の遺跡は確認されておらず、調査が行われたり遺物が採集されたりして確認されているのは、全て縄文時代以降の遺跡である。

縄文時代早期の様相は、未だ不明確である。三カ年にわたる鹿角市内の東北縦貫自動車道関係遺跡の調査で、大地平遺跡^④、上葛岡IV遺跡^⑬、柏木森遺跡^⑮等から、青森県八戸市是川や岩手県二戸市等で出土例があり赤御堂式と呼称される表裏縄文の土器が破片で確認され、同様の土器は大湯付近からも採集されているにすぎない。また、上葛岡IV遺跡^⑬、猿ヶ平II遺跡^⑰、柏木森遺跡^⑮からは、胎土に多量の繊維を含み複節の羽状縄文の施された所謂砲弾形の深鉢が出土しており、早期末~前期初頭に位置づけられている。上記の遺跡からは、縄文時代早期東北地方北部に通用のトランシェ様の石器も併せて出土している。他に極く少量ではあるが一本杉遺跡^⑳からは貝殻文土器の破片、飛鳥平遺跡^⑧からは青森県八戸市でも出土し、草創期の可能性も指摘されている爪形文類似の土器も破片で出土している。

縄文時代前期の遺跡としては、八幡平玉内にある清水向遺跡^㉑があげられる。この遺跡は昭和29年武藤鉄城氏等によって調査され、県内で初めて縄文時代竪穴住居跡2棟を確認した遺跡と

して注目された。出土した土器は、前期後葉円筒下層d式を中心として、円筒下層a式、円筒下層b式等であり、また円筒下層d式土器に伴って、青森県蟹沢遺跡、山形県吹浦遺跡等に類例の求められる大木6式土器も出土している。また、東北縦貫自動車道関係の調査では、居熊井遺跡^①、上山田遺跡^③、堂の上遺跡^⑤、小豆沢館遺跡等^⑤から主に円筒下層d式を中心とした前期後葉の土器の出土をみている。

縄文時代中期の遺跡は東北縦貫自動車道関係遺跡の調査で数箇所調査されている。飛鳥平遺跡^⑧、北ノ林I遺跡^⑨、北ノ林II遺跡^⑩では石組の複式炬をもった竪穴住居跡が検出され、大木9～10式土器を出土している。また歌内遺跡^⑥では、フラスコ状ピットの塘底から中ノ平式土器を出土している。

後期は、鹿角における縄文時代各期を通じて、調査、発見例の最も多い時期である。東北縦貫自動車道関係の遺跡では、後期初頭の埋設土器を検出した飛鳥平遺跡^⑧、後期中葉の捨場と竪穴住居跡を確認した居熊井遺跡、同時期の石組の炬をもつ竪穴住居跡を検出した案内I遺跡^⑭、案内III遺跡^⑮、猿ヶ平I遺跡^⑯、猿ヶ平II遺跡^⑰、後期後葉の竪穴住居跡を検出した案内II遺跡等がある。さらに昭和43年には奥山潤氏等によって、十和田大湯の黒森山麓竪穴群遺跡が調査され後期前葉の土器を伴った石組をもつ竪穴住居跡の検出が報告されている。

また、昭和26年、27年の両年に調査が行われ特別史跡指定された大湯環状列石^⑪は、その後数回にわたって周辺の分布調査がなされ、現在の万座、野中堂の両列石の他にも付近数箇所に配石群の存在が確認されている。

晩期では、清水向遺跡^⑳より一段低い台地に立地する玉内遺跡^㉑が知られ、晩期中葉の遺物とともに所謂日時計形の列石が確認されている。また、この玉内遺跡の立地する台地とちょうど米代川を挟んでの対岸には東在家遺跡^㉒があり、晩期中葉までの遺物を多く出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では、柏木森遺跡^㉓、明堂長根遺跡^㉔から袋状土壙群が検出され、晩期初頭の遺物を多く出土している。

秋田県内における弥生時代の遺跡は現在までのところ縄文時代のそれと較べると、知られている遺跡数、その内容とも少なく且つ不明確な点が多い。鹿角はその中にあるのは比較的該期様相の理解がすすんでいる地域である。

鹿角盆地北端の小坂町周辺では、奥山潤、安保彰両氏の活動により、内ノ岱遺跡、曙岱遺跡等から、天王山式類似の土器、後北C式土器が採集され報告されている。また鹿角市尾去沢からは田舎館式類似の土器が出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では、大地平遺跡^④、駒林遺跡^⑫から縄軸の絡糸体の回転施文された土器片、奥山潤氏等命名による小坂X式土器が出土し、さらに猿ヶ平I遺跡からは交互刺突文のある天王山式類似の土器が出土している。しかし、これらの弥生時代の土器は今のところ断片的な出土に限られており、伴出する遺物や

II 遺跡の立地と環境

遺構等、未だ不明な点が多く残されている。

奈良、平安時代の古代の遺跡も近年調査例を増して来ている。古くは昭和初年に木村善吉氏等によって調査され、その後、後藤守一氏等によって調査された菩提野竪穴群遺跡がある。この遺跡は計12ヶ所の竪穴群からなると想定されたが、その調査当初から覆土中に入る火山灰層が目され、以来鹿角における該期の遺跡調査は、この火山灰層との関係解明を大きな視点の一つとして据えることになる。近年では大湯環状列石周辺の分布調査、鳥野遺跡¹⁰⁸、源田平遺跡¹⁰⁹、小平遺跡¹¹⁰等の調査で、該期竪穴住居跡が検出され、また、東北縦貫自動車道関係の調査では、歌内遺跡⁶、飛鳥平遺跡⁸、北ノ林Ⅰ遺跡⁹、北ノ林Ⅱ遺跡¹¹、上葛岡Ⅳ遺跡¹³、駒林遺跡¹⁴、一本杉遺跡³⁵、中ノ崎遺跡¹⁶、案内Ⅰ遺跡¹⁸、案内Ⅲ遺跡⁴¹、妻ノ神Ⅰ遺跡²²、妻ノ神Ⅱ遺跡²⁴、下乳牛遺跡²⁶などで竪穴住居跡が検出されている。さらに御休堂遺跡⁶⁵、高市向館遺跡でも同様の住居跡が検出されている。菩提野竪穴群から現在まで確認されている該期住居跡の総数は、144棟にのぼる。

他に、奈良、平安時代の遺跡としては、十和田錦木字曲谷地にある枯草坂古墳^{65,66}、尾去沢宇東在家にある三光塚古墳群⁶⁷があげられる。いずれも終末期の小円墳であり、玉類、刀装具等を出土している。また十和田字室田にも古墳群があったと伝えられている。

中世鹿角は、鎌倉時代にこの地に移住したと伝えられる成田氏、安保氏、秋元氏、奈良氏の所謂鹿角四氏の支配する地域であった。これら四氏から出自する各々の庶流は、盆地内に所領を得て『鹿角由来集』『鹿角由来記』などに伝えられる鹿角四十二館にそれぞれ居を構えて割拠する。この状態は近世鹿角が南部領となるまで続く。

鹿角には、鹿角四十二館あるいは四十八館に該当するものを含めて計58カ所に及ぶ「館」跡が確認されている。これらの「館」跡は、舌状に張り出した台地を、1～数本の掘切をおこなって造りあげている多郭連続式のものが多い。すなわち、一ヶ所の「館」跡は数個の郭が連っている。また、郭自体が元来舌状台地であったため、「館」として使用される以前にも人間の居住域として選定される事が多く、郭上面の調査では必ず縄文時代、平安時代の竪穴住居跡等が中世の遺構、遺物等とともに検出される。

現在までに発掘調査の行われているのは、小枝指七ツ館²⁷、長牛館¹、御休堂遺跡⁶⁵等があり、東北縦貫自動車道関係では、湯瀬館遺跡²と乳牛館²¹の一部と考えられている妻ノ神Ⅰ²²、同Ⅱ²⁴、同Ⅲ²⁵、乳牛平遺跡²⁶が調査終了している。

〈註〉 本文中の○内の数字、アルファベットは、第1表・第1図中の番号・記号と同一である。

第1表 周辺遺跡一覧表

1 <東北縦貫自動車道路線上の遺跡>

番号	遺跡名	時代時期	遺構・遺物	掲載報告書名
1	居熊井	縄文(後期)	縄文竪穴住居跡、土壇、土器捨場、縄文土器	東北縦貫自動車道発掘調査報告書1
2	湯瀬館	縄文・弥生・中世	縄文土器、弥生土器、陶磁器、掘立柱建物跡、礎石配列建物跡	” I
3	上山田	縄文(前期)	縄文土器	” I
4	大地平	縄文 弥生	縄文土器、弥生土器	” I
5	堂の上	縄文(前期～晩期)	縄文土器	” I
6	歌内	縄文 平安	縄文竪穴住居跡、土壇、縄文土器、平安竪穴住居跡	” II
7	鳥居平	縄文	縄文竪穴住居跡、縄文土器	” III
8	飛鳥平	縄文(早期、後期) 平安	縄文竪穴住居跡、縄文土器、平安竪穴住居跡	” III
9	北ノ林 I	縄文(中期、後期) 平安	縄文竪穴住居跡、土壇、平安竪穴住居跡、掘立柱建物跡	” III
10	北ノ林 II	縄文(中期、後期) 平安	縄文竪穴住居跡、土壇、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、平安竪穴住居跡、掘立柱建物跡	” IV
11	上葛岡 I	縄文	縄文竪穴住居跡、縄文土器	” IV
12	上葛岡 III	縄文	縄文土器	” I
13	上葛岡 IV	縄文	縄文土器、平安竪穴住居跡、土師器、須恵器	” V
14	駒林	縄文 平安	縄文土器、平安竪穴住居跡	” V
15	柏木森	縄文 平安	土壇、フラスコ状ピット、縄文土器(早期、後期、晩期)、土師器、陶磁器	” VII
16	中の崎	縄文 平安	縄文土器(後期、晩期)、平安竪穴住居跡、掘立柱建物跡、須恵器、土師器	” VIII
17	孫右エ門館	縄文 平安	屋外炉、縄文土器、平安竪穴住居跡、土師器	” XI
18	案内 I	縄文 平安	縄文竪穴住居跡、縄文土器、平安竪穴住居跡、土師器	” XI
19	案内 II	縄文	縄文竪穴住居跡、土壇、配石遺構、縄文土器	” V
20	猿ヶ平 I	縄文(中期～晩期、弥生)	縄文竪穴住居跡、フラスコ状ピット、縄文土器、弥生土器	” V
21	猿ヶ平 II	縄文(早期～晩期)	縄文竪穴住居跡、フラスコ状ピット、縄文土器	” VI
22	妻の神 I	縄文 平安 中世	フラスコ状ピット、縄文土器、平安竪穴住居跡、土師器、漆、土塁	” VIII
23	妻の神 II	縄文 平安 中世	縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡、中世建物跡	” XI
24	妻の神 III	縄文 中世	縄文竪穴住居跡、中世竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壇墓、柵列跡、焼土遺構	” IX
25	乳牛平	縄文 中世	縄文土器、中世竪穴住居跡	” VIII
26	下乳牛	縄文 平安	フラスコ状ピット、縄文土器、平安竪穴住居跡、土師器、須恵器	” XI
27	西町 I	縄文 弥生	縄文土器、弥生土器	” XI
28	西町 II	縄文	縄文土器	” XI
29	室田	中世?	なし	” VI
31	明堂長根	縄文	土壇、フラスコ状ピット、縄文土器、溝状遺構	” VII
32	上葛岡 II	縄文	縄文竪穴住居跡、縄文土器	” IV
33	一本杉	縄文 平安 中世	縄文土器、平安竪穴住居跡、掘立柱建物跡、中世竪穴住居跡、土師器、須恵器、陶磁器	” VI
34	案内 III	縄文 平安	縄文竪穴住居跡、フラスコ状ピット、縄文土器、平安竪穴住居跡、土師器、須恵器	” VI
35	小豆沢	縄文 中世	縄文竪穴住居跡、フラスコ状ピット、平安竪穴住居跡、中世竪穴住居跡、中世竪穴土壇、堀跡	” IV

2 <鹿角の中世城館>

記号	城館名	残存状況	城主(伝)	記号	城館名	残存状況	城主(伝)	記号	城館名	残存状況	城主(伝)
A	谷内高館	やや良		S	尾去館	やや良	尾去越中(安保)	2 L	柴内館		
B	谷内館	不良	谷内三郎(成田)、一戸彈正左エ門(武田)	T	下館			2 M	万谷野館	不良	
C	谷内館			V	玉内館	不良	玉内大炊助(安保)	2 N	高市野	不良	高市玄藩(成田)
D	長牛館	不良	秋元彈正左衛門、一戸摂津守義家、絳殿助友義、長牛弥四郎	W	上山館	不良		2 P	上台館		
E	白懸館	やや良	白懸勘解由	X	茶臼館	不良		2 Q	新斗米館	不良	新斗米左近(奈良)
F	長内小館			Y	花輪館	不良		2 R			
G	三ヶ田館	やや良	三ヶ田左近(阿部)	2 A	かいぬま館	やや良		2 S	小平館	やや良	小平彦次郎(奈良)
H	長嶺館	やや良	長嶺下総(成田)	2 B	高瀬館	やや良	高瀬土佐(秋元)	2 T	小枝指館	不良	小枝指左馬之助(奈良)
I	長内古館	やや良		2 C	孫右エ門館	不良		2 U	一ツ森館	やや良	
J	長内館	やや良	長内刑部(成田)	2 D	花輪古館	不良	(伝)花輪次郎(安保)	2 W	丸館	やや良	奈良越後
K	下和志賀館	不良		2 E	黒土館	やや良	黒土丹後(秋元)	2 X	高屋館	やや良	高屋筑前(秋元)
L	田中館			2 F	(無名館)			2 Y	碁石館	不良	神田十郎(成田)
M	湯瀬館	消滅	湯瀬中務(成田) 安倍宮内	2 G	(無名館)			3 A	中草木館	不良	
N	小豆沢館	不良	小豆沢駿河(秋元)	2 H	妻の神館			3 B	関上館	不良	関神安房(成田)
O	石鳥谷館	やや良	石鳥谷九郎(安保) 南部九郎正友	2 I	乳牛館	不良	乳牛六郎(安保)	3 C	毛馬内館		
P	大里館	不良	成田小次郎左衛門尉頼時、大里上総(安倍)	2 J	柴内館	不良	柴内弥次郎(安保)	3 D	瀬田石館	やや良	瀬田石太郎左衛門(奈良)
Q	松館	やや良	松前越前(安保)	2 K	西町館						

3 <鹿角の周辺遺跡>

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
36	大館	48	岩淵	60	下モ平	72	天戸森 I	84	板橋 II、III	96	石野古墳	108	白坂
37	三ヶ田	49	中ノ沢	61	産土神 A、B、C	73	用野目	85	戸羽の沢	97	曲谷地 B	109	瀬田石 A、B
38	長峰	50	下葛岡 A	62	赤坂 B	74	餅野 IV	86	上ノ野 IX	98	枯草坂	110	狐平
39	新城15、17、18番地	51	尾去	63	東山 C	75	万谷野	87	上ノ野 VIII	99	曲谷地 A	111	柏崎
40	新城26、27番地	52	東在家	64	東山 A	76	餅野 III	88	上ノ野 VII	100	冠田	112	寺ノ上 B
41	長畑	53	尾去	65	東山 C	77	餅野 I	89	上ノ野 VI	101	平元館 I	113	蟹沢
42	天狗橋	54	清水向	66	赤坂 A	78	餅野 II	90	上ノ野 V	102	平元館 II	114	大湯環状列石
43	二ツ森	55	三光塚 1号	67	日向屋敷 I	79	長野	91	上ノ野 IV	103	鳥野	115	一本木平
44	下モ和志賀	56	三光塚 2号	68	御休堂	80	餅野 V	92	板橋 I	104	申ヶ野	116	八幡堂
45	下鷺の巢	57	六角平	69	天戸森	81	花輪 C	93	上ノ野 III	105	草木 C		
46	後口田	58	玉内	70	大曲	82	花輪 B	94	上ノ野 II	106	小坂野		
47	石鳥谷	59	甘露	71	陣場	83	花輪 A	95	上ノ野 I	107	中野袋 B		



第1図 東北縦貫自動車道路線上及び周辺遺跡

孫 右 工 門 館 遺 跡

遺 跡 番 号	No.17
所 在 地	鹿角市花輪字孫右工門館14番地の1他
調 査 期 間	昭和55年9月22日～9月30日、11月1日～12月12日
発掘調査予定面積	1,386m ²
発掘調査面積	1,600m ²

1 遺跡の概観

孫右エ門館遺跡は秋田県鹿角市花輪字孫右エ門館14の1他に所在する。この地は国鉄花輪線陸中花輪駅の東方2km、戦後に開発された住宅団地である東山団地の北西0.3kmの地点で、北緯40度11分10秒、東経140度48分35秒に位置し、標高191~197mである。

花輪盆地の東側には標高1,000m前後の急峻な山谷の奥羽脊梁山脈が走る。遺跡は連山中の一峰、皮投岳(標高1,122m)に源を發し西流する富士川の中流左岸にあたり、山麓より緩傾斜で花輪高位段丘と呼ばれる段丘平坦面の北西端に当たっている。遺跡の北足下10m余りは崖となって富士川の河原に続き、東、西方は畑地、南方は山林で、調査区は休耕地、湿地、山林からなる2,800㎡の傾斜地と平地である。字名から判断できるように中世城館「孫右エ門館」の周辺部に当り、富士川の対岸、北方300mの地点には縄文・平安時代の案内I遺跡(遺跡番号No.18)、南方350mの地点には縄文・平安時代の中の崎遺跡(遺跡番号No.16)が存在する。

2 調査の方法

遺跡は東北縦貫自動車道の本線及び加速車線にあたり、ここにグリッドを設定し調査を実施した。グリッドは遺跡の調査対象区域に設定されている中心杭STA133+20と134+00を結ぶ直線とその延長線を基線とし、これに直交する線を設定し5m×5mのグリッドを組んだ。南から北へアラビア数字で0から12まで、東から西へアルファベットでAからMまで付し、両者の組み合わせで1-Aのように呼び、グリッド南東隅の交点をグリッド名称とした。

発掘調査は平坦部の8ライン以北を全面発掘、山林跡地の斜面部分には幅1.0~1.5mのトレンチを設定し遺構の確認につとめた。

確認された遺構の実測は、2本のグリッド杭を結んだ線とその延長線を基線とし、これに直交する1m×1mの小グリッドを遺構の広さに即して設定する簡易遣り方方法を用い、1/20の縮尺を基本として実測図を作成した。

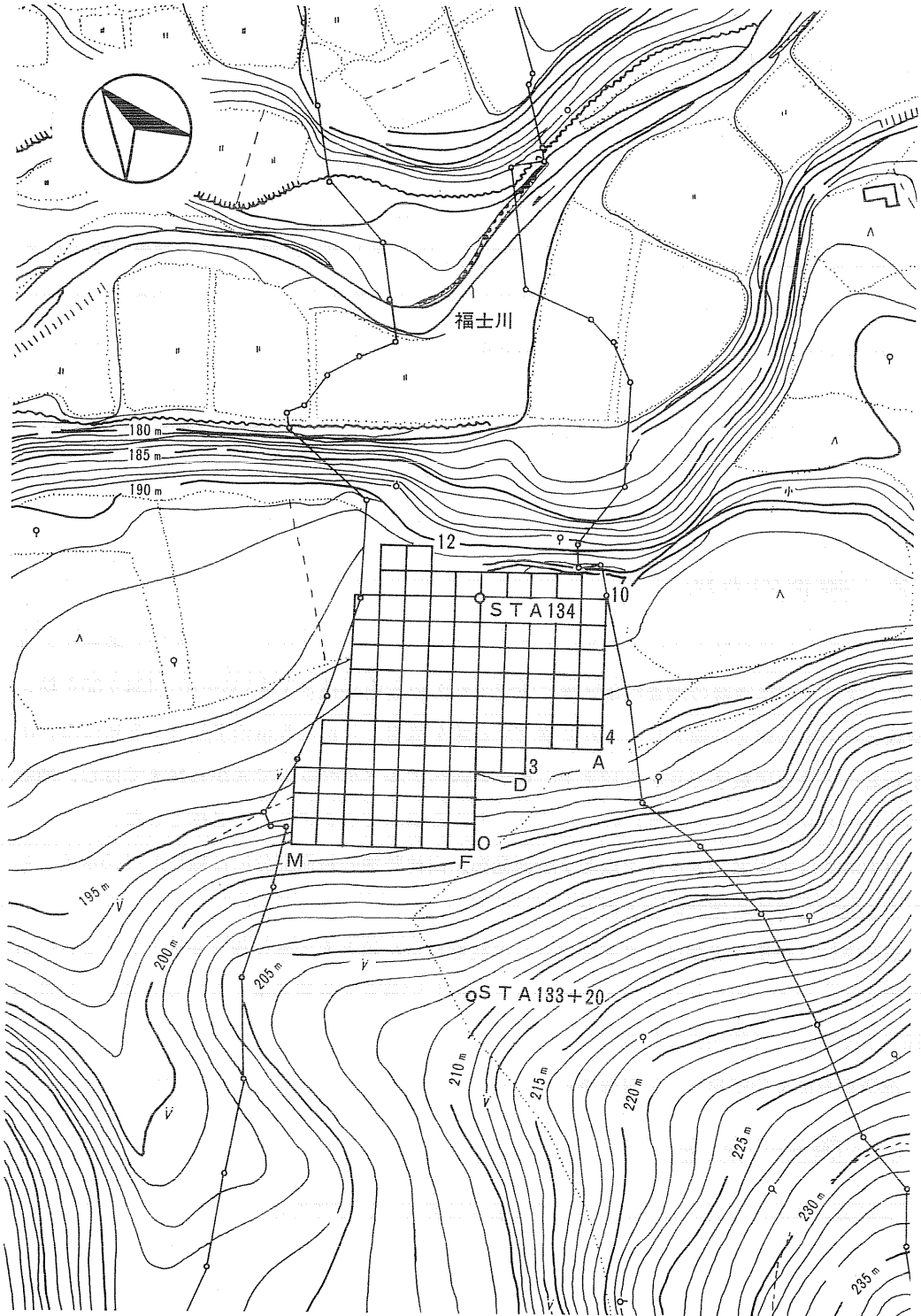
遺構番号はその性格ごとに発見順に付した。

3 調査の経過

発掘調査期間は9月22日~30日、11月1日~12月12日までである。

孫右エ門館遺跡は、昭和55年度当初の発掘調査計画にはなく、8月に決定された追加契約に基づき実施されたものである。柴田陽一郎文化財主事が担当して調査を推し進めたが、11月末から岩見誠夫社会教育主事が調査を引き継いだ。

9月22日に調査員、補佐員、作業員が現地に集合して発掘作業の打ち合わせを行い、のち南



第1図 地形図およびグリッド配置図



東部、山林跡地に斜面の代採木根を避け、道跡中心杭に沿って1.5 m×50 mの7本のトレンチを設定し、遺跡の堆積土層、遺構、広がり、遺物の出土状況確認のための発掘から開始した。この作業は27日まで継続された。30日から10月3日までは重機による抜根作業と平坦部の表土掘削・押土作業が行われ、6日・7日の両日は整地面に業者によるグリッド杭打設が実施された。10月8日から11月7日の1ヶ月間は、調査班は案内I遺跡に移動し、その発掘調査に従事した。

11月10日から南西斜面8-Fグリッドから粗掘を開始、事務所一案内I遺跡との連絡がすばやくできるように短絡路として遺跡下の富士川に橋を仮設した。南西斜面は29日までベルトコンベアーを導入して調査を継続するも遺構の検出はなく、出土遺物は縄文土器細片少量に留まる。調査区東側部分は湿地のためここもトレンチによる調査を行ったが、遺構・遺物の検出はなかった。

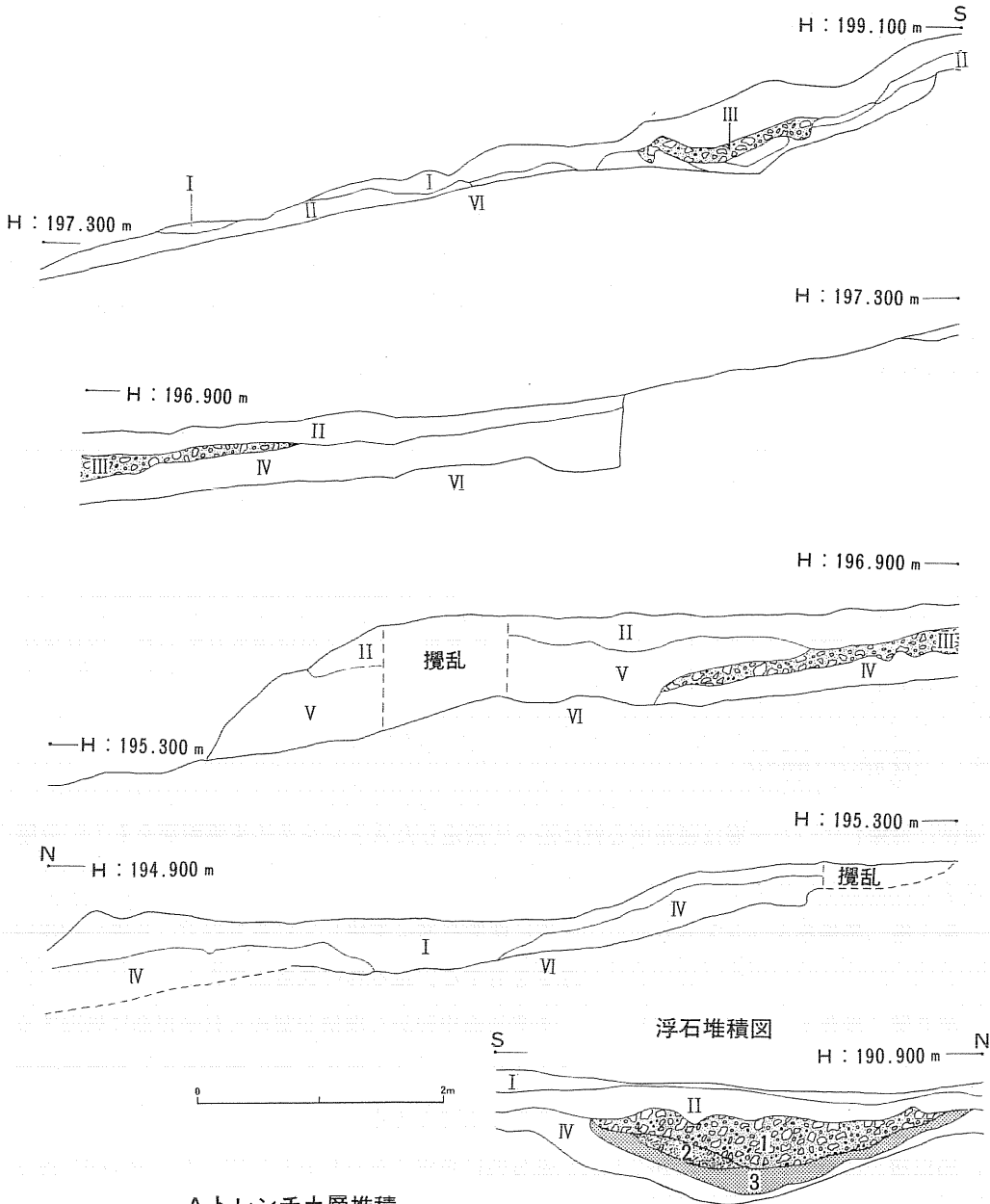
12月1日、北側の平坦部の発掘調査に入る。4日降雪の中で調査続行、10-Jグリッド区で石囲炉と埋設土器を確認。6日には11-Jグリッド内より平安時代の竪穴住居跡を検出し、すぐ精査に入る。壁溝を有する方形の焼失家屋で、南東壁にカマドが付設されていた。12日住居跡などの実測図、記録写真撮影を終え調査を終了した。

4 遺跡の層位

遺跡に堆積していた土層は道路中心杭に沿って設定したAトレンチの東側断面をもとに分層すると、次の6層になる。

- | | | |
|-------|---------------------------------|---|
| 第I層 | 黒褐色土 (5 Y R $\frac{3}{4}$) | 主に南側斜面に堆積しているもので、0 cm~40 cmの厚さを有する。雑木林の表層土である。 |
| 第II層 | 黒色土 (7.5 Y R $\frac{3}{4}$) | 南側斜面中程から堆積が認められ平坦部に接近するにつれ10 cm~30 cmと厚さを増す層である。平坦地畑部分の耕作土でもある。 |
| 第III層 | にぶい黄褐色土 (10 Y R $\frac{5}{4}$) | 部分的に堆積の見られるもので0.2 cm~0.5 cmの粒径をもつ浮石堆積層である。 |
| 第IV層 | 黒褐色土 (7.5 Y R $\frac{2}{4}$) | 遺物包含層である。少量の礫を含み、12 cm~44 cmの厚さで堆積する。 |
| 第V層 | 黒褐色土 (10 Y R $\frac{2}{4}$) | 地山漸移層でまれに縄文土器片を包含する。 |
| 第VI層 | 褐色土 (7.5 Y R $\frac{1}{4}$) | 地山で、遺構はこの層の上面で確認される。 |

A トレンチ土層堆積



A トレンチ土層堆積

層順	土色	備考
I	5 Y R% 黒褐色	
II	7.5 Y R% 黒色	
III	10 Y R% にぶい黄褐色	0.2~0.5cm大の軽石の堆積層でいわゆる大湯浮石層である
IV	7.5 Y R% 黒褐色	0.5~1cm大の礫を含む
V	10 Y R% 黒褐色	
VI	7.5 Y R% 褐色	地山層

浮石堆積

層順	土色	備考
I	5 Y R% 黒褐色	基本層位第I層と同じ
II	7.5 Y R% 黒色	基本層位第II層と同じ
IV	7.5 Y R% 黒褐色	基本層位第IV層と同じ
1	10 Y R% 褐色	0.5~1cm大の軽石を含む
2	10 Y R% にぶい黄褐色	
3	10 Y R% にぶい黄褐色	1mm大の軽石を含む

第2図 基本層位および浮石堆積図

※ 堆積浮石

浮石の堆積は調査区南側斜面と平坦部に散在して分布している。これらの浮石の堆積をこまかく分層し、観察できるものは10-Jグリッドに存在するものである。これは径3 m、厚さ60 cmの凸レンズ状の自然の凹地に堆積したもので、色彩、浮石粒子径から次の3層に分層することができる。

第1層 褐色を示し、浮石粒子径0.5～1 cm。

第2層 にぶい黄褐色、褐色土を少量含む。

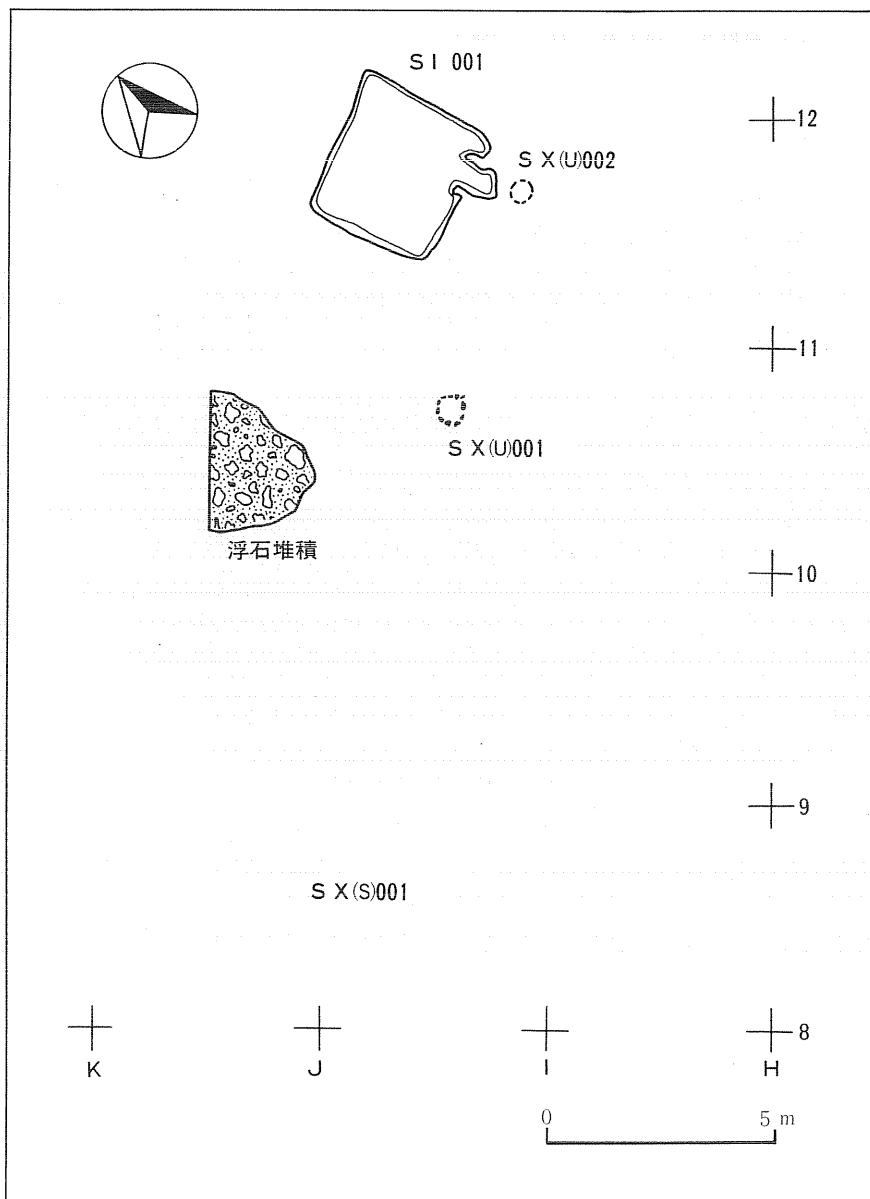
第3層 にぶい黄橙色、浮石粒子径0.1 cm以下。

この層は浮石粒子径に関係なく、その重量の重いものが層下位に堆積するという、いわゆる二次的な水流による水平層理現象を示している。このような現象は「大湯浮石層」と命名されるきっかけとなった大湯遺跡においても、また堂の上遺跡(遺跡番号No.5)、北の林I遺跡(遺跡番号No.9)、猿ヶ平I遺跡(遺跡番号No.21)でもみられる。

5 遺構と遺物

本遺跡の遺構の構築時代は縄文時代と平安時代であり、遺構と遺物の記述は時代順の配列とした。検出された遺構数は以下の通りである。

縄文時代	石組炉…………… 1 基	埋設土器…………… 2 基
平安時代	竪穴住居跡…………… 1 軒	



第3図 遺構配置図

1 縄文時代

(1) 遺構と遺構内出土遺物

① 石組炉・埋設土器

第1表 SX(S)001埋設土器

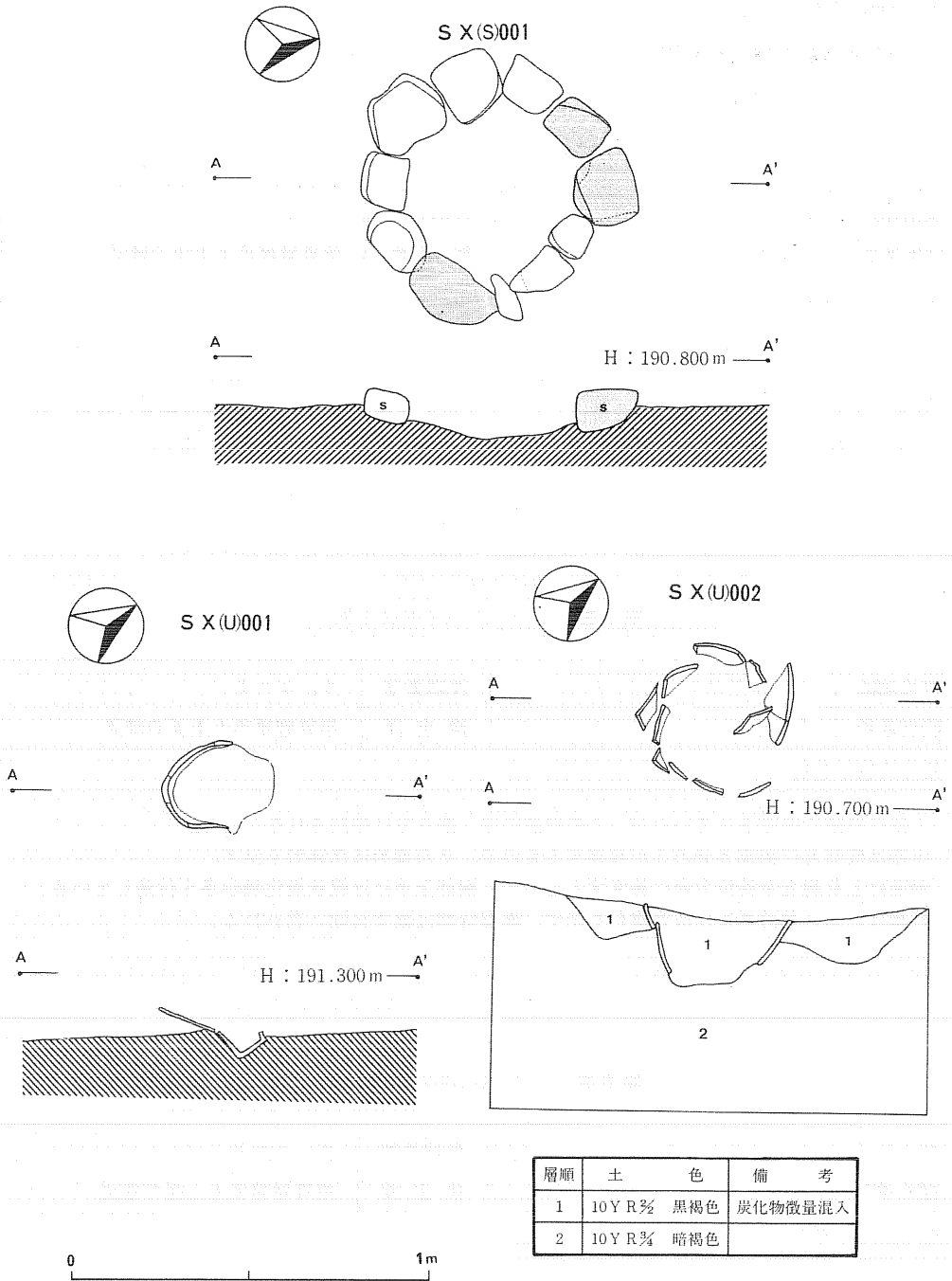
検出地区	10-J グリッド	挿図番号	4
図版番号	3-上	検出面	第VI層褐色土上面で確認
検出状態と遺物	<p>自然石(6cm×14cm~15cm×26cm)を11個用い直径60cmの円形に配列した石組炉である。調査の結果、炉内部には焼土の堆積はなかったが、火熱を受けた形跡を残す石3個が見受けられた。またこの炉が住居跡に伴っていたものか否かを明確にする為この周辺を精査したが、柱穴施設は確認されなかった。構築時期は炉付近より縄文中期、後期初頭の土器が出土しており、いずれかの時期のものと考えられる。</p>		

第2表 SX(U)001埋設土器

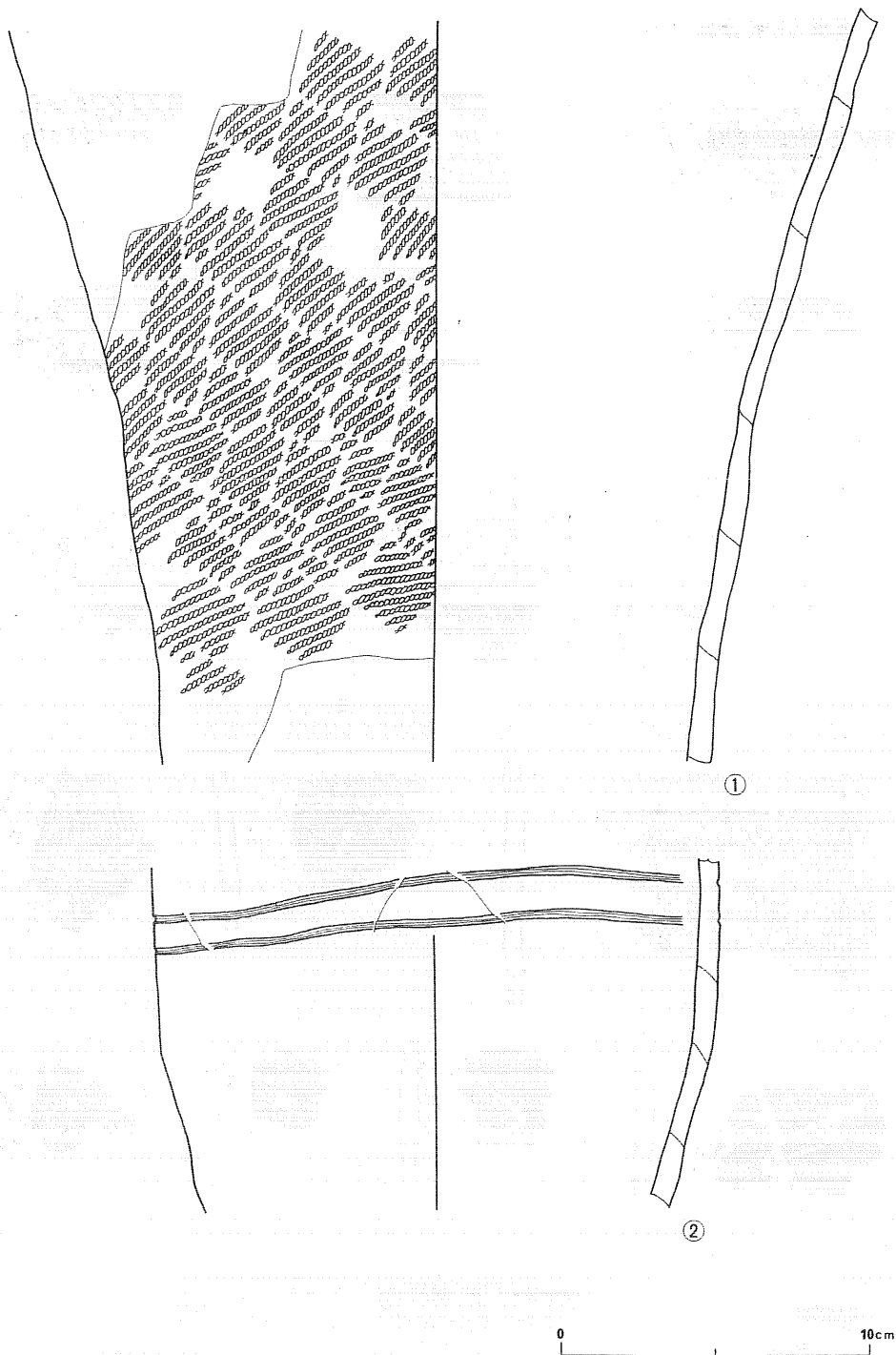
検出地区	8-J グリッド	挿図番号	4, 5-1
図版番号	3-中	検出面	第VI層褐色土上面で確認
検出状態と遺物	<p>土器は斜位に埋設されていたが、この埋設に伴う掘り方は確認されなかった。土器は底部及び胴部3分の2が残存するもので、その器形は深鉢形を呈す。器面にLR縄文を横位方向に施文するもので、胴部上半には煤状炭化物が多く付着している。色調はにぶい黄橙色及び灰黄褐色を示す。構築時期は縄文後期と思われる。</p>		

第3表 SX(U)002埋設土器

検出地区	11-J グリッド	挿図番号	4, 5-2
図版番号	3-下	検出面	第VI層褐色土上面で確認
検出状態と遺物	<p>土器破片が直径40cmほどのピット壁に貼り付けられた状態で確認された。土器内部覆土は黒褐色土が入り込んでおり、微量であるが炭化物が混入していた。土器はわずかに内湾する深鉢土器で胴部下半のみ残存する。文様帯下限に2条の平行沈線を巡らすものである。土器は二次的火熱の為赤変している。色調は浅黄橙色で胎土は石英、砂粒を含むが密で、焼成はもろくなっており磨滅が著しい。構築時期は縄文後期初頭と思われる。</p>		



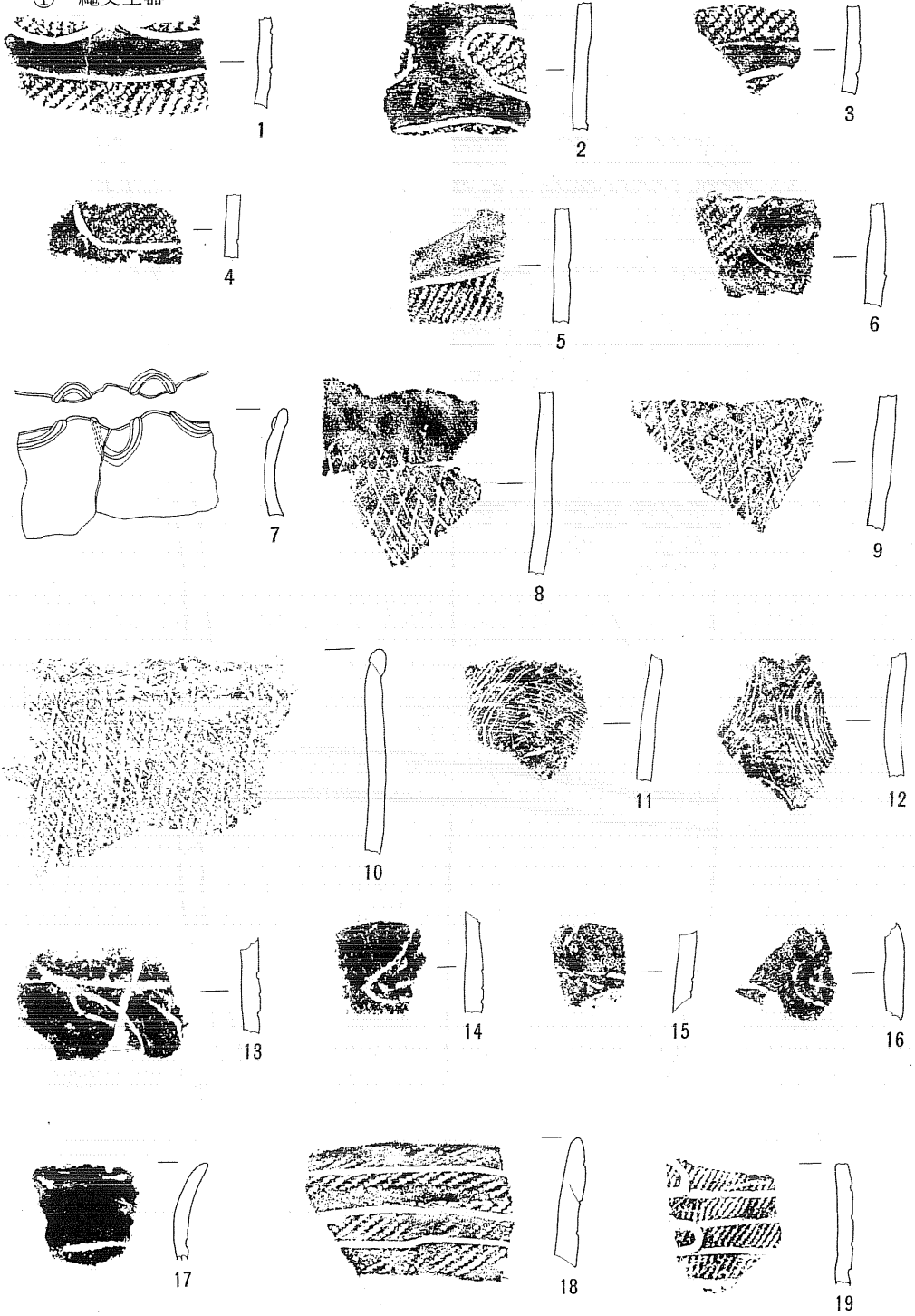
第4図 S X(S)001石組炉・S X(U)001・002埋設土器実測図



第5図 S X(U)001・002埋設土器実測図

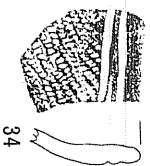
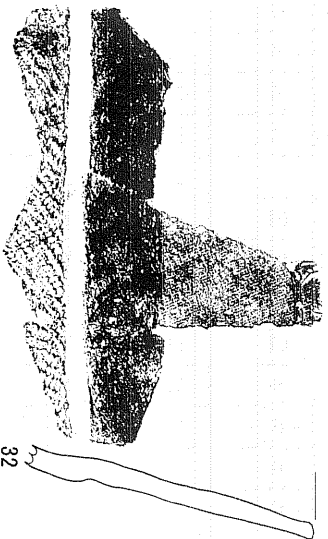
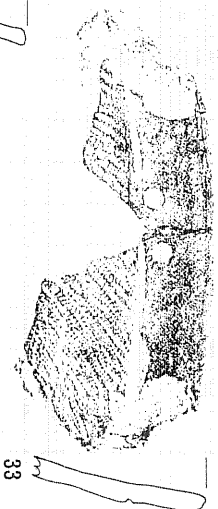
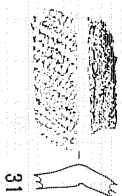
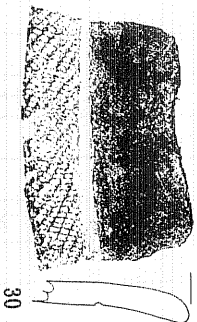
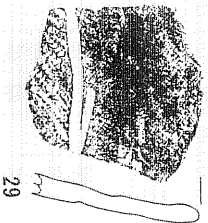
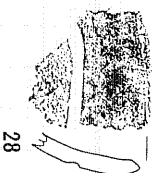
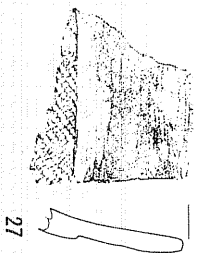
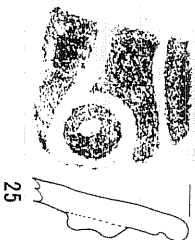
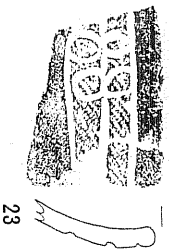
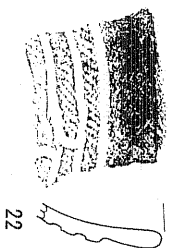
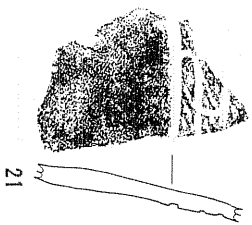
(2) 遺構外出土遺物

① 縄文土器



第6図 遺構外出土土器拓影図(1)

0 10cm



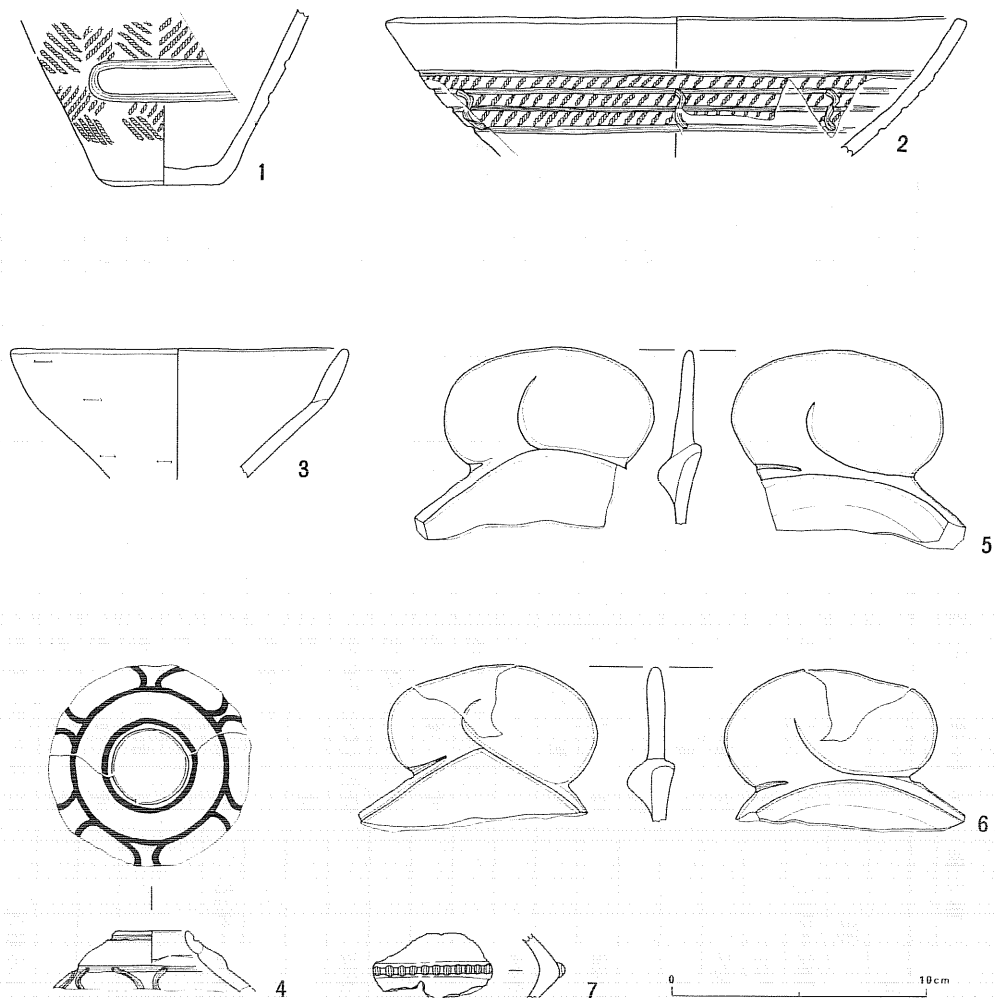
第7図 遺構外出土土器拓影図(2)

第4表 土器観察表(1)

図版番号	挿図番号	出土地区	外 面		内 面		胎 土	備 考
			文 様	色 調	文 様	色 調		
6-3	6-1	9-K	縄文→沈線→磨消	橙 色		にぶい橙色	密	
4	2	9-K	〃	〃		にぶい黄橙色	〃	
5	3	9-K	〃	浅黄橙色		〃	〃	
6	4	9-K	〃	明赤褐色		褐色	〃	
7	5	9-K	〃	灰黄褐色		にぶい褐色	〃	
8	6	9-K	〃	〃		にぶい黄橙色	〃	
9	7	10-I	粘土貼付	明 褐 色		にぶい褐色	〃	
10	8	9-J, 9-K	網目状撚糸文	にぶい黄褐色		にぶい黄橙色	〃	
11	9	9-J	〃	にぶい褐色		にぶい褐色	〃	
12	10	9-J	〃	にぶい黄褐色		浅黄橙色	〃	
13	11	9-J	縄文→磨消→条痕文	にぶい褐色		にぶい褐色	〃	
14	12	9-J	〃	〃		〃	〃	
15	13	10-I	沈線	灰黄褐色		にぶい黄橙色	〃	
16	14	10-I	〃	〃		〃	〃	
17	15	10-I	〃	〃		〃	〃	
18	16	10-I	〃	〃		〃	〃	
7-19	17		縄文→撚紐圧痕→磨消	淡 黄 色		浅 黄 色	〃	
20	18	7-H	縄文→沈線	浅黄橙色		浅黄橙色	〃	
21	19	9-K	縄文→沈線, 弧線	褐 色		橙 色	〃	
22	7-20	9-J	縄文→沈線, 弧線→磨消	にぶい褐色		灰褐色	〃	
23	21	9-J	〃	にぶい橙色		褐灰色	〃	

第5表 土器観察表(2)

図版番号	挿図番号	出土地区	外	面	内 面		胎 土	備 考
			文 様	色 調	文 様	色 調		
7-24	7-22	9-K	縄文→沈線、弧線→磨消	褐 灰 色		黒 褐 色	密	
25	23	10-I	縄文→沈線→磨消	橙 色		にぶい橙色	"	
26	24	2-K	縄文→沈線→磨消	浅 黄 橙 色		浅 黄 橙 色	"	
27	25	9-K	貼付刺突→沈線	明 黄 褐 色		にぶい橙色	"	
28	26	9-K	沈線→磨消	橙 色		橙 色	"	
29	27	9-K	縄文→沈線→磨消	褐 灰 色		にぶい黄橙色	"	
30	28	6-G	縄文→磨消	灰 黄 褐 色		にぶい橙色	"	
31	29	9-K	縄文→沈線→磨消	にぶい褐色		褐 灰 色	"	
32	30	8-J	"	にぶい黄橙色		にぶい黄褐色	"	埋設土器
33	31	9-K	縄文→磨消	黒 褐 色		にぶい黄橙色	"	
34	32	9-K	"	にぶい黄褐色		浅 黄 橙 色	"	
35	33	9-K	縄文→沈線→磨消	橙色または黒褐色		明 赤 褐 色	"	
36	34	10-J	"	橙 色		橙 色	"	
8-1	8-1	9-J	"	にぶい黄橙色		灰 黄 褐 色	"	
2	2	9-K	縄文→沈線、弧線→磨消	灰 黄 褐 色		"	"	
3	3	9-K	横位の磨き	灰 褐 色		褐 灰 色	"	
4	4	9-K	沈線、弧線	暗 赤 褐 色		明 褐 色	"	蓋
5	5	9-J	ヘラミガキ	黄 褐 色		黒 色	"	把手
6	6	9-J	"	黄 褐 色		"	"	把手
7	7	10-J	貼付→工具による押圧	にぶい黄褐色		にぶい黄褐色	"	注口土器



第8図 遺構外出土土器実測図(3)

当遺跡より出土した土器はすべて破片でコンテナ2箱である。これらの破片より推定される器形は深鉢形土器が主体で、他に数点の浅鉢形土器、蓋形土器、注口土器片が含まれる。破片のうち接合し図化できたものは埋設土器の他4点である。出土した土器は縄文時代中期のものと後期のものと2群に大別でき、それらを施文方法により前者を2類、後者を8類に分類した。

第I群土器………縄文中期末の大木10式土器に比定されるものである。

1類 (第6図1～6 図版6)

沈線によって文様帯を区画し、その内部又は外部を磨り消すいわゆる磨消縄文手法を用いたものである。1、2は同一個体で、使用された原体はLRである。

2類 (第6図7 図版6)

口縁部小突起の内・外面に見え隠れするように粘土紐を貼り付けたものである。

第II群土器………縄文後期に比定されるもので、1～3類は大曲I式に、4～7類は大湯式、十腰内I式又はその粗製土器に、8～10類は関東地方の加曾利B I式に比定されるものであり、他の土器も後期のものと考えられる。

1類 (第6図8～10 図版6)

L Rの網目状捺糸文を施文したもので、8は口縁部付近から施文されるのに対して、10は口縁部にも横位方向への施文が行われる。8、9は同一個体である。

2類 (第6図11、12 図版6)

L R縄文を磨り消したのち、6～8条が1単位のくし目状条痕文を曲線的に施文したもので同一個体である。

3類 (第6図13～16 図版6)

2本の平行沈線で入組状曲線文が施文されるもので、同一個体である。

4類 (第6図17 図版7)

捺糸圧痕文で口縁部無文帯と胴部文様帯とに区画するものである。

5類 (第7図26 図版7)

2～3本の幅の狭い平行沈線を弧状又はウロコ状に重層させたものである。

6類 (第7図25 図版7)

胴部にボタン状貼付文を行い、貼付文中央には刺突がみられるもので、これをはさむように太めの沈線を施すものである。

7類 (第7図24 図版7)

文様帯上限、下限に3～数本の平行沈線を施文し、この沈線を弧線によって連結したもので、更に内部を磨り消すものである。

8類 a種 (第6図18、19 図版7)

L R縄文を地文としたもので、口縁部に3～数本の平行沈線をめぐらすものである。また、この施文方法を用い平行沈線間を弧線によって連結するものである。

8類 b種 (第7図20～23 図版7)

8類 a種の施文方法を用い、文様帯の上限、下限を磨り消すものである。平行沈線間を弧線で連結するものと、円形沈線文で連結するものが存在する。20と21、22と第8図2は同一個体で、原体はL R縄文が使用されている。

9類 a種 (第7図28、29、33、34 図版7)

太い沈線によって口縁部無文帯と胴部の文様帯とに区画しているものである。

孫右エ門館遺跡

9類b種 (第7図27、32 図版7)

口縁部無文帯を一段低く作り出し、胴部文様帯を浮き出させる工夫をしたものである。

10類 (第7図30、31 図版7)

口縁部が沈線によって無文帯と文様帯とに区画されるもので、30はR L、31はL R縄文が施されている。

11類 (第8図3 図版8)

無文土器で、ていねいな篋みがきが行われているものである。

蓋形土器 (第8図4 図版8)

口縁部推定径3cm、現高2.5cmを測る。約半分を欠損している。文様帯は平行沈線を上限、下限にめぐらし、この沈線間を弧線で連結した楕円形文を作り出しているもので、内面には明瞭な輪積み痕がみられる。十腰内I式に比定される。

把手 (第8図5、6 図版8)

耳状を呈するもので、篋みがきを施している。

注口土器 (第8図7 図版8)

胴部破片で、器形はソロバン玉形を示すものと思われる。粘土紐の貼り付けと刺突が加えられている。晩期に比定されるものである。

② 石器

当遺跡より出土した石器類は11点で、その内訳は篋状石器1、搔器3、不定形石器1、フレイク6で、表土及び第IV、V層からの出土である。

篋状石器 (第9図1、図版8)

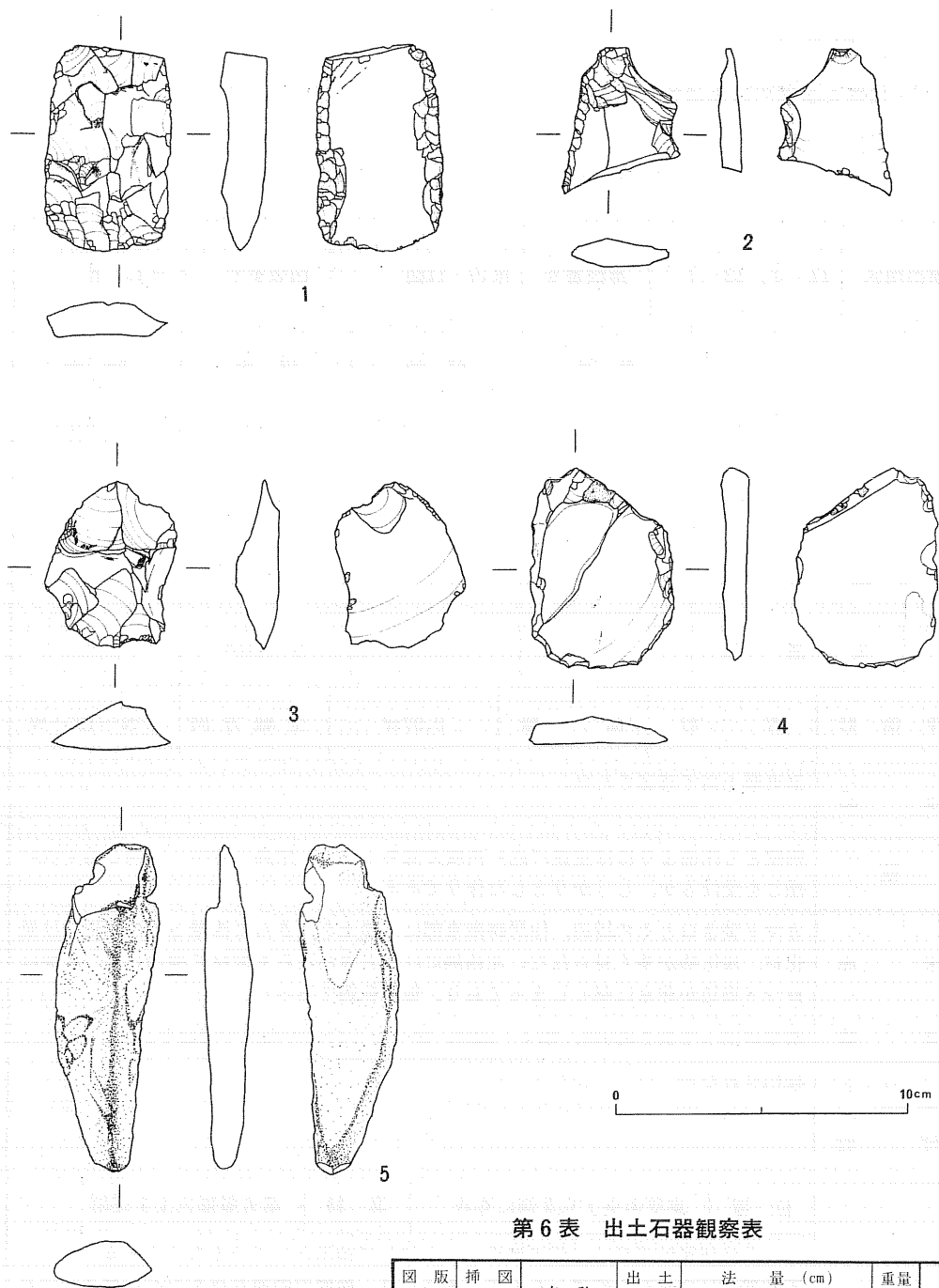
横長の剥片を用いたもので、横断面はカマボコ状を呈する。刃部には大きめの押圧剥離を加え調整している。

搔器 (第9図2～4 図版8)

いずれも背面に剥離調整を加えている。2は左側縁に、3は右側縁にこまかな押圧剥離を加え刃部を作り出している。4は打瘤が除かれている。

不定形石器 (第9図5 図版8)

三ヶ月状の川原石を用い、両側縁からの敲打によってくびれを入れている。



第6表 出土石器觀察表

図版 番号	挿 番号	名 称	出 土 地 区	法 量 (cm)			重 量 (g)	石 質
				最大長	最大幅	最大厚		
8-8	9-1	石 筥	5-H	6.8	4.2	1.5	56.6	砂岩
9	2	搔 器	10-I	(4.4)	3.7	0.9	18	頁岩
10	3	搔 器	9-J	5.7	4.2	1.6	33.8	砂岩
11	4	搔 器	1-J	6.8	4.8	0.9	43.5	頁岩
12	5	不定形石器	10-H	11.2	3.2	1.5	67.3	頁岩

第9図 出土石器実測図

2 平安時代

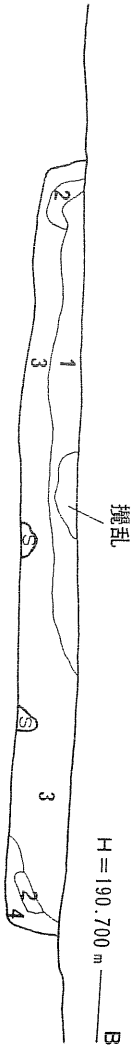
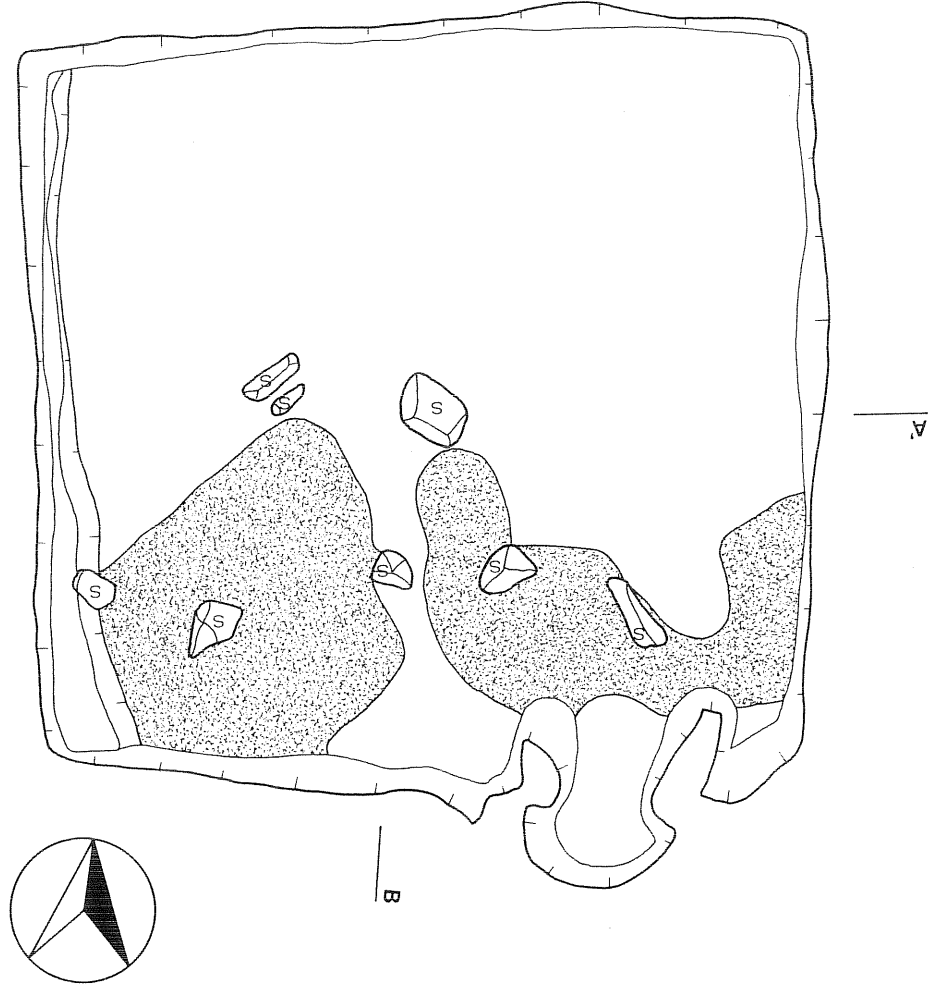
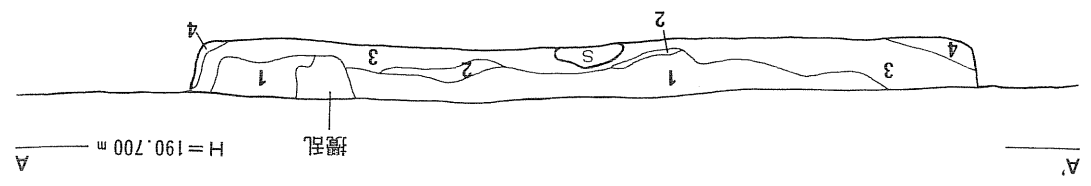
(1) 遺構と遺構内出土遺物

① 竪穴住居跡

第7表 SI001竪穴住居跡

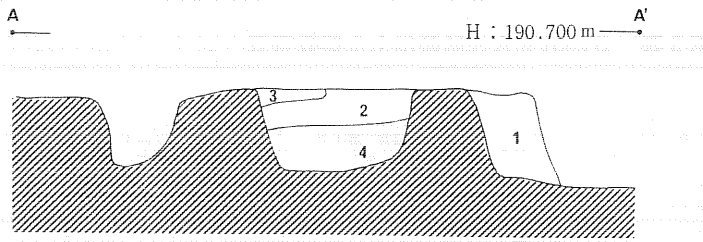
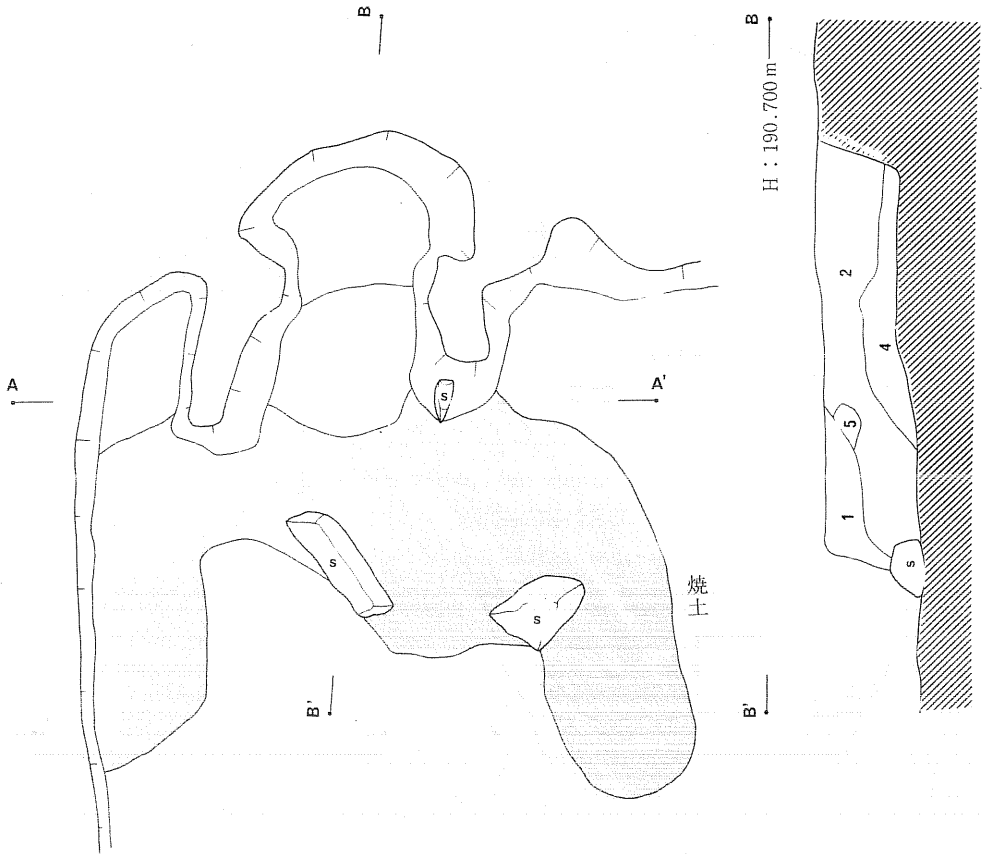
検出地区	11-J, 12-J	挿図番号	第10・11図	図版番号	2-下 4-上, 下 5-上, 下
法 量		東 壁	西 壁	南 壁	北 壁
	壁 長	306cm	312cm	289cm	298cm
	壁 高	20~22cm	17~22cm	22~24cm	19~21cm
	壁 溝 幅	—	—	4~22cm	—
	壁 溝 深	—	—	5~11cm	—
平 面 形	方 形	面 積	9.97㎡	主 軸 方 向	N-19°-W
確 認	第VI層上面で確認された。				
壁	四壁とも床面よりほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。壁高は17cm~24cmと若干浅い感じを受けるが、しっかりとした作りである。				
床 面	カマド焚き口とその周辺、住居跡南東部には焼土を、さらに西壁とその周辺には炭化材、炭化物が多く見られた。北西隅には柱と思われる丸太材を検出した。床面はカマド周辺が非常に堅くしまっており、他は軟弱であった。				
壁 溝	南壁に沿って長さ280cm、幅4~22cm、深さ5~11cmの規模で確認された。				
ピ ッ ト	検出されなかった。				
付 設					
カ マ ド	位 置	東壁中央より北側に存在	素 材	第VI層褐色土を使用	
	カマドは住居跡構築時に第VI層褐色土を残して袖部としているものである。天井部には自然石を使用したものと考えられ、崩壊の際崩れ落ちた石が焚き口に見られる。煙道は壁外にわずかに張り出している。				
遺物とその 出土状態	出土遺物はすべて土師器で、カマド内及び床面直上から出土した。出土土器のうち約4割はカマド内からの出土である。出土破片から推定すると甕形土師器である。				
備 考	焼失家屋である。				

第10図 S I 001竪穴住居跡美測図及び炭化物出土状況



層順	土色	備考
1層	10Y R 5/6 黒褐色土	炭化物1%以下混入
2層	10Y R 5/6 暗褐色土	第2層中に1%以下炭化物混入
3層	10Y R 5/6 暗褐色土	第2層よりも明度・彩度が低い
攪乱層	10Y R 5/6 暗褐色土	ただし攪乱のため層はやわらかくなっている

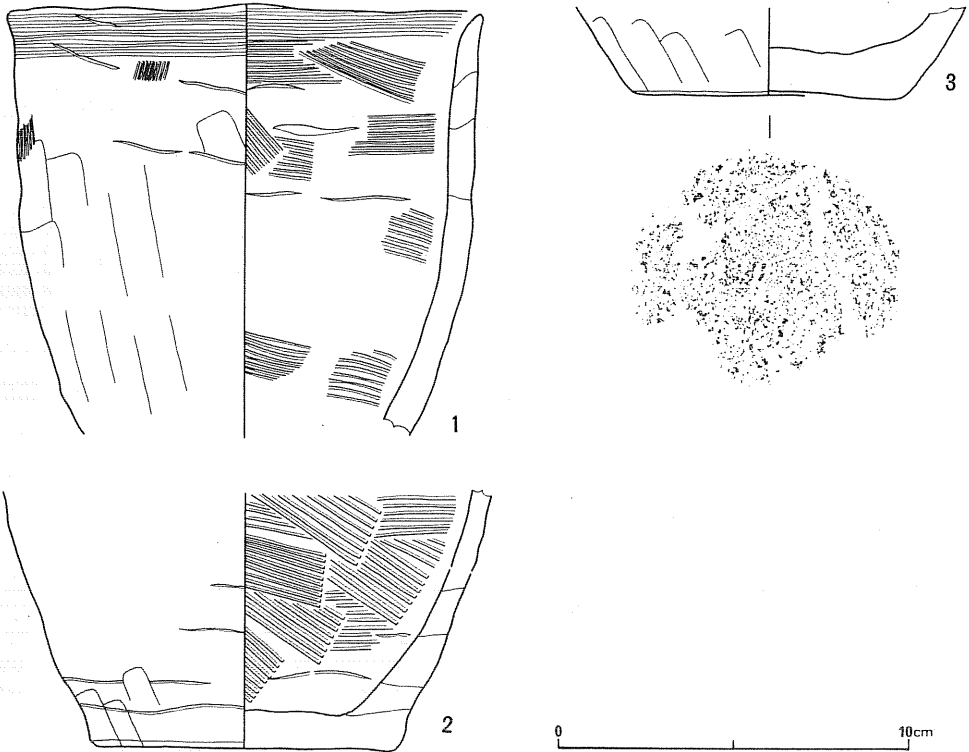




0 1m

層順	土色	備考
1	10Y R 5/1 暗褐色	粘性強、浮石少量混入
2	10Y R 5/2 黒褐色	粘性強、浮石、焼土微量混入
3	2.5Y R 5/1 赤褐色	粘土質
4	2.5Y R 5/2 暗赤褐色	赤褐色焼土多量に混入
5	10Y R 5/1 暗褐色	焼土混入

第11図 S I 001 竪穴住居跡カマド実測図



第12図 S I 001 竪穴住居跡出土土器実測図

第 8 表 S I 001 竪穴住居跡出土土器観察表

図 番 号	挿 番 号	出 土 地 区	外 面		内 面		胎 土	備 考
			調 整	色 調	調 整	色 調		
8-13	12-1	SI001	口縁部, 横ナデ 胴部, ヘラケズリ・刷毛目→ナデ	にふい黄棕色	口縁部, 横ナデ 胴部, 刷毛目	にふい黄棕色	2mm大の小石 を含む	
14	2	SI001	胴部, ヘラナデ 底部, ヘラケズリ	"	胴部, 刷毛目 底部, ヘラナデ	"		
15	3	SI001	胴部, ヘラケズリ 底面, 砂底	橙 色				

② 土 師 器

当遺跡より出土した土師器はすべてS I 001 竪穴住居跡からで、コンテナ 1 箱である。破片より推定できる器形は長胴または小形の甕でロクロを使用したものはみられない。

口縁部の形態は、①ゆるやかに外反するもの、②「く」字状にやや強く外反するもの、③胴部に対して直角に近い角度で外反するものがみられ、底面においてはスタレ状圧痕を窺なでにより磨り消したものの、砂粒の付着したものがみられる。

調整から見ると口縁部内、外面は指なでを施したものが多く、②においては口唇部付近まで

籠などを施したものがみうけられる。胴部外面は籠などで、刷毛目が施され、内面は刷毛目が施されている。底部外面は粗い籠けずりが施されている。

6 まとめ

孫右エ門館遺跡は秋田県鹿角市花輪字孫右エ門館に所在し、地形的には花輪盆地東側山地末端に形成された標高 191 m の花輪高位段丘上に立地する縄文時代と平安時代の複合遺跡である。縄文時代の遺構としては、屋外炉、埋設土器で後期のものと考えられ、出土遺物には中期末、後期、晩期の土器と籠状石器、搔器などの石器がある。

平安時代の遺構としては、竪穴住居跡 1 軒で、床面や埋土から多量の炭化物、焼土が検出された焼失家屋である。一辺 3 m の小型方形で南東壁にカマドが付設され周溝がめぐる歌内遺跡、北の林 I 遺跡などで発見された竪穴住居跡と設計、構造の同類のものである。平安時代の後半期のものであろう。竪穴住居跡からの出土遺物は長胴の甕形土師器である。

これらの遺構と遺物は調査区の北西隅の狭い範囲からの発見であり、このことから遺跡の主要部分は西に隣接する草地、畑の平坦面と考えられる。

主要参考文献

- 今井富士雄、磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」『岩木山』
 鈴木克彦 1974 『中の平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
 葛西 励 1979 「十腰内 I 式土器の編年の細分」『北奥古代文化第11号』
 中村良幸 1979 『立石遺跡』 大迫町埋蔵文化財報告書第 3 集
 秋田県教育委員会 1979 『塚の下遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第61集
 秋田県教育委員会 1979 『館下 I 遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第62集
 成田滋彦 1981 「青森県の土器(後期の土器)」『縄文文化の研究 4』

発掘調査参加者

安保 隆生、小田 幸吉、小田藤次郎、海沼仁太郎、木村省三郎、黒沢 猛、根本 市蔵、
 福本 雅治

安保 洋子、内田トキエ、小田島カチ、海沼 栄子、川又 リサ、黒沢 アキ、黒沢 栄子、
 黒沢 サヨ、児玉 春子、児玉 ヒサ、児玉ミツエ、斎藤 節子、佐々木満子、佐藤カン子、
 佐藤 トミ、佐藤 ミサ、田中ヨシエ、成田 ヒサ、松岡 ヒサ、



遺跡遠景（東▶西）

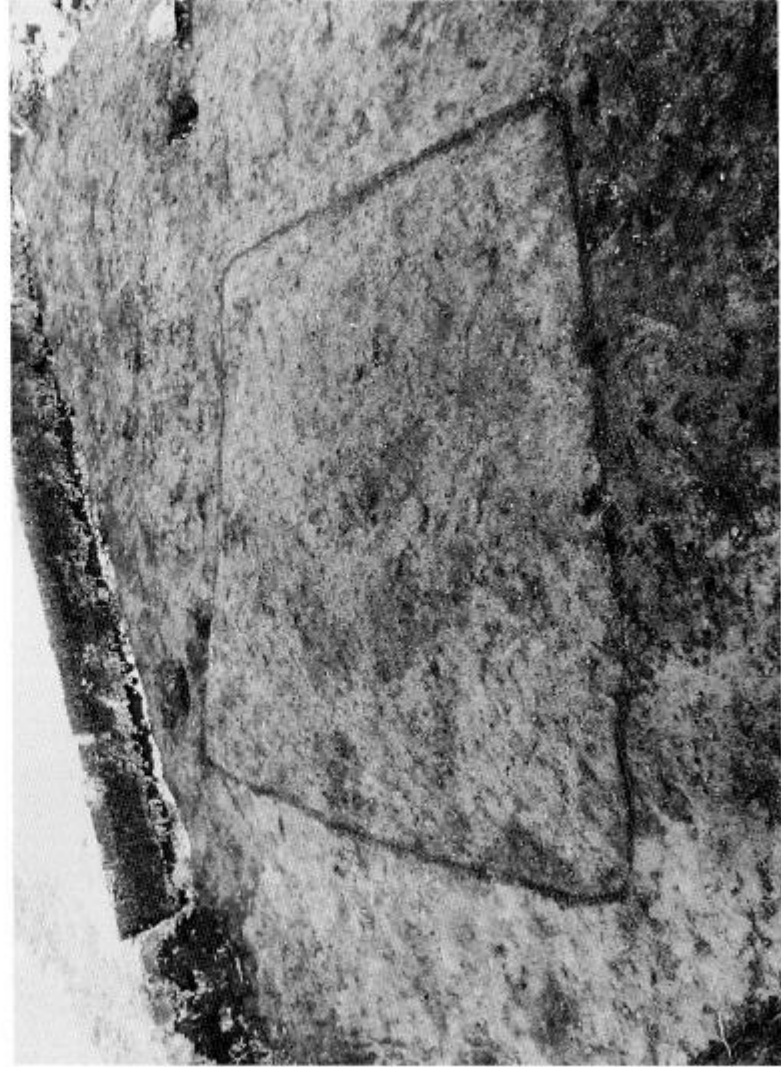


遺跡近景（北▶南）

孫右工門館遺跡



調查風景



S1001 竪穴住居跡確認状況 (北西▶南東)

S X (S) 001 石組炉
(東▶西)



S X (U) 001 埋設土器
(西▶東)



S X (U) 002 埋設土器





S 1 001 竪穴住居跡炭化物出土状況 (北西▶南東)



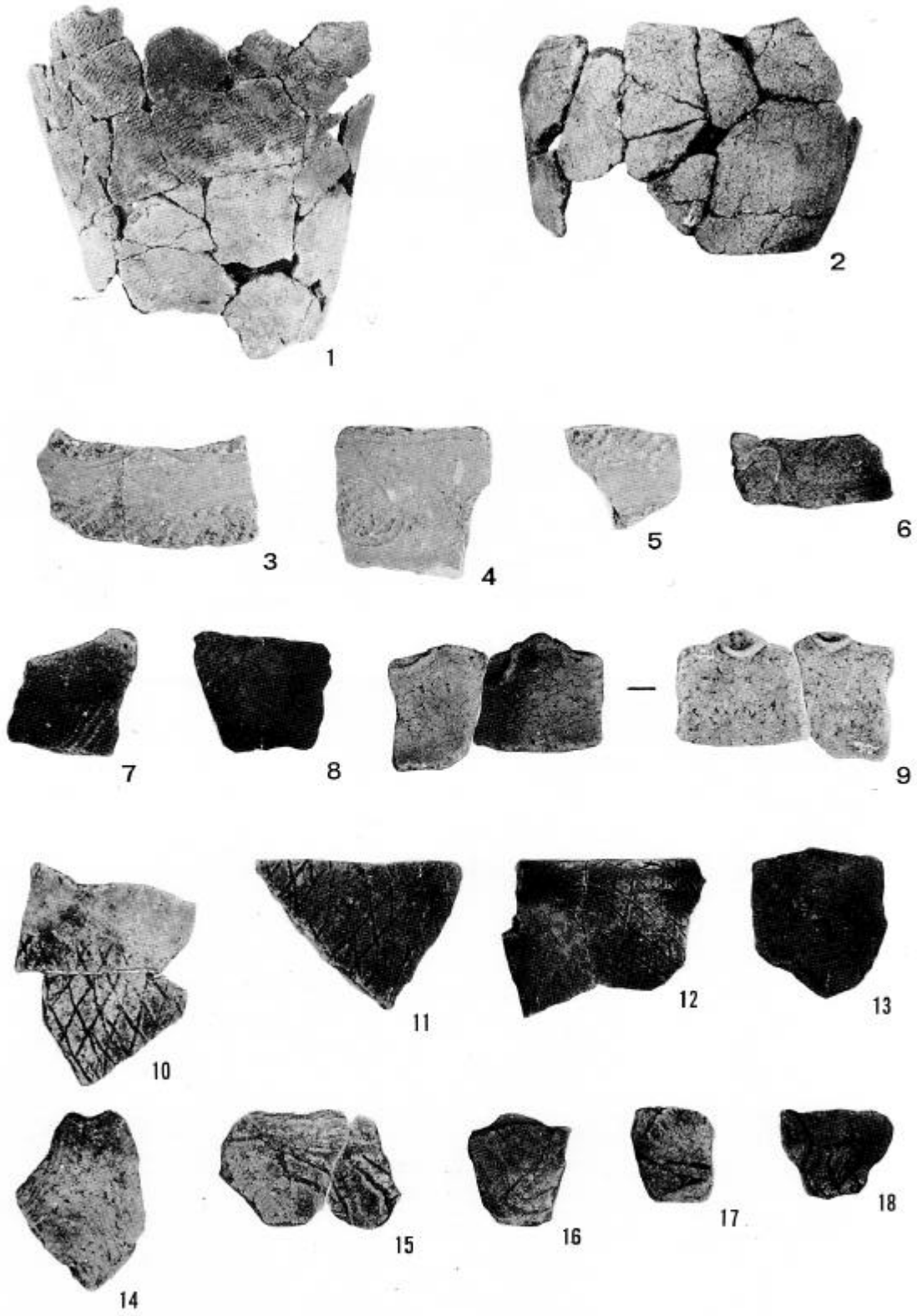
S 1 001 竪穴住居跡西壁炭化物出土状況 (東▶西)



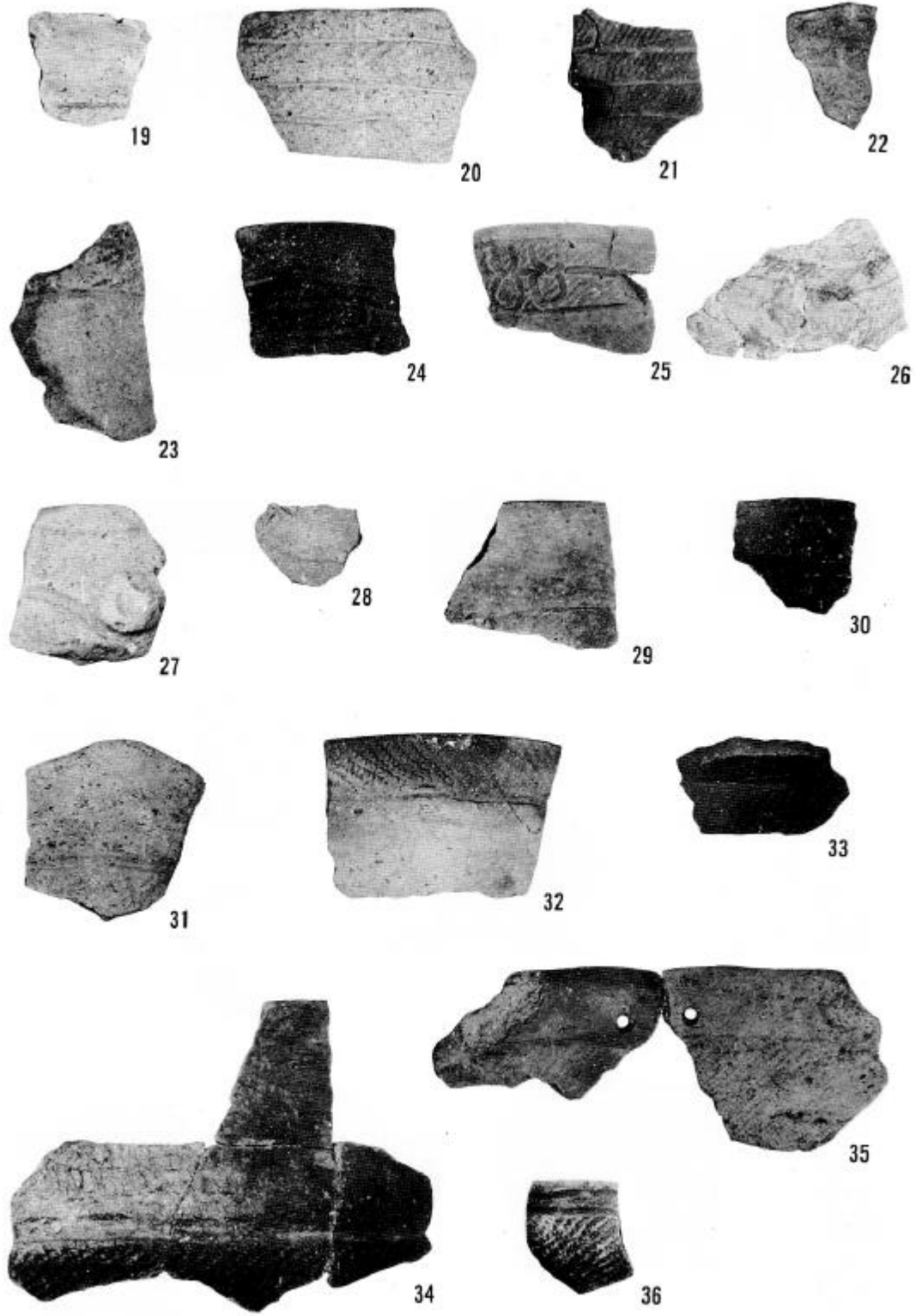
S I 001 竪穴住居跡 (北西▶南東)

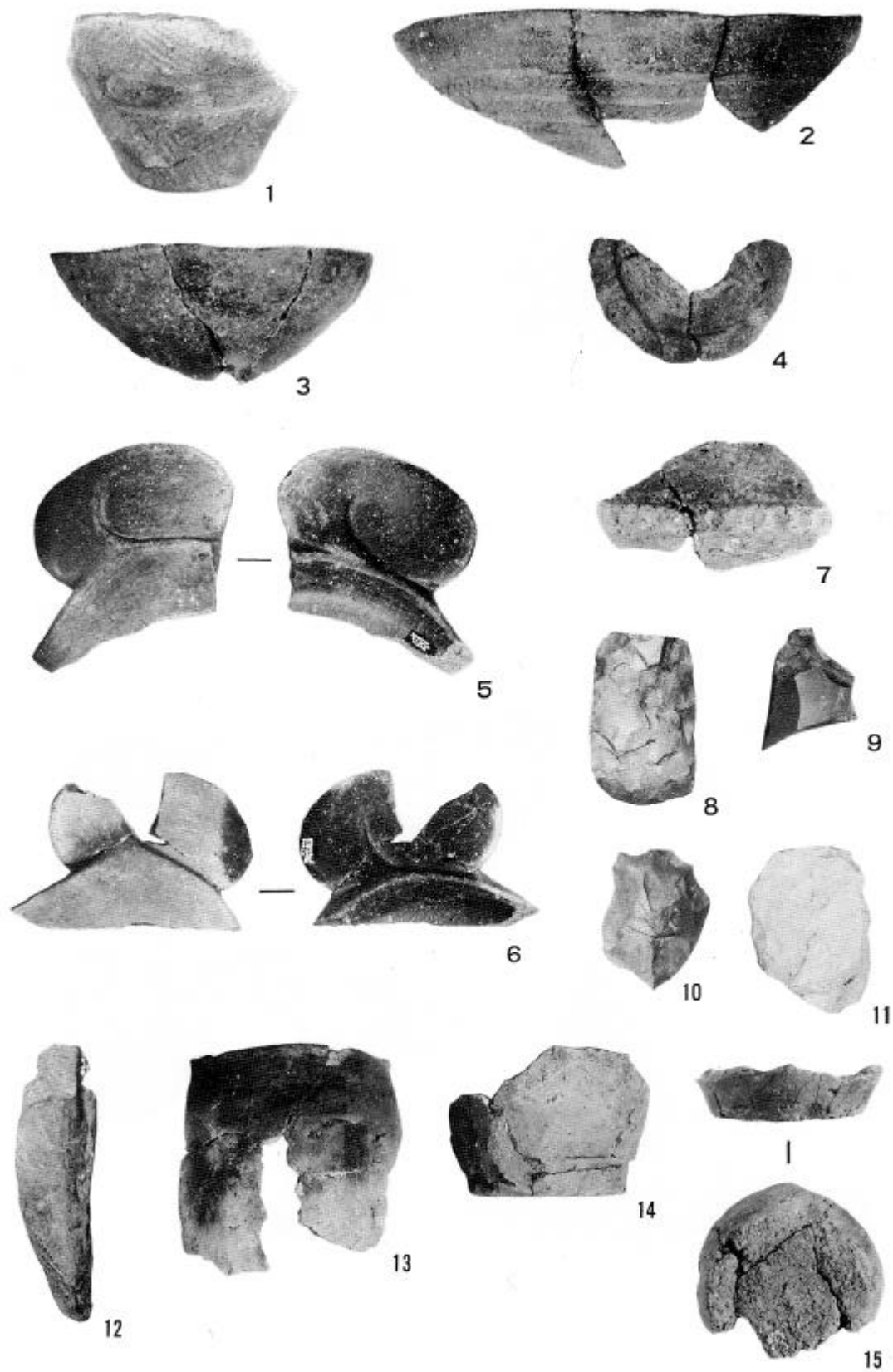


S I 001 竪穴住居跡完掘状況 (北西▶南東)



S X(U)001・002 埋設土器・遺構外出土土器(1)





図版 8

遺構外出土土器・石器・S1001 竪穴住居跡出土土師器

案 内 I 遺 跡

遺 跡 番 号	No.18
所 在 地	鹿角市花輪字案内18番地の1他
調 査 期 間	昭和55年9月22日～11月4日
発掘調査予定面積	2,205m ²
発掘調査面積	1,600m ²

1 遺跡の概観

案内 I 遺跡は鹿角市花輪字案内10-1 他に所在する。この地は国鉄花輪線陸中花輪駅より東 1.8 km、県立比内養護学校東山分校と東山団地のほぼ中間に位置し、北緯40度11分20秒、東経140度40分40秒の地点である。

遺跡は奥羽山脈の一峰をなす二ツ森（標高 739 m）の山麓から西へゆるやかに延びる、標高 200 m 程の花輪高位段丘上西端部に位置する。南・北側は大きな沢に切られ、南方 200 m の所を富士川が西流する。現状は畑地である。

2 調査の方法

遺跡は東北縦貫自動車道の本線にあたり、調査予定地内に存在する中心杭 S T A 137 + 60 と S T A 137 + 80 を結ぶ直線とその延長線を基線とし、これに直交する線を設定し 5 m × 5 m のグリッドを組んだ。グリッドの名称は南東隅の杭をその名称とし、南から北へアラビア数字を 6 から 15 まで、東から西へアルファベットで E から P まで付し、これらの組み合わせにより 8 - E グリッドのように呼ぶようにした。初め 4 本のトレンチを設定して遺構の確認に務め、その後調査区北西の検出遺構から精査を開始した。遺構の実測は、2 本のグリッド杭を結んだ線を基線とし、これに直交する 1 m × 1 m の小グリッドを設定する簡易遣り方方法を用いた。

3 調査の経過

9 月 22 日に現場にプレハブ 2 棟とトイレを設置して器材を搬入し、発掘調査の準備を整える。26 日に遺跡の東側から粗掘りを開始する。縄文土器片、土師器片が出土する。遺跡の中央部分が既に削平されて凹地になっていたため、ここを排土の捨場とする。

10 月 4 日に 14 - P グリッドで検出された円形の落ち込みを S K 001 土壇とする。7 日に 12 - P グリッドで埋設土器が確認され、これは S X(U)001 と命名、9 日に S K 001 に重複する円形プランを確認し、精査の結果石組炉が検出されたため、これを S I 001 竪穴住居跡とする。13 - P グリッドで S I 002 竪穴住居跡を確認。13 日に 13 - L グリッドで円形の遺構を確認し、S I 003 竪穴住居跡とする。この住居跡は北側の壁が削平されていた。農繁期のため作業員が減り、発掘作業が遅れがちになる。16 日に 11 - N グリッドで検出されたプランは、10 - N グリッドでカマドが確認されたため S I 007 竪穴住居跡とする。21 日には S I 003 の南西隅に土壇を検出したため、S K 002 とした。25 日に 9 - F グリッドで黒色土のプランを確認、内部に完形に近い

第1図 フリット下配置図



土器が押し潰された状態で検出された。30日に11-PグリッドでS I 004 竪穴住居跡を確認した。9-Fグリッド検出のプランは竪穴住居跡と土壌が重複したものであり、S I 006 竪穴住居跡、S K 005、S K 007土壌とした。13-KグリッドでS I 005 竪穴住居跡を検出する。

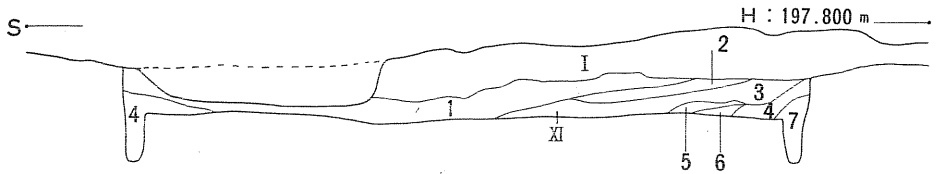
11月3日に遺跡全体のコンター図を作成し、4日には全ての作業を終了して器材の撤収を完了した。

4 遺跡の層位

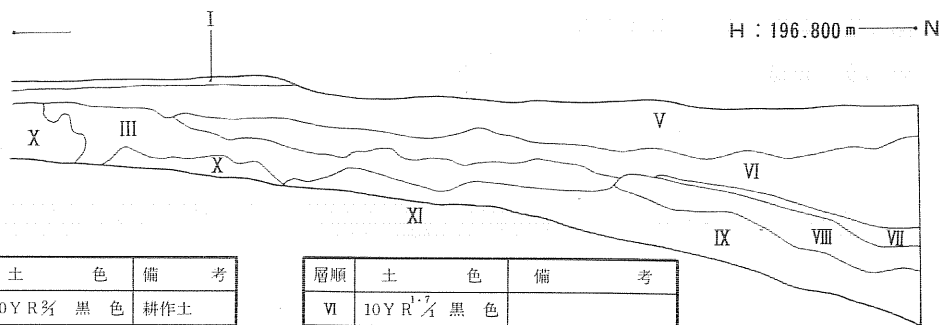
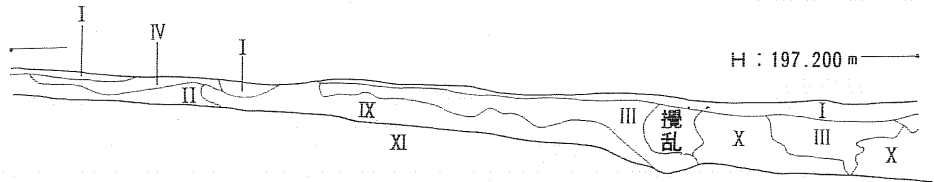
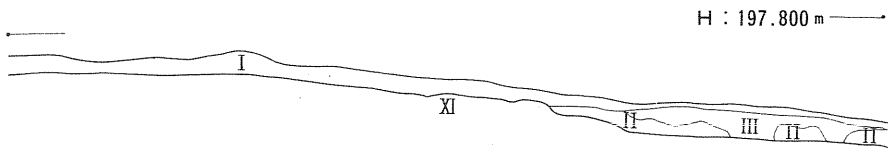
遺跡の基本的な層位を把握するために、遺跡西側に幅1mの南北(Nライン)のトレンチを設定し、観察を行った。

第I層	黒色土	(10Y R $\frac{2}{4}$)	耕作土、攪乱を受けている箇所もある。
第II層	褐色土	(10Y R $\frac{4}{6}$)	遺跡中央部に部分的に見られる。
第III層	暗褐色土	(10Y R $\frac{3}{4}$)	
第IV層	褐色土	(10Y R $\frac{4}{4}$)	遺跡中央部に部分的に見られる。
第V層	黒色土	(10Y R $\frac{2}{4}$)	遺物包含層
第VI層	黒色土	(10Y R $1\cdot\frac{2}{4}$)	
第VII層	黒褐色土	(10Y R $\frac{2}{6}$)	浮石粒子を含む。
第VIII層	黒色土	(10Y R $\frac{2}{4}$)	下面で遺構の確認ができたものもある。
第IX層	黒色土	(10Y R $1\cdot\frac{2}{4}$)	遺構確認面である。
第X層	黄褐色土	(10Y R $\frac{5}{6}$)	
第XI層	黄褐色土	(10Y R $\frac{5}{6}$)	地山

案内1遺跡



※算用数字はS1007 竪穴住居跡の
土層断面図の土色説明と一致する。

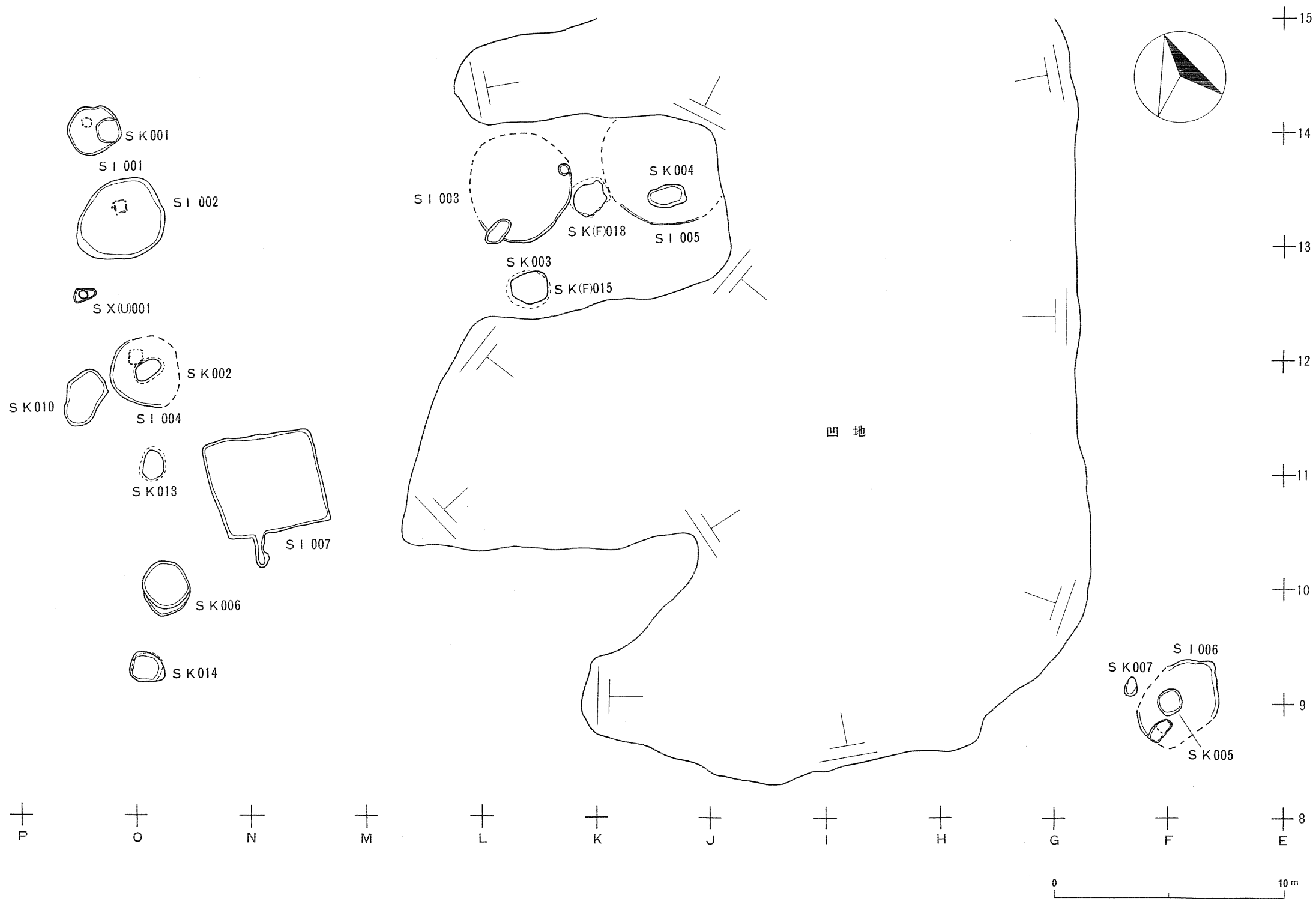


層順	土色	備考
I	10Y R 8/2 黒色	耕作土
II	10Y R 6/2 褐色	
III	10Y R 5/2 暗褐色	
IV	10Y R 4/2 褐色	
V	10Y R 3/2 黒色	

層順	土色	備考
VI	10Y R 1.5/2 黒色	
VII	10Y R 3/2 黒褐色	大湯浮石粒子を含む
VIII	10Y R 4/2 黒色	
IX	10Y R 1.5/2 黒色	
X	10Y R 5/2 黄褐色	
XI	10Y R 6/2 黄褐色	地山層である

第2図 Nライン土層図





第3図 案内I遺跡遺構配置図

5 遺構と遺物

本遺跡の遺構の構築時代は縄文時代と平安時代であり、遺構と遺物の記述は時代順とした。

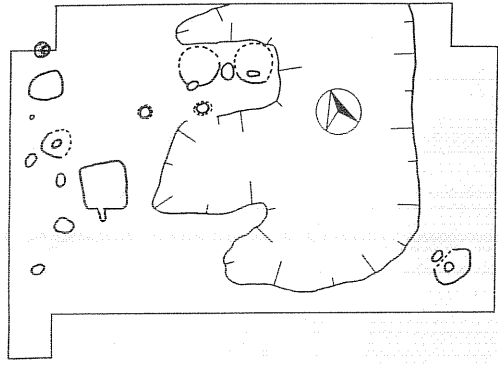
検出された遺構数は以下の通りである。

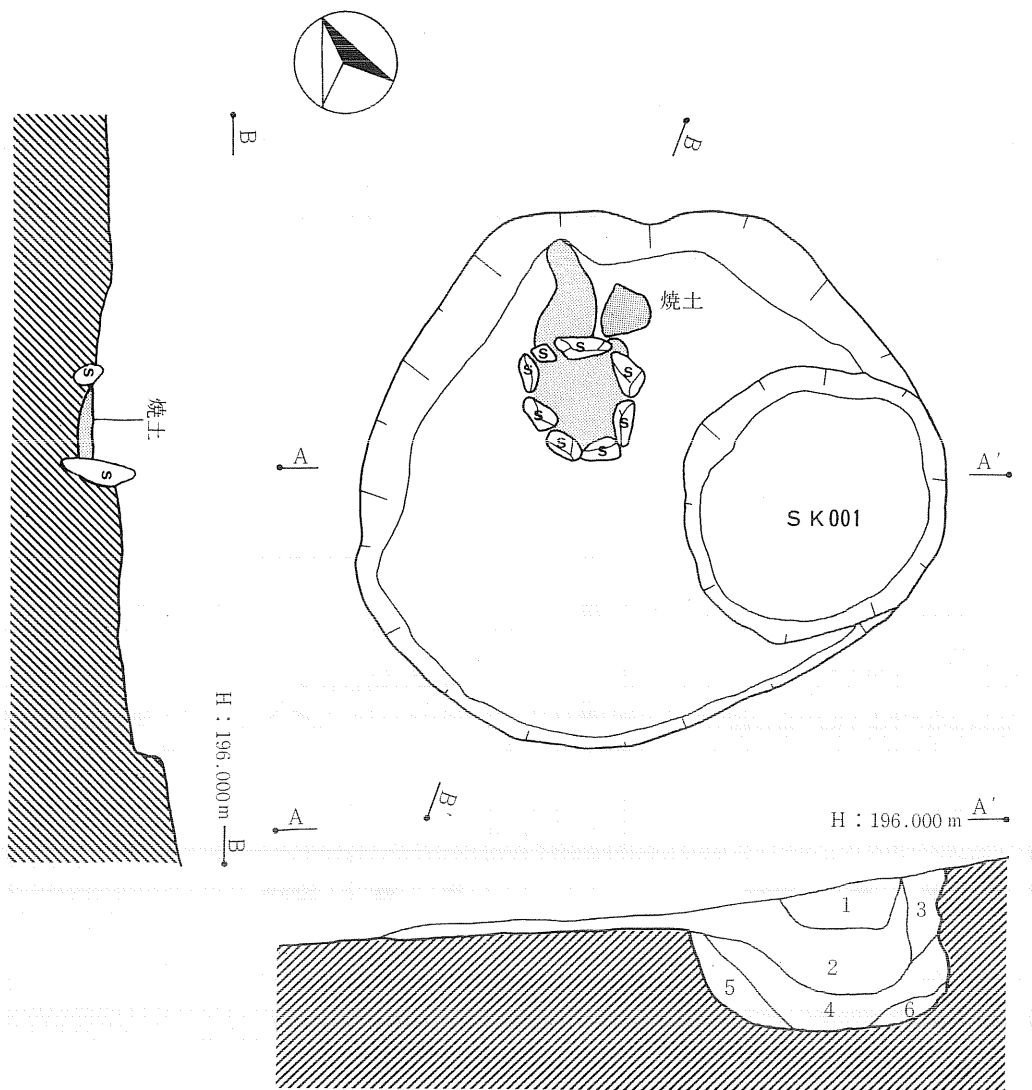
縄文時代	竪穴住居跡…………… 6 軒	土壇…………… 9 基
	フラスコ状ピット…… 2 基	埋設土器…………… 1 基
平安時代	竪穴住居跡…………… 1 軒	

1 縄文時代

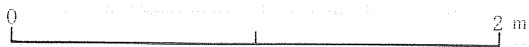
(1) 遺構と遺構内外出土遺物

① 竪穴住居跡・土壇・フラスコ状ピット・埋設土器

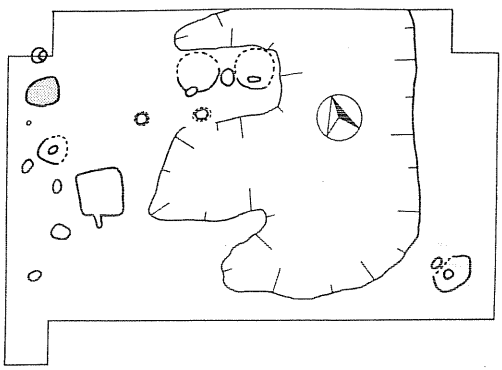
第 1 表		遺構の位置		
遺構名	SI001			
検出地区	13-P 14-P			
挿図番号	第4図, 第18図			
図版番号	3(下)			
法 量	長 軸	240cm	短 軸	220cm
	壁 高	2~24cm	面 積	4.05m ²
	平面形	不整円形	主軸方向	N-30°-E
確 認	Ⅸ層上面			
壁	削平を受け遺存状態は良くない。			
床 面	やや軟弱であるが、平坦である。 中央より北西側に炉が存在する。			
ピ ッ ト	なし			
炉	不整形の石組炉。20cm大の川原石を使用している。南側の石が良く焼けている。			
遺物とその 出土状態	覆土下層及び床面直上より十数点出土。			
備 考	東壁部にSK001が重複する。住居跡よりも新しい。			

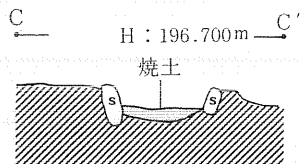
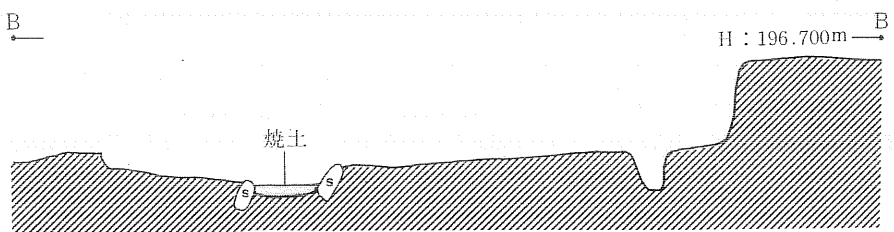
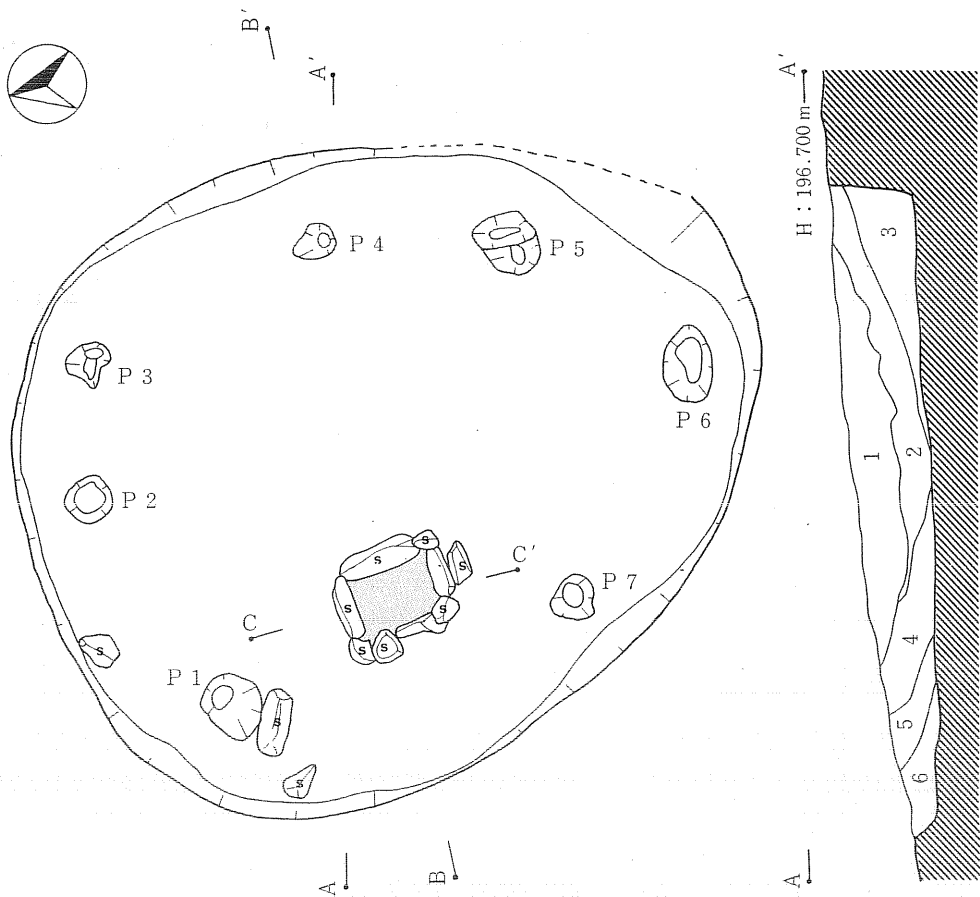


層順	土色	備考
第1層	10Y R $\frac{1}{2}$ 黒色	
2	10Y R $\frac{1}{2}$ 黒褐色	黄色土、炭化物を微量に含む
3	10Y R $\frac{1}{2}$ "	" を少量含む
4	10Y R $\frac{1}{2}$ "	" を多量に含む
5	10Y R $\frac{1}{2}$ "	" を少量含む
6	10Y R $\frac{1}{2}$ "	"

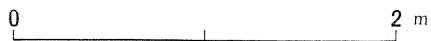


第4図 SI 001 竪穴住居跡および S K 001 土壌実測図

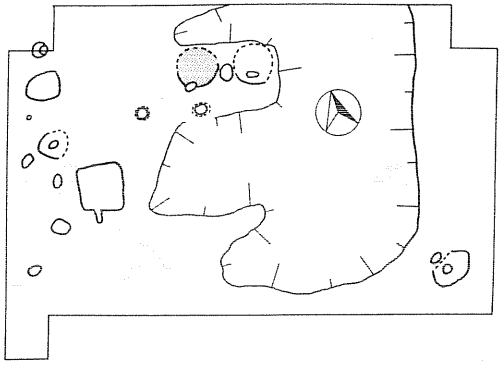
第 2 表		遺構 の 位 置		
遺構名	SI 002			
検出地区	12-O, 12-P 13-O, 13-P			
挿図番号	第5図, 第14図			
図版番号	4(上), 11			
法 量	長 軸	404cm	短 軸	336cm
	壁 高	12~42cm	面 積	10.62㎡
	平 面 形	楕 円 形	主軸方向	N-86°-E
確 認	Ⅸ層上面			
壁				
床 面	平坦であり, 固い。床面中央西側に炉がある。			
ピ ッ ト	住居内にP ₁ ~P ₇ が存在する。P ₁ (61) P ₂ (14) P ₃ (32) P ₄ (21) P ₅ (28) P ₆ (11) P ₇ (11)			
炉	偏平な川原石を使用した方形の石組炉 (64×52cm) である。			
遺物とその 出土状態	床面直上より遺物が出土している。			
備 考	確認面において, 明褐色粘土の周りに黒色土がドーナツ状に確認され, 当初は風倒木痕と考えられたものであった。			

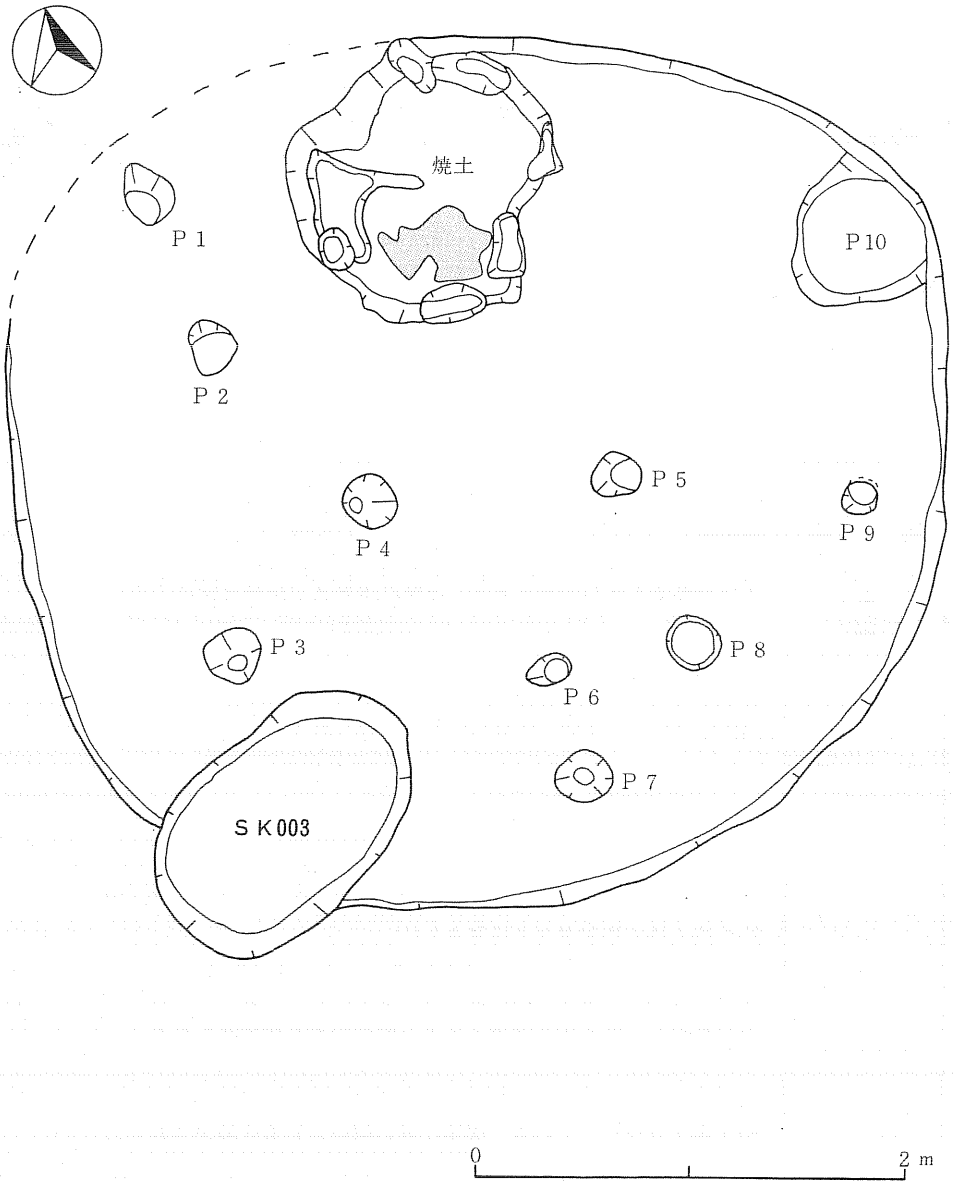


層順	土色	備考
第1層	7.5Y R% 明褐色	
2	10Y R% 黒色	
3	10Y R% 暗褐色	
4	10Y R% "	黒色土を含む
5	10Y R% "	
6	10Y R% "	黄褐色土を少量含む

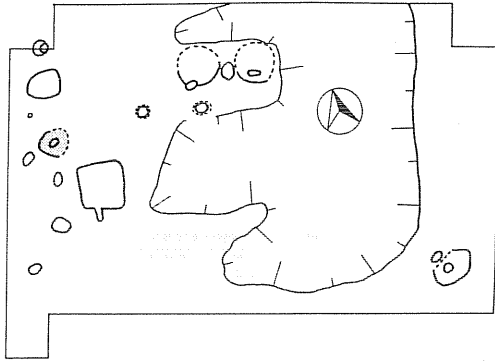


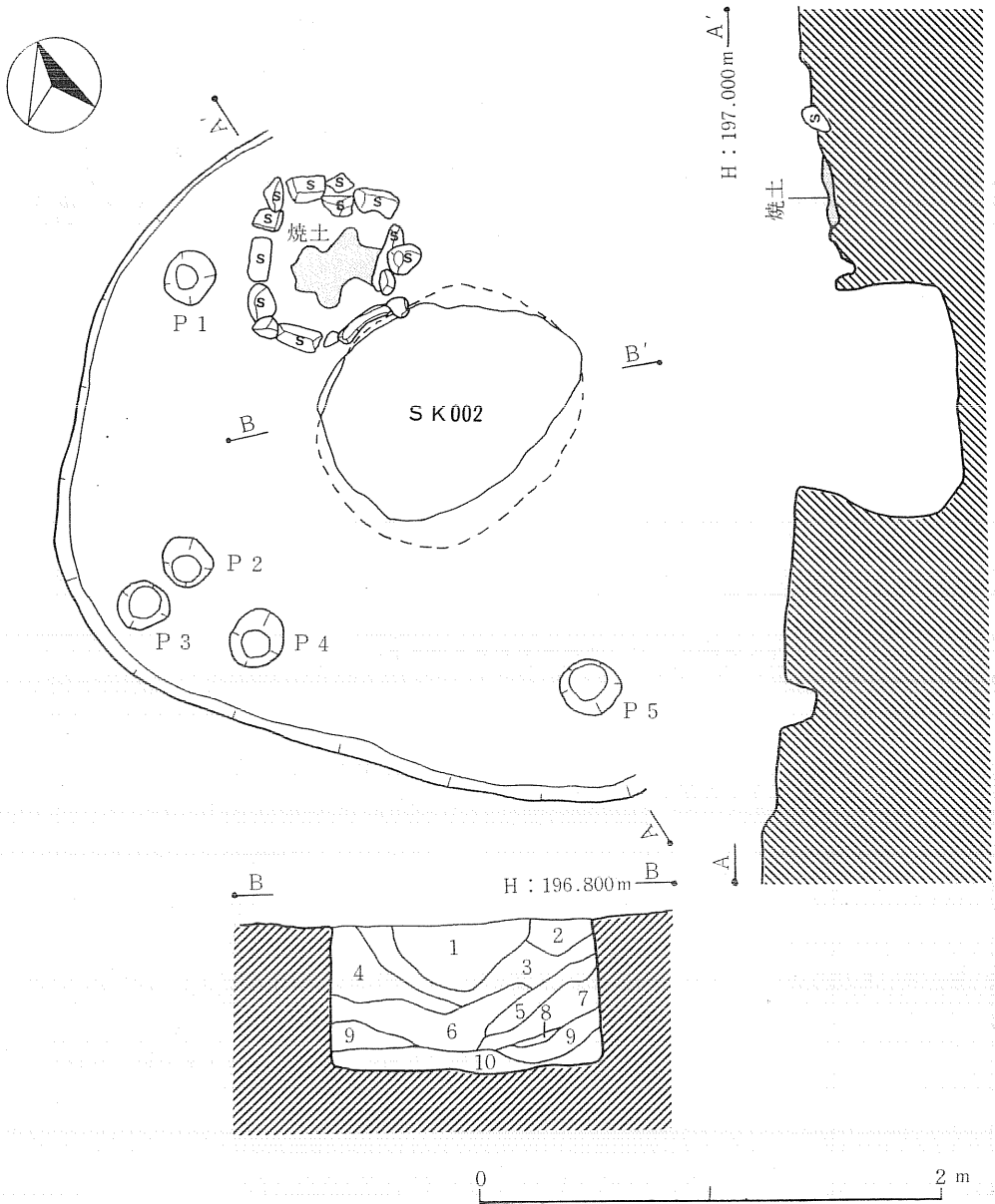
第5図 S I 002 竪穴住居跡実測図

第 3 表		遺構の位置			
遺構名	SI 003				
検出地区	13-L 13-M				
挿図番号	第6図, 第14図, 第18図				
図版番号	4(下), 11				
法 量	長 軸	435cm	短 軸	410cm	
	壁 高	0~26cm	面 積	15.45m ²	
	平面形	円 形	主軸方向	N-9°-E	
確 認	地山面				
壁	南壁が確認できたのみであり、北側は床面まで削平を受けていた。				
床 面	全体に平坦であるが、炉周辺は凹凸が見られる。				
ピ ッ ト	P ₁ ~P ₁₀ が見られる。 P ₁ (47) P ₂ (51) P ₃ (65) P ₄ (66) P ₅ (40) P ₆ (28) P ₇ (82) P ₈ (51) P ₉ (56) P ₁₀ (19) P ₂ ・P ₃ ・P ₇ ・P ₉ がセットになる(?)				
炉	北壁に接して不整長方形の掘り方と焼土があり、数ヶ所の石の抜きとり痕らしきもの等から、長方形を基調とする石組炉の存在が考えられる。				
遺物とその出土状態	埋土中より出土している。床面に近い所から石皿が検出された。				
備 考	SK 003が当住居跡を切って構築されている。				



第 6 図 S I 003 竪穴住居跡および S K 003 土坑実測図

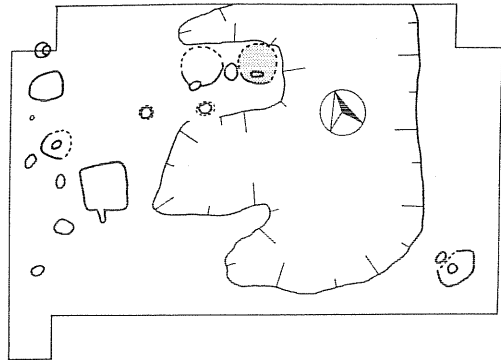
第 4 表		遺構 の 位 置		
遺構名	SI 004			
検出地区	11-0, 11-P 12-0, 12-P			
挿図番号	第7図			
図版番号	5(上)			
法 量	長 軸		短 軸	
	壁 高	0~10cm	面 積	
	平面形	円形(?)	主軸方向	
確 認	Ⅸ層下面			
壁	西壁と南壁の一部が確認できたのみである。			
床 面	床面中央北側に炉がある。			
ピ ッ ト	5個存在する。柱穴の一部をなすと思われるがセットは不明。			
炉	5~20cm大の川原石を使用した方形の石組炉。炉南東隅はSK002に破壊されている。			
遺物とその 出土状態				
備 考	SI004炉を破壊してSK002が構築されている。			

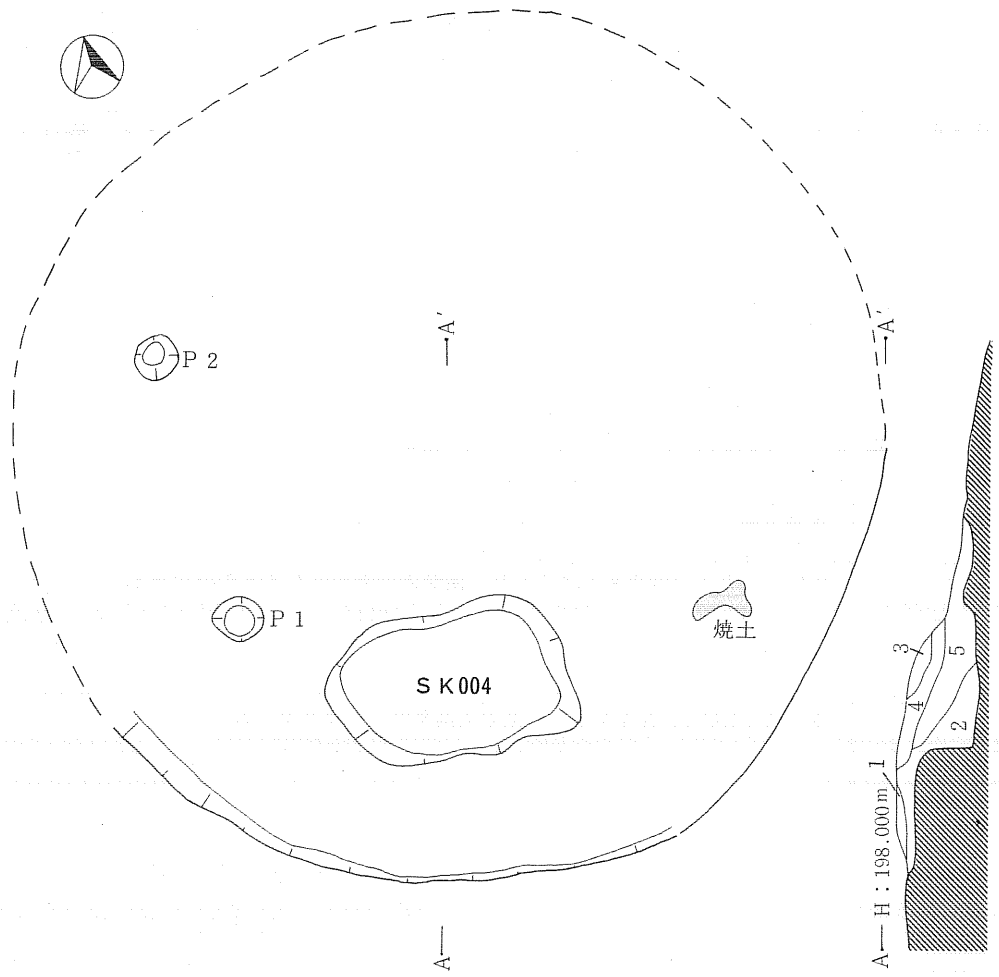


層順	土色	備考
第1層	10Y R 4/4 褐色	黄褐色+黒色土の混合土
2	10Y R 3/2 暗褐色	" 混入
3	10Y R 2/2 黒褐色	
4	10Y R 3/2 暗褐色	
5	10Y R 2/2 黒褐色	

層順	土色	備考
第6層	10Y R 3/4 暗褐色	
7	10Y R 3/2 暗褐色	
8	10Y R 5/2 黄褐色	
9	10Y R 3/2 黒褐色	
10	10Y R 5/2 褐色	

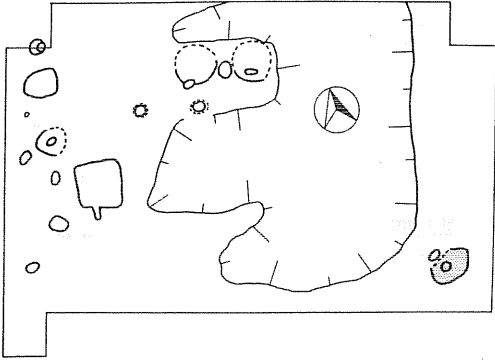
第7図 S I 004 竪穴住居跡および S K 002 土壌実測図

第 5 表		遺構 の 位 置		
遺構名	SI 005			
検出地区	13-K			
挿図番号	第 8 図			
図版番号	5 (下)			
法 量	長 軸		短 軸	
	壁 高	0 ~ 10cm	面 積	
	平 面 形	円 形 (?)	主軸方向	
確 認	IX層下面			
壁	周壁がほとんど削平をうけており、南側の一部が残存するのみである。			
床 面	南側に SK004 が存在する。床面中央南東側に焼土が見られる。			
ピ ッ ト	2 個検出した。			
炉				
遺物とその 出土状態	床面直上よりの出土が多い。十腰内 I 式土器。			
備 考	SK 004 と重複する。同時期と考えられる。			

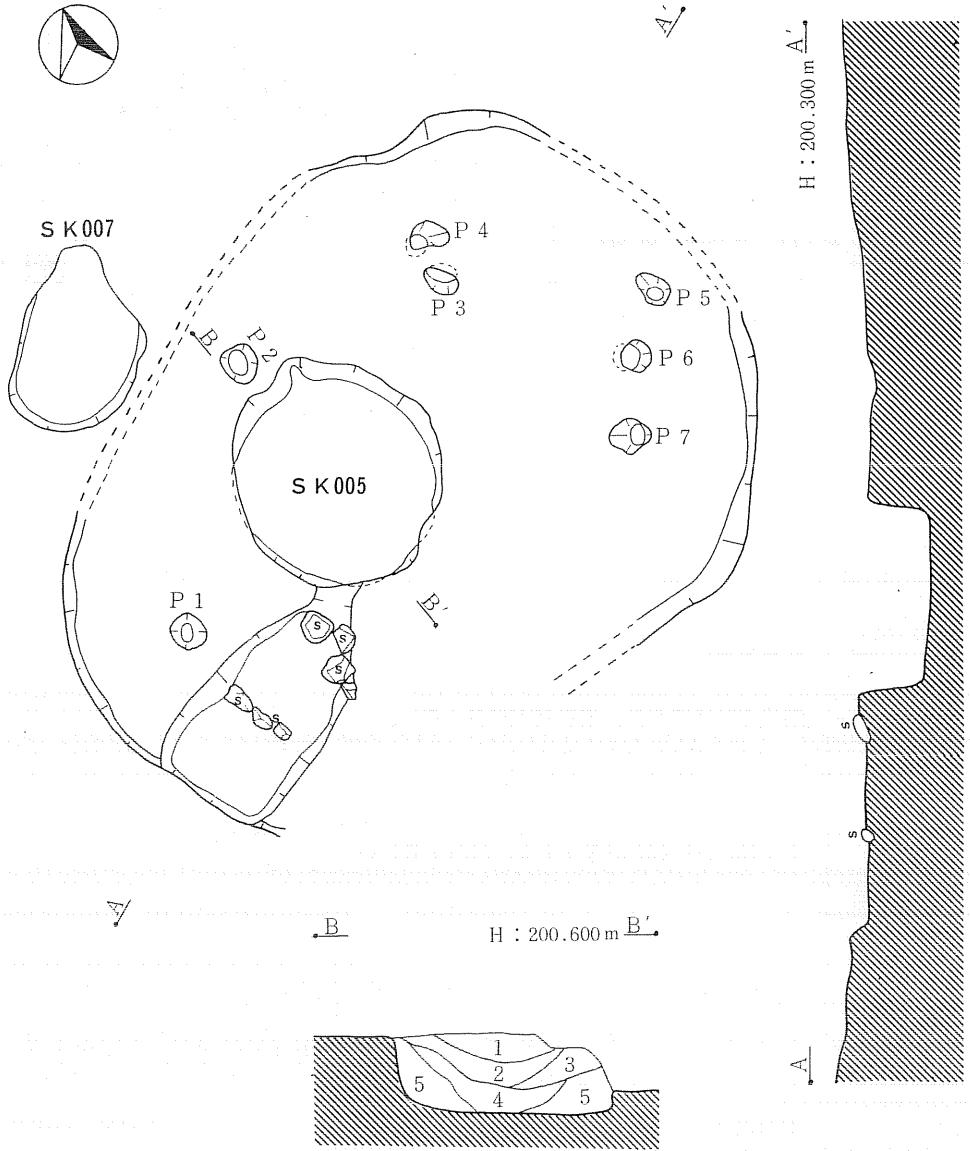


層順	土色	備考
1	10Y R 2/6 黒色	
2	10Y R 2/6 黒褐色	
3	10Y R 1/6 黒色	
4	10Y R 2/6 黒色	
5	10Y R 2/6 黒色	褐色土粒子を含む

第8図 S I 005 竪穴住居跡および S K 004 土壌実測図

第 6 表		遺構 の 位 置		
遺構名	SI 006			
検出地区	8-F, 8-G 9-F, 9-G			
挿図番号	第9図, 第14図, 第15図 第17図, 第18図			
図版番号	6(上), 6(下), 7(上), 7(下), 11, 12			
法 量	長 軸	395cm	短 軸	310cm
	壁 高	0~10cm	面 積	9.72m ²
	平面形	楕円形	主軸方向	N-51°-E
確 認	Ⅸ層上面			
壁	削平をうけており、遺存状況は良くない。			
床 面	中央部にSK 005が存在する。凹凸が著しい。			
ピ ッ ト	住居内にP ₁ ~P ₇ を確認した。P ₁ (25) P ₂ (7) P ₃ (32) P ₄ (24) P ₅ (18) P ₆ (20) P ₇ (13) 柱穴としてどのような配置をなすか不明である。			
炉	南西壁に接して作られ、平面「U」字形を呈する。遺存する石の配列から石組複式炉が考えられる。			
遺物とその 出土状態	床面直上に近い位置から中期末と思われる土器が検出された。 確認面上の土器は十腰内I式の土器が多く、西側に隣接するSK 007と当住居跡が廃棄されたあとに、これらの土器が投げ込まれたものと思われる。(10図参照)			
備 考	西側に隣接するSK 007は当住居跡よりも若干古い但同时期と考えられ、SK 005は住居跡より新しい。			

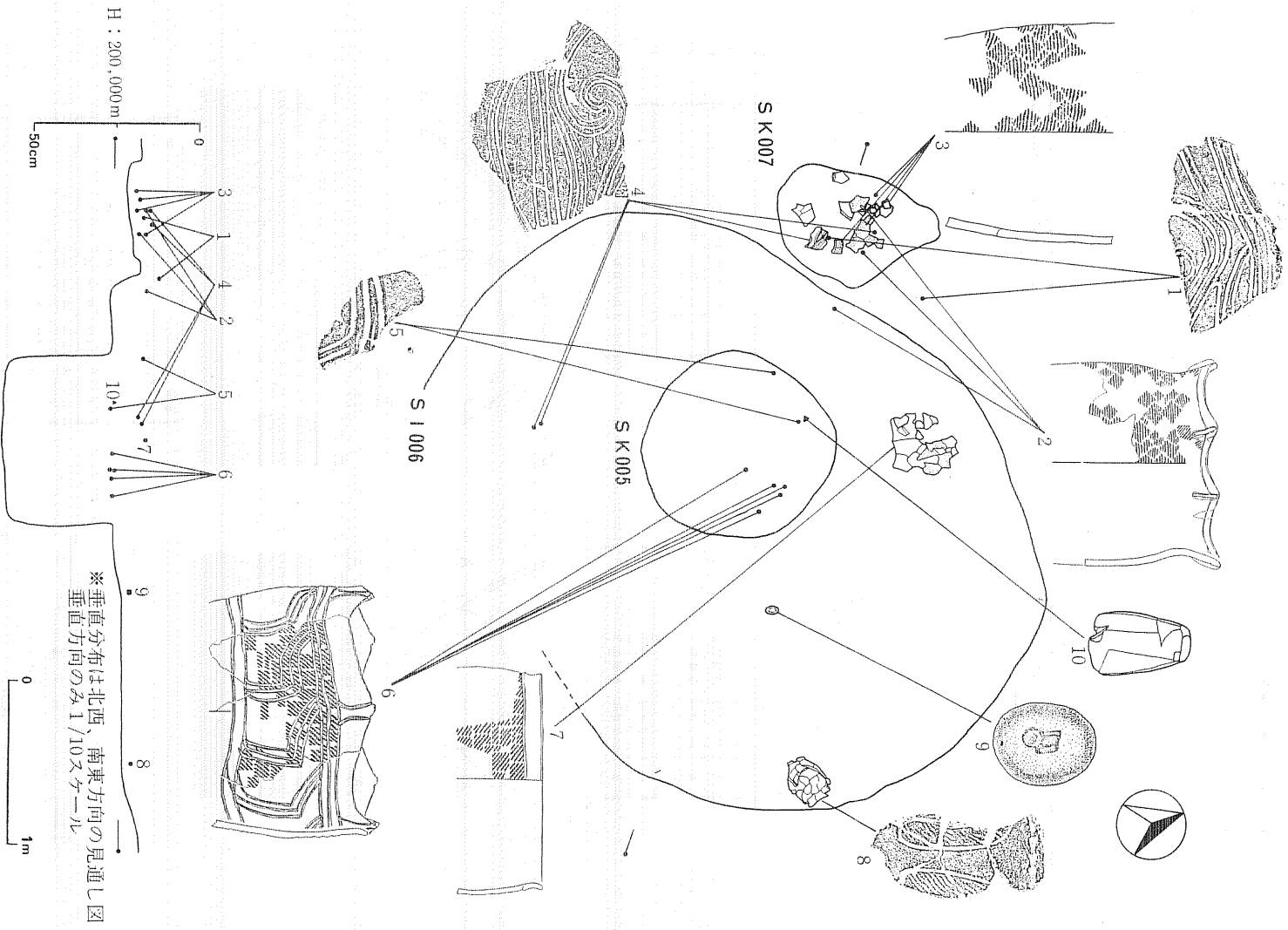
案内 I 遺跡



層順	土色	備考
第1層	10Y R 5/2 黒褐色	にぶい黄橙色土多量に含む
2	10Y R 1/2 黒色	
3	10Y R 5/2 黒色	
4	10Y R 1/2 黒色	明黄褐色土混入
5	10Y R 5/2 黒褐色	

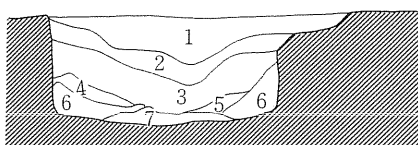
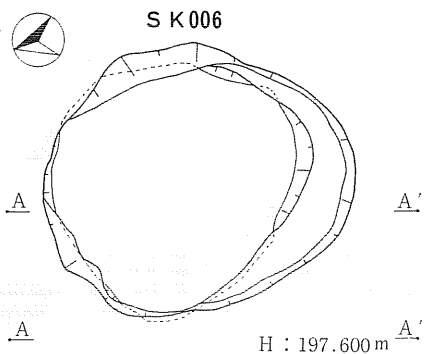
0 2 m

第9図 S I 006 竪穴住居跡および S K 005・007 土壙実測図

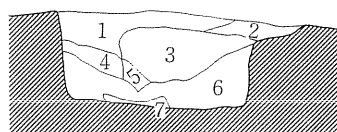
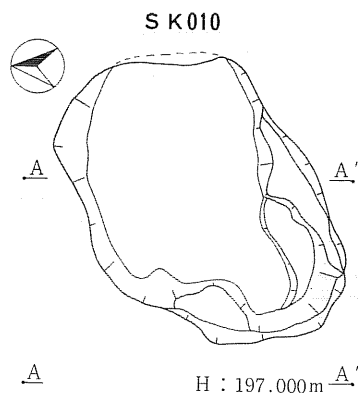


第10図 S I 006・S K 005・007遺物接合水平分布・垂直分布図

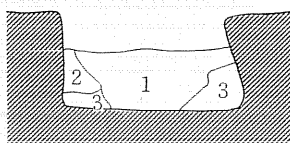
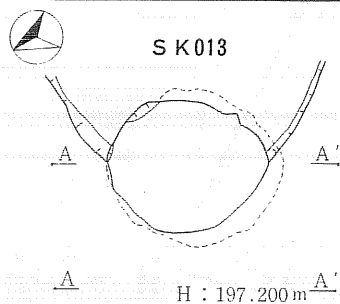
案内 I 遺跡



層順	土 色	備 考
1	10Y R 7/2 黒 色	
2	10Y R 7/2 黒 褐色	
3	10Y R 7/2 黒 褐色	
4	10Y R 7/2 黒 褐色	
5	10Y R 7/2 暗 褐色	
6	10Y R 7/2 褐 色	
7	10Y R 7/2 黒 褐色	

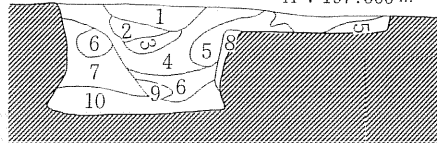
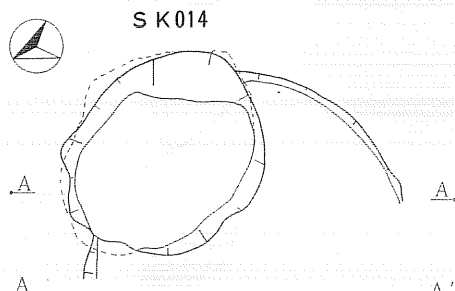


層順	土 色	備 考
1	10Y R 7/2 黒 褐色	
2	10Y R 7/2 黒 色	
3	7.5Y R 7/4 褐 色	
4	10Y R 7/2 黒 褐色	
5	10Y R 1/2 黒 色	
6	10Y R 7/2 褐 色	
7	10Y R 7/2 暗 褐色	



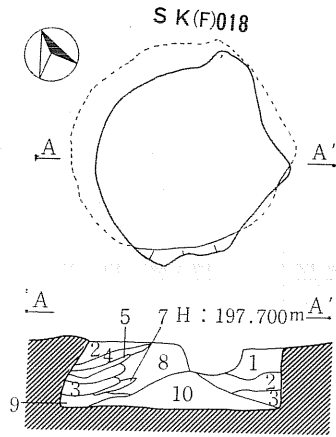
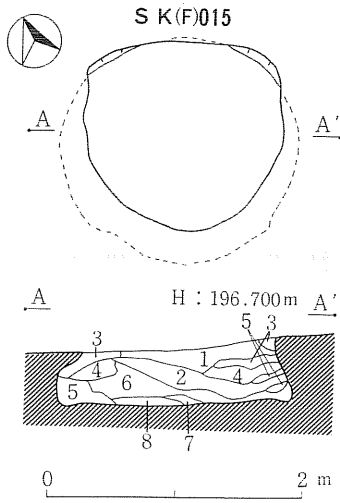
0 2 m

層順	土 色	備 考
1	10Y R 7/2 褐 色	粘性強
2	10Y R 7/2 黒 褐色	
3	10Y R 7/2 褐 色	粘性強、黄褐色土混入



層順	土 色	備 考
1	10Y R 7/2 褐 色	
2	10Y R 7/2 暗 褐色	
3	10Y R 7/2 黒 褐色	
4	10Y R 7/2 暗 褐色	
5	10Y R 7/2 褐 色	
6	10Y R 7/2 褐 色	
7	10Y R 7/2 黄 褐色	
8	10Y R 7/2 明 黄褐色	
9	10Y R 7/2 暗 褐色	黄褐色土を含む
10	10Y R 7/2 暗 褐色	

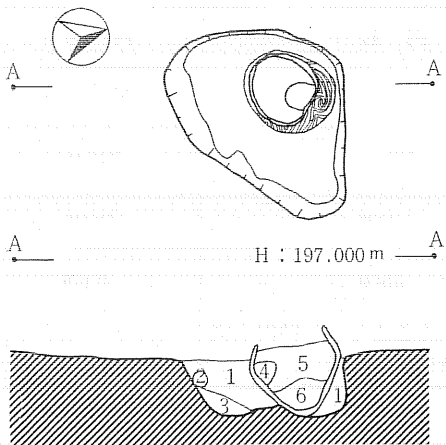
第11図 S K006・010・013・014土壤実測図



層順	土色	備考
1	10YR% 暗褐色	粘性強、炭化物、小石を少量混入
2	10YR% 暗褐色	粘性強
3	10YR% 黄褐色	粘性弱
4	10YR% 黒褐色	粘性強、炭化物、褐色土混入
5	7.5YR% 褐色	粘性強
6	10YR% 暗褐色	粘性強、炭化物
7	10YR% 黒褐色	粘性強
8	10YR% 黒色	粘性強

層順	土色	備考
1	10YR% 暗褐色	
2	10YR% 褐色	
3	7.5YR% 褐色	
4	10YR% 黄褐色	
5	10YR% 褐色	
6	10YR% 黄褐色	
7	10YR% 暗褐色	
8	10YR% 褐色	
9	10YR% 暗褐色	
10	10YR% 褐色	

第12図 SK(F)015・018フラスコ状ピット実測図



層順	土色	備考
1	10YR% 暗褐色	地山粒子を含む
2	10YR% 褐色	
3	10YR% 暗褐色	
4	7.5YR% 黒褐色	
5	7.5YR% 黒褐色	
6	7.5YR% 黒褐色	第5層よりやわらかい

第13図 SX(U)001埋設土器実測図

		S K 001	S K 002	S K 003
挿	図	第 4 図, 第15図	第 7 図	第 6 図
図	版	3 (下), 11	5 (上)	4 (下)
検	出 地 区	13-P, 14-P	11-0, 11-P	13-L
平	面 形	円 形	楕円形	小判形
主	軸 方 位	←→	E←→W	NE←→SW
法 量	長 軸	110cm	118cm	72cm
	短 軸	110cm	96cm	50cm
	深 さ	40~50cm	55~74cm	11~13cm
出土遺物				
備	考	IX層上面で確認。 SI01と重複, 住居跡より新しい。	SI004 を切って構築している。袋状の土壇	SI003 を切って構築されている。
		S K 004	S K 005	S K 006
挿	図	第 8 図	第 9 図, 第10図, 第15図 第17図	第11図, 第15図
図	版	5 (下)	6 (上), 6 (下), 8 (上), 11, 12	8 (中), 11
検	出 地 区	13-K	8-FG, 9-FG	9-0, 10-0
平	面 形	長方形	円 形	円 形
主	軸 方 位	E←→W	N←→S	N←→S
法 量	長 軸	158cm	126cm	245cm
	短 軸	98cm	110cm	210cm
	深 さ	30cm	35cm	85cm
出土遺物			覆土上面より, 十腰内 I 式 土器出土	
備	考	SI005 と重複する。 同時期であろう。	SI006 と重複する。 SK005 が新しい。	VIII層で確認 袋状の土壇

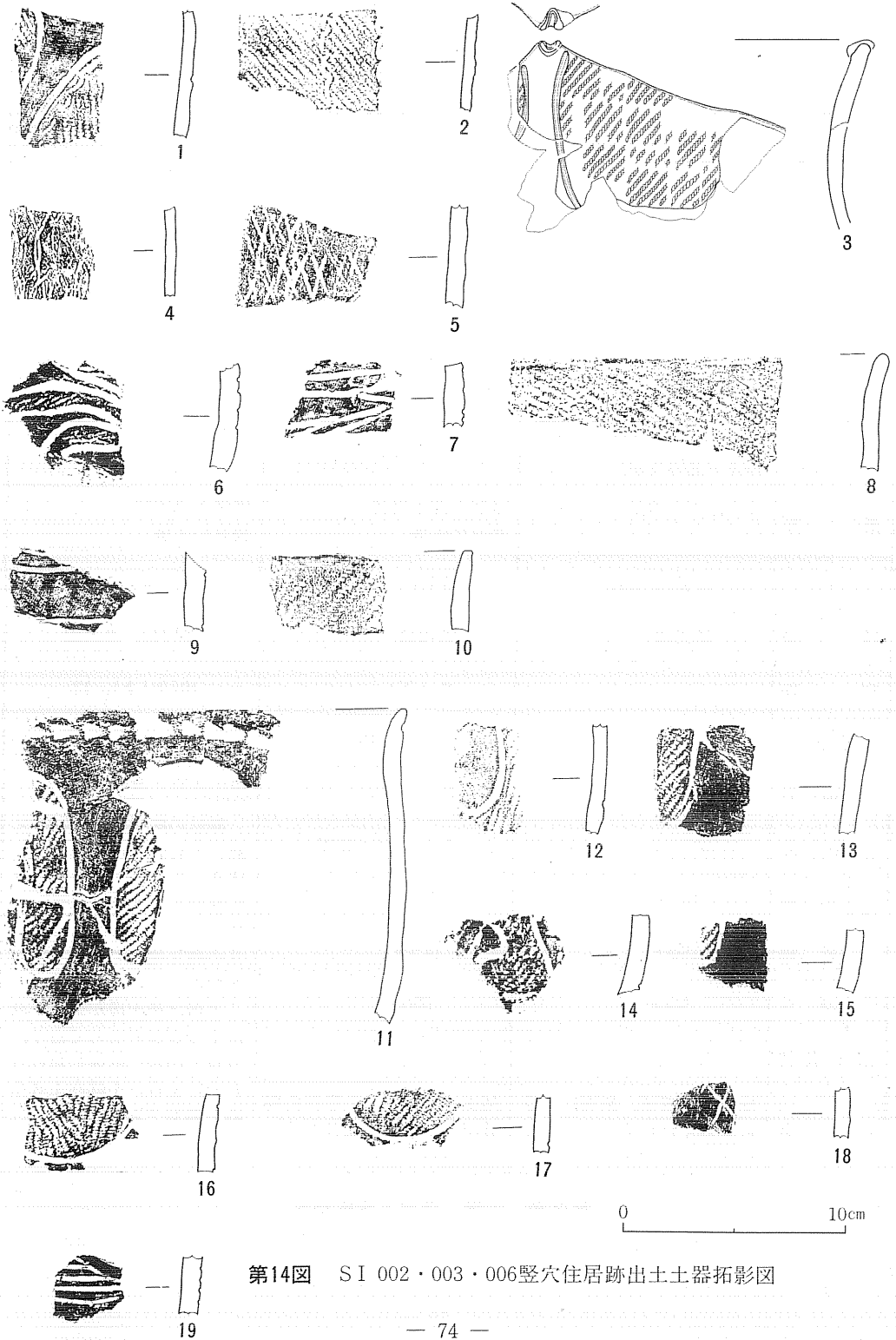
第 7 表 土 壇 観 察 表

		S K010	S K013	S K014
挿 図		第11図, 第15図, 第18図	第11図	第11図
図 版		8(下), 12	9(上)	9(中)
検出地区		11-P	10-O, 11-O	8-P, 9-P
平 面 形		不整円形	円 形	円 形
主軸方位		NE ←→ SW	N ←→ S	N ←→ S
法 量	長 軸	260cm	125cm	170cm
	短 軸	180cm	105cm	140cm
	深 さ	75cm	75cm	87cm
出土遺物	覆土中より大洞A'式と考えられる甕形土器検出, 大木10式土器混入か。			
備 考	IX層上面で確認		VIII層上面で確認 袋状の土壙	VIII層面で確認 袋状の土壙
		S K(F)015	S K(F)018	S X(U)001
挿 図		第12図	第12図	第13図, 第16図
図 版			9(下)	10(中・下), 12
検出地区		12-L	13-K, 13-L	12-P
平 面 形		円 形	円 形	検出状態と遺物
主軸方位		←→	NE ←→ SW	卵形の掘り方(118×84×36)の北側にほぼ接して, 体部上半をやや南側に向けて埋設されている。頸部より上を欠く。なお周辺部よりの破片接合で, 図上完形となる。 土器は最大径が体中央部にくる壺形のものであり, 直線・曲線・弧線の組み合わせによる。十腰内I式土器の典型であろう。
法 量	長 軸	160cm	175cm	
	短 軸	150cm	145cm	
	深 さ	50cm	50cm	
出土遺物				
備 考	地山面で確認, 断面はフラスコのくびれ部分が削平され逆台形を呈する。		地山面で確認, くびれた部分が削平された逆台形の断面が観察された。	

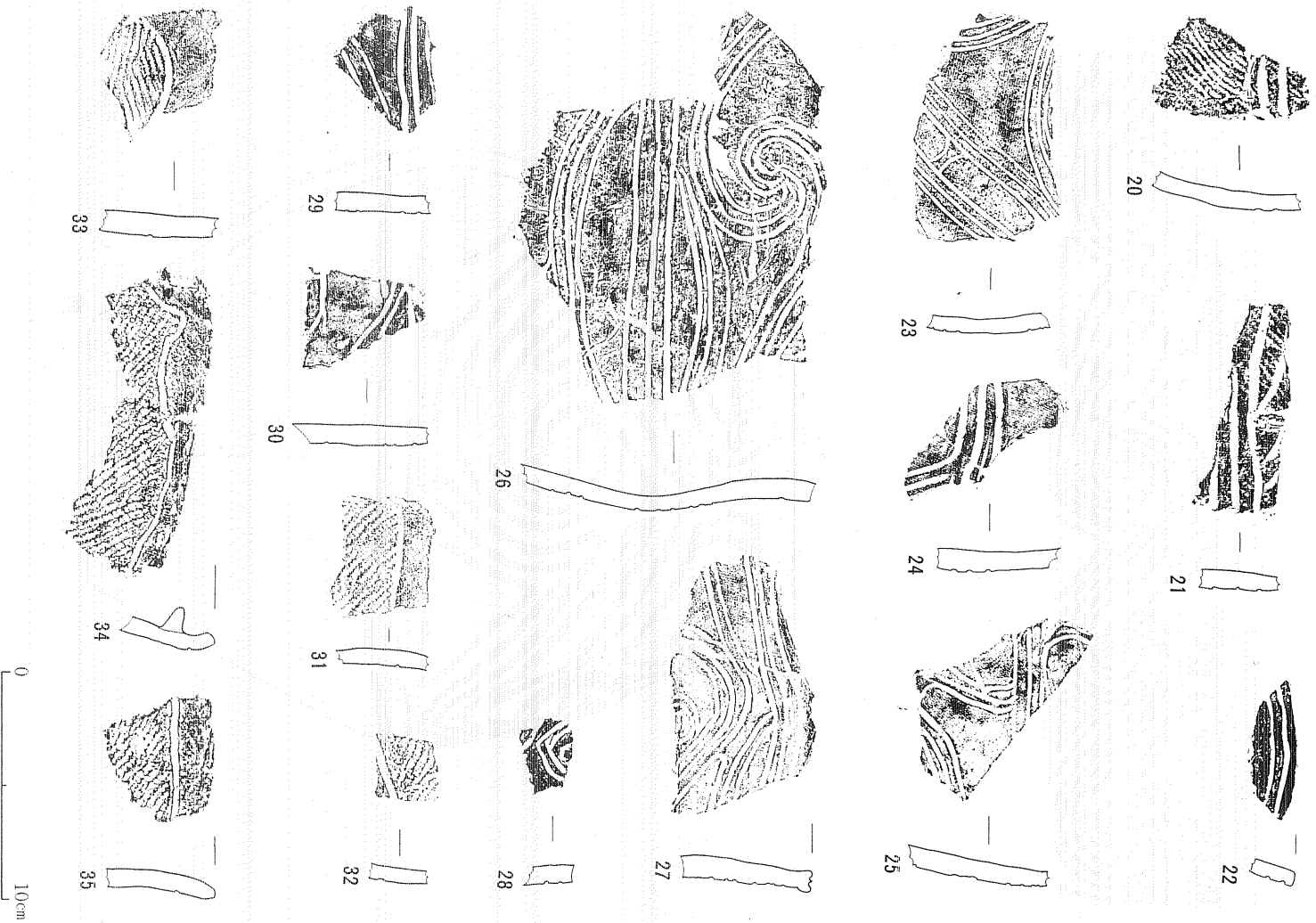
第8表 土壙, 埋設土器観察表

(2) 遺構内外出土遺物

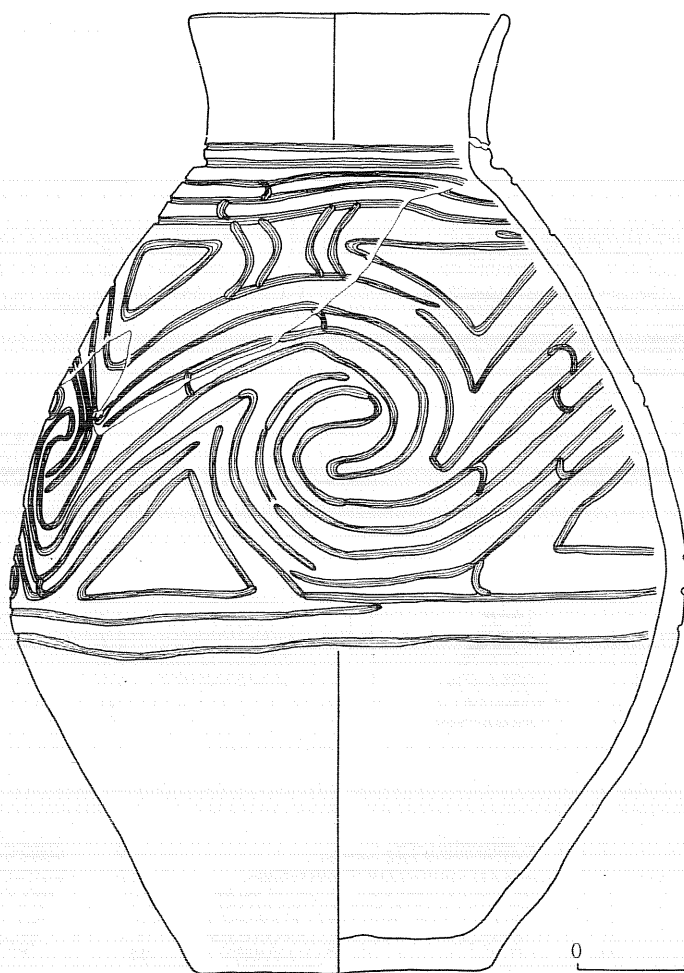
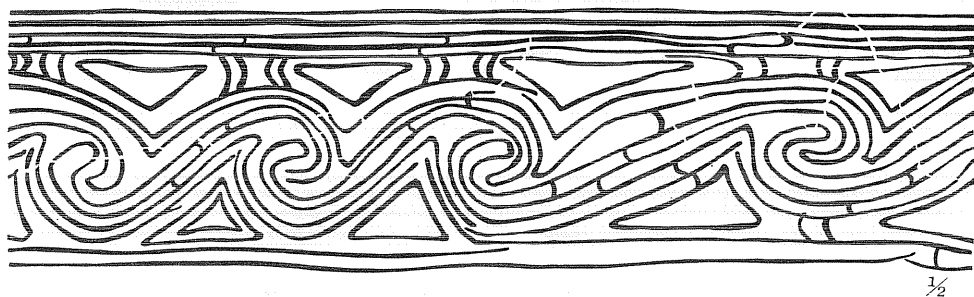
① 土器



第14図 SI 002・003・006 竪穴住居跡出土土器拓影図

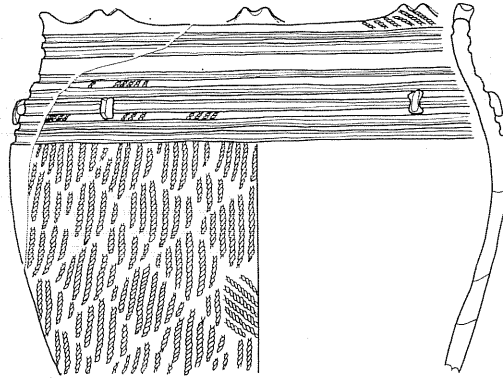


第15図 S K 001・005・006・007・010土壙出土土器拓影図

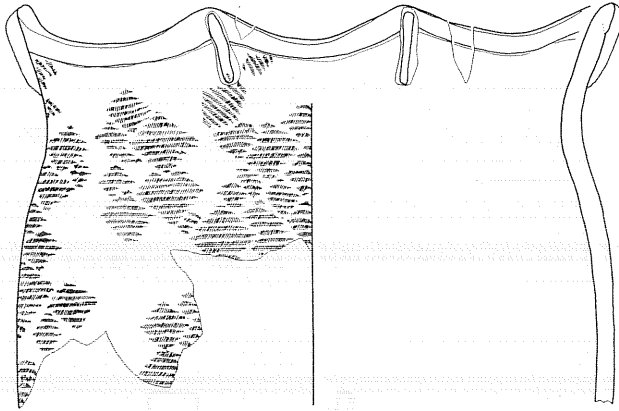


36

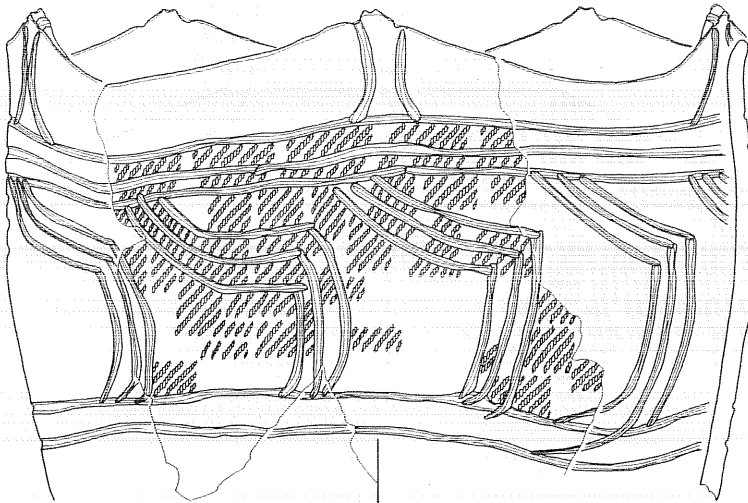
第16図 S X(U)001埋設土器実測図



37



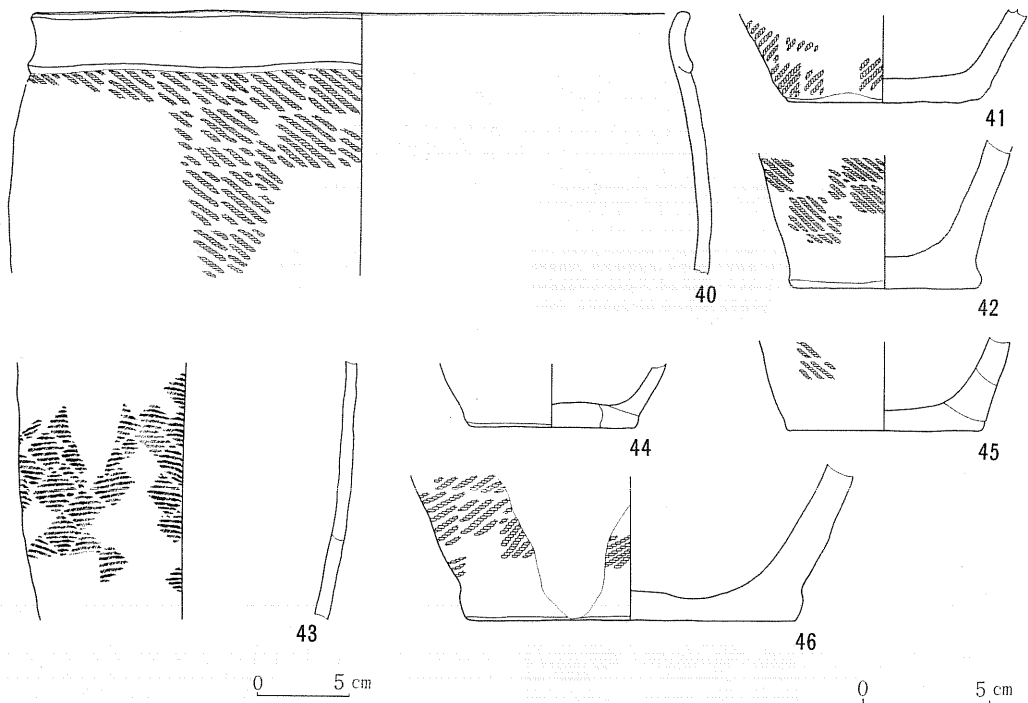
38



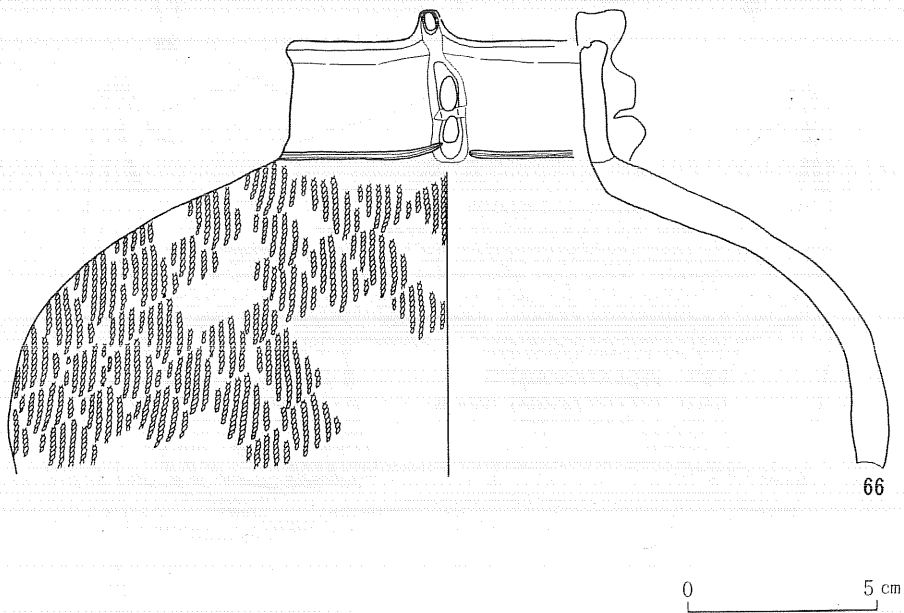
39



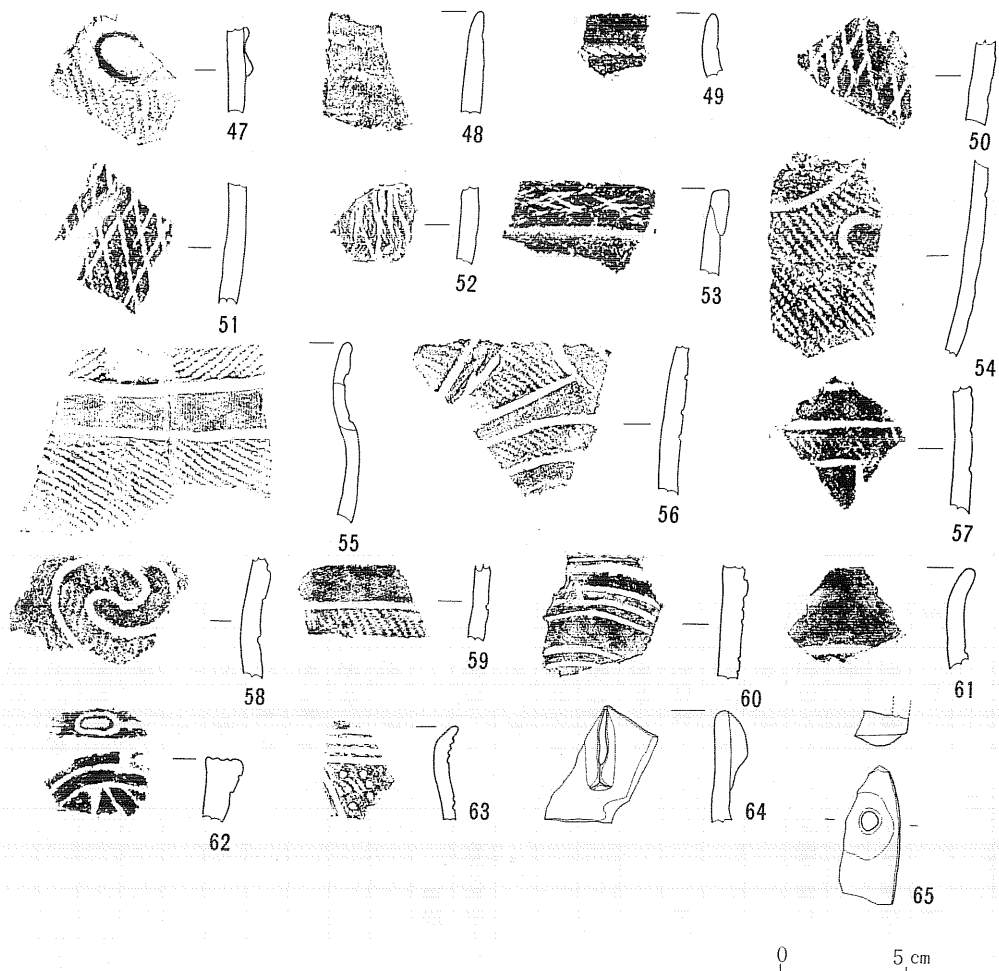
第17図 S K10・SI 006・S K005出土土器実測図



第18図 S I 006・001・003竪穴住居跡、S K 007・010土壌出土土器実測図



第19図 遺構外出土土器実測図



第20図 遺構外出土土器拓影図

第 9 表 土 器 観 察 表 (1)

図版番号	挿図番号	出土地区	外 面		内 面		胎 土	備 考
			文 様	色 調	文 様	色 調		
11-1	14-1	SI002	R L 縄文+絡綾文→沈線→磨消	黒 褐 色		にぶい褐色		
2	2	"	R L 縄文+絡綾文	" 色		にぶい橙色		
3	3	"	L R 縄文→貼付・沈線→磨消	にぶい褐色	貼付	灰 褐 色		
4	4	SI003	網目状撚糸文	褐 灰 色		黒 褐 色		
5	5	"	"	浅 黄 橙 色		にぶい黄橙色		
6	6	"	L 縄文→沈線→磨消	にぶい黄橙色		"		
7	7	"	沈線→磨消	にぶい橙色		にぶい橙色		
8	8	"	L R 縄文	浅 黄 橙 色		"		
9	9	"	沈線→磨消	にぶい橙色		橙 色		
10	10	"	R L 縄文	褐 灰 色		褐 灰 色		
11	11	SI006	R L 縄文→沈線→磨消刺突	にぶい橙色		灰 褐 色		
12	12	"	R L 縄文→沈線→磨消	"		にぶい橙色		
13	13	"	"	褐 灰 色		褐 灰 色		
14	14	"	"	にぶい橙色		にぶい褐色		
15	15	"	"	明 赤 褐 色		にぶい赤褐色		
16	16	"	"	明 黄 褐 色		にぶい黄褐色		
	17	"	"	黒 褐 色		にぶい褐色		
17	18	"	網目状撚糸文	"		橙 色		
18	19	"	沈線→磨消	褐 灰 色		明 褐 灰 色		
19	15-20	SK005	L 縄文→沈線	にぶい橙色		にぶい橙色		
11 20	21	SI006	縄文→沈線→磨消	浅 黄 橙 色		浅 黄 橙 色		
21	22	"	沈線→磨消	にぶい橙色		にぶい橙色		

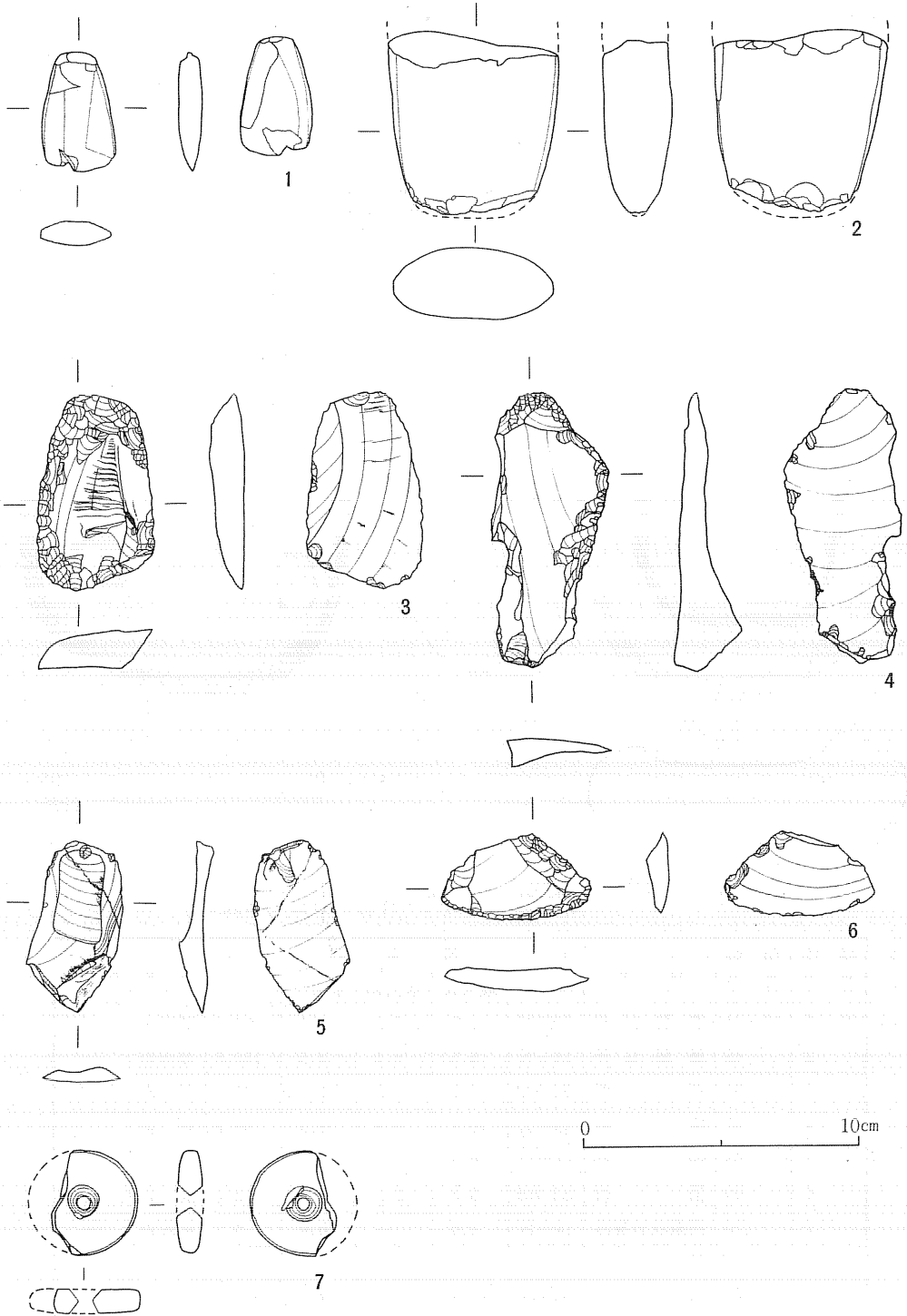
第 10 表 土 器 観 察 表 (2)

図版番号	挿図番号	出土地区	外 面		内 面		胎 土	備 考
			文 様	色 調	文 様	色 調		
11-22	15-23	SI 006	沈線→磨消	橙 色		にぶい 橙色		
23	24	"	"	灰 褐 色		明 褐 灰 色		
24	25	SI006, SI003	"	褐 灰 色		橙 色		
25	26	SI 006	"	にぶい 橙色		にぶい黄橙色		
26	27	"	"	"		橙 色		
12-27	28	"	"	橙 色		"		
28	29	"	"	にぶい 橙色		"		
29	30	"	"	"		"		
30	31	SK001	L R 縄文→沈線→磨消	にぶい黄褐色		灰 黄 褐 色		
31	32	"	R L 縄文→沈線→磨消	灰 黄 褐 色		"		
32	33	SK006	"	灰 褐 色		浅 黄 橙 色		
33	34	SK010	"	にぶい 褐色	隆線貼付	にぶい 褐色		
34	35	"	"	"		にぶい赤褐色		
35	36	SX(U)001	沈線→磨消	にぶい 橙色		橙 色		4 単位
36	37	SK010	R L 縄文→沈線→貼瘤磨消	灰 褐 色	沈線	にぶい黄橙色		
37	38	SI 006	貼付→L 縄文	浅 黄 橙 色		浅 黄 橙 色		波状口縁 8 単位
38	39	SK005	L R 縄文→沈線→磨消	にぶい 橙色	唇部刻目	橙 色		波状口縁 5 単位(?)
39	18-40	SI 006	L R 縄文, 折り返し口縁	褐 灰 色		にぶい 褐色		
12-40	41	"	L R 縄文	にぶい 褐色		にぶい 橙色		
41	42	SI 001	" , 底部ナデ	褐 色		にぶい黄橙色	1~2mmの小石多量に含	
	43	SI 006	L 縄文	にぶい黄橙色		"		
	44	SK010		褐 灰 色		浅 黄 橙 色		

第 11 表 土器観察表(3)

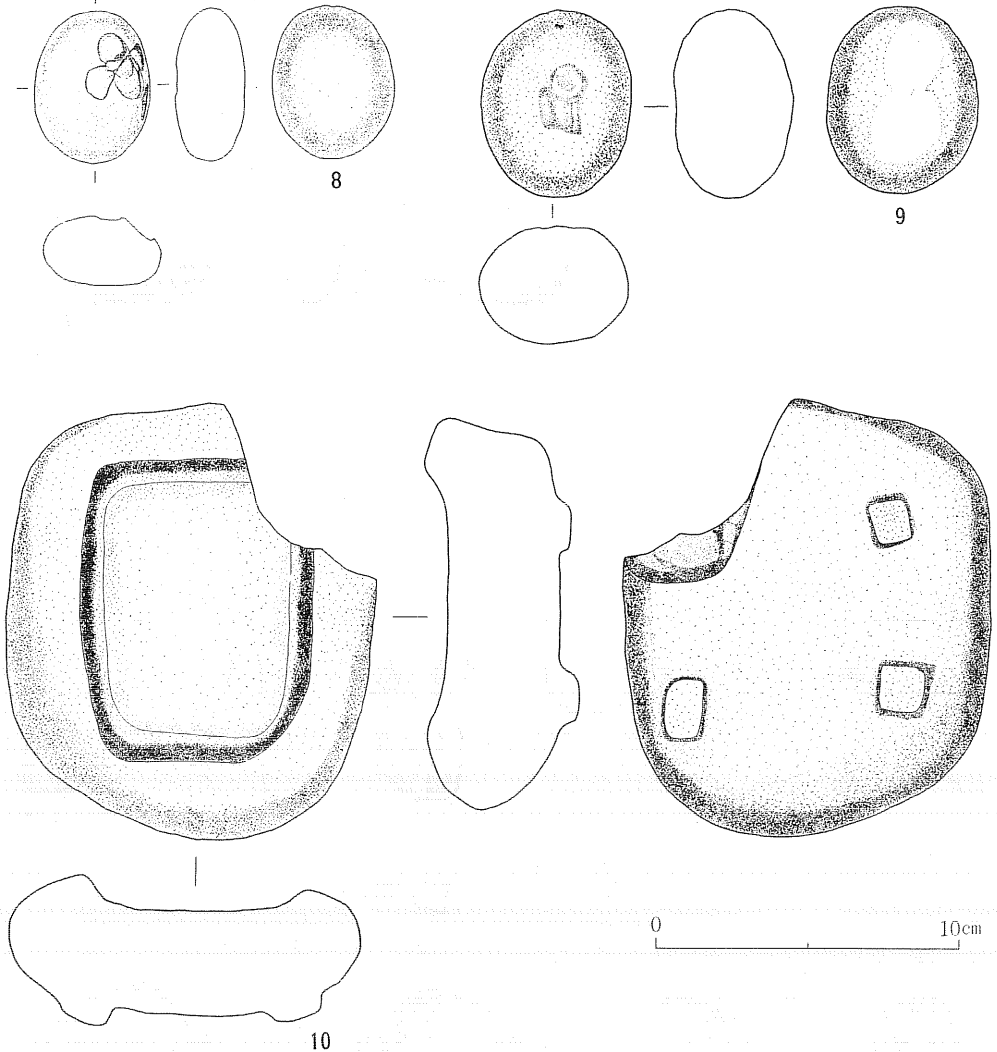
図版番号	挿図番号	出土地区	外 面		内 面		胎 土	備 考
			文 様	色 調	文 様	色 調		
	45	SI 003	LR縄文	にぶい黄橙色		灰黄褐色		
12-42	46	SI005	RL縄文	浅黄橙色		浅黄橙色		
43	20-47	14-P	LR縄文	灰褐色		にぶい褐色		
44	48	9-F	縄文→縄文圧痕	にぶい橙色		にぶい橙色		
45	49	"	縄文圧痕	褐灰色		にぶい褐色		
46	50	8-F	網目状撚糸文	にぶい黄橙色		灰黄褐色		
47	51	"	"	"		灰黄褐色		
13-48	52	9-F	"	にぶい赤褐色		にぶい橙色		
49	53	13-L	網目状撚糸文折り返し口縁	黒褐色		褐灰色		
50	54	SI006	RL縄文→沈線→磨消	橙 色		橙 色		
51	55	13-L	"	"		にぶい橙色		
52	56	"	"	浅黄橙色		浅黄橙色		
53	57	8-F	"	にぶい黄橙色		浅黄橙色		
54	58	13-L	"	にぶい黄橙色		にぶい黄橙色		
55	59	8-F	"	"		"		
56	60	9-F	沈線→磨消	灰黄褐色		"		
13-57	61	8-F	沈 "	にぶい橙色		橙 色		
58	62	15-N	"	灰白色	唇部沈線	灰白色		
59	63	9-F	RL縄文→沈線→刺突	黒褐色		褐灰色		
	64	13-F	貼付	にぶい黄橙色		灰白色		
	65	"	底部一貼瘤状の脚部	浅黄橙色		にぶい黄橙色		
13-60	19	15-N	RL縄文→貼付→沈線→磨消	浅黄橙色	唇部沈線	明褐色		壺形

案内1遺跡



第21図 遺構内・外出土石器実測図(1)

案内 I 遺跡



第22図 遺構内・外出土石器実測図(2)

挿 番 号	図 番 号	版 号	名 称	出 土 地 区	法 量 (cm)			重 量 (g)	石 質	備 考
					最大長	最大幅	最大厚			
21-1	13-64		磨製石斧	SK005	4.3	2.6	0.9	13.7	凝灰岩	
2	65		磨製石斧	14-N	(6.5)	6.1	2.6	180.6	凝灰岩	
3	66		石 筥	SI 002	7.1	4.2	1.4	44	頁 岩	
4	67		搔 器	13-L	10.1	3.9	2.5	55.2	頁 岩	
5	68		搔 器	11-O	6.3	3.1	1.0	13.5	頁 岩	
6	69		搔 器	SI 006	5.3	3.2	0.8	8.4	頁 岩	
7	70		凹盤状石製品	14-N	4.0	—	0.9	9.5	凝灰岩	
22-8	71		凹 石	SI 001	10.1	7.8	4.5	551	安山岩	
9	72		凹 石	SI 006	12.3	9.9	8.2	1500	安山岩	
10	73		石 皿	SI 003	29.3	24.4	7.4	5451	安山岩	多孔質

第12表 出土石器観察表

遺構について

遺跡は、舌状台地端部にあり、調査区はその平坦部から北西部に向かって、緩やかに下降している。調査区中央部が既に削平されており、遺構の配置等を考える上で大きな障害となった。

縄文時代

ア 竪穴住居跡

6軒検出した。いずれも壁が削平を受けており、確認面＝床面という住居跡も見られた。平面形態は、円形もしくは楕円形を呈するものと思われる。面積から見ると、5㎡未満の小さなもの(S I 001)、ほぼ10㎡以上のも(S I 002～006)に分けられる。確認された炉は、石組のもので、その形態から二つに分けられる。一つは、方形、長方形の石囲炉をもつものである。位置は、床面中央より周壁に寄って設置されている。もう一つは、石囲複式炉をもつものである。S I 003は、どちらに属するか不明確であるが、後者が壁に接して設置されていることを考えると、石囲複式炉と思われる。

柱穴は、S I 001のように見られないもの、S I 002・003のように住居内に存在し、上屋の想定のできるものがある。しかし、それ以外は住居内に幾つかのピットが見られ、それが柱穴の一部をなすと思われるが、どのような配置を示すのか不明である。

イ 土壌・フラスコ状ピット

これら土壌群は、11基を数える。断面形態は、袋状を呈するものが多い。しかしこれらが全てフラスコ状ピットとなるかは疑問が多く、一応断面が逆台形状を呈するものを、S K(F)と表記し、それ以外をS Kとしておいた。

平面形は、円形を基調とするものが多く、径も1m前後、1.5m前後、2.5m前後のものとはらつきが見られる。住居跡と切り合いの見られるものもあり、住居跡を切っているもの、切られているものがある。また同時期と考えられるものは、住居跡と土壌の埋土状態の観察によつたが、断定はできない。時期的には大部分は、住居跡と同期の中期末～後期初頭頃と考えられ、S K 010のみが晩期末の構築と想定できる。

遺物について


出土遺物は、縄文土器、石器、石製品である。

(1) 土器

出土土器は、いずれも縄文土器である。遺構内からの出土が多く、遺構外出土は相対的に少ない。


案内 I 遺跡

I 群 中期に属するものである。

1 類 大木 9・10 式に比定されるものである。(14 図 11~15)、11 は、S I 006 床面近くから一括して出土した土器の一部の拓影である。この土器は、口縁部から底部まで縦に半載されたような状態で確認されたが、遺存状態が非常に悪く復元が困難であった。口縁部は、平縁で横位の刺突が回る。体部文様帯は L R 縄文の地文に、沈線と磨消によって「」形に区画された文様が横位に展開するものと考えられる。この文様帯の下位にも異種の区画文様帯の一部と思われる沈線も見られる。13・15 は 11 と同一個体である。

2 類 大木 10 式の粗製土器を成すものであろう。(15 図 34・35)、34 は、内面口縁部に「ノ」字状の貼付が付されるもので、この部分が、大きな波状口縁の頂部となっている。外面口縁部は沈線が巡る。胎土には小石の混入が多く、焼成は良くない。S K 010 埋土より出土した。

II 群 後期の土器である。

1 類 縄文の地文に沈線と磨消縄文の見られるものである。(14 図 1、6、15 図 21、31~33 17 図 39、20 図 54~59)、磨消縄文は、直線を主体とするものと、曲線的なものがある。17 図 39 は、5 単位の波状口縁を呈するものと思われる。文様帯の上下を画する平行沈線間を「」状の 3 本沈線で連結充填したもので、文様帯上下を磨消している。波状口縁下には、平行沈線部まで達する「x」様の沈線が見られ、波頂部に刻目が施されている。地文は L R 縄文である。

2 類 綾絡文の見られるものである。(14 図 1、2)、1 は、綾絡文を付した地文に 1 類の文様構成をもつものである。

3 類 網目状撚糸文が施されているものである。(14 図 4、5、20 図 50~53)、繩を軸に巻く方法が異なるためであろうか、定型的な網目状を呈しているものの他、不整形のもの(14 図 4、20 図 52、53)も見られる。53 は折り返し口縁部に横位の撚糸文が施されている。

4 類 沈線と磨消手法の見られるものである。(14 図 7、9、19、15 図 22~30、16 図 36、20 図 60、61)、調査区東側の S I 006・S K 005・007 から比較的多く検出され、S I 003・S X(U) 001 から出土している。16 図 36 は、埋設土器である。図上復元の壺形土器である。頸部から体中央部まで沈線のみによる文様が施されている。上下を平行沈線で画し、4 単位の入組状の渦巻文を右回り横位に展開させている。この主モチーフと平行沈線間を埋めるように三角形の沈線文が施されている。

17 図 38 は、無節の縄文に波状口縁部に縦位の隆線貼付を行っているものである。出土レベルは、4 類土器の多くと同じである。20 図 64 も同一個体と思われる。

5 類 口縁部に 2 条の縄文圧痕の付されたものである。(20 図 48、49)、いずれも遺構外出土である。居熊井遺跡第 III 群 5 類 6 種に類似する。

6 類(20 図 63)、口縁部の横走する平行沈線下に、三角形を呈すると思われる沈線モチーフが

あり、その中に円形刺突を行っているものである。沈線の彫りは、いずれも深い。

20図65は、粘土瘤貼付により脚部を作り出している底部片である。

Ⅲ群 晩期のものである。

1類 壺形を呈するもので、口縁部に「B」字状貼付を伴う。頸部には一条の沈線が巡り、体部には縦位の縄文が施されている。口唇部内面にも沈線が見られる。

2類 鉢形土器である。頂部に刻目をもつ山形口縁のもので、口縁～体部上半まで7本の沈線が走る。この体部上半の沈線をこえていくつか貼瘤が付されている。内面口縁部にも沈線が見られる。地文は縦位のRL縄文である。

(2) 石器・石製品

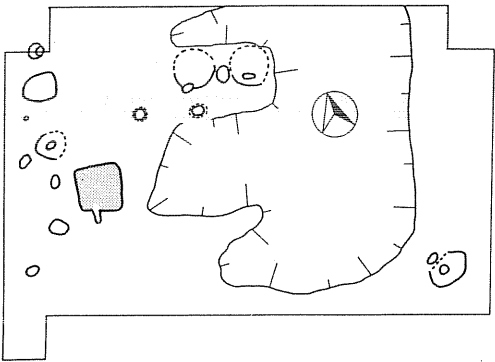
出土した石器類は10点である。S I 006・S K 005出土石器以外は、遺構内外出土ともに調査区北西部に集中している。

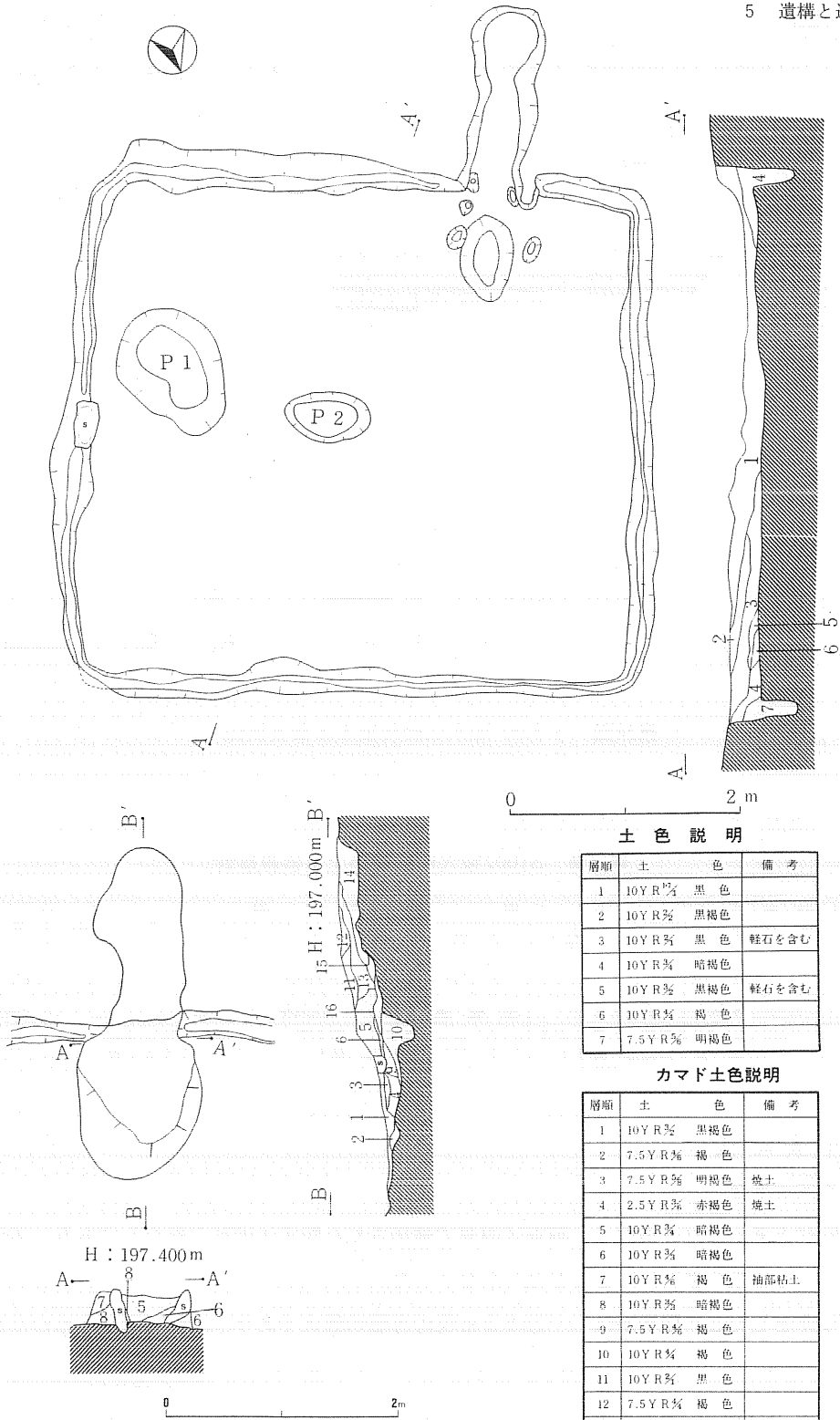
石器は、磨製石斧・石筥・搔器・凹石・石皿があり、石製品には円盤状石製品が見られる。磨製石斧は、大形のものとミニチュアのものがある。搔器には、縦長剝片を利用したものと、横長剝片を使用したものがある。石皿は楕円形に整形した安山岩を上面には隅丸長方形に削り取り、下面には方形の四脚（一脚欠損）を作り出している。円盤状石製品は浅黄橙色の凝灰岩を素材としており、円形に面取りした後に、両面穿孔が施されている。

2 平安時代

(1) 遺構と遺構内出土遺物

① 竪穴住居跡と出土土器

第 13 表		遺構の位置				
遺構名	SI 007					
検出地区	10-N, 10-O 11-N, 11-O					
挿図番号	第23図, 第24図					
図版番号	10(上), 13					
法 量		東 壁	西 壁	南 壁	北 壁	
	壁 長	461cm	430cm	444cm	472cm	
	壁 高	30cm	30cm	30cm	26cm	
	壁 溝 幅	12~30cm	20cm	20~30cm	15~25cm	
	壁 溝 深	30cm	25cm	30cm	35cm	
平面形	方形	面積	22.74㎡	主軸方向	N-4°-E	
確 認	地山面					
壁	垂直に立ちあがり、四壁ともしっかりした作りである。					
床 面	カマド前面、南側は特に強くしまっている。					
壁 溝	周壁に沿い一巡する。一部に炭化材が壁に接して見られた。					
ピ ッ ト	2個検出したが、柱穴と考えられるものは確認できなかった。					
付 設						
カ マ ド	位 置	南壁西寄り	素 材	川原石, 粘土		
	南壁壁溝を埋めて燃焼部を構築。川原石を芯材として、それに粘土を貼り付けたものである。芯材となる石の掘り方が見られる。焚口部も凹んでおり、焼土が堆積していた。煙道部は160cmを有し、煙出しに向かって上昇する。					
遺物とその出土状態	床面直上より土師器の甕と坏が検出された。					
備 考	埋土全体に浮石が混入している。					



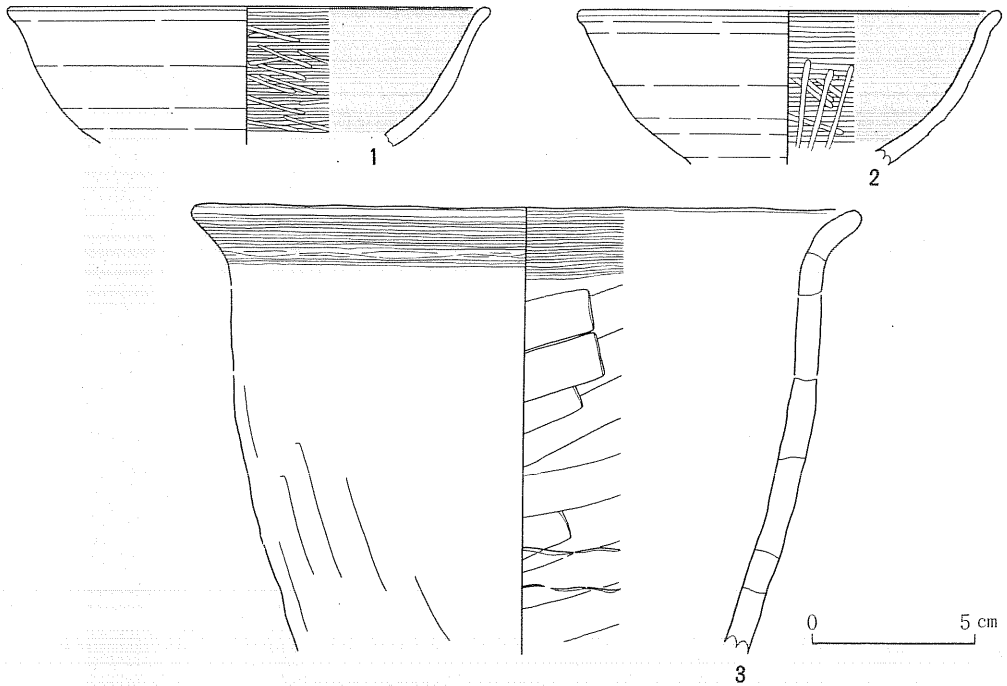
第23図 S I 007 竖穴住居跡およびカマド実測図

土色説明

層順	土色	備考
1	10Y R ^{2.5} /4 黒色	
2	10Y R ^{2.5} /6 黒褐色	
3	10Y R ^{2.5} /4 黒色	軽石を含む
4	10Y R ^{2.5} /4 暗褐色	
5	10Y R ^{2.5} /6 黒褐色	軽石を含む
6	10Y R ^{2.5} /4 褐色	
7	7.5Y R ^{2.5} /6 明褐色	

カマド土色説明

層順	土色	備考
1	10Y R ^{2.5} /6 黒褐色	
2	7.5Y R ^{2.5} /6 褐色	
3	7.5Y R ^{2.5} /6 明褐色	焼土
4	2.5Y R ^{2.5} /6 赤褐色	焼土
5	10Y R ^{2.5} /4 暗褐色	
6	10Y R ^{2.5} /4 暗褐色	
7	10Y R ^{2.5} /6 褐色	袖部粘土
8	10Y R ^{2.5} /6 暗褐色	
9	7.5Y R ^{2.5} /6 褐色	
10	10Y R ^{2.5} /4 褐色	
11	10Y R ^{2.5} /4 黒色	
12	7.5Y R ^{2.5} /4 褐色	
13	10Y R ^{2.5} /4 褐色	
14	10Y R ^{2.5} /4 黒色	焼土を含む
15	10Y R ^{2.5} /6 黄褐色	
16	10Y R ^{2.5} /6 褐色	



第24図 S I 007 竪穴住居跡出土土器実測図

第14表 S I 007 竪穴住居跡出土土器観察表

挿 番 号	図 版 番 号	出 土 地 区	外 面		内 面		胎 土	備 考
			調 整	色 調	調 整	色 調		
1		SI007 床 面	ロクロナデ	にぶい褐色	ヘラミカキ→黒色処理	黒 色		土師器環
2		SI007	ロクロナデ	黒 褐 色	ヘラミカキ→黒色処理	黒 色		土師器環
3		SI007 床 面	体部・ヘラケズリ 口縁部・横ナデ	にぶい橙色	体部・ヘラナデ 口縁部・横ナデ	浅黄橙色	3～5mmの小石 を多く含む	土師器甕

(2) 平安時代

ア 竪穴住居跡

平安時代と考えられる遺構は、調査区西側で検出された竪穴住居跡1軒のみである。遺構外においても平安期の遺物はほとんど見られなかった。

S I 007としたこの住居跡は、一辺4.5 m程の方形の竪穴であり、南壁西寄りにカマドを有する。出土遺物は土師器のみである。床面直上より環と甕が検出されている。環は推定口径14.8cmで、内外面をロクロ整形、調整後に内面に横位の磨きを入念に行い、黒色処理を施しているものである。底部は欠落しており、底部切り離しは不明である。なお、埋土中より同類の

坏が出土している。甕は、体部から内湾気味に立ち上がり、頸部で緩く外反し口縁部に至るものである。胎土に3～5mm大の小石を含むが調整は丁寧である。体部外面に軽い篋けずりが、内面には篋なでが施され、口縁部は内外面とも横なでが行われている。

一方、住居跡の埋土状況を見るとレンズ状に堆積を見せており、自然堆積を窺わせる。この埋土に十和田火山起源とされる軽石質（径1～2mm）の火山灰が3～5%の割合でまんべんなく見られる。このことは、火山灰降下後に住居を構築し、廃棄後に火山灰を含んだ土が二次的に入り込んだものと考えられるのである。床面出土の土師器は胎土も精選されている定形的なもので、鹿角地方では平安時代末には同類の坏は見られなくなる。それに火山灰の降下時期は現段階では11世紀前後と考えられている。以上のことからこの住居跡は、平安時代も後半期に営まれたものと考えられる。

6 まとめ

案内Ⅰ遺跡は、秋田県鹿角市花輪字案内に所在し、花輪盆地東側山地の末端に形成された標高197mの花輪高位段丘上に立地する縄文時代と平安時代の複合遺跡である。北側には沢を挟んで同時代の案内Ⅰ・Ⅱ遺跡があり、南側には富士川をへだてて本書で報告のある孫右エ門館遺跡が位置する。本遺跡もまた花輪高位段丘縁に所在する遺跡の内の一つである。

縄文時代の遺構として竪穴住居跡6軒がある。これは円形もしくは楕円形で、石囲炉もしくは石囲複式炉を持つ中期末～後期のもので、貯蔵穴と考えられる土壙を伴っている。出土遺物は土器のほかに磨製石斧、石篋、搔器、凹石、石皿の石器がある。

平安時代の遺構には一辺が4.5mの方形を呈し、南壁にカマドを有する竪穴住居跡1軒がある。竪穴住居跡内から出土した遺物は坏形、甕形土師器で、歌内遺跡、北の林Ⅰ・Ⅱ遺跡で検出されている住居跡と同じ平安時代も後半期のものと考えられる。

以上の遺構は台地縁部に位置しており、内部は削平が行われていたため遺構の存在は、不明であった。

主要参考文献

- 成田滋彦 1981 「青森県の土器(後期の土器)」『縄文文化の研究4』
 葛西 励 1979 「十腰内Ⅰ式土器の編年の細分」『北奥古代文化第11号』
 蛭沢遺跡発掘調査団 1979 『蛭沢遺跡』
 富樫泰時 1979 『塚の下遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第61集

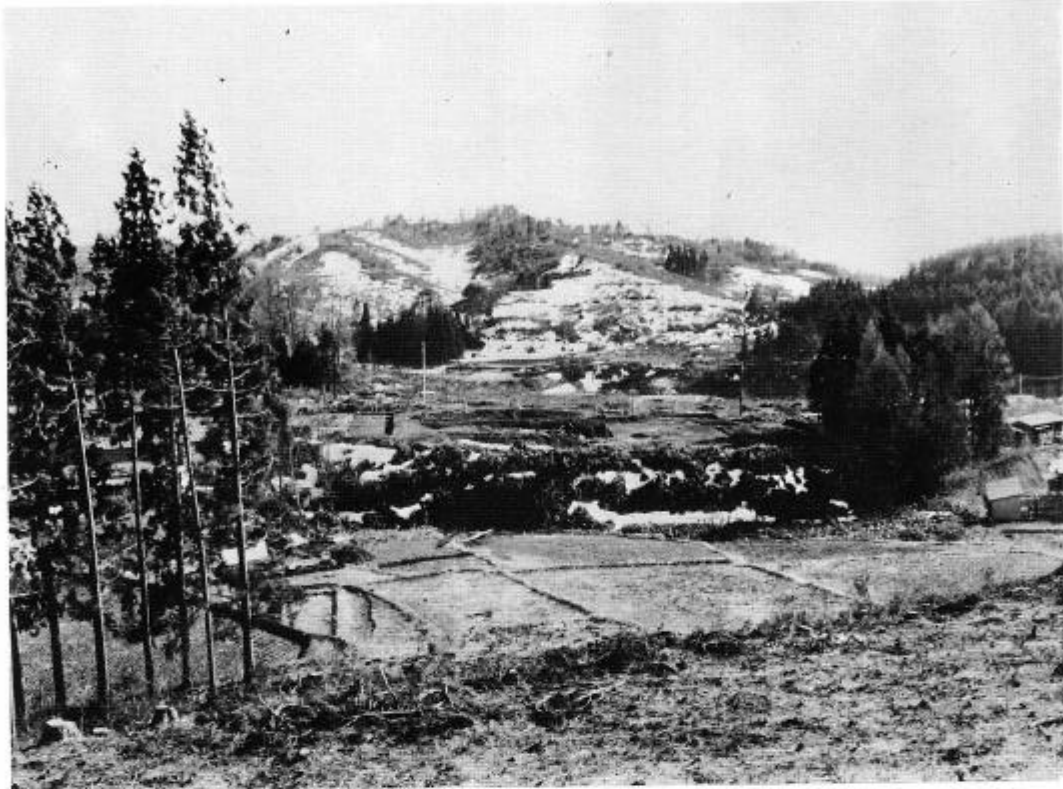
案内 I 遺跡

- 鈴木克彦 1974 『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
中村良幸 1979 『立石遺跡』大迫町埋蔵文化財報告書第3集
名和達朗 1981 『水上遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第40集
狩野敏男 1979 「卯遠坂遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 I』岩手県文化財調査報告書第31集
富樫泰時 1978 「大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡」『どるめん19号』

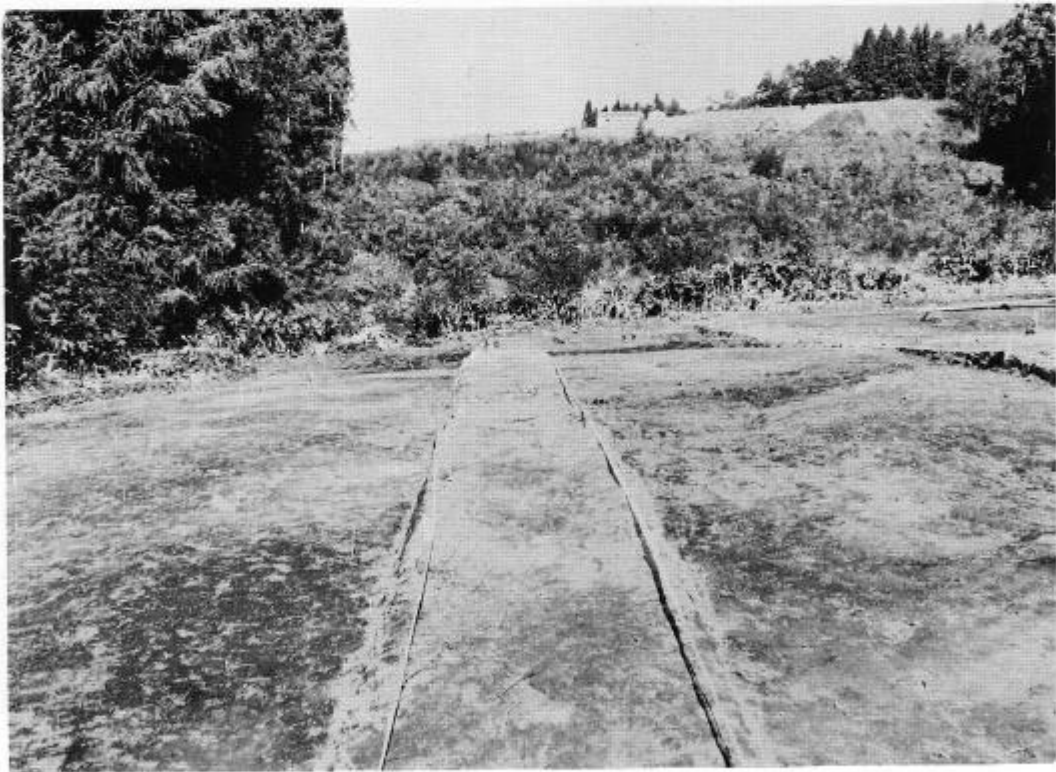
発掘調査参加者

安保 隆生、小田 幸吉、小田藤次郎、海沼仁太郎、木村省三郎、黒沢 猛、根本 市蔵、
福本 雅治

安保 洋子、内田トキエ、小田島カチ、海沼 栄子、川又 リサ、黒沢 アキ、黒沢 栄子、
黒沢 サヨ、児玉 春子、児玉 ヒサ、児玉ミツエ、齋藤 節子、佐々木満子、佐藤カン子、
佐藤 トミ、佐藤 ミサ、田中ヨシエ、成田 ヒサ、松岡 ヒサ (五十音順)



遺跡遠景 (北▶南、案内II遺跡より)

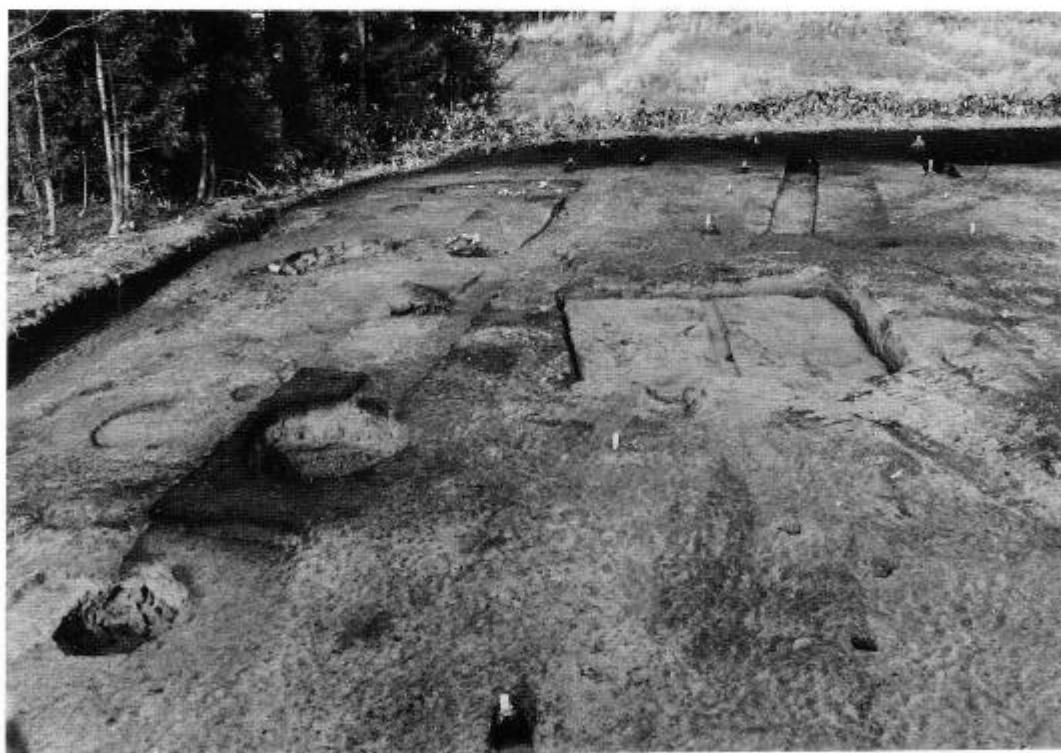


図版1

調査区西側表土排除状況 (南▶北)



調査風景



図版 2

調査区西側完掘状況 (南▶北)



調査区西側完掘状況 (東▶西)



図版 3

S1001 竪穴住居跡・SK001 土壇 (北▶南)



SI 002 竖穴住居跡土層断面 (西▶東)



図版 4

SI 003 竖穴住居跡・SK003 土壙 (南▶北)



S I 004 竪穴住居跡・SK002土壙（北▶南）



図版 5

S I 005 竪穴住居跡・SK004土壙（北▶南）



S I 006 竪穴住居跡・SK005・SK007 土壇確認面（北▶南）

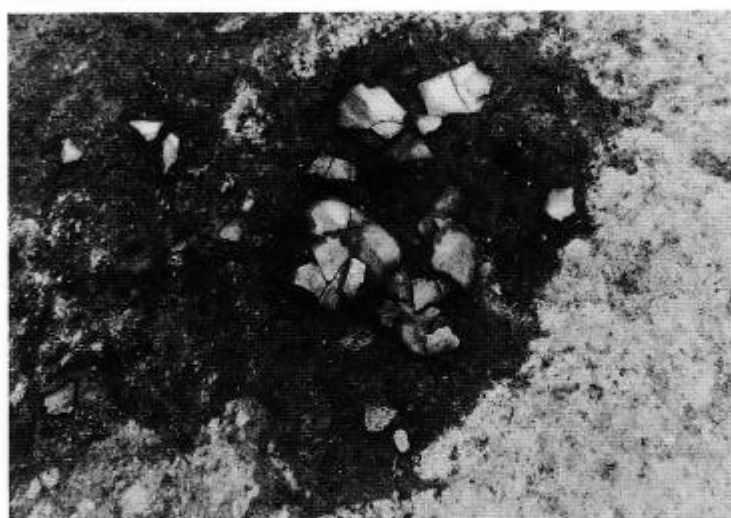


図版 6

S I 006 竪穴住居跡・SK005・SK007 土壇完掘（西▶東）



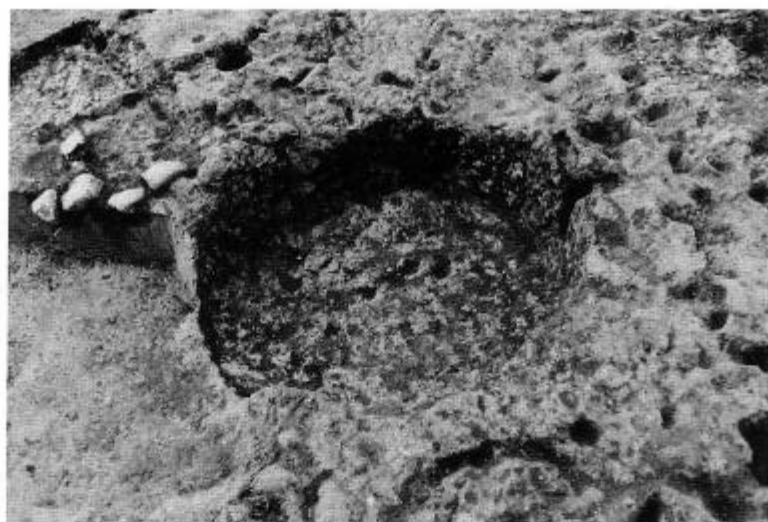
S I 006 竪穴住居跡
炉



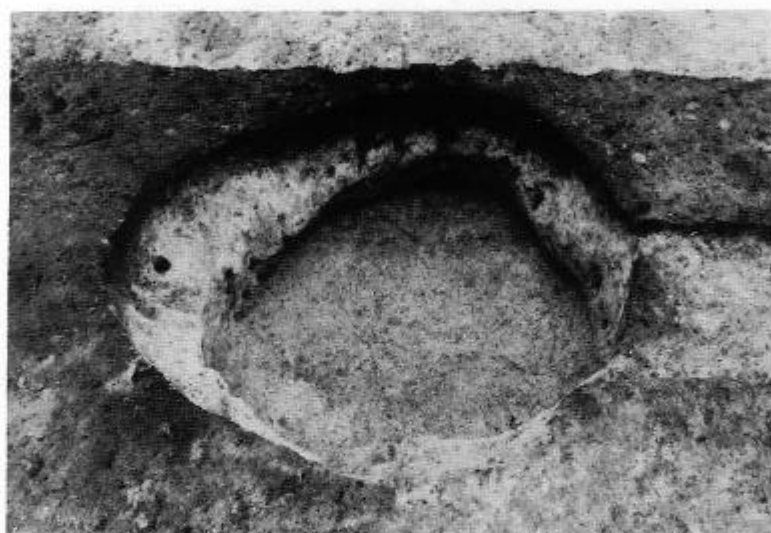
SK 007 土壙
土器出土状況



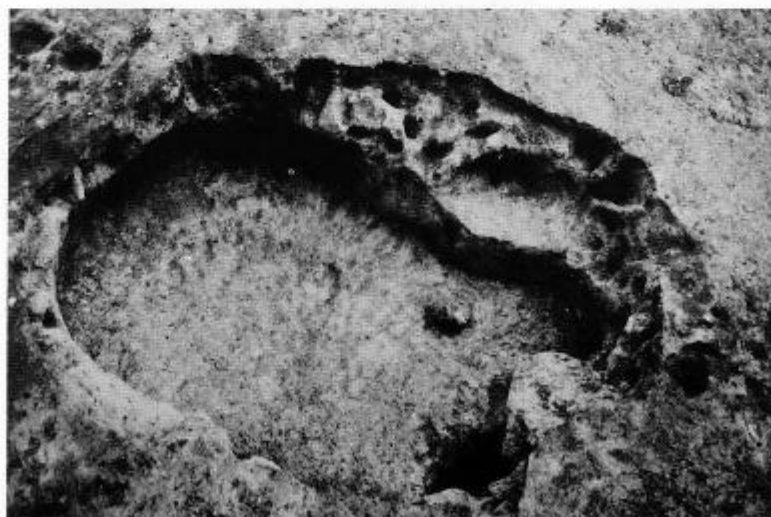
S I 006 竪穴住居跡
土器出土状況



SK005 土壙



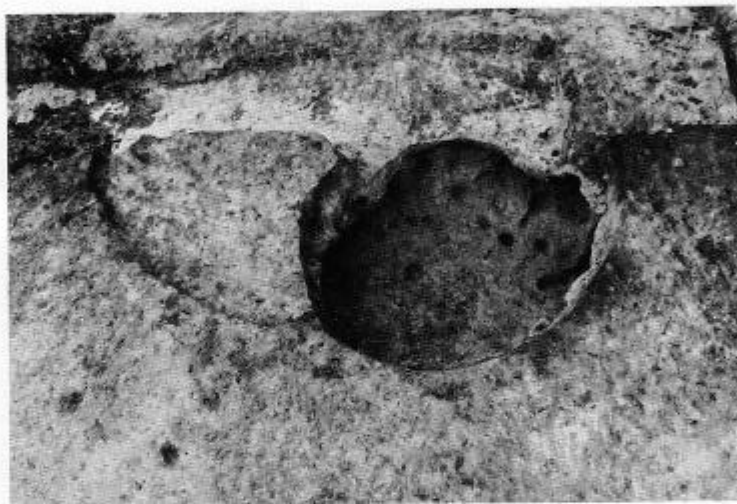
SK006 土壙



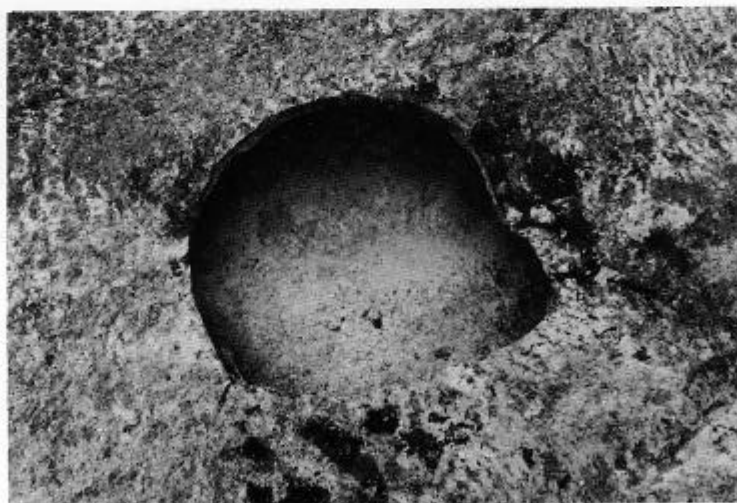
SK010 土壙



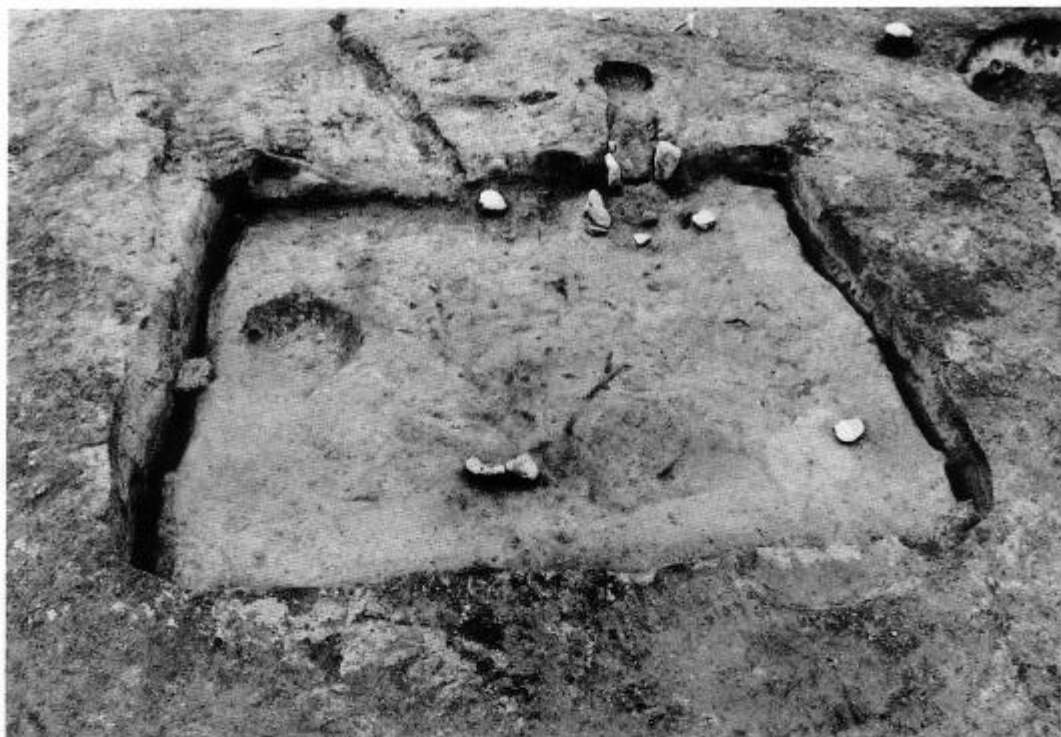
SK013土壌



SK014土壌



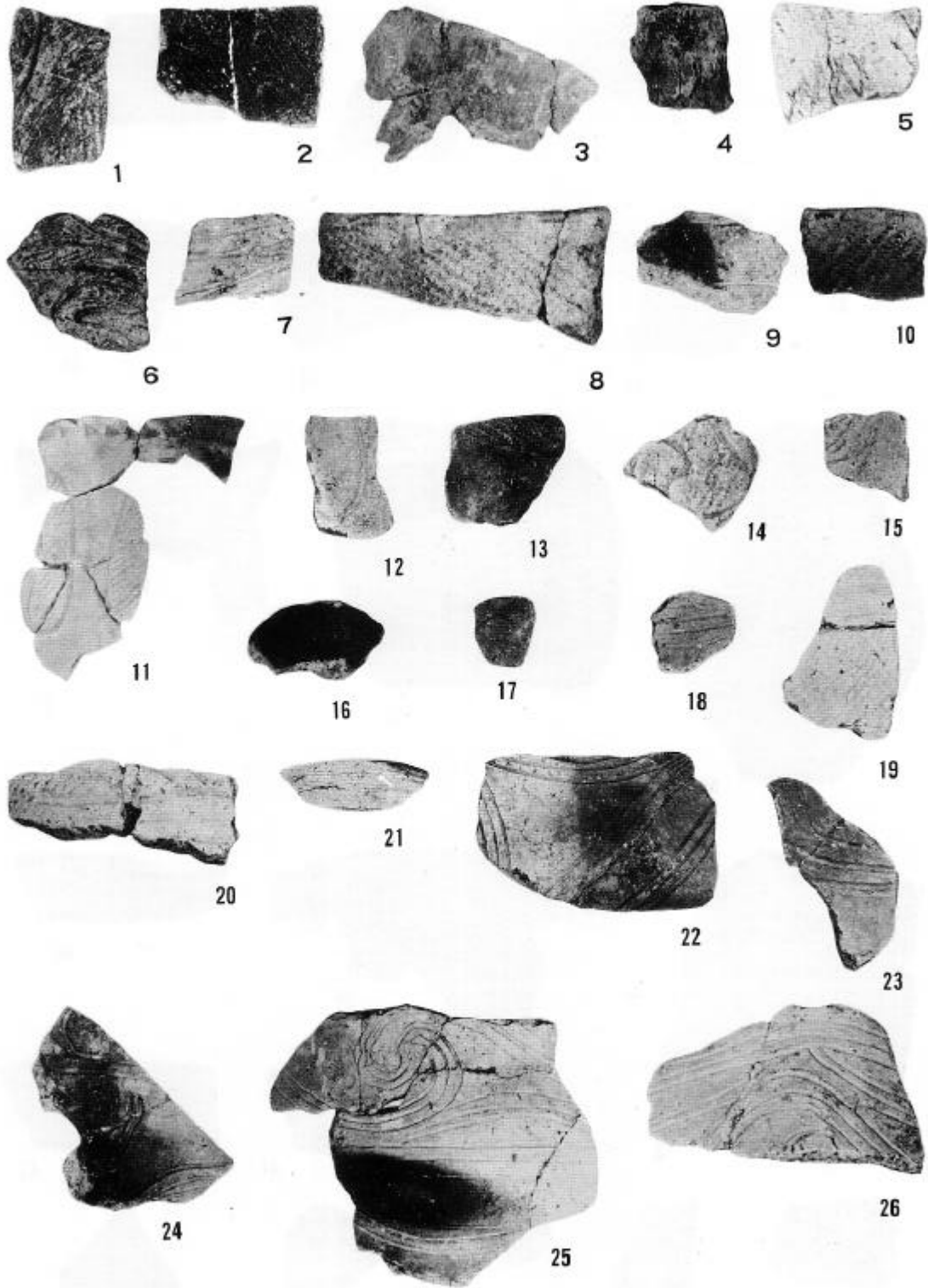
SK(F)018
フラスコ状ビット



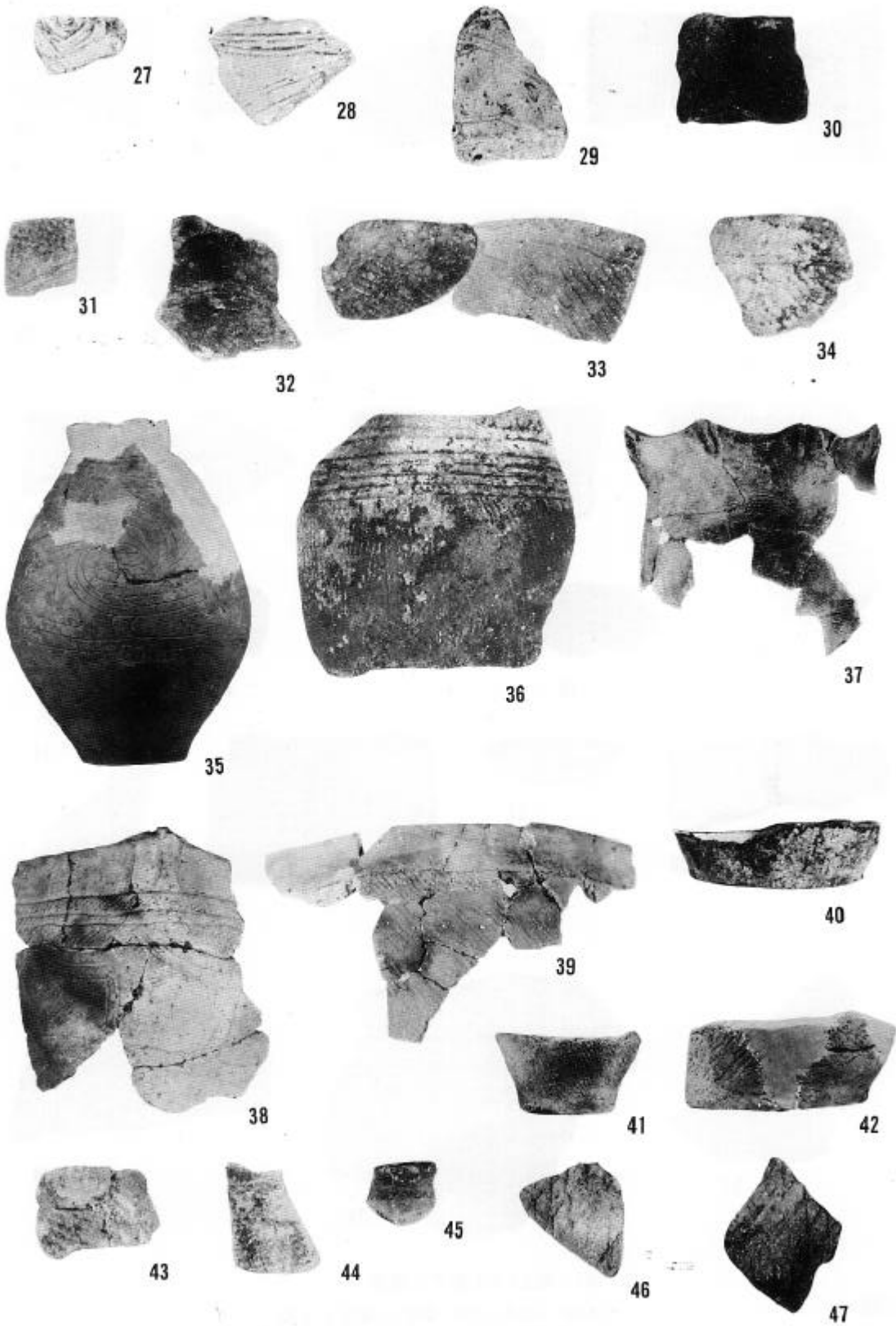
S I 007 竪穴住居跡 (北▶南)



◀ S X (U) 001 埋設土器 ▲

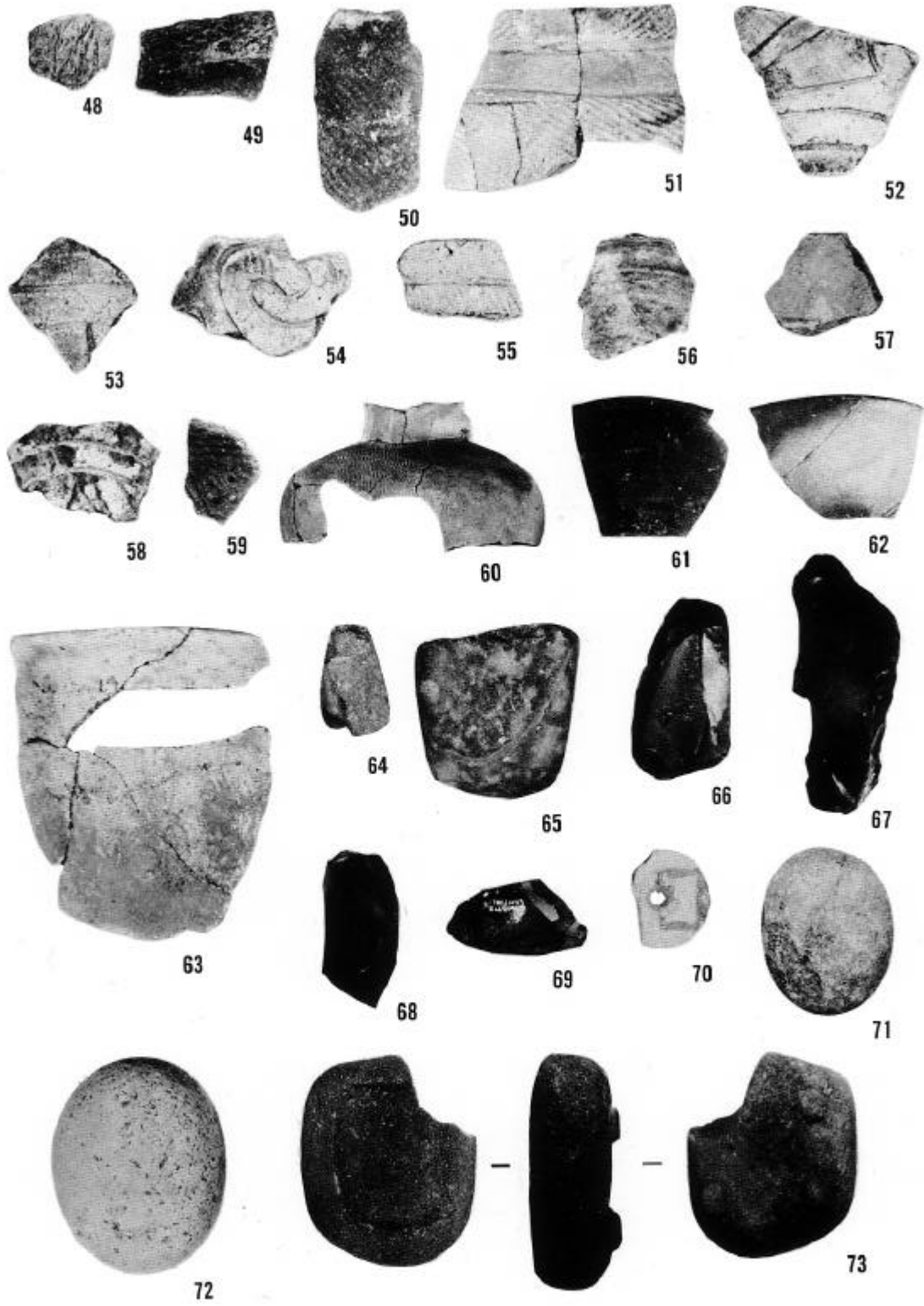


S I 002・003・006 竪穴住居跡
 S K 001・005・006・007 土壙出土土器



図版12

SI 006 竪穴住居跡、SK005・010 土壙
SX(U)001 埋設土器出土土器



図版13

S1007 竪穴住居跡、遺構外出土土器
遺構内・外出土土器

妻の神 II 遺跡

遺跡番号	No.23
所在地	鹿角市花輪字妻の神36番地他
調査期間	昭和55年9月16日～11月25日
発掘調査予定面積	1,937m ²
発掘調査面積	2,330m ²

1 遺跡の概観（図版番号1・2）

妻の神Ⅱ遺跡は、秋田県鹿角市花輪字妻の神36番地他に所在する。

遺跡の立地する花輪盆地は、盆地の西縁と東縁部に生じた断層によって地盤が陥没してできた地溝盆地であり、盆地の西側山地の裾に沿って北流する米代川流域に開けた沖積低地と、米代川に流入する諸河川の浸食作用を受けて形成された段丘からなっている。

遺跡は、盆地の東側奥羽山脈に水源を発し、河岸段丘を浸食・開析して米代川へ流れ込む乳牛川が山間を抜けて沖積低地に出ようとする付近の右岸に発達して西にのびる舌状台地の先端近くに位置し、国鉄花輪線陸中花輪駅の北東約2.75km、市道乳牛不動沢線の北側にある。遺跡の標高は約160～163m、沖積低地からの比高約25～43mである。

遺跡の現状は、台地西側の杉林と東側のりんご園にはさまれた南向きの緩い斜面に立地する畑地であった。なお、遺跡が立地する同台地上の南側には、東西に走る農道をはさんで妻の神Ⅰ遺跡（遺跡番号No.22）が所在し、深い沢目に隔てられて隣接する北側の台地上には、妻の神Ⅲ遺跡（遺跡番号No.24）が所在している。

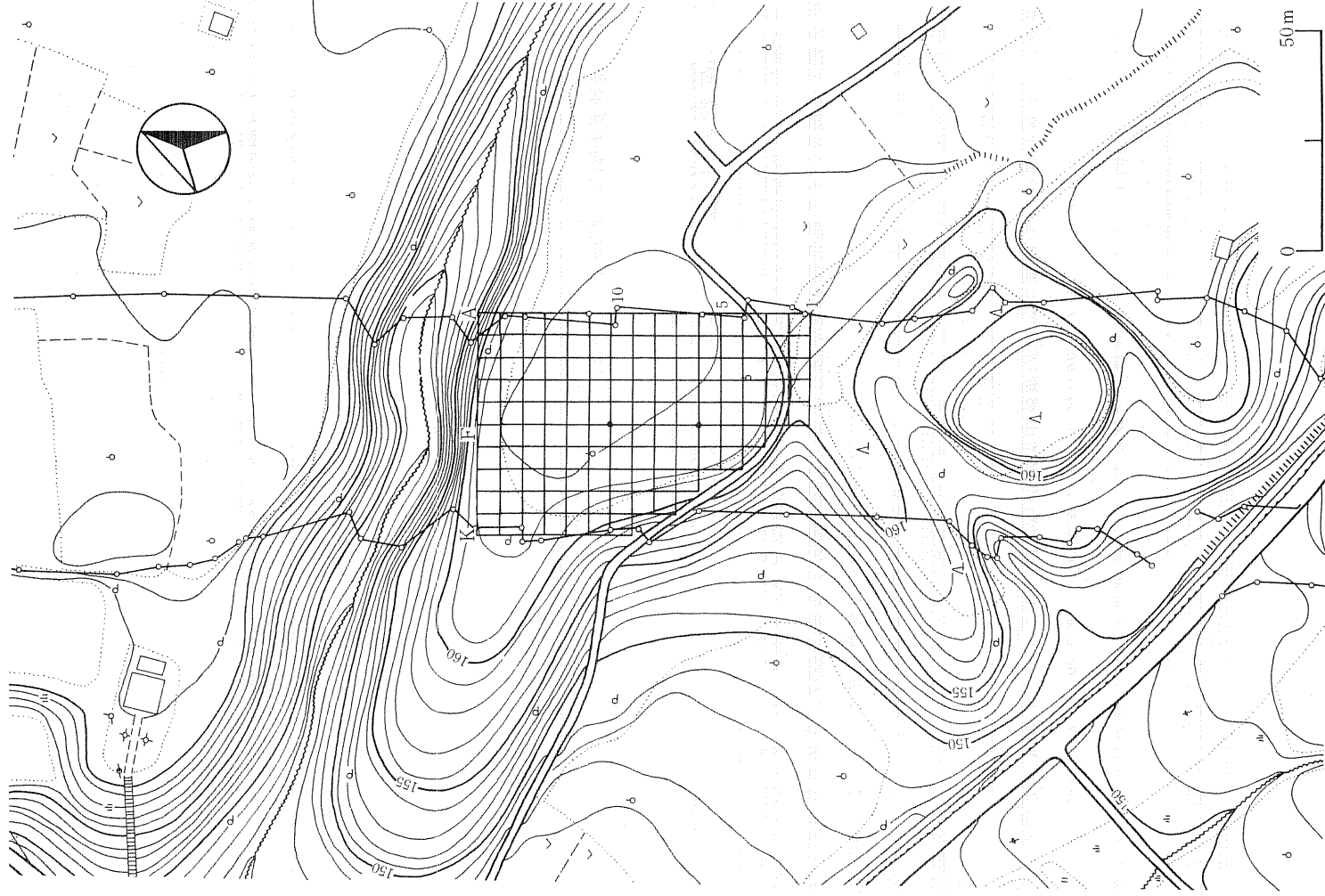
2 調査の方法

日本道路公団が建設区域に設定した東北縦貫自動車道の路線中心杭S T A 155 + 80とS T A 156を結ぶ直線及びその延長線を基準線として、これに直交する線を設け、5 m × 5 mのグリッドを設定した。なおS T A 155 + 80とS T A 156を結ぶ基準線は座標系第X系から西へ20度50分1秒偏しているが、一応南北ラインとし、この基準線に直交する線を東西ラインとした。また南北ラインの南から算用数字で1～16、東西ラインの東からアルファベットでA～Kを付し、各グリッドの名称は南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組合せて呼称した。

調査は、土層堆積状況を把握するため遺跡中央部から東西（10ライン）と南北（Fライン）に幅1 mのトレンチを設定し、さらに補足的に遺跡の南東隅から北と西へそれぞれサブトレンチを入れた。この結果、表土はほぼ調査区全域にわたって農機具等に掘り返された耕作土であったので、表土除去は重機を用いて、その後精査を行った。

発掘調査によって検出された遺構には、検出順に番号を付したが、後に検討の結果遺構ではないと判断したものは欠番とした。

遺跡地形や遺構等の実測は、各グリッドの隅の杭を利用して、簡易遣り方測量により実測した。実測図の縮尺は20分の1を原則とし、炉とカマドなどはその状況に応じて10分の1とした。また20分の1で実測した遺跡地形図と遺構平面図を原図にして、200分の1の遺構配置図など必



第1図 グリッド配置図

要な図面を作成した。

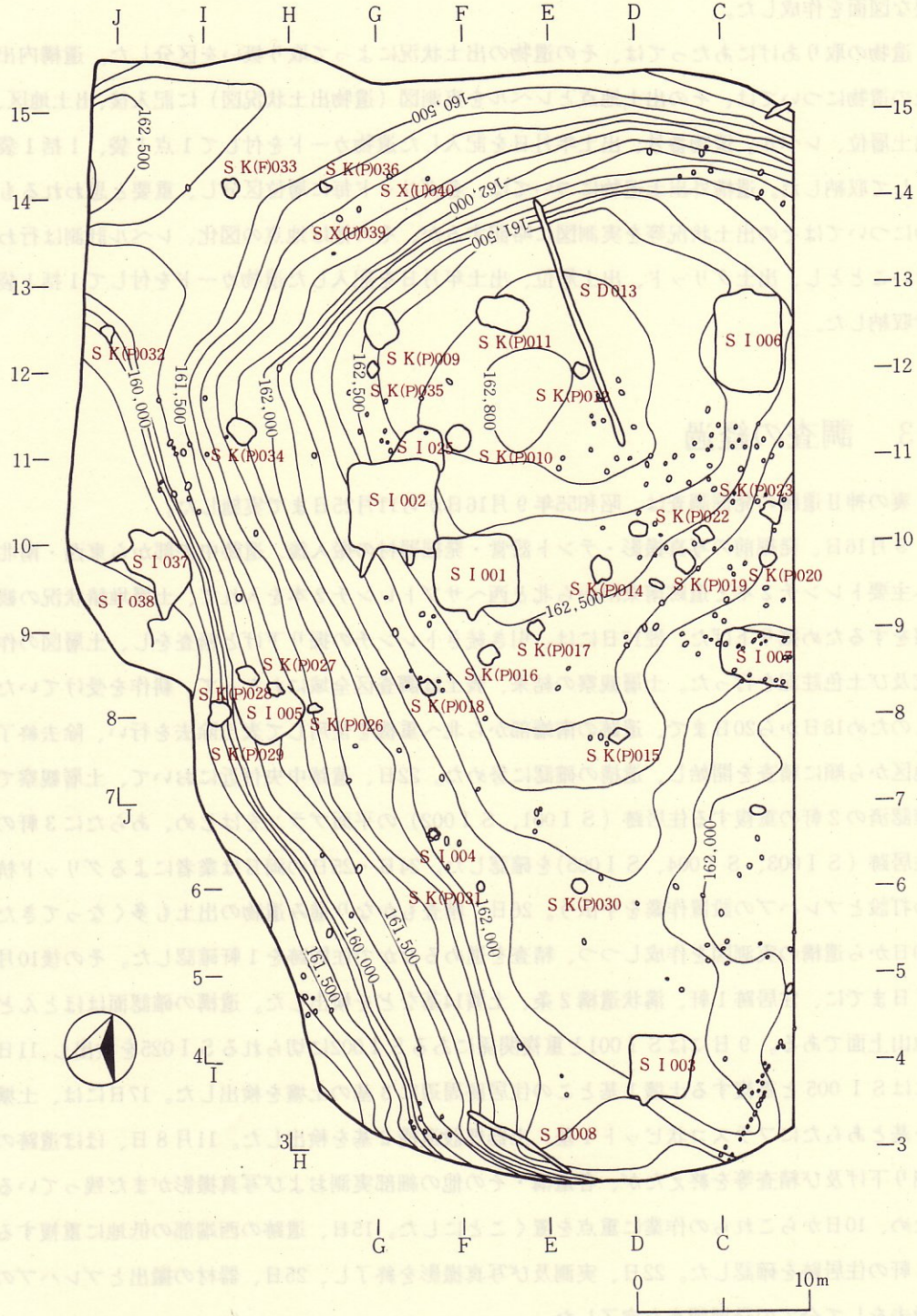
遺物の取りあげにあたっては、その遺物の出土状況によって取り扱いを区分した。遺構内出土の遺物については、その出土地点とレベルを実測図（遺物出土状況図）に記入後、出土地区、出土層位、レベル、遺物番号、出土年月日を記入した遺物カードを付して1点1袋、1括1袋として収納した。遺構外出土遺物については、各グリッド毎に層位区分し、重要と思われるものについてはその出土状況等を実測図に略記するが、その他は地点の図化、レベル計測は行わないこととし、出土グリッド、出土層位、出土年月日を記入した遺物カードを付して1括1袋で収納した。

3 調査の経過

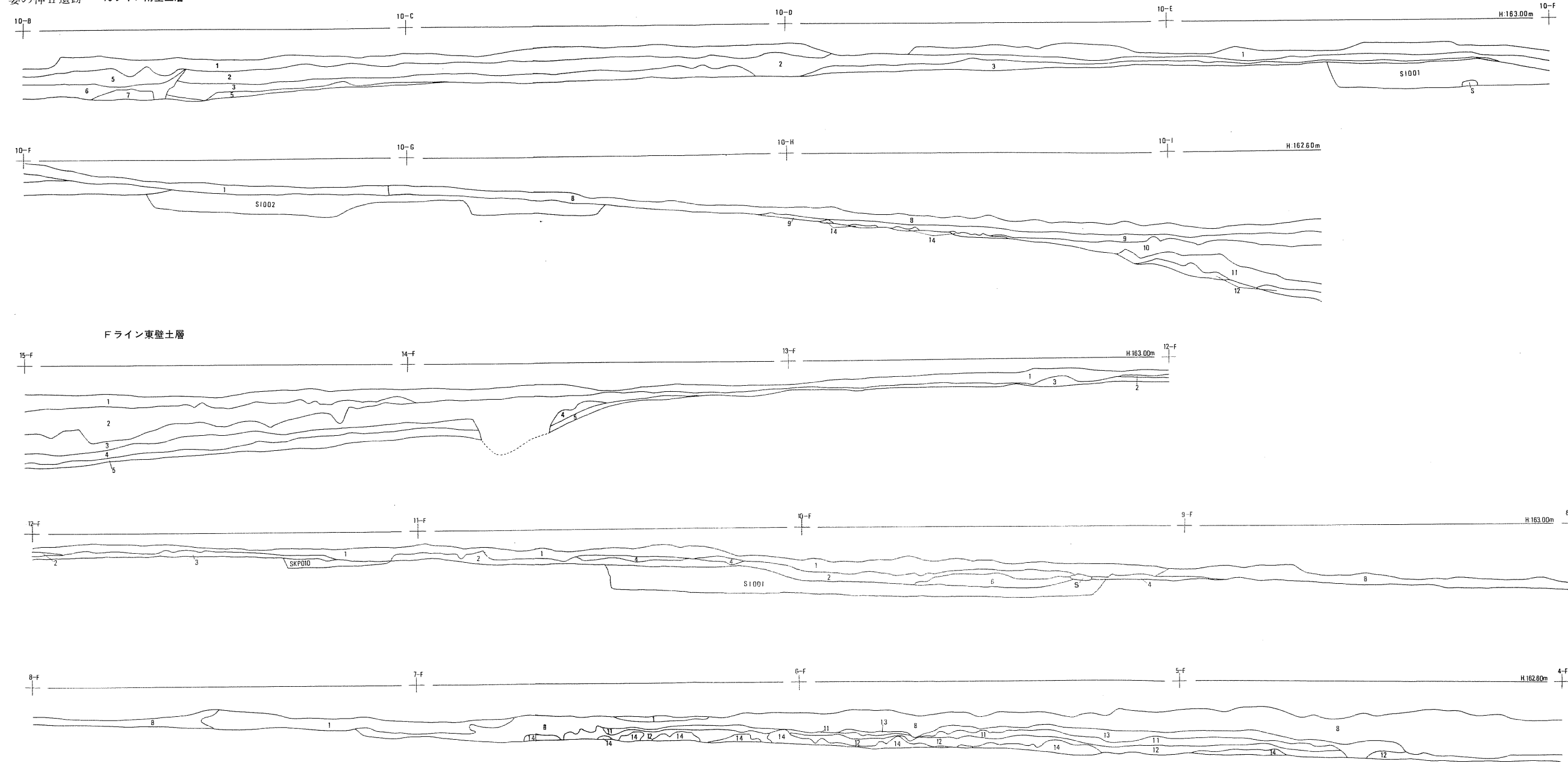
妻の神Ⅱ遺跡の発掘調査は、昭和55年9月16日から11月25日まで実施した。

9月16日、発掘前の写真撮影・テント設営・発掘器材の搬入後、遺跡中央部から東西・南北へ主要トレンチ2本と遺跡南東隅から北と西へサブトレンチ2本を入れて、土層堆積状況の観察をするため掘り下げた。翌17日には、引き続きトレンチの掘り下げと精査をし、土層図の作成及び土色註記を行った。土層観察の結果、表土は調査区全域にわたって、耕作を受けていた。このため18日から20日まで、遺跡の南端部から北へ重機を使用して表土除去を行い、除去終了地区から順に精査を開始し、遺構の確認に努めた。22日、遺跡中央付近において、土層観察で確認済の2軒の重複する住居跡（S I 001、S I 002）の平面プランをはじめ、あらたに3軒の住居跡（S I 003、S I 004、S I 005）を確認した。24日・25日の両日は業者によるグリッド杭の打設とプレハブの設置作業を手伝う。26日、精査もかなり進み遺物の出土も多くなってきた。29日から遺構の実測図を作成しつつ、精査を進めるなかで住居跡を1軒確認した。その後10月7日までに、住居跡1軒、溝状遺構2条、土壙14基などを検出した。遺構の確認面はほとんど地山上面である。9日にはS I 001と重複関係にあるS I 002に切られるS I 025を検出し、11日にはS I 005と重複する土壙1基とこの住居跡周辺に3基の土壙を検出した。17日には、土壙6基とあらたにフラスコ状ピット1基、土器埋設遺構2基を検出した。11月8日、ほぼ遺跡の掘り下げ及び精査等を終えたが、各遺構・その他の細部実測および写真撮影がまだ残っているため、10日からこれらの作業に重点を置くことにした。15日、遺跡の西端部の低地に重複する2軒の住居跡を確認した。22日、実測及び写真撮影を終了し、25日、器材の搬出とプレハブの撤去をして全ての発掘調査を完了した。

妻の神II遺跡



第2図 遺構配置図



層	土色	備考
1	黒色土 10Y R ¹ ・㉔	耕作土 粘性強 しまり弱 浮石混入
2	黒色土 10Y R ¹ ・㉔	粘性中 しまり強 浮石及び褐色土粒子混入
3	黒色土 10Y R ^㉔	粘性中 しまり中 浮石及び黄褐色土粒子混入
4	暗褐色土 10Y R ^㉔	粘性中 しまり中 黄褐色土粒子及び褐色土粒子混入
5	褐色土 10Y R ^㉔	粘性中 しまり中 明黄褐色土粒子及び黄褐色土粒子混入
6	黒褐色土 10Y R ¹ ・㉔	粘性中 しまり強 浮石及び黄褐色土粒子混入
7	黒褐色土 10Y R ^㉔	粘性中 しまり中 浮石及び黄褐色土粒子混入

層	土色	備考
8	黒褐色土 10Y R ^㉔	耕作土 粘性中 しまり中 浮石及び明黄褐色土粒子混入
9	黒褐色土 10Y R ^㉔	粘性中 しまり強 浮石及び黄褐色土粒子混入
10	黒褐色土 10Y R ^㉔	粘性中 しまり強 浮石及び黄褐色土粒子混入
11	黒色土 10Y R ¹ ・㉔	粘性中 しまり中 浮石及び黄褐色土粒子混入
12	黒色土 10Y R ^㉔	粘性中 しまり中 褐色土粒子及び黄褐色土粒子混入
13	黒色土 7.5Y R ^㉔	粘性強 しまり強 浮石混入
14	黄褐色粘質土 10Y R ^㉔	粘性強 しまり強



第3図 妻の神II遺跡基本層位

4 遺跡の層位

遺跡の調査では、表土除去を重機で行う前に、10ラインの北側に設けた東西トレンチの南壁セクションとFラインの西側に設けた南北トレンチの北壁セクションを基本層として、14層に分けた。第1・8層は表土層で、耕作やその他の攪乱を受けていた。第2・3層は調査区中央部では非常に薄かったり、確認されなかった部分もあった。第4・5層は主に北側の傾斜地に堆積していた自然堆積層で、上部平坦地にも若干確認された。第6層は10-Bラインと9-FラインのS I 001 上部に認められた層であり、第7層は10-Bラインにわずかに堆積している層であった。第9・10・11・12層は西側の傾斜地に堆積し、11・12層は南側の緩傾斜地も認められた。第13層は4-Fラインと5-Fラインの8層と11層の間層であった。第11層は黄褐色粘質土の地山漸移層であった。以上の堆積土層には縄文・平安時代の遺物が入り混じっており、遺物を層位的に把握することはできなかった。また大湯浮石粒がまばらに混入し、とくに傾斜地の堆積土には多く混入しているのが見られた。

5 遺構と遺物

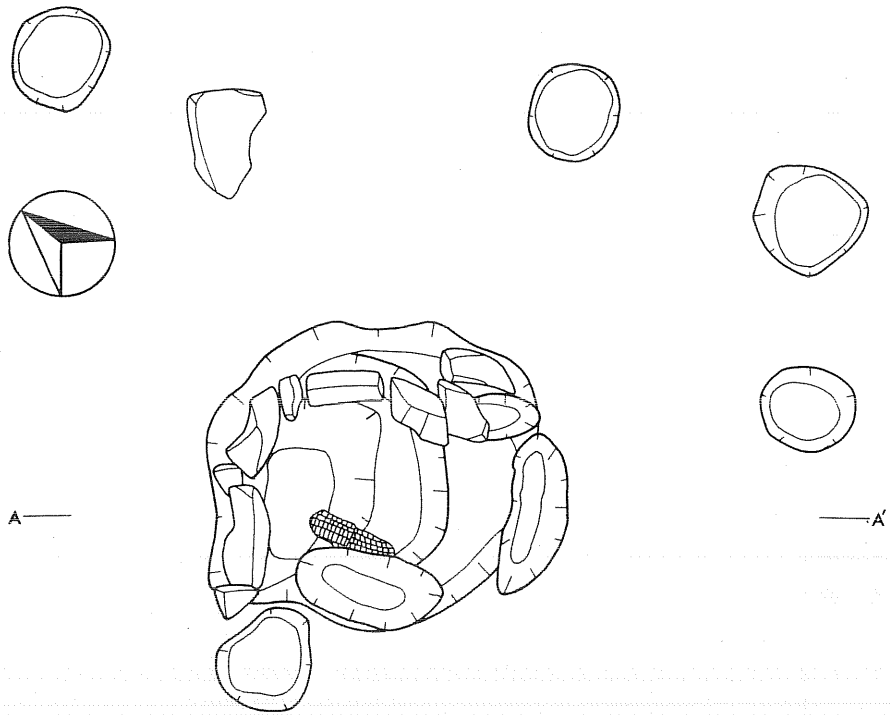
妻の神Ⅱ遺跡発掘調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡5軒、土壙24基、フラスコ状ピット1基、土器埋設遺構2基、溝状遺構2条、平安時代の竪穴住居跡4軒、中世の竪穴住居跡1軒などである。これらの遺構は、ほとんど地山上面において検出されたものである。遺構番号は、時期別に取り扱わずに検出順に付したものであるため、精査後に遺構と認められなかったものについては欠番扱いとした。

出土遺物は、縄文時代前期・後期・平安時代後半・中世の各時期のものがあり、縄文時代と平安時代の遺物が大多数を占めている。

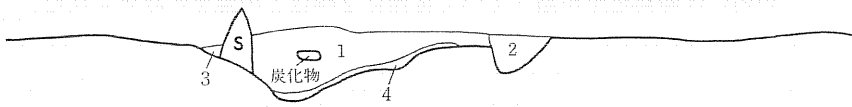
遺構・遺物は各時代別に取り扱い、遺物は遺構内・遺構外の順で図示した。

第1表 S1004 竪穴住居跡

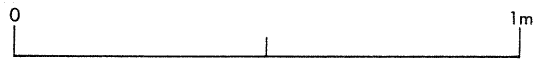
検出地区		6-F			挿図番号	4	図版番号	3・4
法量	長軸	—	壁溝幅	—	壁高	—	主軸方向	—
	短軸	—	壁溝深	—	面積	—	形態	—
プラン確認時の状態		表土から遺構確認面まで浅くわずかに炉跡とピット5個を検出。						
壁面の状態		不明						
覆土と床面の状態		不明						
ピット・柱穴		石組炉の北側に1個、東側に3個、西側に1個のピットを検出したが柱穴とは判別できなかった。						
炉		河原石を使った石組炉である。石の欠失している部分は抜き跡が確認できた。西側の石は炉に向いた方が、北側の石は表面全体が熱を受け赤化している。炉内には黒褐色土が詰っていて底面に2cmほどの焼土が認められた。黒褐色土中に木炭が入っていた。						
遺物とその出土状態		出土なし						
備考		開墾や整地作業により、住居跡の壁は消失したと思われる。						



A ————— H:163.10m ————— A'



層	土色	備考
1	黒褐色 (10Y R%)	褐色土粒子 黄褐色土粒子多量混入
2	褐色 (10Y R%)	黒褐色土粒子微量混入
3	黒色 (10Y R%)	黄褐色土粒子ブロック状に微量混入
4	焼土	



第4図 S I 004竪穴住居跡・炉実測図

第2表 S1005 竪穴住居跡

検出地区	7-G、8-G、7-H、8-H			挿図番号	5	図版番号	5・6	
法量	長軸	370cm	壁溝幅	——	壁高	2~18cm	主軸方向	——
	短軸	336cm	壁溝深	——	面積	9.554m ²	形態	不整形
プラン確認時の状態	表土から遺構面まで浅く黒褐色土の不整形プランと2個のピット検出。							
壁面の状態	不明							
覆土と床面の状態	埋土（黒褐色土）を掘り下げたが床面と思われる黄褐色の面は軟らかく、固くたたきしめられた状態ではなかった。							
ピット柱穴	重複する2個のピットを検出。 住居跡南側に床面及び壁を切ったPit1は、長さ158cm、幅35cm、深さ5cmの規模である。							
炉	河原石を使った石組炉である。石の欠失部分は抜き跡が確認できた。 石は熱を受け赤化しているものが多い。 炉内には暗褐色土が詰っていて底面に2cmほどの焼土が認められた。							
遺物とその出土状態	縄文土器片1点と土師器片1点の計2点出土。							
備考	開墾や整地作業により北西壁は発見できなかった。							

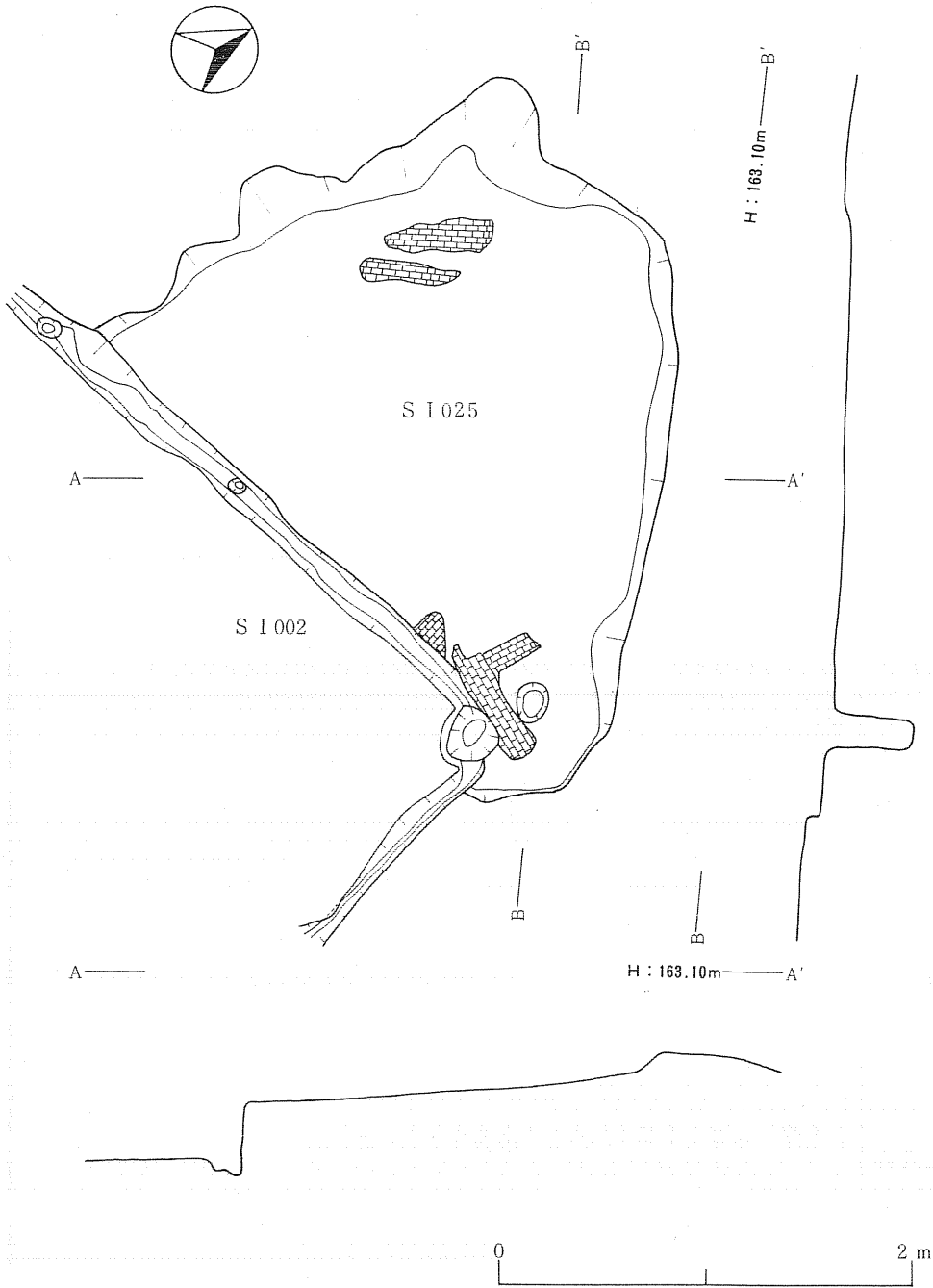


層	土色	備考
1	黒褐色 (10Y R $\frac{2}{2}$)	黒色土粒子少量混入
2	褐色 (10Y R $\frac{3}{3}$)	
3	黄褐色 (10Y R $\frac{5}{2}$)	
4	黒色 (10Y R $^{1.7/4}$)	

第5図 S I 005竪穴住居跡実測図

第3表 S I 025 竪穴住居跡

検出地区	10-F、11-F			挿図番号	6・17	図版番号	7・46	
法量	長軸	—	壁溝幅	—	壁高	5～8cm	主軸方向	—
	短軸	—	壁溝深	—	面積	—	形態	—
プラン確認時の状態	地山面において黒色土の広がりを確認。 南側はS I 002に切られている。							
壁面の状態	北東壁は遺存状態がよいが北西壁は破壊されている。							
覆土と床面の状態	住居跡の埋土は黒色土(10Y R ¹ ・7)で、床面もよくたたきしめられていた。 北側よりに焼土面確認。東・北西側で床面に密着した炭化材を発見した。 この炭化材は本住居跡に伴ったものと思われるが詳細は不明である。							
ピット・柱穴	東側隅に近いところでピット1個検出。							
炉	住居内北側よりに焼土面を認めたが、炉跡とは判断できなかった。							
遺物とその出土状態	住居内床面より縄文土器片9点出土。							
備考	S I 002に切られている為、壁高以外の法量は測定できず。							



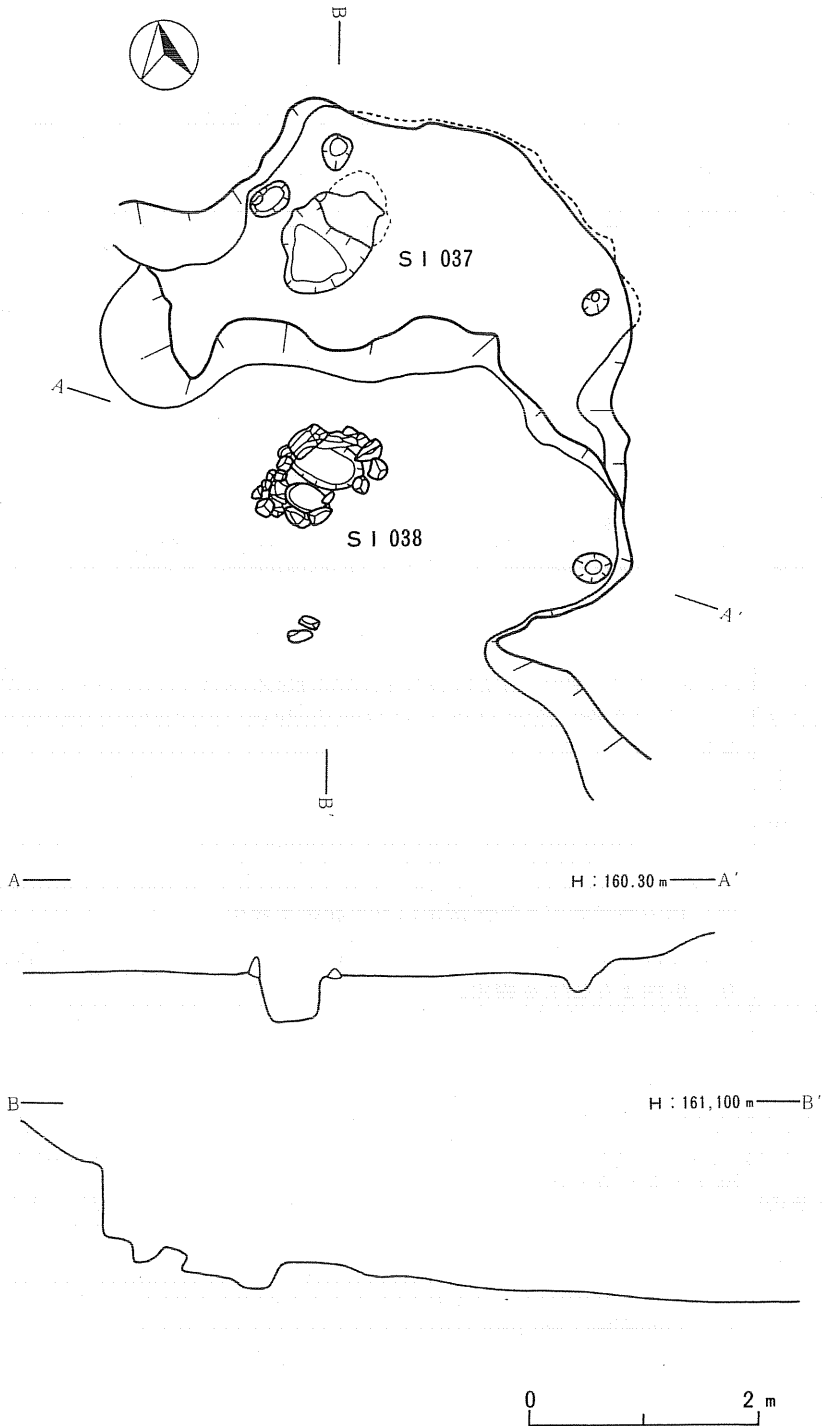
第6図 S I 025 竖穴住居跡実測図

第4表 S I 037 竪穴住居跡

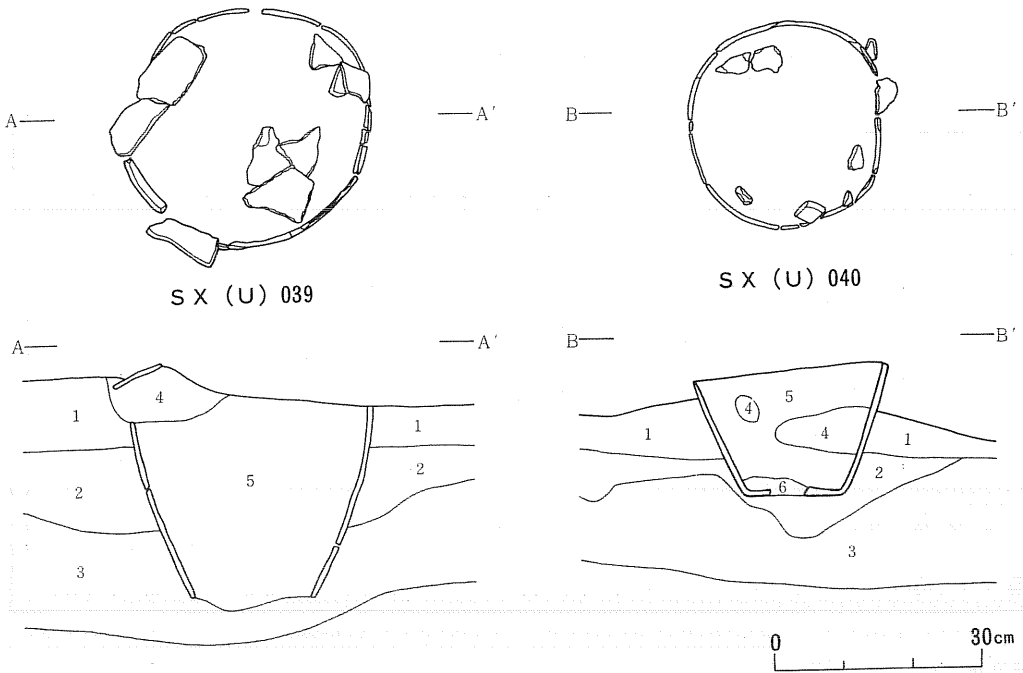
検出地区	9-I、9-J、10-I			挿図番号	7・18	図版番号	8・47	
法 量	長軸	—	壁溝幅	—	壁高	21~39cm	主軸方向	—
	短軸	—	壁溝深	—	面積	6.996m ²	形態	—
プラン確認 時の状態	遺跡西側斜面において黄褐色土に褐色土がわずかに混入している不明確なプランであった。							
壁面の状態	しまり良く、ほぼ垂直に立ち上がるが遺存部分は50%で他は削平されている。壁高はない。							
覆土と床面 の状態	覆土は黄褐色土に褐色土がわずかに混入している。住居跡が斜面に位置することも考え合わせると流入したものであろう。床面はやや軟弱でかなり起伏がある。							
ピット ・ 柱 穴	なし							
炉	なし							
遺物とその 出土状態	西壁際から縄文土器片23点と土師器片2点の計25点出土。							
備考	S I 038 に切られている。							

第5表 S I 038 竪穴住居跡

検出地区	8-I、9-I、9-J			挿図番号	8・18	図版番号	8・9・47	
法量	長軸	—	壁溝幅	—	壁高	10~21cm	主軸方向	—
	短軸	—	壁溝深	—	面積	7.828m ²	形態	—
プラン確認時の状態	S I 037掘り下げ中にS I 037の南側に重複し検出された。 黄褐色土に褐色土がわずかに混入しているだけで明確とはいえなかった。							
壁面の状態	S I 037と切り合い関係にある部分だけしまりがよく、ゆるい傾斜で立ち上がるが、他の壁は住居が斜面に位置するため確認できなかった。 壁溝はない。							
覆土と床面の状態	覆土は暗褐色土中に明黄褐色土がわずかに混入しているもので斜面に位置する事から全て流入したものであろう。 床面は軟弱で覆土と区別できなかったが、石組炉を検出したのでその面を床とした。							
ピット・柱穴	なし							
炉	10~40cmの河原石を20数個用いた石組炉を検出。 炉から抜けたと思われる石2個を床面から検出。炉を囲む石の内側は焼けており、炉内より焼土を検出。							
遺物とその出土状態	縄文土器片6点出土。							
備考	S I 037を切っている。							



第7図 S I 037・S I 038竪穴住居跡実測図



層	土色	備考
1	黒褐色土 (10Y R 5/2)	粘性中、黄褐色土粒子少量混入
2	褐色土 (10Y R 5/4)	粘性中、明黄褐色土粒子微量混入
3	黄褐色土 (10Y R 5/6)	粘性中、黒褐色土粒子少量混入
4	黒褐色土 (10Y R 5/2)	粘性中、黄褐色土粒子少量混入
5	黒色土 (10Y R 1/2)	粘性中、黄褐色土粒子微量混入

層	土色	備考
1	黒褐色土 (10Y R 5/2)	粘性中、黄褐色土粒子少量混入
2	褐色土 (10Y R 5/4)	粘性中、明黄褐色土粒子微量混入
3	黄褐色土 (10Y R 5/6)	粘性中、黒褐色土粒子少量混入
4	黒色土 (10Y R 5/2)	粘性中、黄褐色土粒子少量混入
5	黒色土 (10Y R 1/2)	粘性強、純黒色土
6	明赤褐色 (2.5Y R 5/6)	焼土

第 8 図 SX (U) 039・040埋設土器実測図

第6表 SK009 土壇

検出地区	12-F、12-G		挿図番号	9	図版番号	10
法 量	長軸	234cm	深さ	64cm	主軸方位	N-48°-W
	短軸	198cm	平面形	円形	断面形	台形
床面状態	わずかに南西側に傾斜していて堅固である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第7表 SK010 土壇

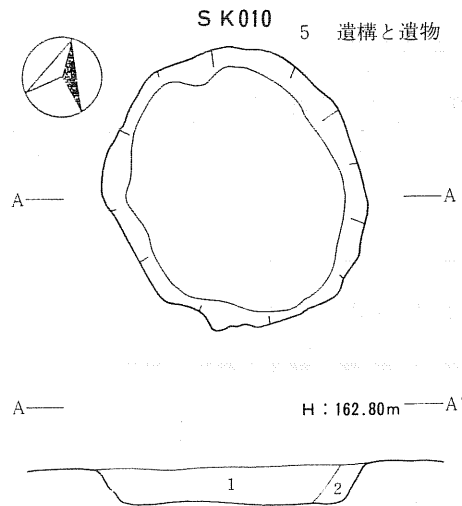
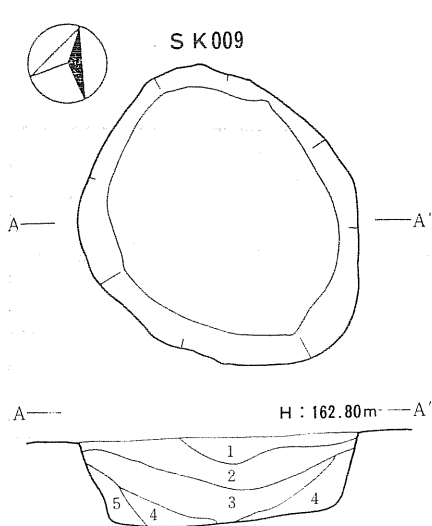
検出地区	11-E、11-F		挿図番号	9	図版番号	10
法 量	長軸	152cm	深さ	15cm	主軸方位	N-53°-W
	短軸	131cm	平面形	不整円形	断面形	鍋底形
床面状態	平坦で堅固である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第8表 SK011 土壇

検出地区	12-E		挿図番号	9	図版番号	11
法 量	長軸	228cm	深さ	52cm	主軸方位	N-61°-E
	短軸	204cm	平面形	円形	断面形	台形
床面状態	東側半分が20cmほど低いため段差を有し、全体的に凹凸がある。					
出土遺物	出土なし					
備考						

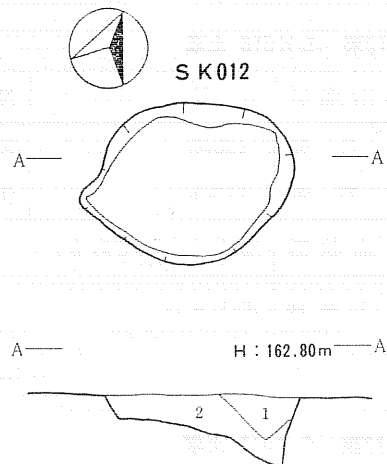
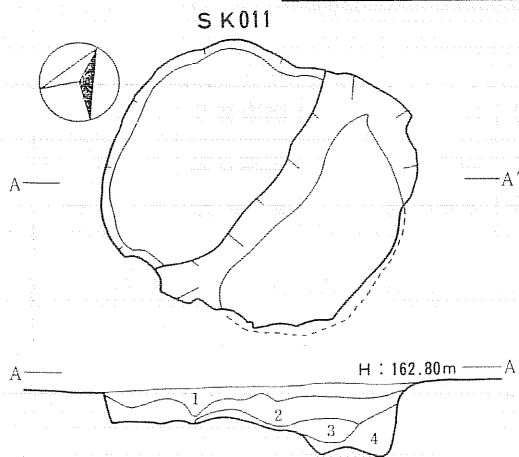
第9表 SK012 土壇

検出地区	11-D、12-D		挿図番号	9	図版番号	12
法 量	長軸	115cm	深さ	10~35cm	主軸方位	N-60°-E
	短軸	86cm	平面形	不整円形	断面形	台形
床面状態	東側に傾斜し凹凸がある。					
出土遺物	縄文土器2点出土。					
備考						



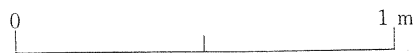
層	土色	備考
1	黒色 (10Y R ¹ ・7/10)	粘性強 黄褐色土粒子少量混入 浮石多量混入
2	黒褐色 (10Y R 7/10)	粘性中 黄褐色土粒子多量混入 浮石少量混入
3	黒褐色 (10Y R 7/10)	粘性中 黄褐色土粒子多量混入
4	にぶい黄褐色 (10Y R 7/10)	粘性中 黄橙色土粒子多量混入 黒色土粒子少量混入
5	黒褐色 (10Y R 7/10)	粘性中 黄褐色土粒子少量混入 浮石少量混入

層	土色	備考
1	黒色 (10Y R ¹ ・7/10)	粘性中 礫少量混入
2	黒褐色 (10Y R 7/10)	粘性中 礫少量混入



層	土色	備考
1	黒色 (10Y R ¹ ・7/10)	粘性中 黄褐色土粒子少量混入 浮石多量混入
2	黒褐色 (10Y R 7/10)	粘性中 黄褐色土粒子少量混入 浮石少量混入
3	にぶい黄褐色 (10Y R 7/10)	粘性中 明黄褐色土粒子多量混入 小砂礫少量混入
4	黒色 (10Y R ¹ ・7/10)	粘性強 黄褐色土粒子少量混入 浮石少量混入

層	土色	備考
1	黒色 (10Y R ¹ ・7/10)	粘性中 礫少量混入
2	黒褐色 (10Y R 7/10)	粘性中



第9図 S K 009・010・011・012土壌実測図

第10表 SK014 土壌

検出地区	9-D	挿図番号	10	図版番号	13	
法量	長軸	132cm	深さ	77cm	主軸方位	N-18°-W
	短軸	121cm	平面形	不整円形	断面形	「U」字形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	縄文土器片2点出土。					
備考						

第11表 SK015 土壌

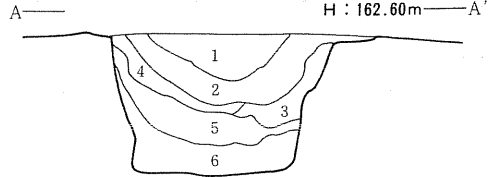
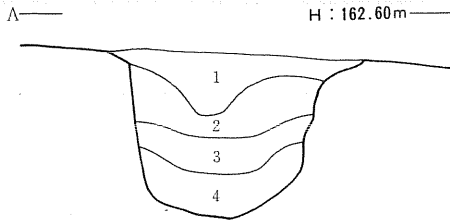
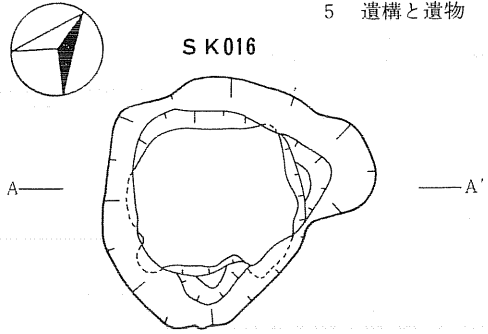
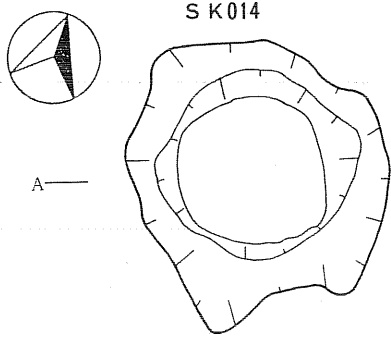
検出地区	7-D	挿図番号	10	図版番号	14	
法量	長軸	110cm	深さ	20cm	主軸方位	N-61°-E
	短軸	80cm	平面形	不整円形	断面形	台形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第12表 SK016 土壌

検出地区	8-E	挿図番号	10	図版番号	15	
法量	長軸	138cm	深さ	63cm	主軸方位	N-55°-E
	短軸	113cm	平面形	不整円形	断面形	台形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第13表 SK017 土壌

検出地区	8-E、9-E	挿図番号	10	図版番号	16	
法量	長軸	104cm	深さ	20cm	主軸方位	N-28°-W
	短軸	100cm	平面形	不整円形	断面形	台形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

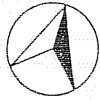


H : 162.60m

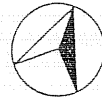
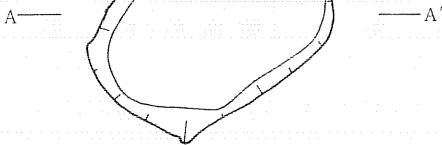
H : 162.60m

層	土色	備考
1	黒色 (10Y R ¹ ・3/4)	粘性強 黄褐色土粒子少量混入
2	黒褐色 (10Y R 2/3)	粘性強 黄褐色土粒子少量混入
3	黒褐色 (10Y R 2/3)	粘性強 黄褐色土粒子少量混入 小砂礫少量混入
4	黒褐色 (10Y R 2/3)	粘性強 黄褐色土粒子少量混入

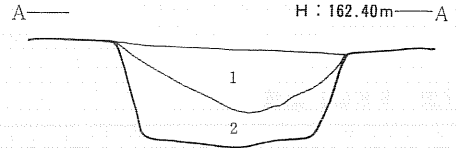
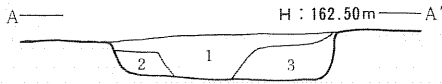
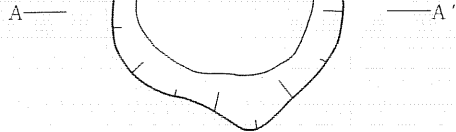
層	土色	備考
1	黒色 (7.5Y R 2/3)	粘性中 黄褐色土粒子微量混入
2	黒褐色 (7.5Y R 2/3)	粘性中 黄褐色土粒子多量混入
3	褐色 (10Y R 3/4)	粘性中 黄褐色土粒子多量混入
4	黒色 (10Y R 2/3)	粘性弱 黄褐色土粒子少量混入
5	黒褐色 (10Y R 2/3)	粘性弱 黄褐色土粒子多量混入
6	黒褐色 (10Y R 2/3)	粘性弱 黄褐色土粒子多量混入



S K015



S K017

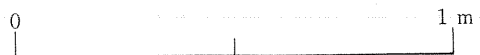


H : 162.50m

H : 162.40m

層	土色	備考
1	黒色 (7.5Y R ¹ ・3/4)	粘性中 黄褐色土粒子微量混入
2	黒色 (7.5Y R ¹ ・3/4)	粘性強 黄褐色土粒子微量混入
3	黒色 (7.5Y R 2/3)	粘性強 黄褐色土粒子少量混入

層	土色	備考
1	黒色 (10Y R ¹ ・3/4)	粘性強 黄褐色土粒子少量混入
2	黒色 (10Y R 2/3)	粘性強 黄褐色土粒子多量混入



第10図 S K014・015・016・017土壌実測図

第14表 SK018 土壌

検出地区	8-F	挿図番号	11	図版番号	17	
法 量	長軸	94cm	深さ	60cm	主軸方位	N-81°-E
	短軸	90cm	平面形	円形	断面形	台形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし。					
備考						

第15表 SK019 土壌

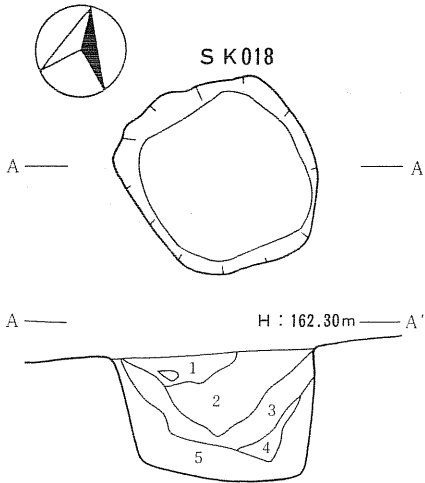
検出地区	9-C	挿図番号	11	図版番号	18	
法 量	長軸	140cm	深さ	53cm	主軸方位	N-62°-E
	短軸	116cm	平面形	不整円形	断面形	箱形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考	プラン確認面において炭化物微量検出。					

第16表 SK020 土壌

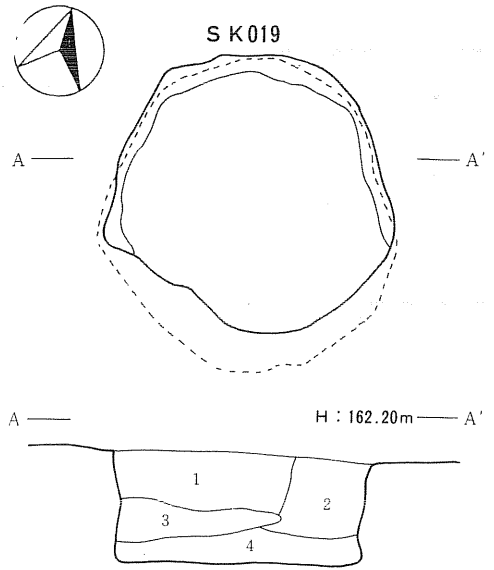
検出地区	9-B	挿図番号	11	図版番号	19	
法 量	長軸	95cm	深さ	14cm	主軸方位	N-64°-E
	短軸	86cm	平面形	円形	断面形	台形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	縄文土器片1点出土					
備考						

第17表 SK021 土壌

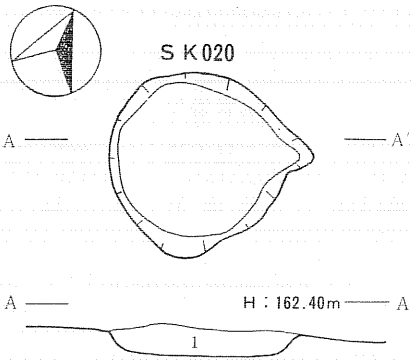
検出地区	10-C、10-D	挿図番号	11	図版番号	20	
法 量	長軸	105cm	深さ	72cm	主軸方位	N-31°-W
	短軸	100cm	平面形	円形	断面形	「U」字形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						



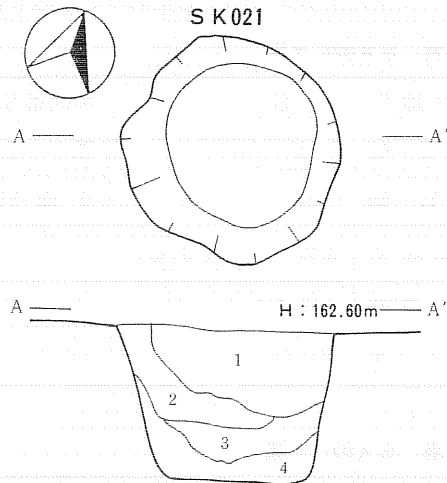
層	土色	備考
1	黒色 (10Y R 2/6)	粘性強 黄褐色土粒子ブロック状に微量混入 黒褐色土粒子多量混入
2	黒褐色 (10Y R 2/5)	粘性強 黄褐色土粒子少量混入 黒褐色土粒子多量混入
3	褐色 (10Y R 4/6)	粘性強 黄褐色土粒子及び黒褐色土粒子多量混入
4	黄褐色 (10Y R 5/6)	粘性中 黒褐色土粒子多量混入
5	黒褐色 (10Y R 2/5)	粘性強 黄褐色土粒子多量混入



層	土色	備考
1	黒色 (10Y R 1.5/2)	粘性中 黄褐色土粒子混入
2	黒色 (10Y R 2/6)	粘性中 黄褐色土粒子多量混入
3	暗褐色 (10Y R 3/6)	粘性強 黄褐色土粒子多量混入
4	黒褐色 (10Y R 2/5)	粘性強 黄褐色土粒子及び小砂礫多量混入



層	土色	備考
1	黒色 (10Y R 2/6)	粘性中 黄褐色土粒子少量混入



層	土色	備考
1	黒色 (10Y R 1.5/2)	粘性中 黄褐色土粒子ブロック状に微量混入
2	暗褐色 (10Y R 3/6)	粘性強 黄褐色土粒子ブロック状に多量混入
3	黒褐色 (10Y R 2/5)	粘性中 黄褐色土粒子少量混入
4	暗褐色 (10Y R 3/6)	粘性中 黄褐色土粒子多量混入 小砂礫少量混入



第11図 SK018・019・020・021土壤実測図

第18表 SK022土壌

検出地区	10-C	挿図番号	12	図版番号	21	
法 量	長軸	113cm	深さ	54cm	主軸方位	N-81°-W
	短軸	90cm	平面形	不整円形	断面形	台形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第19表 SK023土壌

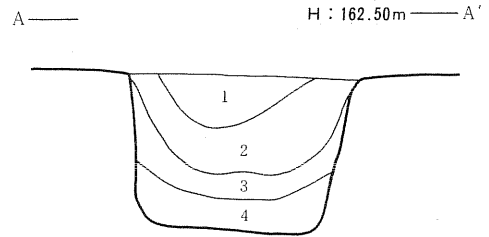
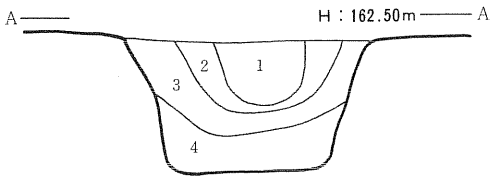
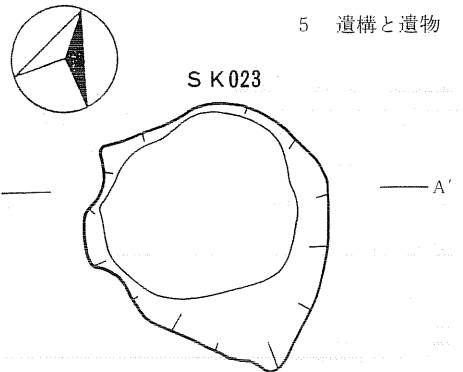
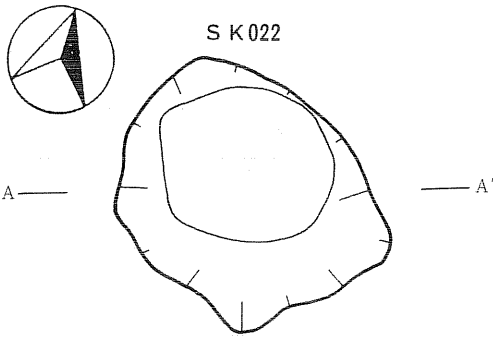
検出地区	10-B	挿図番号	12	図版番号	22	
法 量	長軸	106cm	深さ	64cm	主軸方位	N-59°-W
	短軸	90cm	平面形	不整円形	断面形	箱形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第20表 SK026土壌

検出地区	8-G	挿図番号	12	図版番号	23	
法 量	長軸	87cm	深さ	52cm	主軸方位	N-70°-E
	短軸	52cm	平面形	不整楕円形	断面形	箱形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

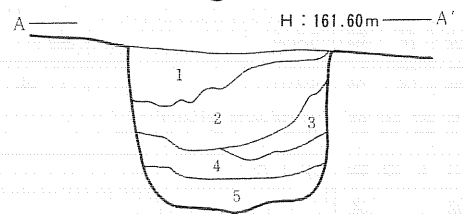
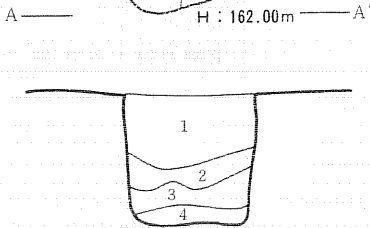
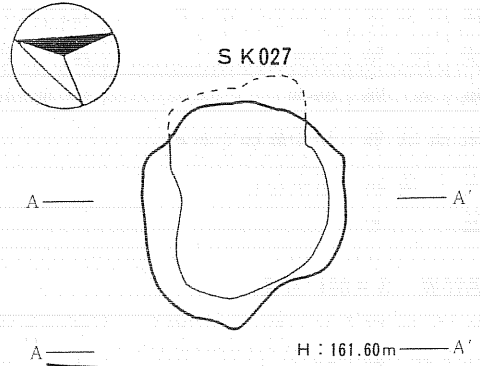
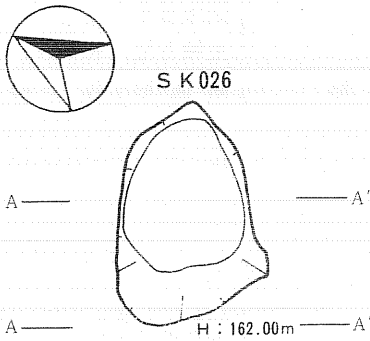
第21表 SK027土壌

検出地区	8-H	挿図番号	12	図版番号	23	
法 量	長軸	97cm	深さ	65cm	主軸方位	N-86°-W
	短軸	80cm	平面形	不整楕円形	断面形	「U」字形
床面状態	南から北へゆるい傾斜をもち凹凸がある。					
出土遺物	出土なし					
備考						



層	土色	備考
1	黒色 (10Y R ¹ ・%)	粘性中 黄褐色土粒子微量混入
2	黒色 (10Y R%)	粘性強 黄褐色土粒子フロック状に少量混入
3	黒褐色 (10Y R%)	粘性中 黄褐色土粒子多量混入
4	明黄褐色 (10Y R%)	粘性強 黄褐色土粒子、黒褐色土粒子多量混入

層	土色	備考
1	黒色 (10Y R ¹ ・%)	粘性中 黄褐色土粒子微量混入
2	黒色 (10Y R%)	粘性中 黄褐色土粒子多量混入 小砂礫多量混入
3	黒褐色 (10Y R%)	粘性強 黄褐色土粒子多量混入 浮石少量混入
4	暗褐色 (10Y R%)	粘性中 黒色土粒子多量混入



層	土色	備考
1	黒褐色 (10Y R%)	粘性中 黄褐色土粒子フロック状に少量混入
2	黒色 (10Y R%)	粘性中
3	暗褐色 (10Y R%)	粘性強 黄褐色土粒子多量混入
4	黒褐色 (10Y R%)	粘性強 黄褐色土粒子少量混入

層	土色	備考
1	褐色 (10Y R%)	粘性中 黄褐色土粒子多量混入
2	黒褐色 (10Y R%)	粘性中 黄褐色土粒子多量混入
3	褐色 (10Y R%)	粘性中
4	黒褐色 (10Y R%)	粘性強 黄褐色土粒子微量混入
5	黒褐色 (10Y R%)	粘性強 黄褐色土粒子微量混入



第12図 S K 022・023・026・027土壌実測図

第22表 SK028 土壌

検出地区	8-H	挿図番号	13	図版番号	24	
法 量	長軸	132cm	深さ	90cm	主軸方位	N-89°-W
	短軸	108cm	平面形	不整円形	断面形	箱形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第23表 SK029 土壌

検出地区	7-H、8-H	挿図番号	13	図版番号	24	
法 量	長軸	163cm	深さ	32cm	主軸方位	N-32°-E
	短軸	120cm	平面形	不整楕円形	断面形	台形
床面状態	堅固で平坦であるが東から西へゆるく傾斜している。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第24表 SK030土壌

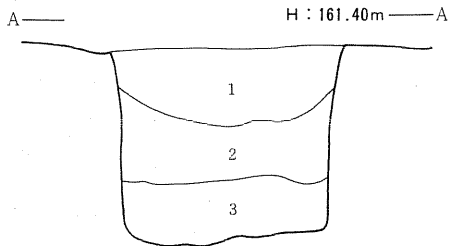
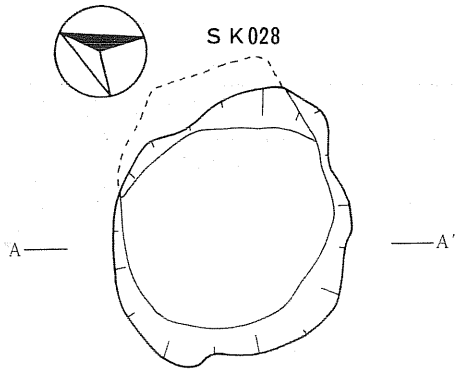
検出地区	5-D、6-D	挿図番号	13	図版番号	25	
法 量	長軸	93cm	深さ	8cm	主軸方位	N-34°-W
	短軸	84cm	平面形	円形	断面形	台形
床面状態	やや軟弱である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第25表 SK031 土壌

検出地区	5-E、6-E	挿図番号	13	図版番号	25	
法 量	長軸	58cm	深さ	38cm	主軸方位	N-24°-E
	短軸	48cm	平面形	円形	断面形	「U」字形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

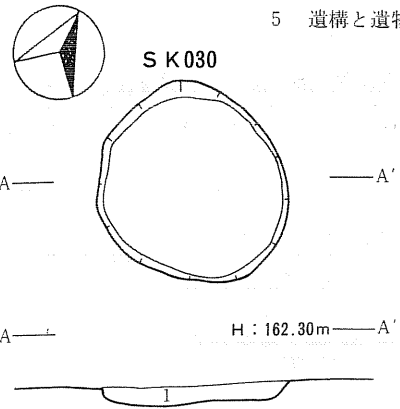
第26表 SK032 土壌

検出地区	12-J	挿図番号	13	図版番号	26	
法 量	長軸	80cm	深さ	28cm	主軸方位	N-45°-W
	短軸	62cm	平面形	不整円形	断面形	台形
床面状態	堅固で北から南へゆるく傾斜している。					
出土遺物	出土なし					
備考						



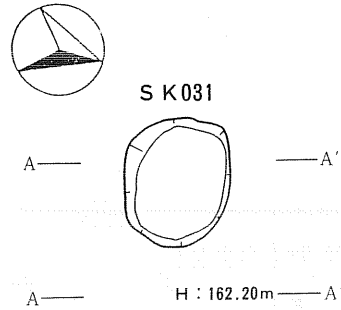
層	土色	備	考
1	黒褐色 (10Y R 2%)	粘性中	黄褐色土粒子多量混入
2	黒褐色 (10Y R 2%)	粘性中	黄褐色土粒子ブロック状に多量混入
3	黒褐色 (10Y R 2%)	粘性中	黄褐色土粒子微量混入

H : 161.40m

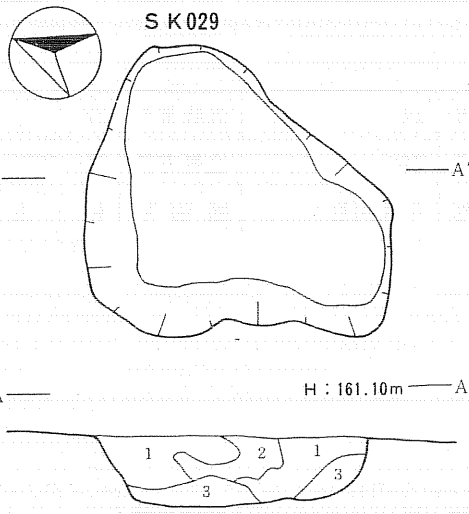


層	土色	備	考
1	黒色 (7.5Y R 1.5%)	粘性強	黄褐色土粒子微量混入

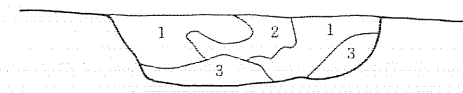
H : 162.30m



H : 162.20m

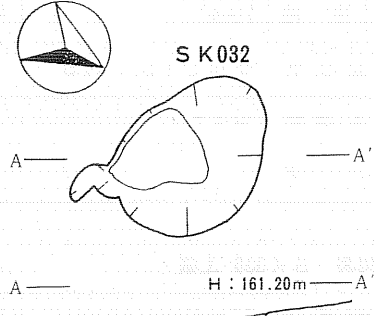


H : 161.10m

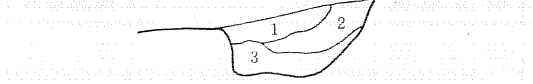


層	土色	備	考
1	黒色 (7.5Y R 1.5%)	粘性中	黄褐色土粒子微量混入
2	黒色 (10Y R 2%)	粘性中	黄褐色土粒子多量混入
3	黄褐色 (10Y R 5%)	粘性弱	

層	土色	備	考
1	黒色 (10Y R 1.5%)	粘性中	黄褐色土粒子微量混入
2	褐色 (10Y R 5%)	粘性中	



H : 161.20m



層	土色	備	考
1	黒色 (10Y R 1.5%)	粘性強	黄褐色土粒子微量混入
2	黒褐色 (10Y R 2%)	粘性強	黄褐色土粒子ブロック状に多量混入
3	黄褐色 (10Y R 5%)	粘性弱	黒褐色土粒子微量混入



第13図 S K 028・029・030・031・032土壌実測図

第27表 SK(F)033 フラスコ状ピット

検出地区	14-G	挿図番号	14	図版番号	27	
法 量	長軸	94cm	深さ	48cm	主軸方位	N-23°-W
	短軸	68cm	平面形	不整円形	断面形	フラスコ状
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第28表 SK034 土壌

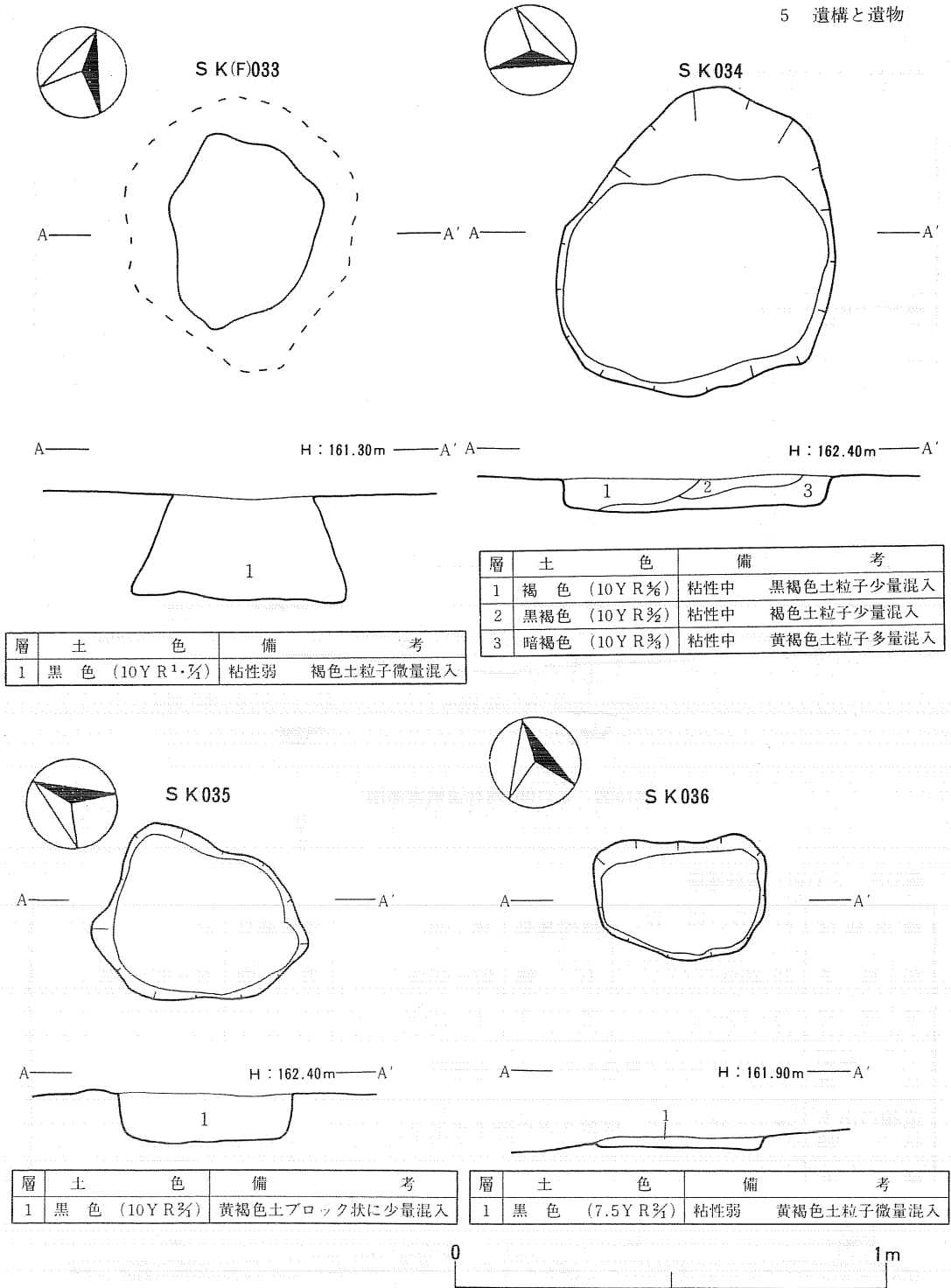
検出地区	11-H	挿図番号	14	図版番号	26	
法 量	長軸	144cm	深さ	14cm	主軸方位	N-34°-E
	短軸	124cm	平面形	不整円形	断面形	箱形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第29表 SK035 土壌

検出地区	11-G、12-G、12-F	挿図番号	14	図版番号	27	
法 量	長軸	100cm	深さ	24cm	主軸方位	N-19°-W
	短軸	70cm	平面形	不整円形	断面形	箱形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

第30表 SK036 土壌

検出地区	14-G	挿図番号	14	図版番号		
法 量	長軸	80cm	深さ	6cm	主軸方位	N-78°-E
	短軸	54cm	平面形	不整長方形	断面形	台形
床面状態	堅固で平坦である。					
出土遺物	出土なし					
備考						

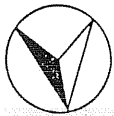


第14図 S K(F)033・S K034・035・036土壌実測図

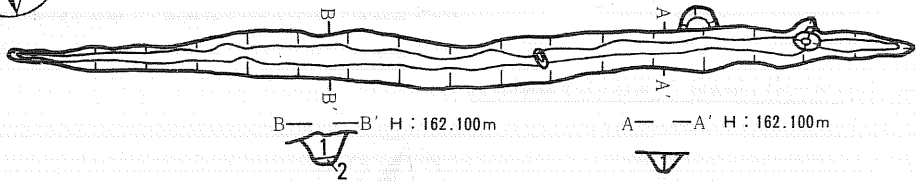
第31表 S D008 溝状遺構

検出地区	2-D、2-E、 3-E	挿図番号	15	図版番号	44	
法	長さ	7.14m	上幅	10~40cm	方向	N-80°-W
量	底幅	6~18cm	深さ	底面は凹状に落ち込む部分もある。2~30cm。		
プラン確認 状況	地山面において黒色土のプランを確認。					
遺物の出土 状況	出土なし					
備考						

層	土色	備	考
1	黒色土 10YR1.7/2	しまり強	粘性強
2	黒褐色土 10YR2/2	しまり中	粘性強 黄褐色土粒子混入



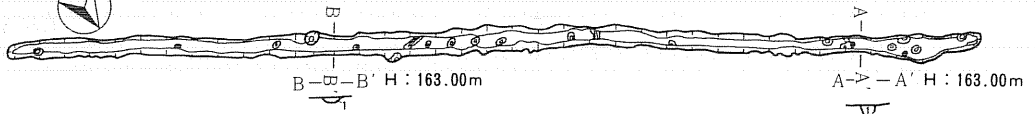
層	土色	備	考
1	黒色土 10YR1.7/2	しまり弱	粘性中 黄褐色土粒子混入



第15図 S D008溝状遺構実測図

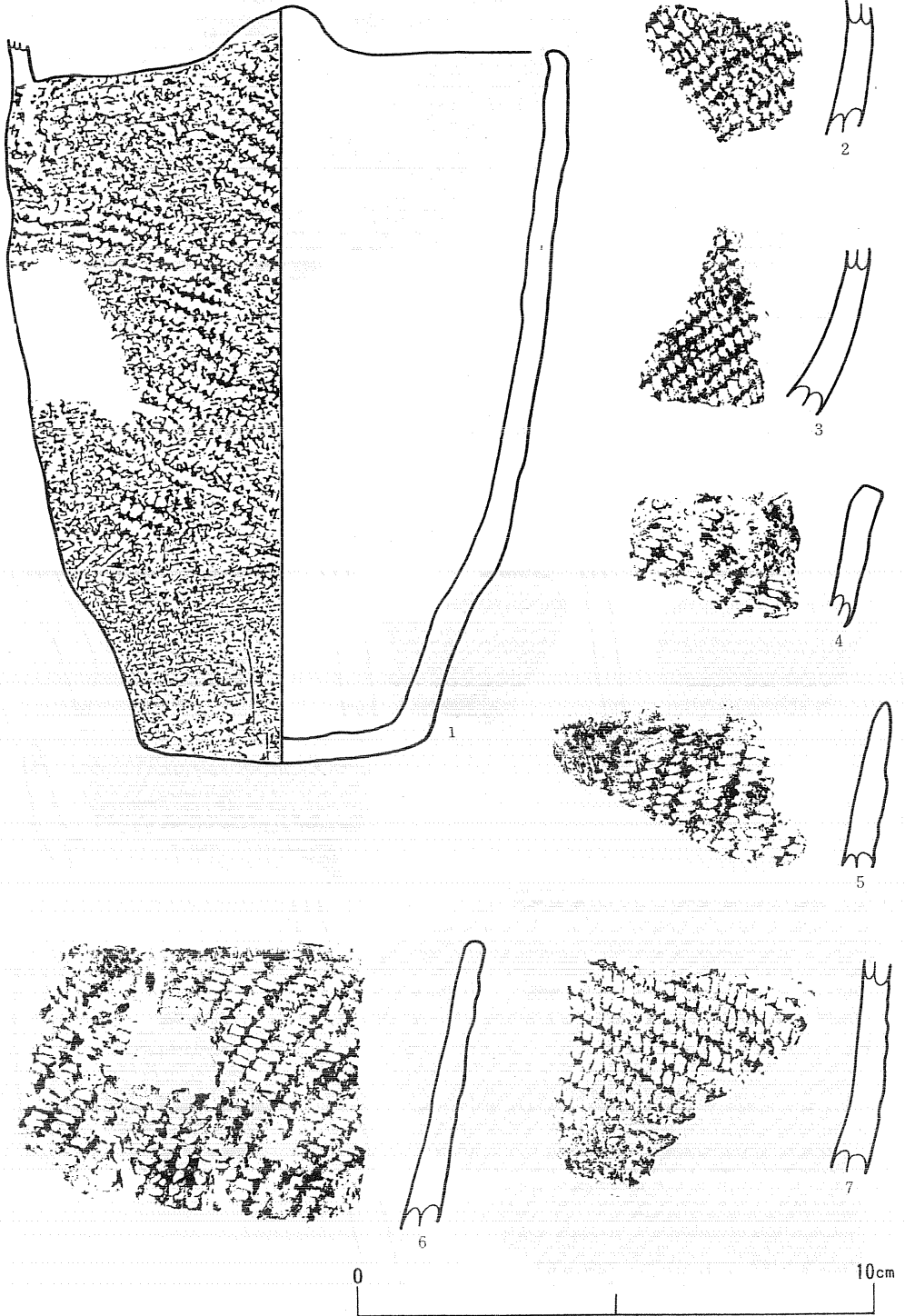
第32表 S D013 溝状遺構

検出地区	11-D、12-D、 13-D、13-E	挿図番号	16・20	図版番号	45	
法	長さ	15.26m	上幅	27~45cm	方向	N-42°-W
量	底幅	15~35cm	深さ	8~17cm		
プラン確認 状況	地山面において黒色土のプランを確認。					
遺物の出土 状況	縄文土器片2点、搔器2点の計4点出土。					
備考						

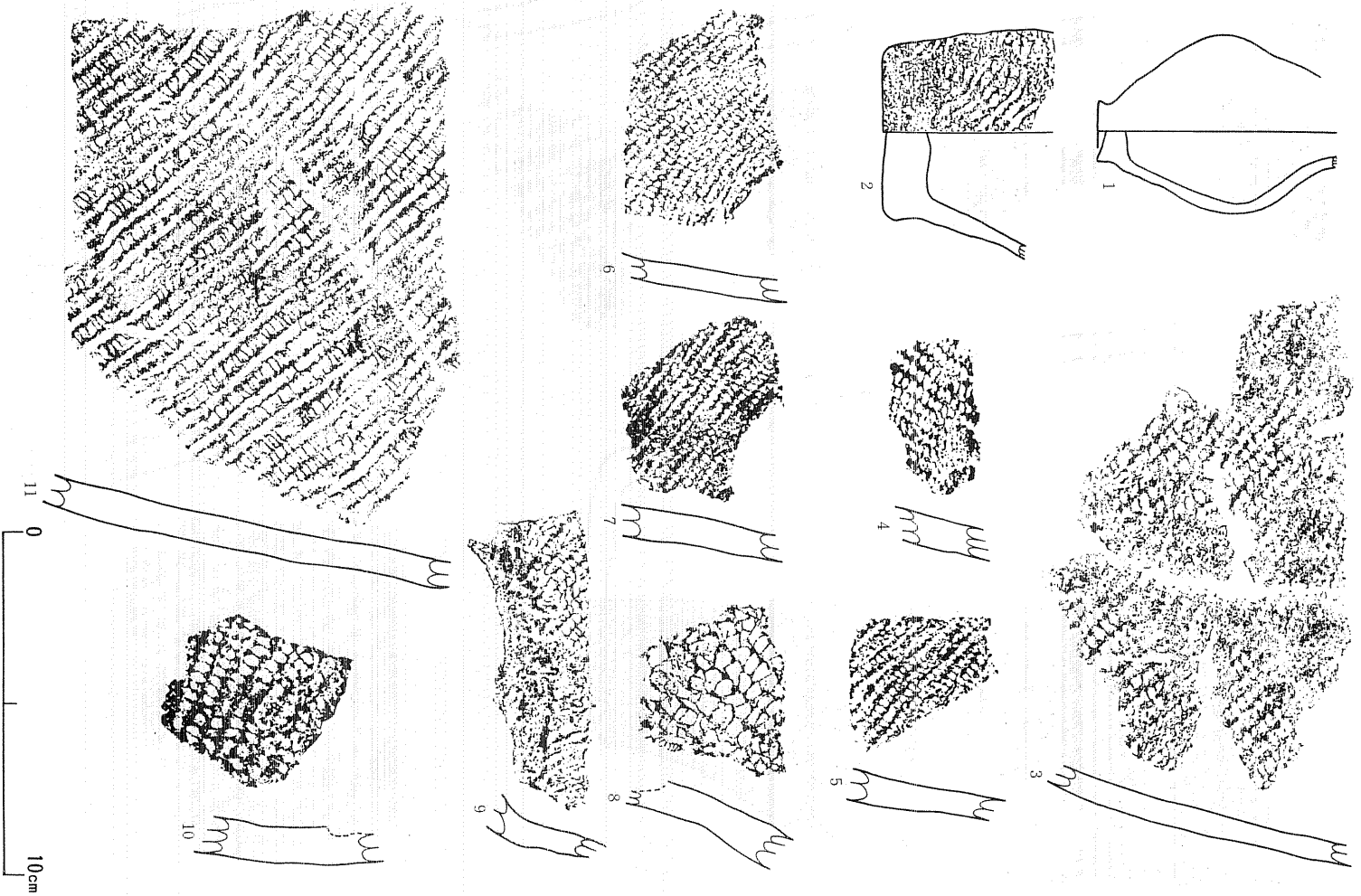


層	土色	備	考
1	黒色土 10YR2/2	しまり弱	粘性弱 黄褐色土粒子混入

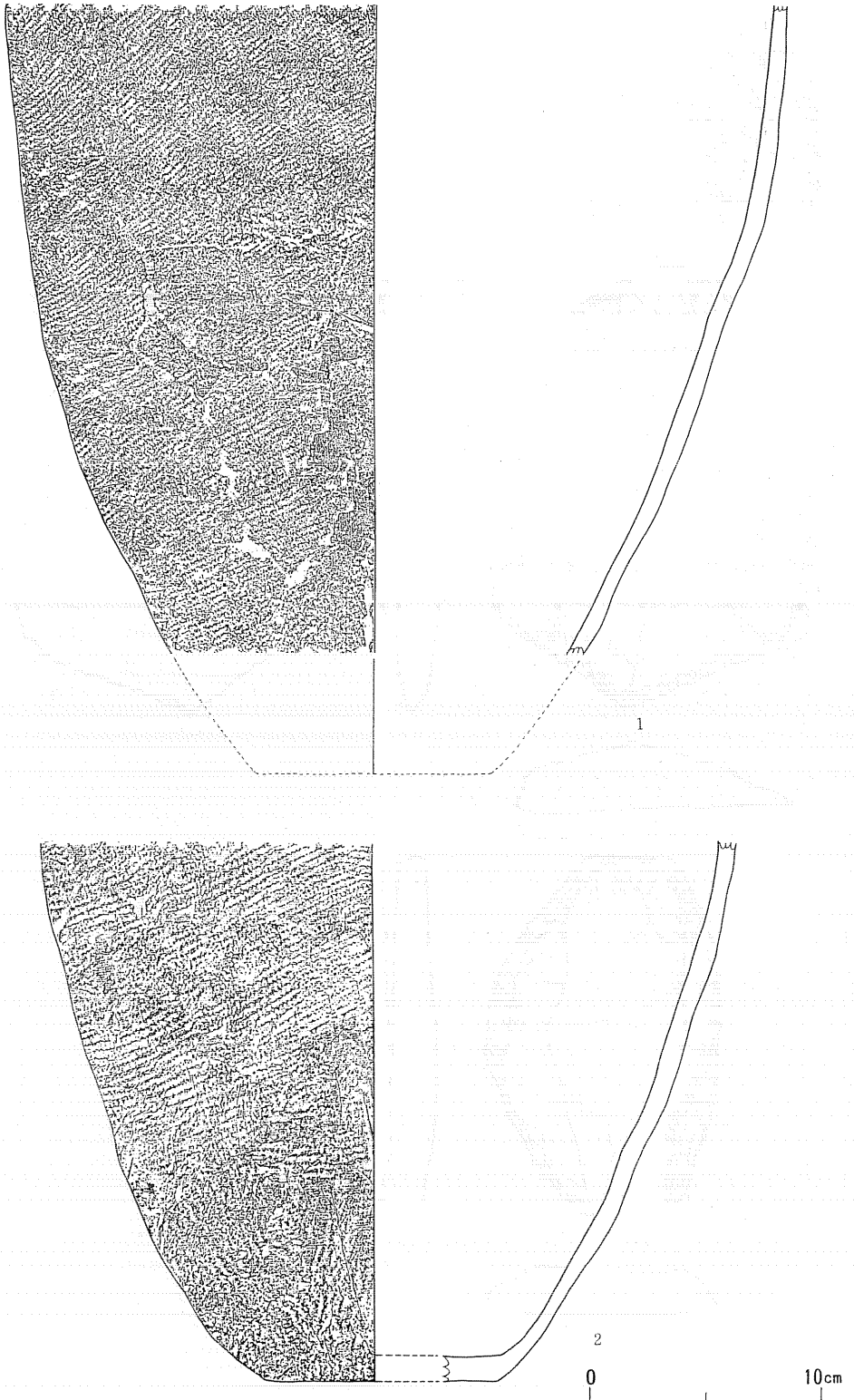
第16図 S D013溝状遺構実測図



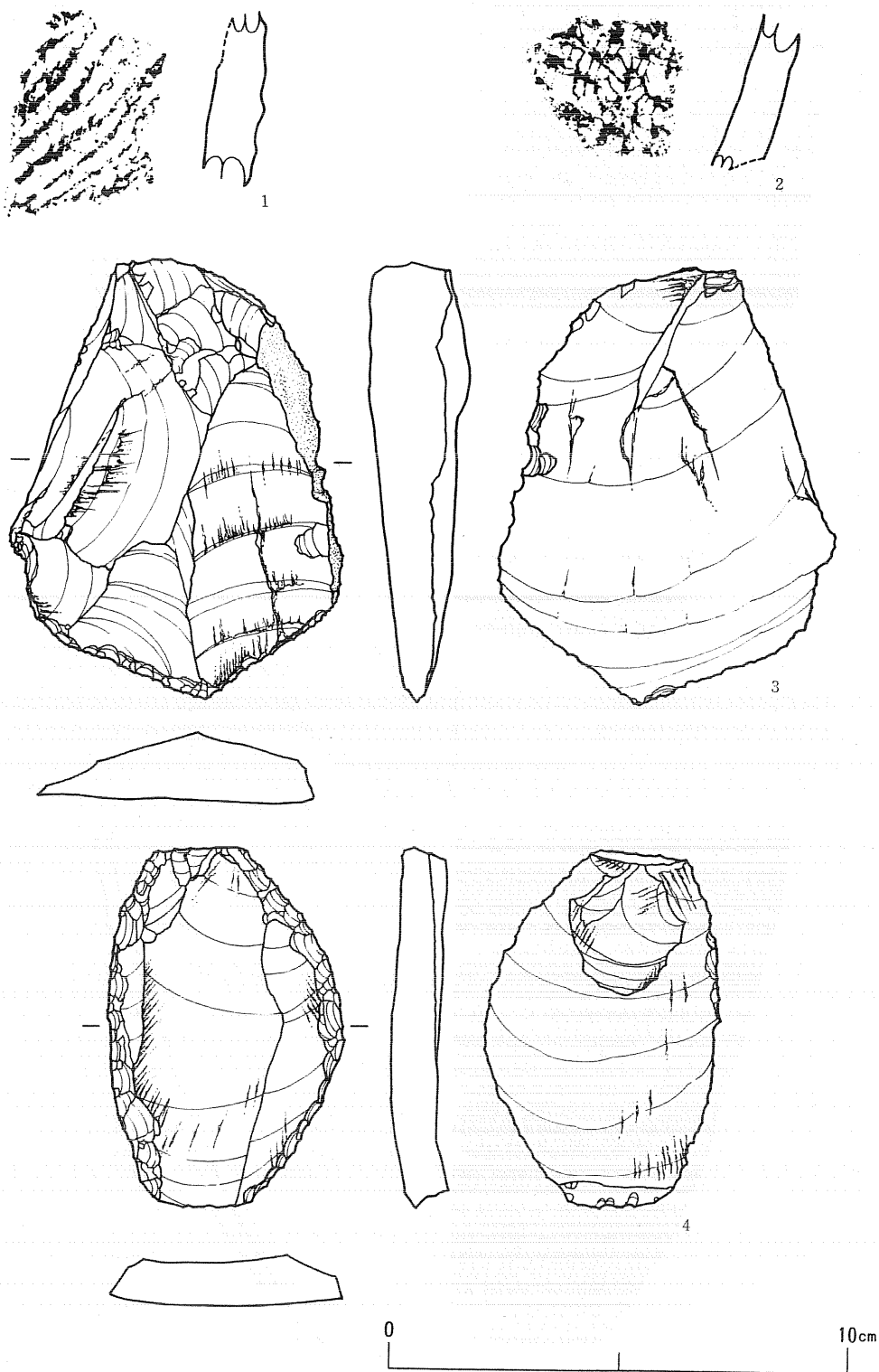
第17図 S I 025竪穴住居跡出土遺物実測図



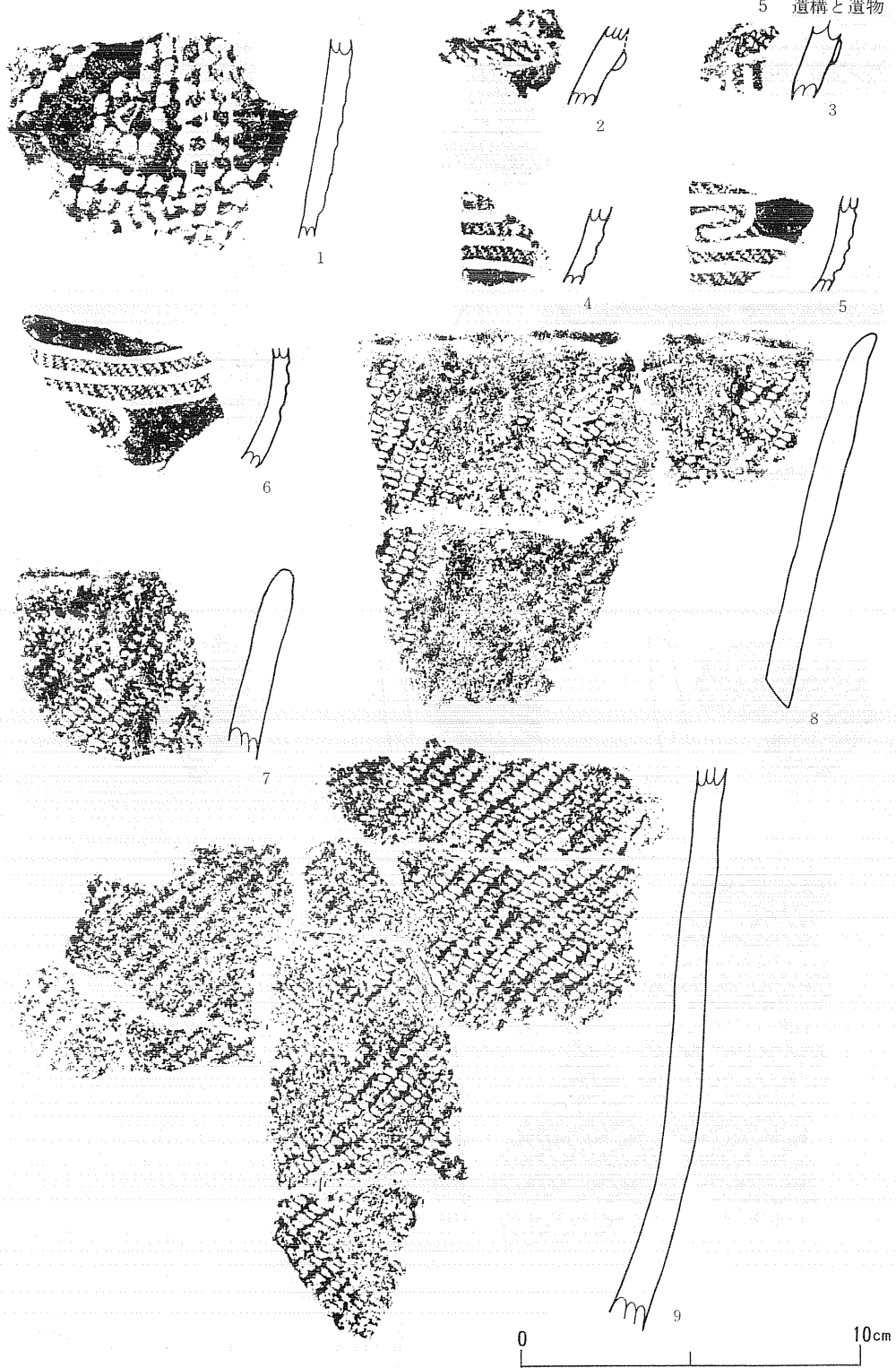
第18図 S1037・038竪穴住居跡出土遺物実測図



第19図 SX(U)039・040埋設土器実測図



第20図 S D013溝状遺構出土遺物実測図

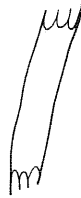


第21図 遺構外出土遺物拓影図(1)

妻の神Ⅱ遺跡



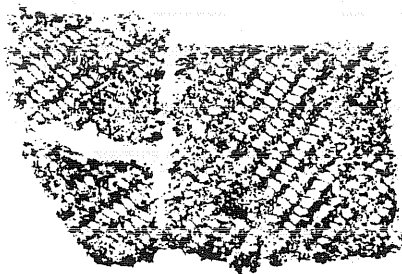
10



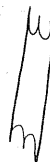
11



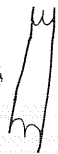
12



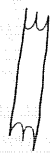
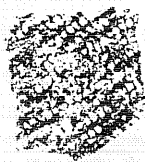
13



14



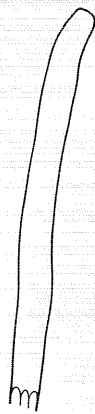
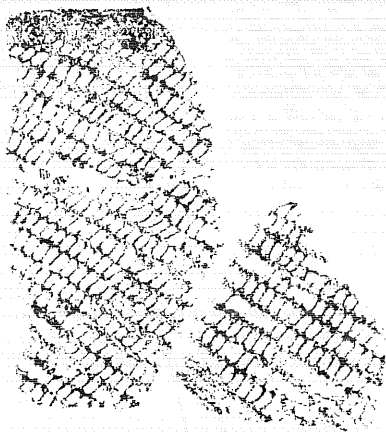
15



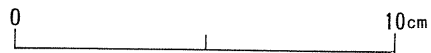
16



17

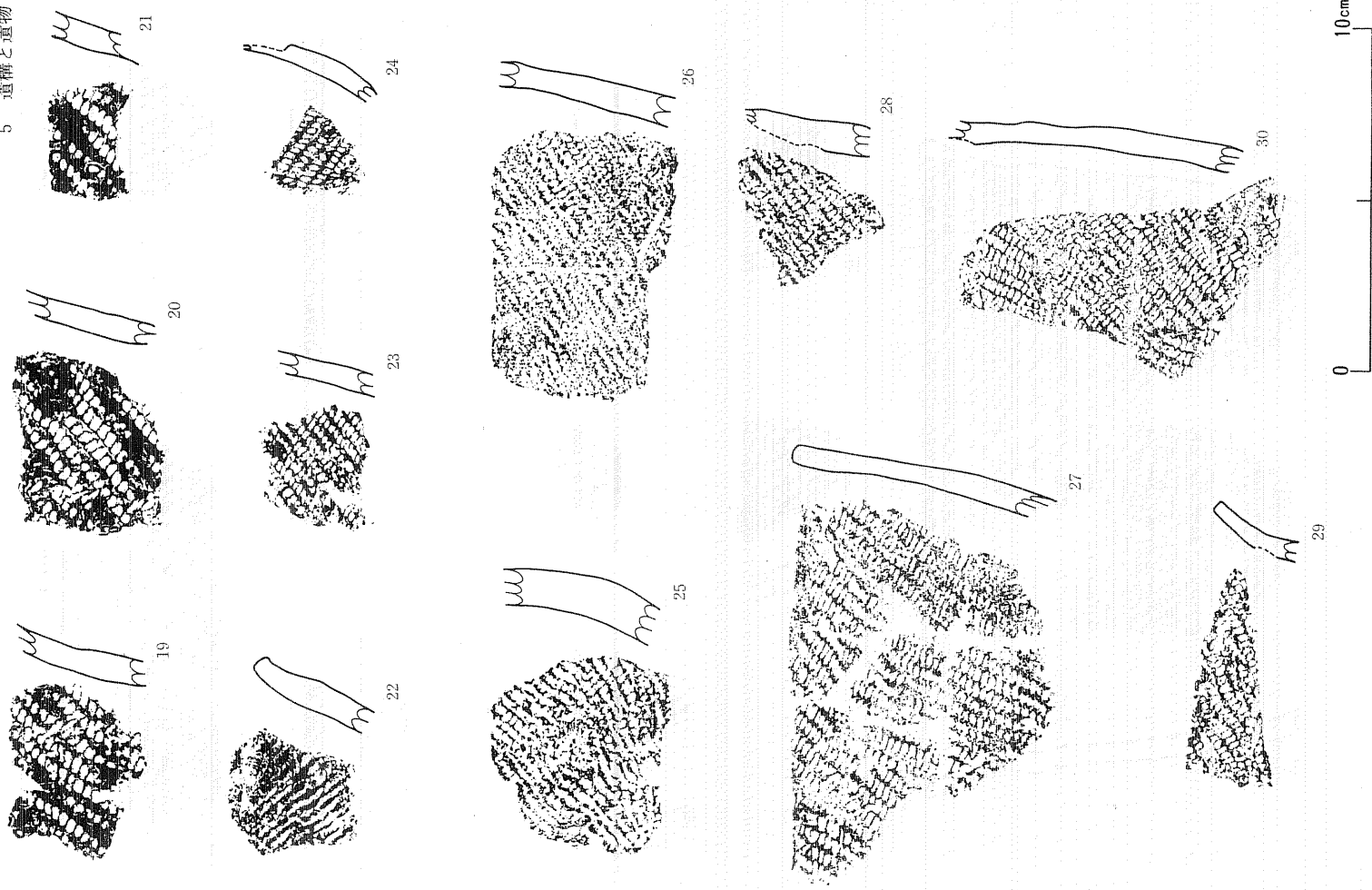


18

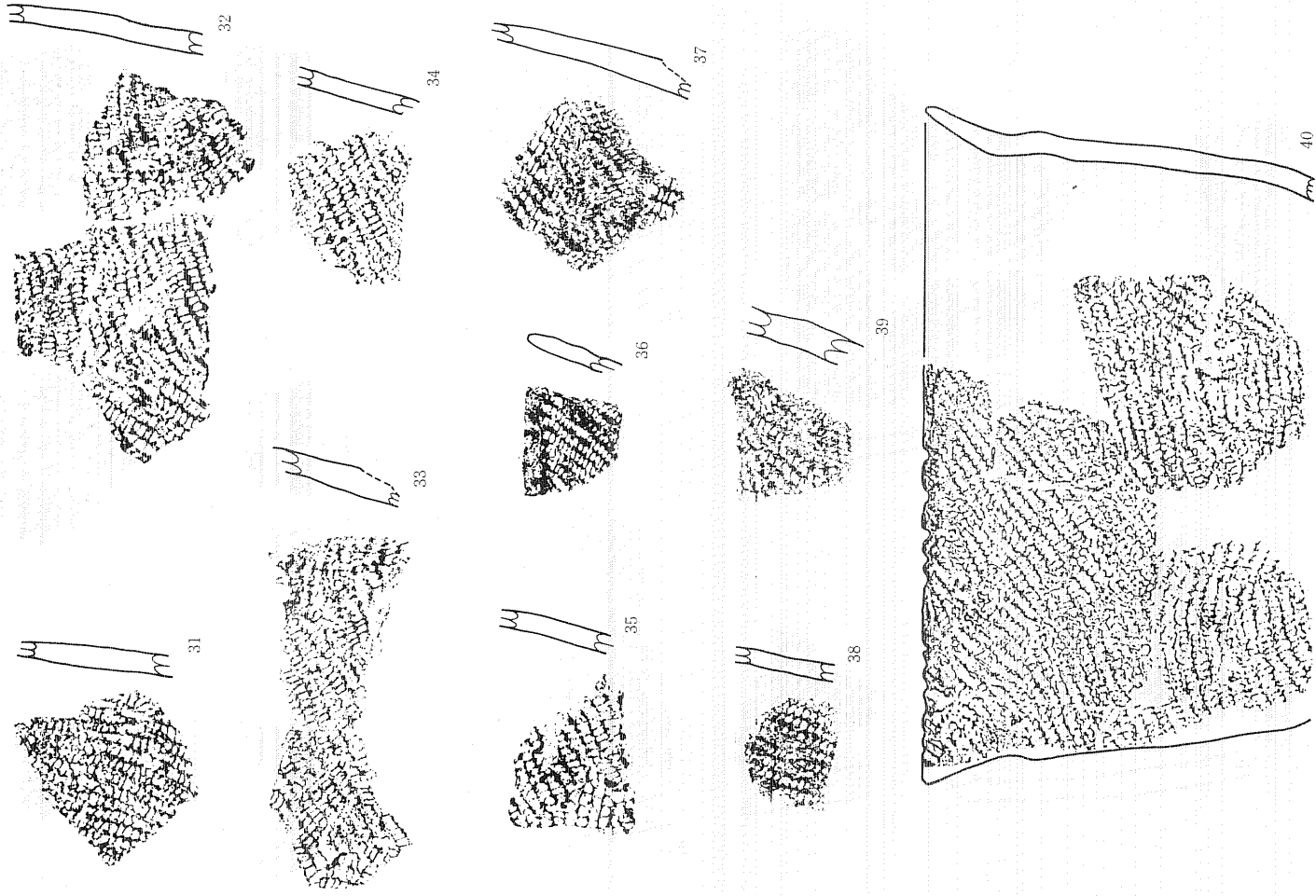


第22図 遺構外出土遺物拓影図(2)

5 遺構と遺物



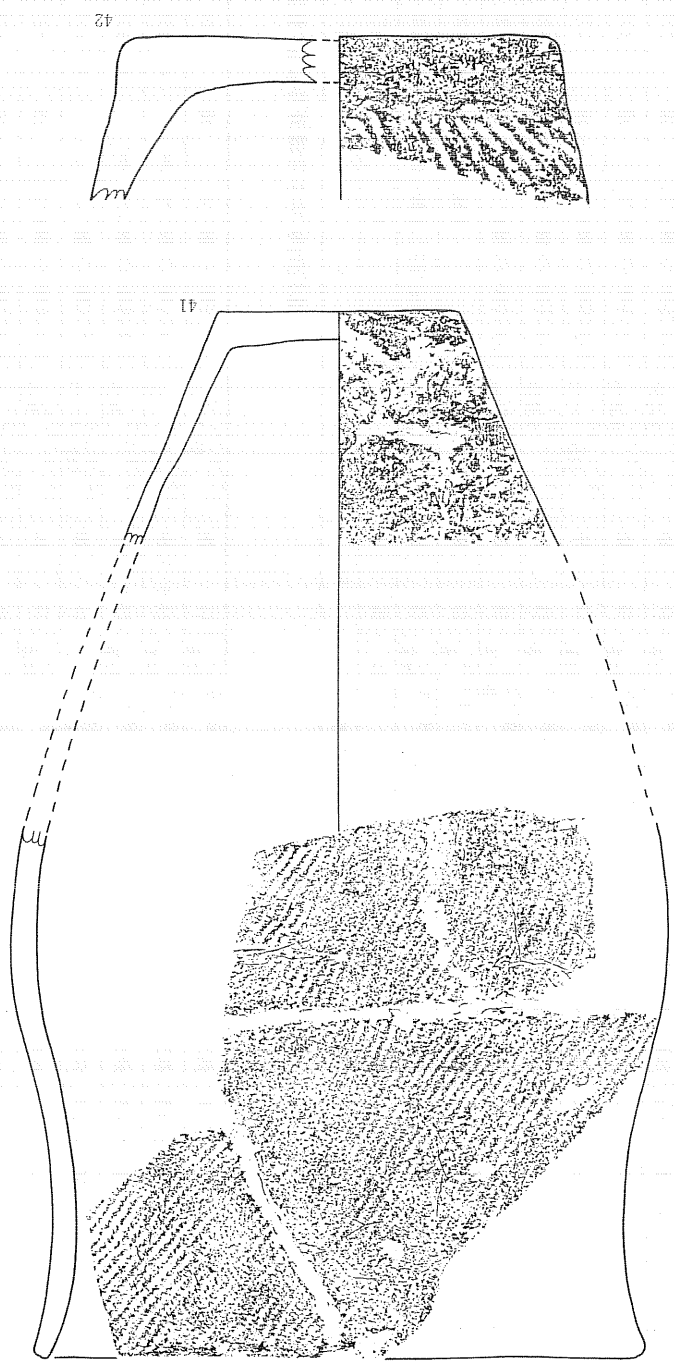
第23図 遺構外出土遺物拓影图 (3)



第24図 遺構外出土遺物拓影図(4)

第25図 遺構外出土遺物拓影図(5)

0 10cm



第33表 S I 025 竪穴住居跡出土遺物観察表

竪穴住居跡

挿 番 号	図 番 号	版 番 号	出 土 地 点	部 位	外 面		内 面		器 厚 (mm)	胎 土	焼 成	備 考
					文 様	色 調	調 整	色 調				
17-1	46-1	S I 025	口唇部~底部		R L 縄文の縦位回転	褐灰 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	斜 位	暗褐 (10Y R $\frac{2}{8}$)	5	長石、石英	普通	
2	2	S I 025	胴		L R 縄文の縦位回転	にぶい赤褐 (5 Y R $\frac{3}{8}$)	斜 位	黒褐 (5 Y R $\frac{3}{4}$)	5	長石、雲母、石英	良好	外面に少量の煤状炭化物付着
3	3	S I 025	胴		L R 縄文の縦位回転	灰褐 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	斜 位	黒褐 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	6	長石、雲母、石英	良好	外面部分的に煤状炭化物付着
4	4	S I 025	口 縁		R L 縄文の縦位回転	にぶい赤褐 (5 Y R $\frac{3}{8}$)	縦 位	にぶい赤褐 (5 Y R $\frac{3}{4}$)	5	長石、石英	良好	少量の煤状炭化物付着
5	5	S I 025	口 縁		R L 縄文の縦位回転	灰褐 (5 Y R $\frac{5}{8}$)	縦位・斜位	黒褐 (5 Y R $\frac{3}{4}$)	6	長石、石英	良好	煤状炭化物付着
6	6	S I 025	口 縁		R L 縄文の縦位回転	にぶい赤褐 (5 Y R $\frac{3}{8}$)	縦位・斜位	灰褐 (5 Y R $\frac{5}{8}$)	6	長石	良好	煤状炭化物付着
7	7	S I 025	胴		R L 縄文の縦位回転	にぶい褐 (7.5Y R $\frac{5}{8}$)	縦 位	黒褐 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	7	長石、石英	良好	煤状炭化物付着

第34表 S I 037-038 竪穴住居跡出土遺物観察表

挿 番 号	図 番 号	版 番 号	出 土 地 点	部 位	外 面		内 面		器 厚 (mm)	胎 土	焼 成	備 考
					文 様	色 調	調 整	色 調				
18-1	47-1	S I 037	胴部~底部		縄文(原体不明)	暗赤褐 (2.5Y R $\frac{3}{8}$)	横 位	赤褐 (2.5Y R $\frac{3}{8}$)	4	長石、石英	普通	外面胴部に煤状炭化物付着
2	2	S I 037	胴部~底部		無文	浅黄橙 (7.5Y R $\frac{3}{8}$)	横 位	黒 (10Y R $1\cdot\frac{1}{4}$)	4	長石、石英	普通	内面に炭化物付着
3	3	S I 037	胴		L R 縄文の縦位回転	にぶい褐 (7.5Y R $\frac{5}{8}$)	縦 位	明赤褐 (5 Y R $\frac{3}{8}$)	7	長石	良好	
4	4	S I 037	胴		R L 縄文の縦位回転	浅黄橙 (10Y R $\frac{3}{8}$)	縦 位	橙 (5 Y R $\frac{3}{8}$)	9	長石、雲母、石英	良好	
5	5	S I 037	胴		L R 縄文の縦位回転	にぶい黄橙 (10Y R $\frac{3}{8}$)	横 位	褐灰 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	7	長石、雲母、石英	良好	内面に少量の煤状炭化物付着
6	6	S I 038	胴		L R 縄文の縦位回転	灰黄褐 (10Y R $\frac{5}{8}$)	横 位	黒褐 (10Y R $\frac{3}{4}$)	7	長石、雲母、石英	良好	内面に煤状炭化物付着
7	7	S I 038	胴		L R 縄文の縦位回転	浅黄橙 (10Y R $\frac{3}{8}$)	横 位	褐灰 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	7	長石、雲母、石英	良好	内面に煤状炭化物付着
8	8	S I 038	胴		L R 縄文の横位回転	灰褐 (7.5Y R $\frac{5}{8}$)	横 位	橙 (5 Y R $\frac{3}{8}$)	11	長石、雲母、石英	良好	
9	9	S I 037	胴		L R 縄文の縦位回転	にぶい橙 (5 Y R $\frac{3}{4}$)	縦 位	にぶい黄橙 (10Y R $\frac{3}{8}$)	胴部8 底部11	長石、雲母、石英	良好	
10	10	S I 038	胴		R L 縄文の斜位回転	にぶい橙 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	横 位	にぶい橙 (5 Y R $\frac{3}{4}$)	11	長石、雲母、石英	良好	外面部分的に煤状炭化物付着
11	11	S I 037	胴		R L 縄文の横位回転	にぶい橙 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	横 位	にぶい橙 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	8	長石、雲母、石英	良好	煤状炭化物付着

第35表 S X(U)039・040 埋設土器観察表

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
				文 様	色 調	調 整	色 調				
19-1	48-1	G-13	胴	L R 縄文横位回転	にぶい褐 (7.5Y R 5/8)	横 位	にぶい褐 (7.5Y R 5/8)	8	砂粒	良好	外面、内面ともにスス付着
2	2	F-14	胴部~底部	L R 縄文横位回転	にぶい橙 (7.5Y R 3/4)		にぶい黄橙 (10Y R 3/4)	9	砂粒	良好	底部内面にスス付着

第36表 S D 013 溝状遺構出土遺物観察表

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
				文 様	色 調	調 整	色 調				
20-1		S D 013	胴	L 捻糸文の縦位回転	にぶい橙 (7.5Y R 3/4)		褐灰 (7.5Y R 5/4)	11	長石、石英	良好	
2		S D 013	胴	R L 縄文	にぶい橙 (5Y R 5/4)	横 位	にぶい橙 (7.5Y R 5/4)	11	長石、雲母、石英	良好	
挿図 番号	図版 番号	出土 地点	種 別	大 き さ (単位 mm)				石 質	備 考		
				長 さ	幅	厚 さ	重 さ (g)				
20-3		S D 013	搔 器	9.8	7.4	2.3	12.0	頁岩			
4		S D 013	搔 器	7.9	4.7	1.0	56.8	頁岩			

第37表 遺構外出土遺物観察表 (1)

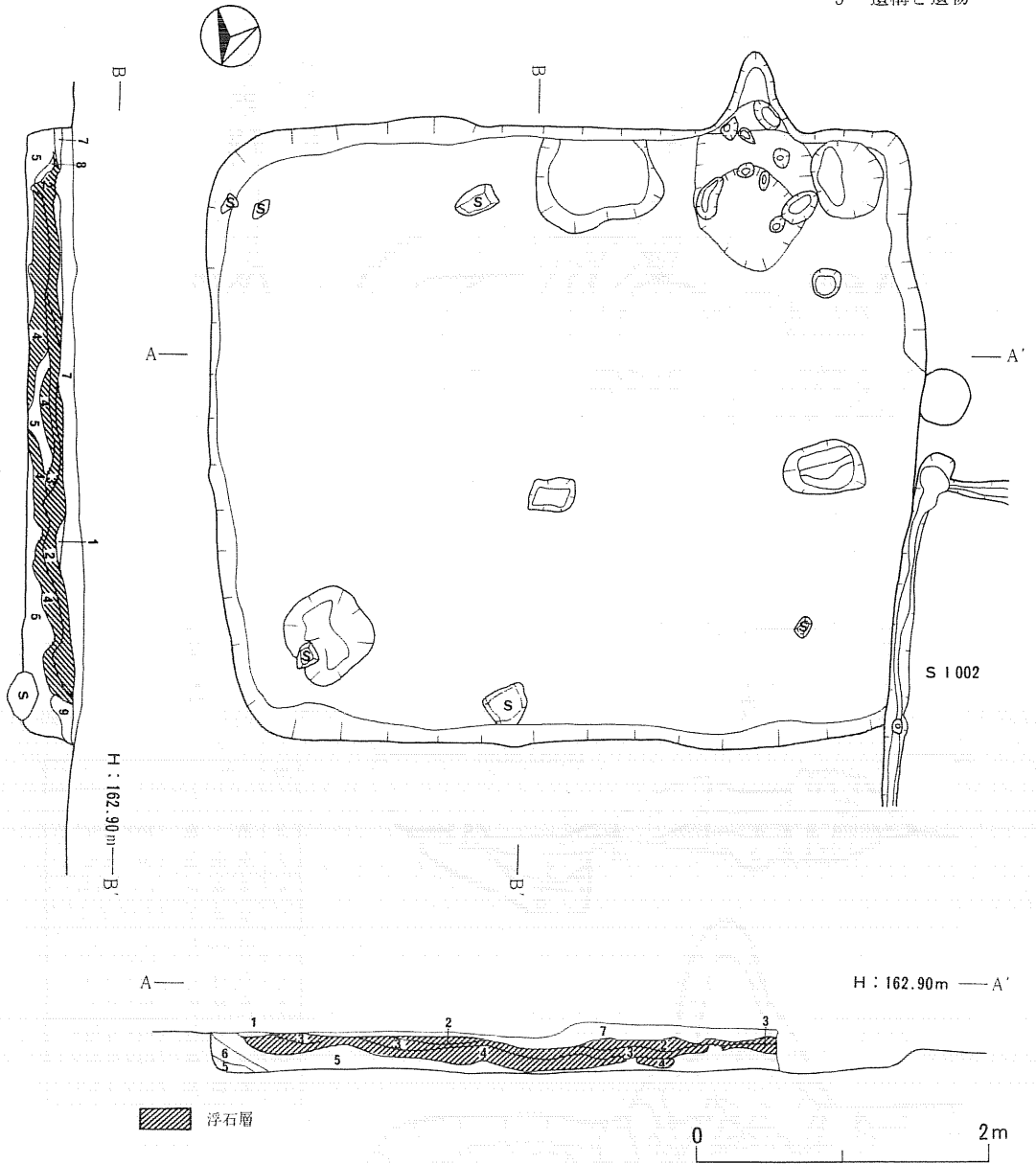
挿 番 号	図 番 号	出 土 地 点	部 位	外 面		内 面		器 厚 (mm)	胎 土	焼 成	備 考
				文 様	色 調	調 整	色 調				
21-1	49-1	13-E	胴		にぶい橙 (7.5Y R $\frac{7}{8}$)		灰黄褐 (10Y R $\frac{5}{8}$)	7	長石、雲母、	良好	
2	2	13-G	胴	粘土紐を貼付後R縄文原体押圧	灰褐 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)	横 位	にぶい橙 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)	9	長石、石英	良好	外面部分的に煤状炭化物付着
3	3	13-G	胴	粘土を貼付後R縄文原体押圧	にぶい褐 (7.5Y R $\frac{5}{8}$)	横 位	にぶい褐 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)	8	長石、石英	良好	
4	4	5-B	胴	RL縄文施文後、沈線で区画し磨消しを施している	にぶい黄橙 (10Y R $\frac{7}{4}$)	横 位	にぶい黄橙 (10Y R $\frac{5}{8}$)	5	長石、雲母、石英	良好	
5	5	5-B	胴	RL縄文施文後、沈線で区画し磨消しを施している	にぶい黄橙 (10Y R $\frac{5}{8}$)	横 位	灰黄褐 (10Y R $\frac{5}{8}$)	5	長石、雲母、石英	良好	
6	6	5-B	胴	RL縄文施文後、沈線で区画し磨消しを施している	にぶい橙 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)	横 位	灰黄褐 (10Y R $\frac{5}{8}$)	5	長石、雲母、石英	良好	
7	7	14-H	口 縁	RL縄文の縦位回転	にぶい橙 (7.5Y R $\frac{7}{8}$)	横 位	橙 (5Y R $\frac{9}{8}$)	9	長石、雲母、石英	不良	
8	8		口 縁	RL縄文の縦位回転	にぶい黄橙 (10Y R $\frac{9}{8}$)	横 位	浅黄橙 (7.5Y R $\frac{9}{8}$)	9	長石、雲母、石英	不良	
9	9	14-H	胴	RL縄文の縦位回転	橙 (7.5Y R $\frac{7}{6}$)		橙 (5Y R $\frac{9}{8}$)	10	長石、雲母、石英	不良	
22-10	50-10	14-H	胴	RL縄文の縦位回転	にぶい橙 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)	横 位	橙 (5Y R $\frac{9}{8}$)	10	長石、雲母、石英	不良	外面まばらに煤状炭化物付着
11	11	14-H	胴	RL縄文の縦位回転	にぶい橙 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)		褐 (7.5Y R $\frac{7}{8}$)	10	長石、雲母、石英	不良	
12	12	14-H	胴	RL縄文の縦位回転	にぶい黄橙 (10Y R $\frac{7}{8}$)		橙 (7.5Y R $\frac{7}{6}$)	9	長石、雲母、石英	不良	
13	13	14-H	口 縁	LR縄文の縦位回転	灰白 (10Y R $\frac{5}{2}$)		浅黄橙 (10Y R $\frac{9}{8}$)	9	長石、雲母、石英	不良	
14	14		胴	LR縄文の縦位回転	にぶい褐 (7.5Y R $\frac{5}{8}$)	縦 位	褐灰 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)	9	長石、雲母、石英	良好	
15	15	9-H	胴	RL縄文の縦位回転	灰褐 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)	縦 位	褐灰 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)	8	長石	良好	内面部分的に煤状炭化物付着
16	16	9-I	胴	LR縄文の縦位回転	灰黄褐 (10Y R $\frac{5}{2}$)	斜 位	褐灰 (10Y R $\frac{7}{4}$)	8	長石、雲母、石英	良好	内面に煤状炭化物付着
17	17	9-I	胴	LR縄文の縦位回転	にぶい黄橙 (10Y R $\frac{7}{2}$)	縦 位	灰黄褐 (10Y R $\frac{5}{2}$)	7	長石、雲母、石英	良好	
18	18		胴	LR縄文の縦位回転	にぶい褐 (7.5Y R $\frac{5}{8}$)	横 位	褐灰 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)	8	長石、雲母、石英	良好	
23-19	51-19	13-I	胴	RL縄文の縦位回転	にぶい橙 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)		灰白 (10Y R $\frac{5}{2}$)	8	長石、雲母、石英	良好	
20	20	14-H	胴	RL縄文の縦位回転	浅黄橙 (10Y R $\frac{9}{8}$)		灰白 (10Y R $\frac{5}{2}$)	7	長石、石英	良好	
21	21		胴	RL縄文の縦位回転	にぶい黄橙 (10Y R $\frac{7}{4}$)		灰白 (10Y R $\frac{7}{4}$)	7	長石、石英	良好	

第38表 遺構外出土遺物観察表 (2)

挿 番 号	図 版 番 号	出 土 地 点	部 位	外 面		内 面		器 厚 (mm)	胎 土	焼 成	備 考
				文 様	色 調	調 整	色 調				
23-22	51-22	14-H	口 縁	L R 縄文の縦位回転	灰黄褐 (10Y R $\frac{5}{2}$)	横 位	にふい赤褐 (5 Y R $\frac{3}{4}$)	9	長石、雲母、石英	良好	
23	23		胴	R L 縄文の縦位回転	にふい橙 (5 Y R $\frac{3}{4}$)	縦 位	灰黄褐 (10Y R $\frac{5}{2}$)	6	長石、石英	良好	
24	24		胴	R L 縄文の縦位回転	灰白 (10Y R $\frac{3}{4}$)	縦 位	褐灰 (10Y R $\frac{3}{4}$)	6	長石、雲母、石英	良好	
25	25	12-T	胴	縄文(原体不明)	にふい黄褐 (10Y R $\frac{3}{8}$)	縦 位	にふい橙 (7.5Y R $\frac{3}{8}$)	11	長石、雲母、石英	良好	外面少量の煤状炭化物付着
26	26	3-B	胴	縄文(原体不明)	にふい褐 (7.5Y R $\frac{3}{8}$)	横 位	にふい橙 (7.5Y R $\frac{3}{8}$)	8	長石、石英	良好	外面まばらに煤状炭化物付着
27	27		口 縁	R L 縄文の縦位回転	にふい橙 (5 Y R $\frac{3}{4}$)	縦 位	にふい橙 (7.5Y R $\frac{3}{8}$)	7	長石、石英	良好	内面に少量の煤状炭化物付着
28	28		胴	縄文(原体不明)	灰褐 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)	横 位	明褐灰 (7.5Y R $\frac{3}{2}$)	9	長石、石英	良好	外面まばらに煤状炭化物付着
29	29	14-H	口 縁	L R 縄文の横位回転	灰褐 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)	横 位	にふい褐 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)	6	長石、雲母、石英	良好	
30	30	14-H	胴	L R 縄文の横位回転	褐灰 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	横 位	にふい褐 (7.5Y R $\frac{3}{8}$)	6	長石、雲母、石英	良好	
24-31	52-31	14-H	胴	L R 縄文の横位回転	褐灰 (7.5Y R)	横 位	にふい褐 (7.5Y R $\frac{3}{8}$)	5	長石、雲母、石英	良好	
32	32	14-H	胴	L R 縄文の横位回転	灰褐 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)	横 位	にふい褐 (7.5Y R $\frac{3}{8}$)	5	長石、雲母、石英	良好	
33	33	14-H	胴	L R 縄文の横位回転	にふい黄橙 (10Y R $\frac{3}{2}$)	横 位	灰褐 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)	7	長石、雲母、石英	良好	
34	34	14-H	胴	L R 縄文の横位回転	灰白 (10Y R $\frac{5}{2}$)	横 位	にふい褐 (7.5Y R $\frac{3}{8}$)	5	長石、雲母、石英	良好	
35	35	14-H	胴	L R 縄文の横位回転	にふい黄橙 (10Y R $\frac{3}{2}$)		明褐灰 (7.5Y R $\frac{3}{2}$)	5	長石、雲母、石英	良好	
36	36	7-B	口 縁	縄文(原体不明)	褐灰 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	横 位	灰褐 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)	5	長石、雲母、石英	良好	煤状炭化物付着
37	37	14-H	胴	L R 縄文の縦位回転	にふい黄橙 (10Y R $\frac{3}{2}$)	斜 位	にふい橙 (7.5Y R $\frac{3}{8}$)	7	長石、雲母、石英	良好	
38	38		胴	L R 縄文の縦位回転	黒褐 (10Y R $\frac{3}{4}$)	縦 位	黒褐 (10Y R $\frac{3}{4}$)	5	長石、雲母	良好	
39	39	14-H	胴	L R 縄文の横位回転	褐灰 (10Y R $\frac{3}{4}$)	斜 位	灰褐 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)	8	長石、雲母、石英	良好	
40	40	14-H	口縁~胴	L R 原体の横位回転	灰黄褐 (10Y R $\frac{3}{2}$)	横 位	にふい褐 (7.5Y R $\frac{3}{8}$)	6	長石、雲母、石英	良好	口唇部に4個を一単位とする刻みがある。
25-41		14-H	口縁~底	縄文(原体不明)	浅黄橙 (10Y R $\frac{3}{4}$)		浅黄橙 (10Y R $\frac{3}{4}$)	6	長石、雲母	普通	
42		12-T	底	縄文(原体不明)	にふい黄橙 (10Y R $\frac{3}{8}$)		にふい黄橙 (10Y R $\frac{3}{4}$)	10.1	長石、石英	良好	

第39表 S I 001 竪穴住居跡

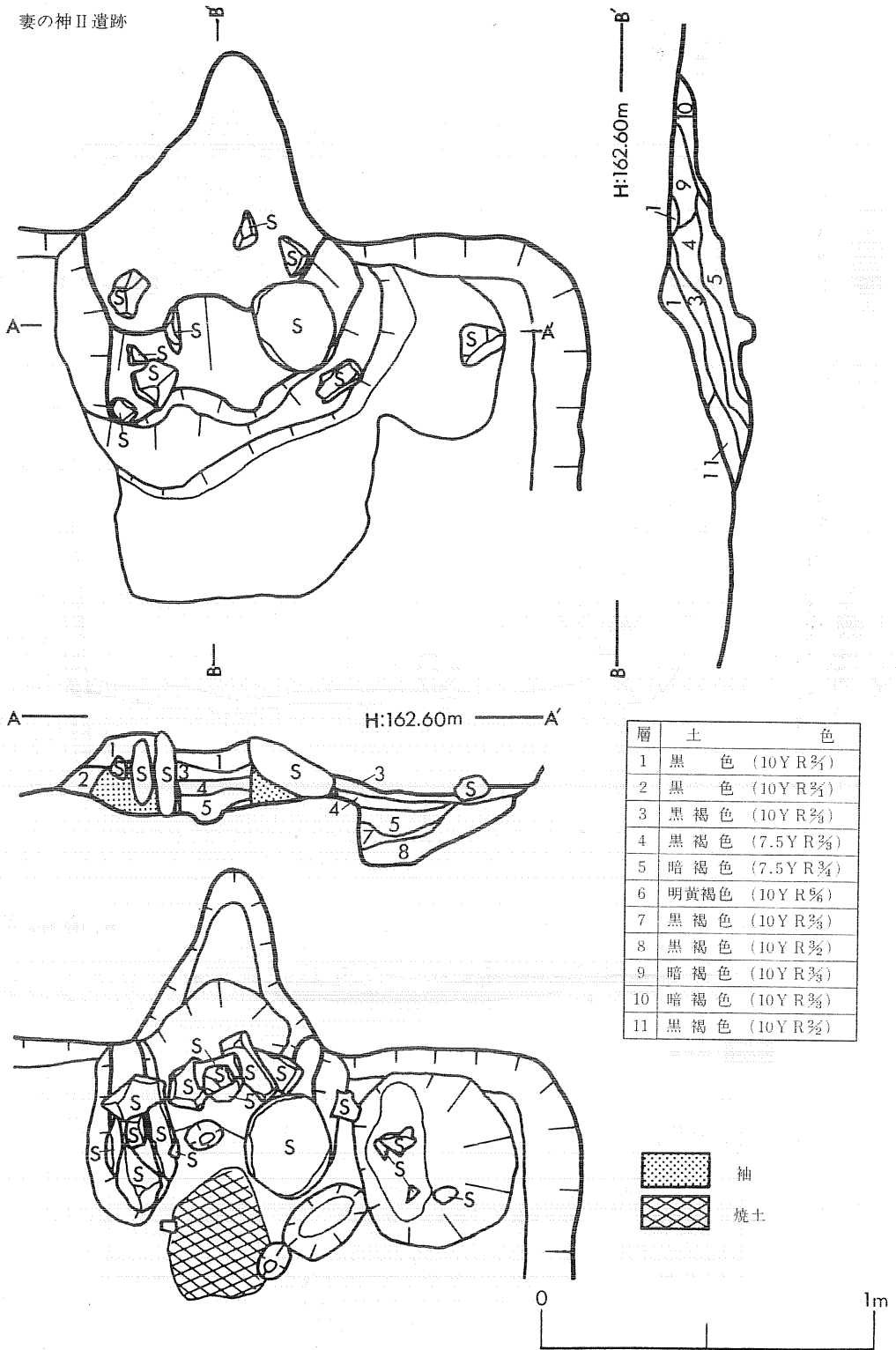
検出地区	9-E、9-F、10-E 10-F		挿図番号	26・27・35		図版番号	30・31・32・ 33・35	
法 量	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁				
	壁長	414cm	230cm	440cm		456cm		
	壁高	24~26cm	7~11cm	6~25cm		16~27cm		
	壁溝幅	_____	_____	_____		_____		
	壁溝深	_____	_____	_____		_____		
形態	方形	面積	19.781m ²		主軸方位	N-21°-W		
プラン確認 時の状態	地山面において黒色土の方形プランを確認。 S I 002と重複関係にありS I 002を切っている。							
壁面の状態	しまりが良くほぼ垂直に立ち上る。							
覆土と床面 の状態	覆土は2~4層が浮石層で20~30cmの厚さに堆積しており、住居中央部においては、床面に接している。浮石は流入したものと考えられ、それを何度も繰り返し返して堆積したものである。 床は貼床され堅固で部分的に小さなくぼみがある他は平坦である。							
ピット 柱 穴	南西壁際にピット1個のみである。							
かまど	位置	南東壁南寄り			構築素材	河原石・粘土		
	袖は芯材の石と共に粘土もかなり良好に残存しているが天井部は崩落している。燃焼部において土器片が検出された。支脚は検出できなかったが支脚を置いたと思われる小ピットが確認された。							
遺物とその 出土状態	床面より11点、カマド内より20点、住居東側のピットより53点と石器1点の計85点出土。							
備考	住居中央部において径70cmほどの範囲で焼土及び炭化物（厚さ1cm内外）を検出。							



層	土色	備考
1	黒褐色 (10Y R $\frac{5}{2}$)	粘性中 浮石少量混入
2	にぶい黄橙色 (10Y R $\frac{7}{4}$)	粘性中 浮石混入
3	灰黄褐色 (10Y R $\frac{5}{2}$)	粘性中 浮石混入
4	にぶい黄橙色 (10Y R $\frac{7}{4}$)	粘性弱 浮石混入
5	黒褐色 (10Y R $\frac{5}{2}$)	粘性中 黄褐色土粒子少量混入 浮石少量混入
6	黒色 (10Y R $^{1,7/4}$)	粘性中 浮石微量混入
7	黒色 (10Y R $\frac{5}{2}$)	粘性中 浮石微量混入
8	黒褐色 (10Y R $\frac{5}{2}$)	粘性中 浮石少量混入
9	暗褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	粘性強

第26図 S1001竪穴住居跡実測図

妻の神II遺跡



第27図 S I 001 竪穴住居跡カマド実測図

第40表 S I 002 竪穴住居跡

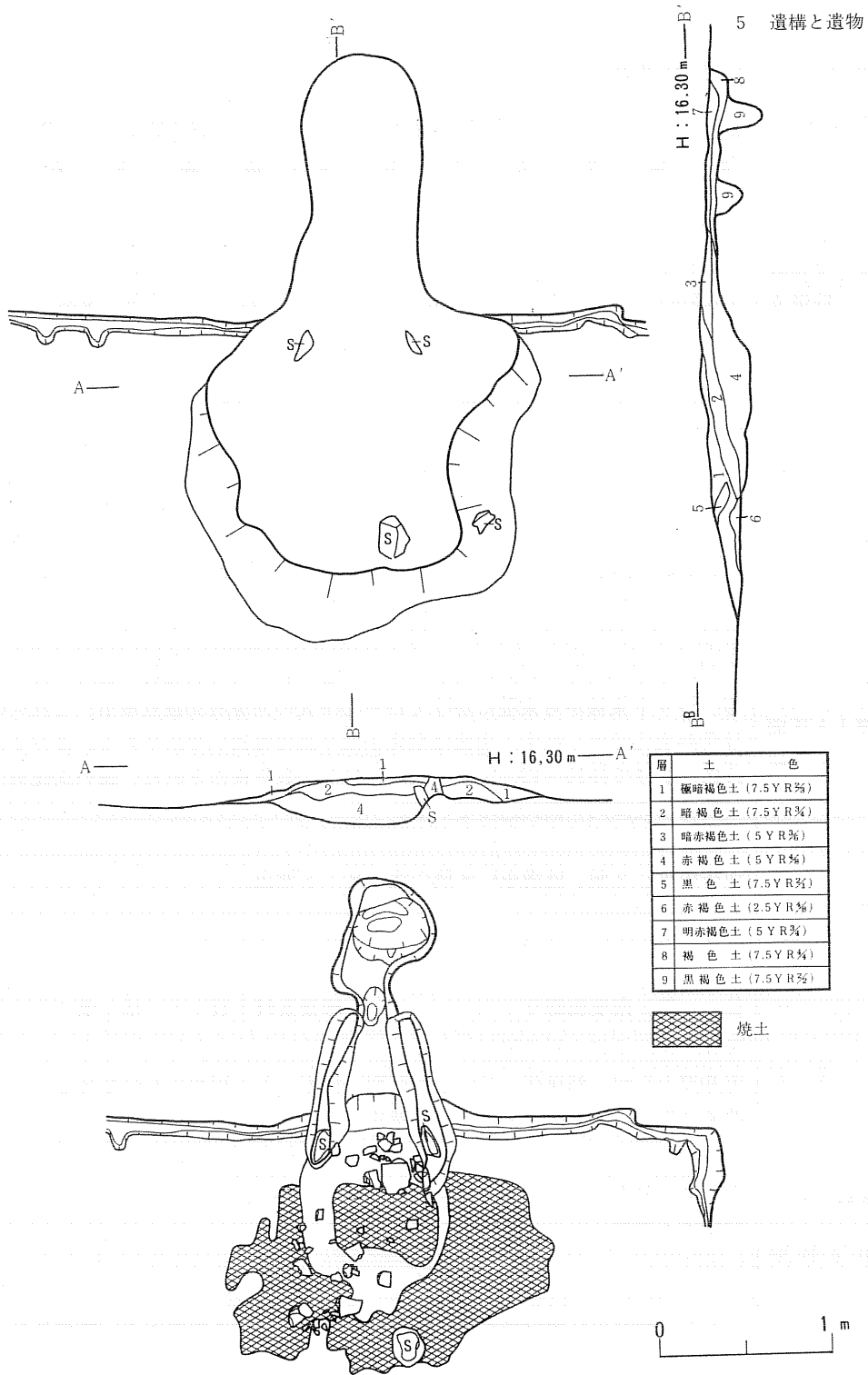
検出地区	9-F、9-G、10-F 10-G		挿図番号	28・29・36	図版番号	34・35・36・54
法 量	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁		
	壁長	612cm	580cm	584cm	614cm	
	壁高	7～36cm	6～30cm	7～16cm	25～40cm	
	壁溝幅	6～15cm	5～15cm	3～37cm	4～20cm	
	壁溝深	4～13cm	5～9cm	2～15cm	3～8cm	
形態	正方形	面積	36.551m ²		主軸方位	N-21°-W
プラン確認 時の状態	地山面において黒色土の方形プランを確認。 S I 001と重複関係にありS I 001に切られている。					
壁面の状態	しまりが良く垂直に近い立ち上がりをする。 壁溝はカマド部分を除いて全周する。					
覆土と床面 の状態	覆土は1・2層において流入したと思われる浮石が認められ、3層以下は炭化物を含む。 炭化物は下層にゆくほどその量を増し、床面では炭化材が検出された。 床面は貼床がされており堅固で平坦である。又多量の炭化物（炭化材を含む）と焼土が広範囲に確認された。					
ピット 柱穴	柱痕は住居4隅の壁溝内にそれぞれ1個、東西の壁にそれぞれ2個の計8個が確認された。					
かまど	位置	南東壁南寄り		構築素材	河原石・粘土	
	遺存状態は不良で煙道の一部を除いて崩落している。煙道は長いがトンネル式ではない。					
遺物とその 出土状態	住居内覆土・床面より土師器30点、カマド内およびその近くから土師器片50点 石器1点の計81点出土。					
備考	覆土・床面の状態から焼失家屋と思われる。 S I 025とも重複関係にありS I 025より新しい。					

妻の神II遺跡

層	土色	備考
1	黒褐色 (10Y R 2/2)	粘性中 黄褐色粒子 浮石少量混入
2	暗褐色 (10Y R 3/3)	粘性中 黄褐色粒子 浮石多量混入
3	黒色 (10Y R 3/1)	粘性中 黄褐色粒子 浮石少量 炭化物微量混入
4	黒色 (10Y R 3/1)	粘性強 明黄褐色粒子、浮石、炭化物微量混入
5	黒色 (10Y R 3/1)	粘性強 黄褐色粒子 浮石混入
6	黒褐色 (10Y R 2/2)	粘性弱 黄褐色粒子 浮石少量 炭化物微量混入
7	黒色 (10Y R 1.5/1)	粘性強 黄褐色粒子 浮石少量混入



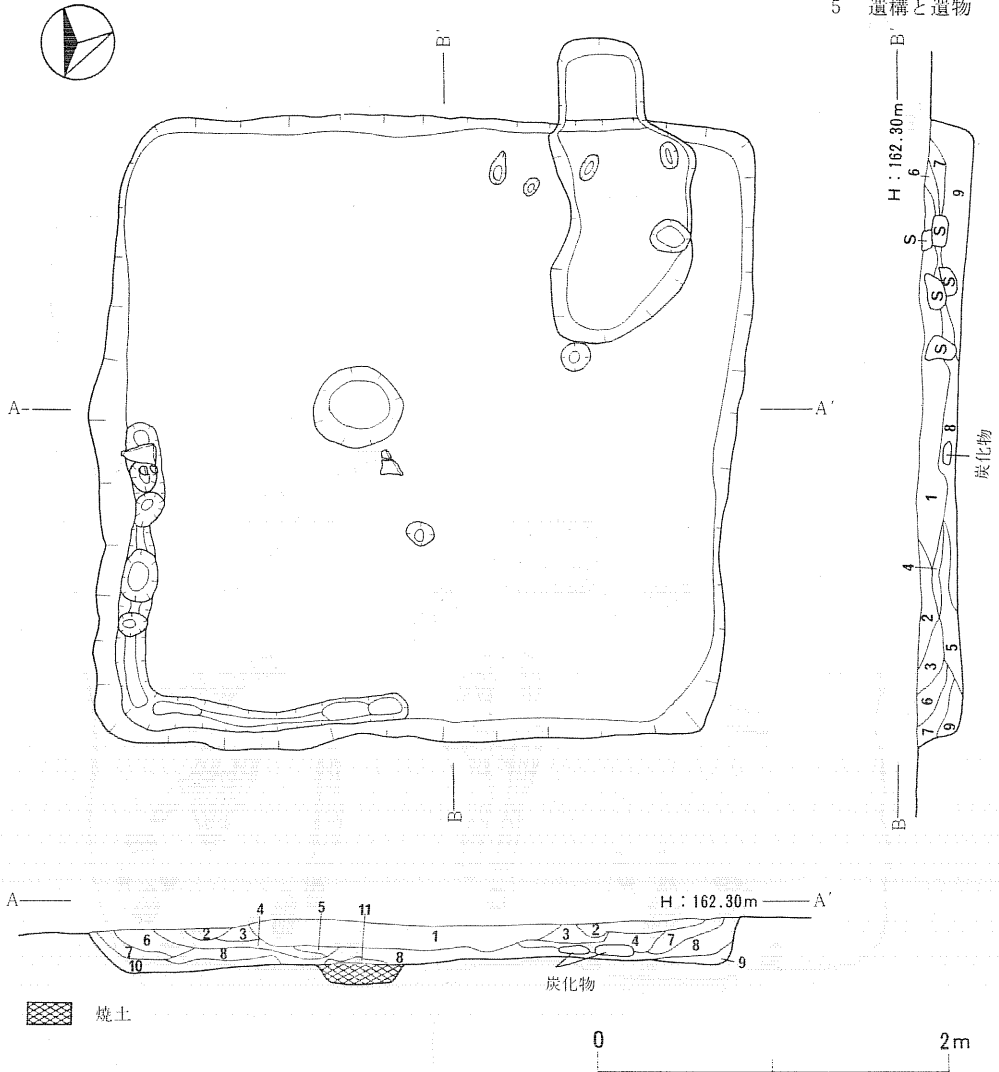
第28図 S I 002 竖穴住居跡実測図



第29図 SI002 竪穴住居跡カマド実測図

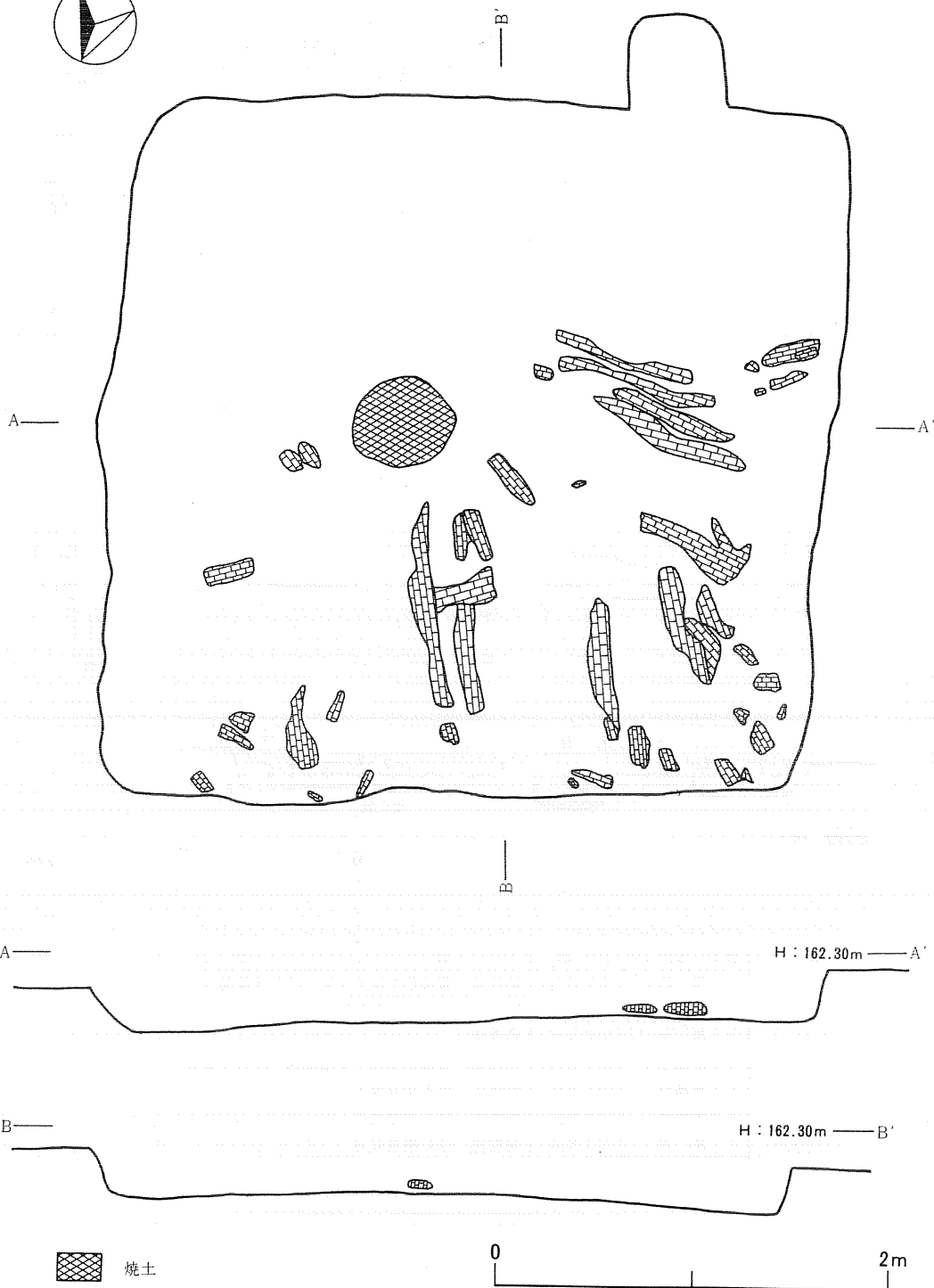
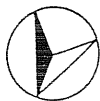
第41表 S I 003 竪穴住居跡

検出地区	3-C、4-C、3-D 4-D		挿図番号	30~32 37, 38		図版番号	37~40・55・56		
法 量	東側壁		西側壁		南側壁		北側壁		
	壁長		353cm		341cm		340cm		
	壁高		15~27cm		19~28cm		8~18cm		
	壁溝幅		9~19cm		————		10~20cm		
壁溝深		1~10cm		————		————		2~8cm	
形態	隅丸方形		面積	12.64m ²		主軸方位	N-21°-W		
プラン確認 時の状態	黒褐色土上面において浮石混じりの方形プランを確認。 確認時点において河原石14個を検出。								
壁面の状態	しまりが良く垂直に近い立ち上がりをする。 壁溝は北東隅から東側及び北側にそれぞれ約1.5m検出されたが他は確認できず。								
覆土と床面 の状態	全層に浮石の混入が認められる。8~11層においては炭化物の混入が認められる。カマド東袖から東壁にかけて15~40cm大の河原石30数点検出。これらの石は受熱変化認められず。床面は全体が貼り床で堅固・平坦である。カマドから北側にかけて径10~15cm位の丸炭化材が10数本検出された。長い炭化材は全て住居中央に向い倒れ込んでいる。								
ピット 柱 穴	住居中央に2個、壁溝中に8個の浅いピット検出。								
かまど	位置	南壁西寄り			構築素材	石・粘土			
	遺存状態は良好で袖芯部と天井部に石を使用している。 天井部の石が一部崩落しているが原形に復原できる程度のものである。 煙道は短く、燃焼部において土師器片が20数点出土。								
遺物とその 出土状態	遺物は72点出土している。 内訳は土師器片69点、鉄製品3点である。								
備考	カマドの袖石下に薄い浮石堆積層が認められ、カマドがその上に構築されていることからカマド構築時期は火山灰降下後と思われる。その後火災により焼失し周囲の浮石が他の土と混合して流れ込んだものと思われる。								

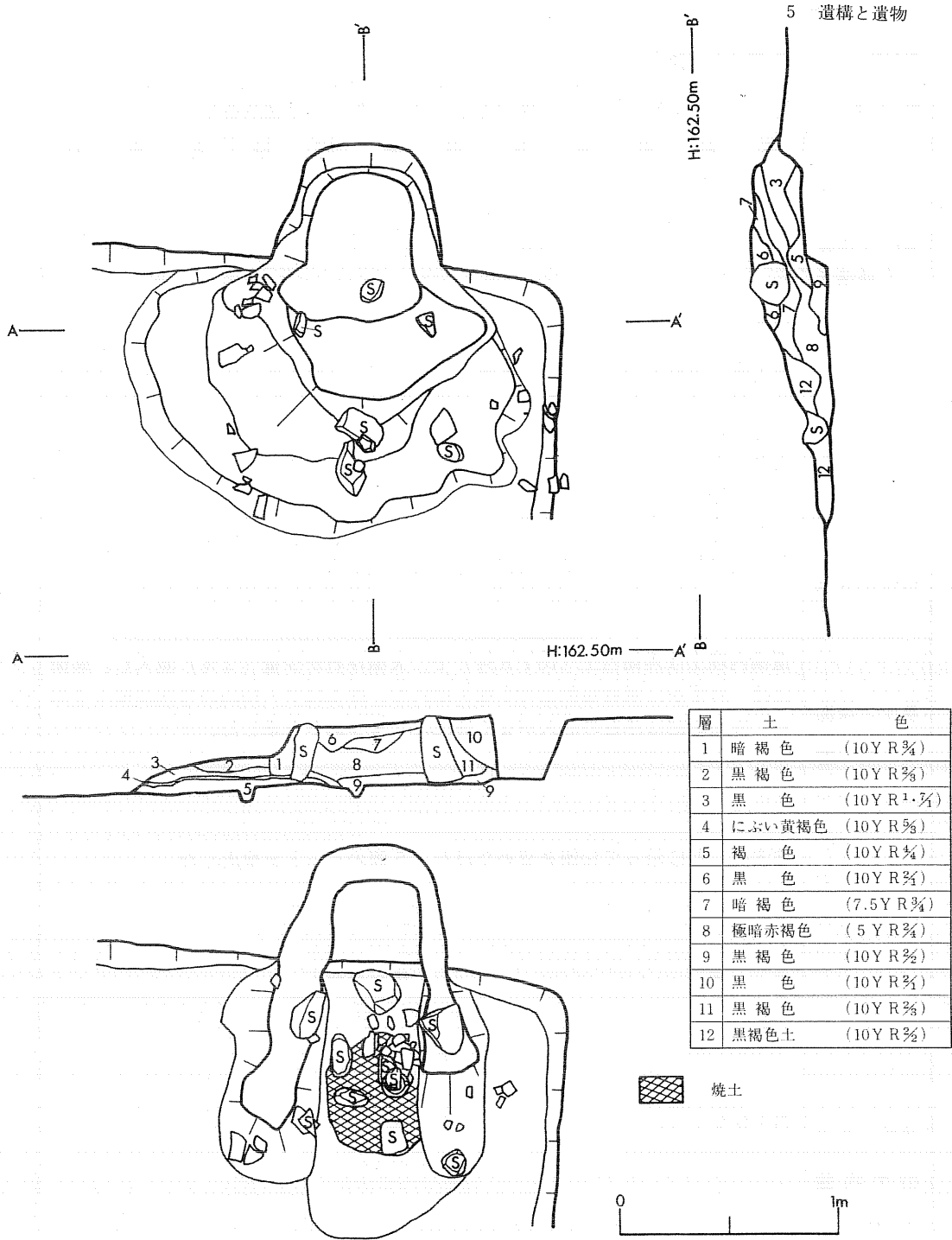


層	土色	備考
1	黒色 (10Y R 2/1)	粘性強 黄褐色土粒子少量 浮石多量混入
2	黒色 (10Y R 2/1)	粘性強 浮石小砂礫多量混入
3	黒色 (10Y R 2/1)	粘性強
4	黒褐色 (10Y R 2/1)	粘性強 黄褐色土粒子少量混入 浮石少量混入
5	黒褐色 (10Y R 2/1)	粘性中 浮石少量混入
6	黒褐色 (10Y R 2/1)	粘性中 浮石少量混入
7	黒色 (10Y R 2/1)	粘性強 浮石微量混入
8	黒褐色 (10Y R 2/1)	粘性強 浮石少量混入 炭化物少量混入
9	黒褐色 (10Y R 2/1)	粘性強 浮石少量混入 炭化物少量混入
10	暗褐色 (10Y R 2/1)	粘性強 浮石少量混入 炭化物少量混入
11	褐色 (2.5Y R 2/1)	粘性強 浮石少量混入 炭化物少量混入

第30図 S I 003 竪穴住居跡実測図



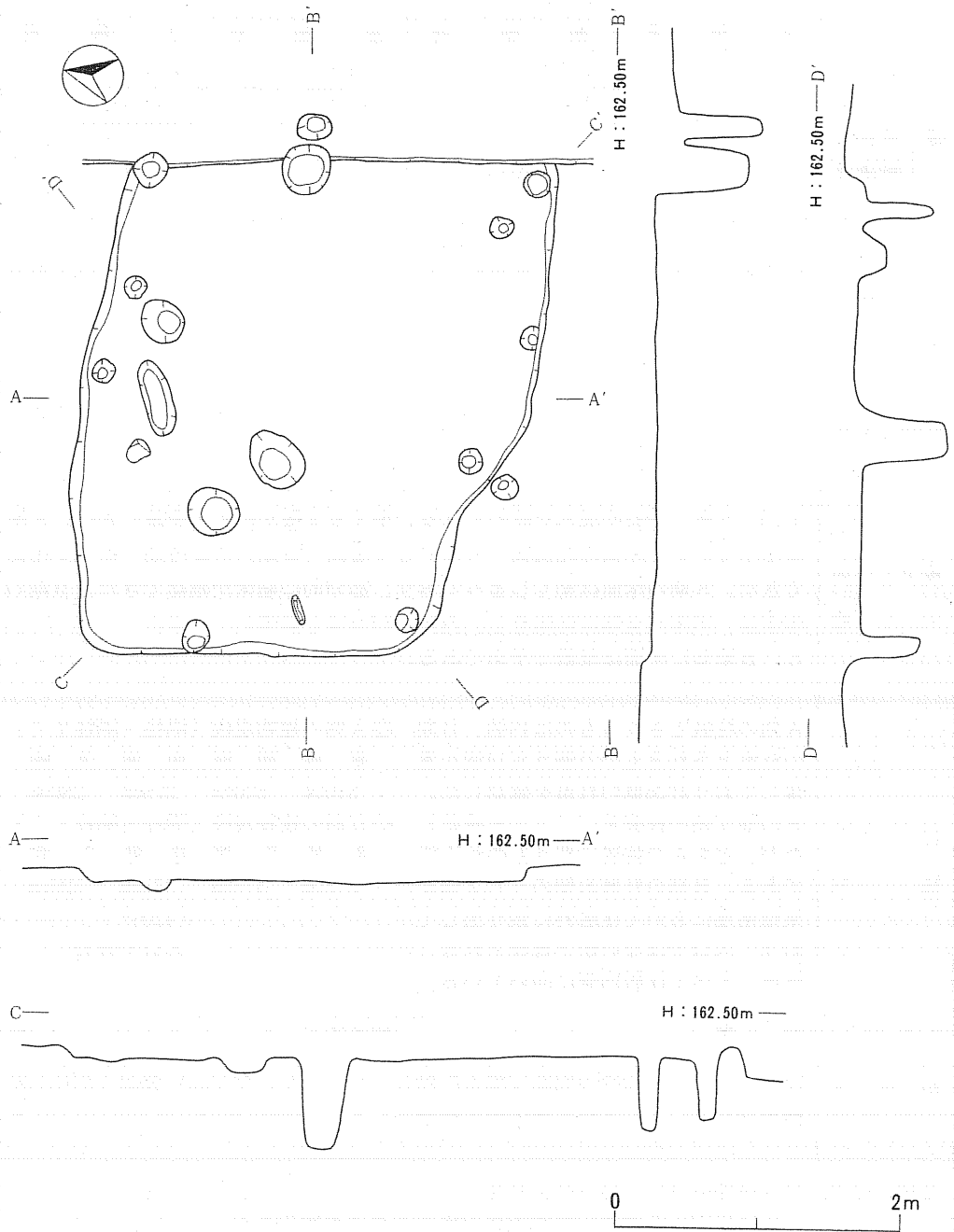
第31図 S1003竪穴住居跡炭化物出土状況図



第32図 S I 003竪穴住居跡カマド実測図

第42表 S1007 竪穴住居跡

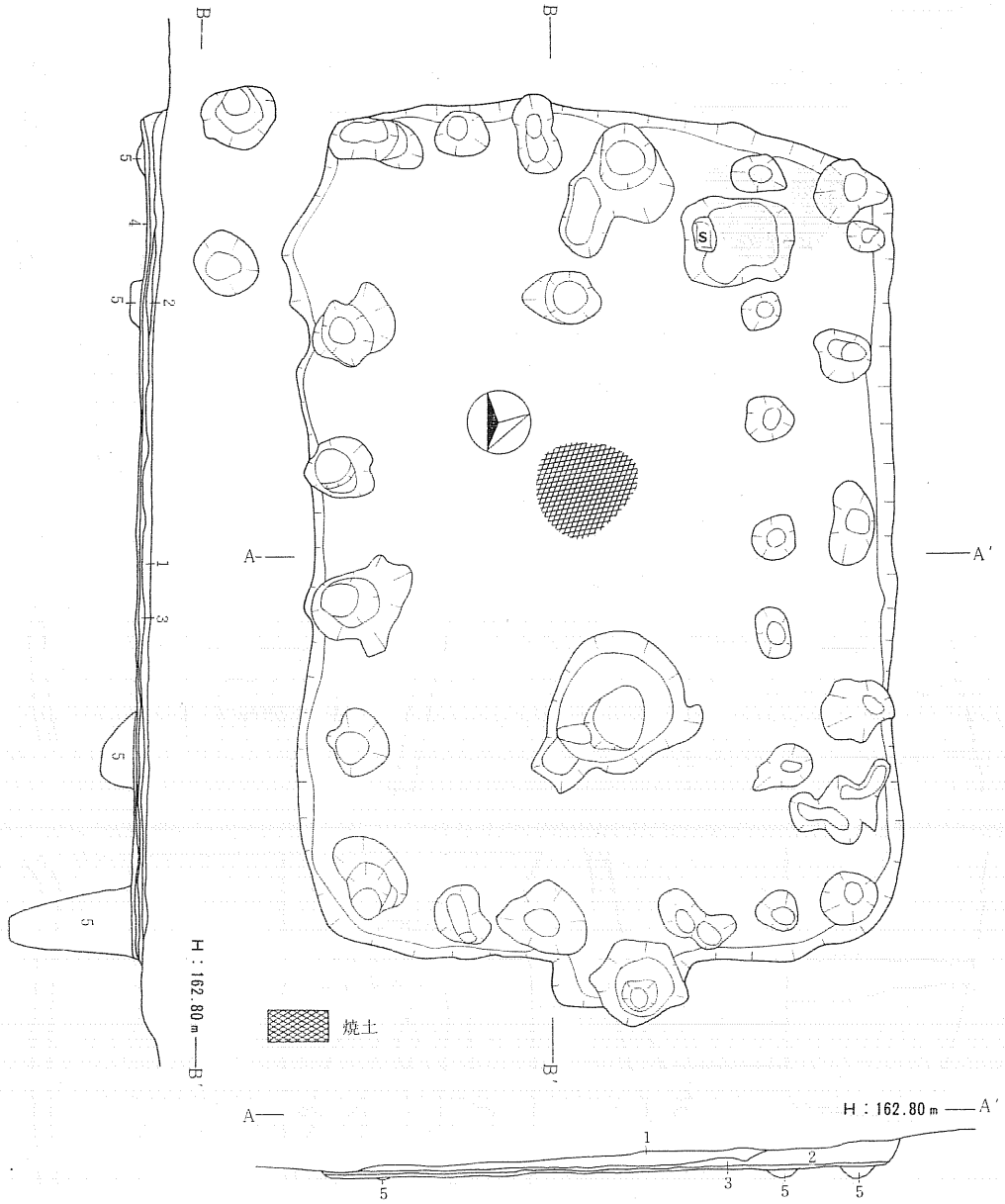
検出地区	8—B		挿図番号	33		図版番号	43	
法 量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁			
	壁長	——	250cm	345cm		345cm		
	壁高	——	7.6~8.1cm	7.8~13.2cm		9.6~14.0cm		
	壁溝幅	——	——	——		——		
	壁溝深	——	——	——		——		
形態	隅丸方形		面積	——		主軸方位	——	
プラン確認時の状態	<p>第1層（黒色土10Y R¹・7/）を除去したところ、第2層（黒色土）中に浮石を混入する範囲を遺構と判断した。規模は長軸約4.00×短軸3.00mの隅丸長方形である。ただし東側壁は範囲確認調査のトレンチ調査で破壊されたため、長軸規模は推定概数である。</p>							
壁面の状態	<p>黒色土で軟らかいが、ほぼ垂直に近く立ち上がる。</p>							
覆土と床面の状態	<p>遺構内埋土は黒褐色土（10Y R²/）で、大湯浮石が少量（2%）混入し、底面には、わずかに明黄褐色土の小塊を認めた。埋土は7~10cmの自然堆積土である。底面確認は浮石の混入がなく埋土より多少固さを感じた。</p>							
ピット・柱穴	<p>柱穴は、壁に沿って10個を認めたほか、5個のピットを検出した。</p>							
かまど	位置	——			構築素材	——		
	なし							
遺物とその出土状態	<p>出土なし</p>							
備考	<p>本遺構は黒色土中であったことや、生活遺構面の痕跡に乏しいことも重なって正確に把握できなかった。埋土に大湯浮石が混入し鉄製品が出土していることから考えて、平安時代末以降の遺構と位置づけておく。</p>							



第33図 S1007竪穴住居跡実測図

第43表 S I 006 竪穴住居跡

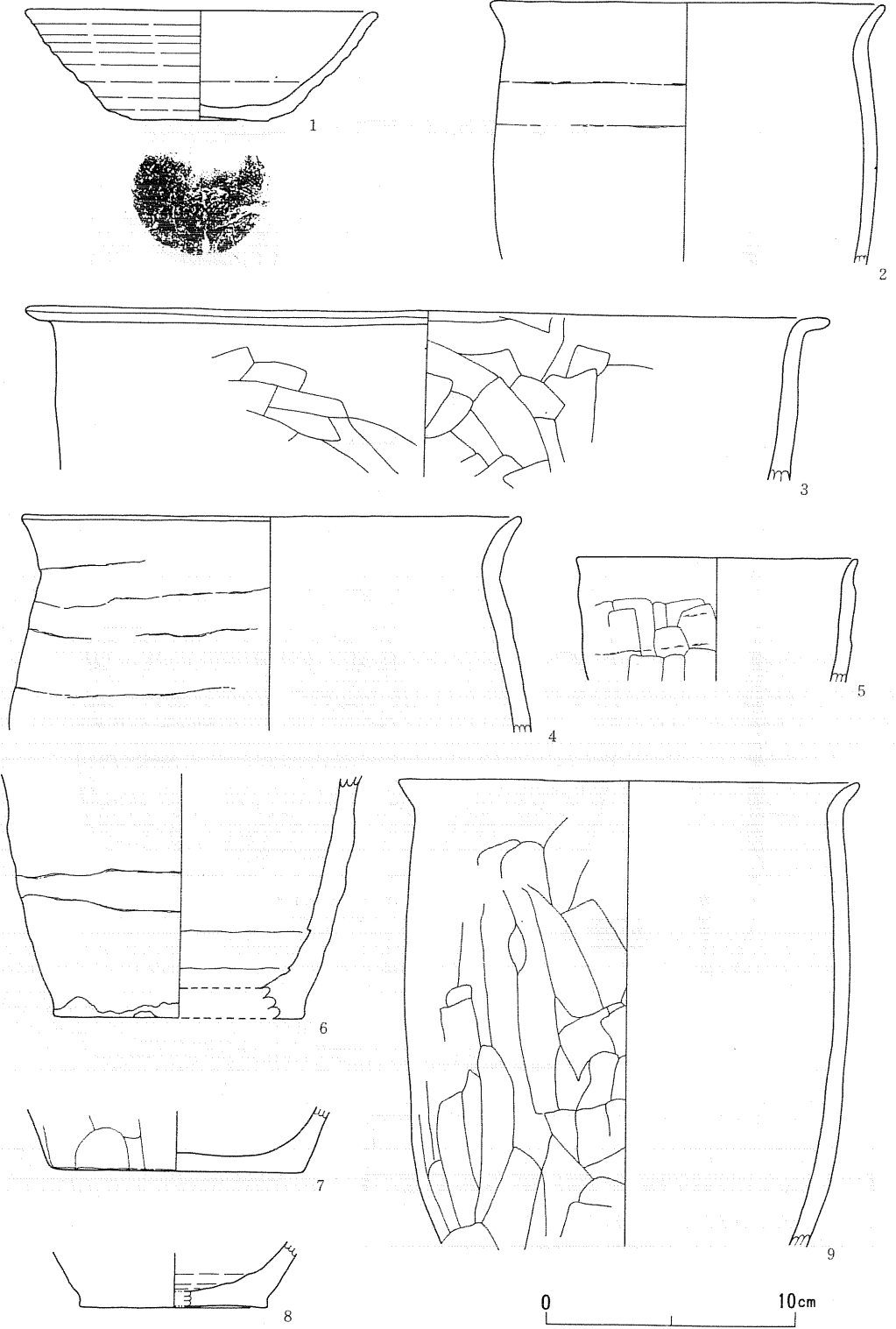
検出地区	11-B、11-C、12-B 12-C		挿図番号	34	図版番号	41・42
法 量	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁		
	壁長	589cm	540cm	390cm	400cm	
	壁高	1～7cm	14～20cm	3～22cm	8～20cm	
	壁溝幅	——	——	——	——	
	壁溝深	——	——	——	——	
形態	長方形	面積	21.612m ²	主軸方位	N-21°-W	
プラン確認時の状態	地山面において黒色土に、明黄褐色土と浮石がブロック状に混入している長方形プランを確認。					
壁面の状態	しまり良く、ほぼ垂直に立ち上がるが、東壁、北壁が削平をうけ、ゆるい傾斜の立ち上がりをする。					
覆土と床面の状態	1、2、3層に浮石の混入が認められる。中でも2層が浮石を多量に含む。4層は貼床である。床面は地山面（A期）と4層面（B期）の2時期の重複が確認できた。A期の床面は堅くしまっており、部分的に貼床が確認できた。B期の床面は、旧床面全体に貼床をし、西側に50cmほど拡張している。 A、B期共に床面は堅固で平坦である。					
ピット 柱穴	A期の柱痕とされるものは19個、B期の柱痕とされるもの21個うち14個が重複しており計26個の柱痕を確認した。その他4個の柱痕及びピットを確認したが、どちらの住居に伴うものか不明である。B期の柱痕21個のうち2個が東壁南端において住居外に張り出しており、入口ではないかと推察される。柱痕はすべて住居内側に向いている。 ◎A期の建物規模（隅柱～隅柱まで） 東側、西側、南側、北側 510cm 500cm 275cm 280cm ◎B期の建物規模（隅柱～隅柱まで） 東側、西側、南側、北側 515cm 475cm 335cm 325cm (420) 入口を含む					
かまど	位置	——	構築素材	——		
	住居中央に65×70cmの範囲で焼土が確認されており、やや広い範囲で炭化物が検出されていることから地床炉と推察される。					
遺物とその出土状態	出土遺物は古銭3点のみである。 1点は中国明朝時代の洪武通寶で他の2点は不明である。					
備考	2棟の重複で西側に拡張したものと推察される。					



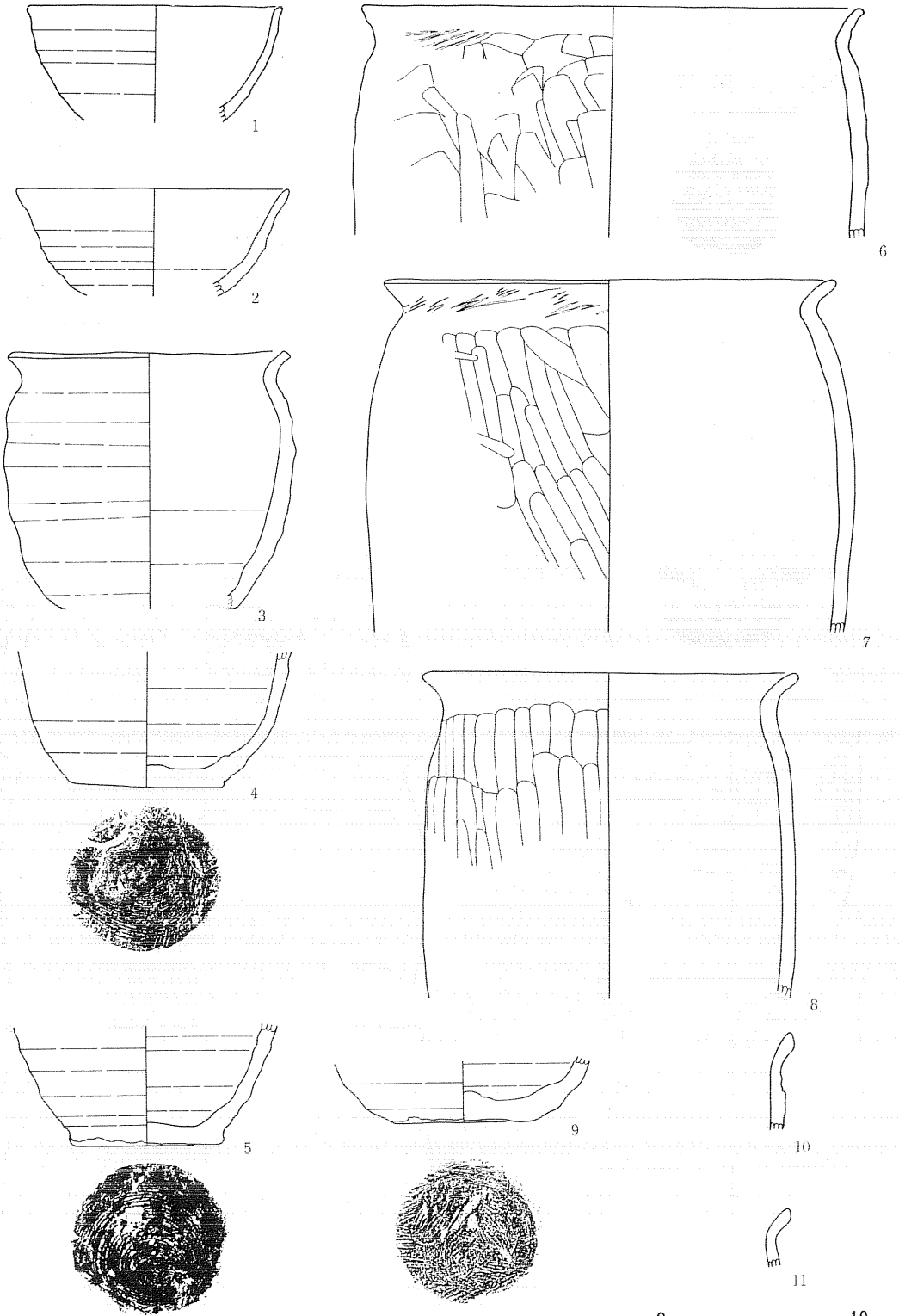
層	土色	備考
1	黒色土 (10Y R ₂)	粘性中、浮石少量混入
2	黒褐色土 (10Y R ₃)	粘性弱、砂礫少量混入、浮石少量混入
3	明黄褐色土 (10Y R ₄)	粘性中、黒褐色土粒子少量混入
4	浅黄橙色土 (10Y R ₅)	粘性中、浮石多量混入、黒褐色土少量混入
5	黒褐色土 (10Y R ₆)	粘性弱

第34図 S1006竪穴住居跡実測図

妻の神Ⅱ遺跡

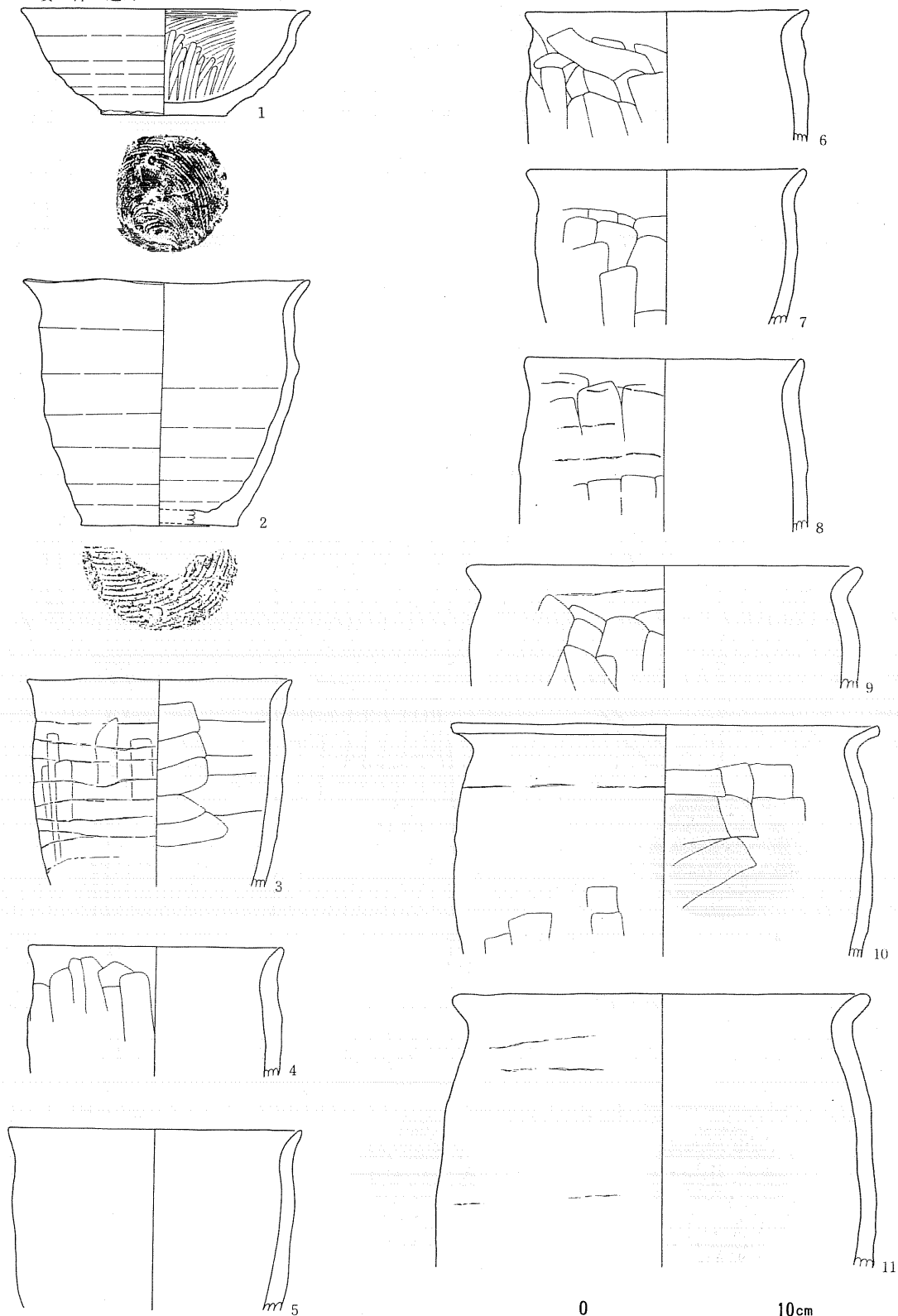


第35図 S I 001 竪穴住居跡出土遺物実測図

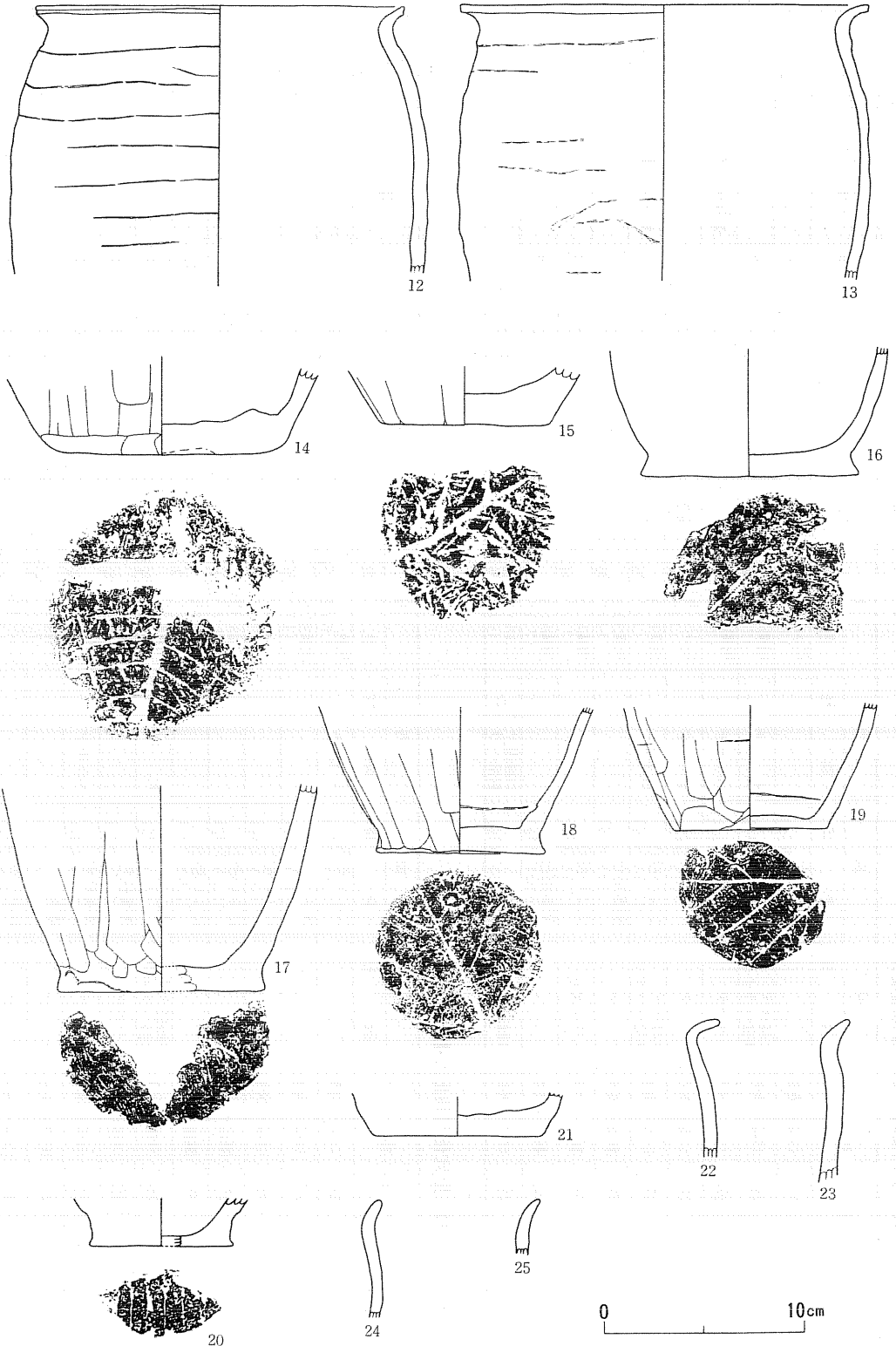


第36図 S I 002 竪穴住居跡出土遺物実測図

妻の神口遺跡



第37図 S1003竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第38図 S1003 竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

第44表 S I 001 竪穴住居跡出土遺物観察表

挿 番 号	図 版 番 号	器 形	部 位	外 面		内 面		成 形	胎 土	焼 成	備 考		
				調 整	色 調	調 整	色 調						
35-1	53-1	杯	口縁～底部		明褐色 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)		にぶい橙色 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)	ロクロ	砂	粒	良	好	
2	2	甕	口縁～胴部	口縁ナデ 胴部ヘラナデ	褐色 (7.5Y R $\frac{4}{1}$)	ナ デ	明褐色 (7.5Y R $\frac{7}{2}$)	巻きあげ	砂	粒	良	好	
3	3	甕	口縁～胴部	ヘラナデ	灰褐色 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)	ヘラナデ	灰褐色 (7.5Y R $\frac{5}{2}$)		砂	粒	良	好	煤状炭化物付着
4	4	甕	口縁～胴部	ナ デ	にぶい黄褐色 (10Y R $\frac{9}{2}$)	ナ デ	にぶい黄褐色 (10Y R $\frac{9}{2}$)	巻きあげ	砂	粒	良	好	
5	5	甕	口縁～胴部	口縁ナデ 胴部ヘラナデ	にぶい橙色 (7.5Y R $\frac{7}{2}$)	口縁部ナデ	浅黄褐色 (10Y R $\frac{8}{2}$)	巻きあげ	砂	粒	良	好	煤状炭化物付着
6	6	甕	胴部～底部	ナ デ	灰黄褐色 (10Y R $\frac{5}{2}$)		灰黄褐色 (10Y R $\frac{5}{2}$)		砂	粒	良	好	
7	7	甕	胴部～底部	ヘラケズリ	にぶい橙色 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)		明褐色 (7.5Y R $\frac{7}{1}$)		砂	粒	良	好	
8	8	甕	胴部～底部		灰黄褐色 (10Y R $\frac{4}{2}$)		明褐色 (7.5Y R $\frac{7}{2}$)	ロクロ	砂	粒	良	好	
9	9	甕	口縁～胴部	口縁部ナデ	灰白 (7.5Y R $\frac{9}{2}$)	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	にぶい黄褐色 (10Y R $\frac{7}{2}$)		砂	粒	良	好	

第45表 S I 002 竪穴住居跡出土遺物観察表

挿 番 号	図 版 番 号	器 形	部 位	外 面		内 面		成 形	胎 土	焼 成	備 考		
				調 整	色 調	調 整	色 調						
36-1	54-1	杯	口縁～胴部		にぶい橙色 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)	ミガキ	黒色 (7.5Y R $1\frac{1}{4}$)	ロクロ	砂	粒	良	好	内 黒
2	2	杯	口縁～胴部		灰白色 (10Y R $\frac{8}{1}$)		浅黄褐色 (10Y R $\frac{8}{2}$)	ロクロ	砂	粒	良	好	
3	3	甕	口縁～胴部		にぶい橙色 (5Y R $\frac{7}{2}$)		にぶい橙色 (5Y R $\frac{7}{2}$)	ロクロ	砂	粒	良	好	
4	4	甕	胴部～底部		にぶい橙色 (7.5Y R $\frac{8}{4}$)		にぶい橙色 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)	ロクロ	砂	粒	良	好	
5	5	甕	胴部～底部		にぶい橙色 (7.5Y R $\frac{9}{2}$)		明褐色 (7.5Y R $\frac{7}{1}$)	ロクロ	砂	粒	良	好	
6	6	甕	口縁～胴部	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	灰白色 (10Y R $\frac{9}{2}$)	ナ デ	浅黄褐色 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)		砂	粒	良	好	
7	7	甕	口縁～胴部	ヘラナデ	浅黄褐色 (7.5Y R $\frac{8}{4}$)		浅黄褐色 (7.5Y R $\frac{8}{4}$)		砂	粒	良	好	
8	8	甕	口縁～胴部	ナ デ	浅黄褐色 (7.5Y R $\frac{8}{2}$)	ヘラナデ	浅黄褐色 (7.5Y R $\frac{7}{4}$)		砂	粒	良	好	
9	9	甕	胴部～底部	ナ デ	橙色 (5Y R $\frac{7}{2}$)		浅褐色 (7.5Y R $\frac{9}{2}$)	ロクロ	砂	粒	良	好	
10	10	甕	口縁～胴部	ナ デ	にぶい橙色 (5Y R $\frac{7}{2}$)		にぶい橙色 (5Y R $\frac{7}{2}$)	ロクロ	砂	粒	良	好	
11	11	甕	口縁～胴部	ナ デ	にぶい橙色 (5Y R $\frac{7}{4}$)		にぶい橙色 (5Y R $\frac{7}{4}$)	ロクロ	砂	粒	良	好	

第46表 S I 003 竪穴住居跡出土遺物観察表 (1)

挿 番 号	図 版 番 号	器 形	部 位	外 面		内 面		成 形	胎 土	焼 成	備 考
				調 整	色 調	調 整	色 調				
37-1	55-1	杯	ほぼ完形	ヘラナデ	黒色 (7.5YR1.7/1)	ミガキ	橙色 (7.5YR7/6)	ロクロ	砂粒	良好	内黒
2	2	甕	口縁~底部		にぶい橙色 (7.5YR7/4)		にぶい橙 (5YR9/4)	ロクロ	砂粒	良好	
3	3	甕	口縁~胴部	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	にぶい橙色 (5YR9/4)	ナデ	灰褐色 (5YR9/2)	巻きあげ	砂粒	良好	
4	4	甕	口縁~胴部	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	にぶい橙色 (5YR9/4)	ナデ	橙色 (5YR7/6)		砂粒	良好	煤状炭化物付着
5	5	甕	口縁~胴部	ナデ	橙色 (5YR9/6)	ナデ	橙色 (5YR9/6)		砂粒	良好	
6	6	甕	口縁~胴部	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	にぶい赤褐色 (5YR9/2)		橙色 (5YR9/6)		砂粒	良好	煤状炭化物付着
7	7	甕	口縁~胴部	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ハケメ	にぶい褐色 (7.5YR9/4)		砂粒	良好	煤状炭化物付着
8	8	甕	口縁~胴部	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	明赤褐色 (5YR9/6)	ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	巻きあげ	砂粒	良好	
9	9	甕	口縁~胴部	胴部ヘラナデ	灰白色 (7.5YR9/2)	ヘラナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	巻きあげ	砂粒	良好	
10	10	甕	口縁~胴部	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	橙色 (5YR7/6)	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	橙色 (5YR7/6)	巻きあげ	砂粒	良好	
11	11	甕	口縁~胴部	ナデ	橙色 (5YR7/6)	ナデ	明赤褐色 (2.5YR9/6)	巻きあげ	砂粒	良好	
38-12	56-12	甕	口縁~胴部	ナデ	にぶい橙色 (5YR7/4)	ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	巻きあげ	砂粒	良好	
13	13	甕	口縁~胴部	ナデ	橙色 (7.5YR7/6)		にぶい黄褐色 (10YR7/4)		砂粒	良好	煤状炭化物付着
14	14	甕	底部~胴部	ヘラケズリ	にぶい橙色 (5YR9/4)	胴部ヘラナデ 底部ナデ	橙色 (5YR9/6)	巻きあげ	砂粒	良好	木葉痕
15	15	甕	底部~胴部	ヘラケズリ	にぶい褐色 (7.5YR9/4)	ヘラナデ	褐灰色 (10YR9/4)		砂粒	良好	木葉痕
16	16	甕	底部~胴部	ヘラナデ	橙色 (2.5YR9/6)	ヘラナデ	にぶい赤褐色 (2.5YR9/4)		砂粒	良好	笹葉状圧痕
17	17	甕	底部~胴部	ヘラナデ	にぶい赤褐色 (5YR9/4)	ミガキ	暗赤褐色 (5YR9/2)		砂粒	良好	木葉痕
18	18	甕	底部~胴部	ヘラケズリ	灰黄褐色 (10YR9/6)	ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	巻きあげ	砂粒	良好	木葉痕
19	19	甕	底部~胴部	ヘラナデ	にぶい橙色 (5YR9/4)		にぶい褐色 (7.5YR9/4)	巻きあげ	砂粒	良好	木葉痕
20		甕	底部~胴部	ヘラケズリ	褐灰色 (10YR9/4)	ナデ	褐灰色 (10YR9/4)		砂粒	良好	木葉痕

第47表 S I 003 竪穴住居跡出土遺物観察表 (2)

挿 番 号	図 版 番 号	器 形	部 位	外 面		内 面		成 形	胎 土	焼 成	備 考
				調 整	色 調	調 整	色 調				
38-21		不 明	底 部	ヘラナデ	暗灰黄色 (2.5Y R 5/2)		にぶい黄橙色 (7.5Y R 7/4)		砂 粒	良 好	砂 底
22		甕	口縁~胴部	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	橙色 (5 Y R 7/6)	ナ デ	にぶい橙色 (5 Y R 7/6)		砂 粒	良 好	
23		甕	口縁~胴部	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	にぶい橙色 (7.5Y R 7/6)	ナ デ	にぶい橙色 (7.5Y R 7/6)		砂 粒	良 好	
24		甕	口縁~胴部	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	にぶい褐色 (7.5Y R 8/6)	ナ デ	浅黄橙色 (7.5Y R 8/4)		砂 粒	良 好	
25		甕	口縁~胴部	ナ デ	明赤褐色 (2.5Y R 5/6)		にぶい赤褐色 (2.5Y R 5/4)	ロ ク ロ	砂 粒	良 好	

6 まとめ

発掘調査の結果、縄文時代・平安時代および中世の遺構・遺物が検出される複合遺跡であることがわかった。

(1) 縄文時代の遺構と遺物

- ① 縄文時代前期の遺構は発見されていないが、前期中葉～後葉と思われる、土器片1片出土している。この土器片の施文原体は解明できず、後期の可能性もある。
- ② 縄文時代後期の遺構と遺物が主体であった。竪穴住居跡は南西に傾斜する台地縁辺に集まっているように思える。住居跡のプランは保存状態が悪く、全体をつかめたものはない。石組炉はS I 004・S I 005・S I 038で認めたにすぎない。又、炉は河原石を用いたつくり方など共通点が多い。住居跡内から縄文土器が出土している。これらの縄文土器のうち時期決定できるものは少ないが、おそらく後期初頭の十腰内I式期に比定できるものと思われる。24基の土壌のなかで、縄文土器を共伴したものは、S K 012・S K 014・S K 020にすぎなかったが、同種の遺構もほぼ同時期と推定した。S D 013 溝跡から縄文土器・搔器が出土したので、S D 008 とともに当該期としておく。

(2) 平安時代の遺構と遺物

平安時代の竪穴住居跡のうち、S I 001・S I 002・S I 003は相前後する時期と思われる。S I 001とS I 002は平面プラン確認時点で切合い関係があり、S I 001がS I 002を切っていた。S I 001の覆土には大湯浮石が大量に入っていたが、2次堆積であるのかが問題となろう。また、重複関係にあるS I 002の覆土土層中にも浮石が少量混入している。したがって、両住居跡ともに大湯浮石以前の住居と断定することはできないようだ。S I 003はカマド袖石下から浮石が見つかっていることから、大湯浮石以後の住居跡である。このように重複関係や火山灰のかかわりから、S I 002→S I 001→S I 003の推移をみとめることができる。大湯浮石層の降下時期が10世紀前半だとすれば、出土土器の観察もふまえて、おおそ10世紀代の年代を与えてもよいと思う。

S I 007 竪穴住居跡は、出土遺物もなく、上述竪穴住居跡の平面プランとも異なるため、年代も下がるだろう。

(3) 中世の遺構と遺物

中世の竪穴住居跡はS I 006とした1軒で、2時期の重複であり、西側に拡張していた。

妻の神Ⅱ遺跡

全体のプランは長方形で、地床炉と思われる焼土が中央にみられた。柱穴は焼土を挟む長軸方向にもあるのが注意されよう。出土遺物は古銭3点であり、うち1点は洪式通寶は初鑄1368年の明銭であり、輸入してから埋もれるまで相当な期間を考慮しなくてはならないだろう。

『秋田県の中世城館』による中世の乳牛館は、乳牛平遺跡・妻の神Ⅲ遺跡・妻の神Ⅱ遺跡・妻の神Ⅰ遺跡を含む広大な範囲としている。乳牛館の主要な郭は乳牛平遺跡・妻の神Ⅰ遺跡とその周辺の遺構群であろう。また、妻の神Ⅲ遺跡は館の中心的・日常的な集落の場なのであろうか。妻の神Ⅱ遺跡は妻の神Ⅰ遺跡とは同じ台地上地続きにあり、妻の神Ⅲ遺跡とは深い沢目で隔たっている。このように当遺跡は乳牛館を構成する妻の神Ⅰ遺跡、妻の神Ⅲ遺跡に挟まれた空間に位置するとでも呼称してもよい、平坦な場所である。今回の発掘した範囲は狭く、竪穴住居跡も1軒しか見つかっていないため、推測の域を出ないが、両遺跡間の連絡するような役割を果たしていたものであろう。

註

- 1 鈴木恵治 1982『文献史料から見た古代奥羽での天災』『考古風土記』 第7号
- 2 秋田県教育委員会 1981『秋田県の中世城館』
- 3 秋田県教育委員会 1984『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ 一妻の神Ⅰ遺跡・乳牛平遺跡一』 秋田県文化財調査報告書第107集
- 4 秋田県教育委員会 1984『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ 一妻の神Ⅲ遺跡一』 秋田県文化財調査報告書第108集
- 5 註2前掲書

付 ¹⁴C年代測定結果

日本アイソトープ協会

昭和56年1月23日に受取りましたC-14試料2個の測定結果ができましたのでご報告します。

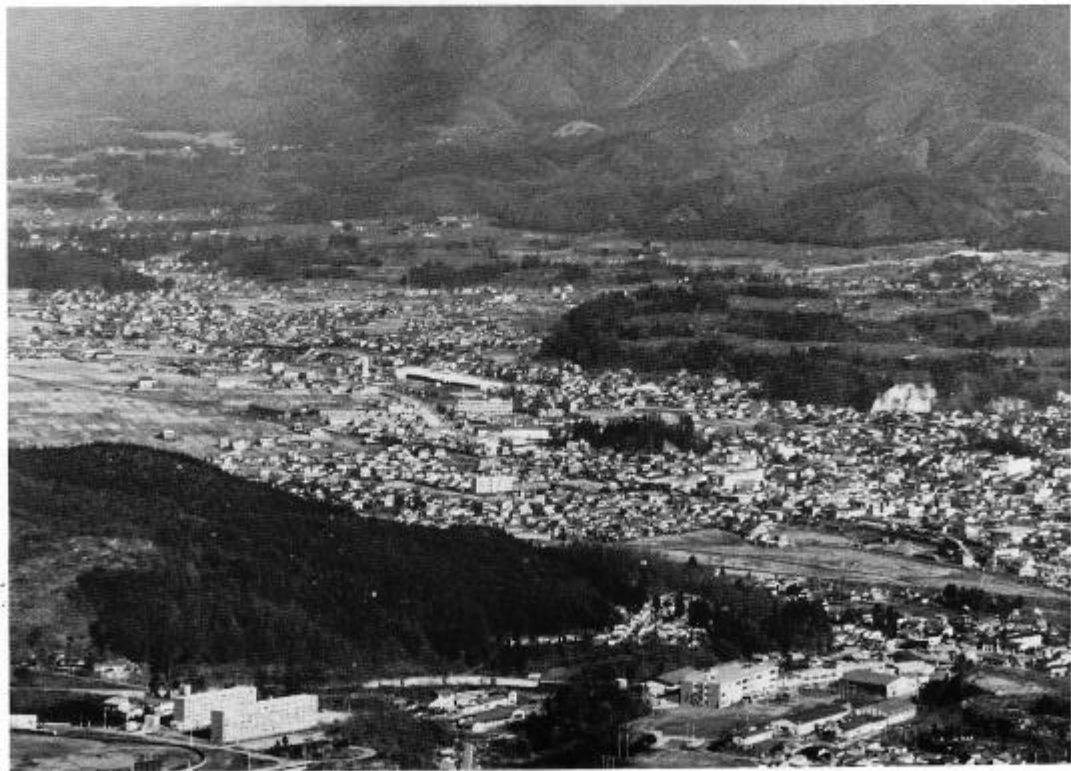
当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
N-4129	TW23 S I 002 No.2	1310±80y B.P. (1270±75y B.P.)
N-4130	TW23 S I 004	3790±85y B.P. (3680±80y B.P.)

年代は¹⁴Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、¹⁴C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に広げますと確率は約95%となります。なお¹⁴C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

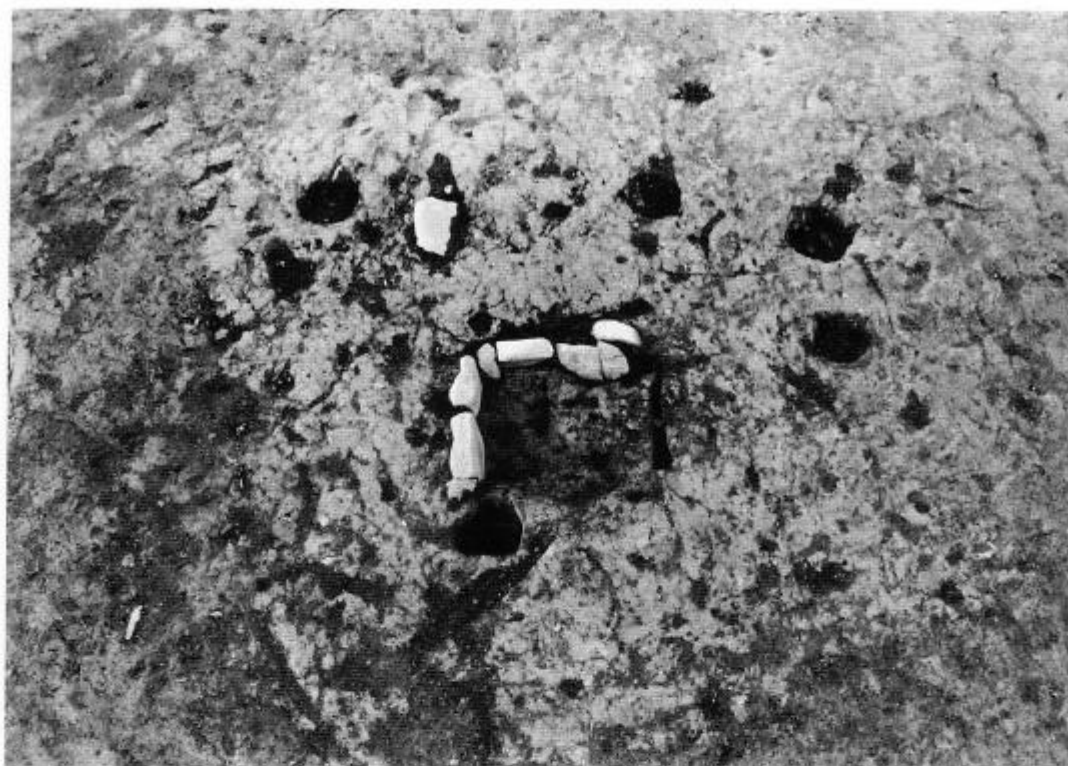
発掘調査参加者（妻の神II遺跡）

川又喜代治、浅水 七藏、石川 富雄、佐藤 富男、川又権太郎、佐藤喜之丞、関 信一、
渋谷鉄次郎、佐藤 光雄

川又 ミヨ、川又 千代、川又 スエ、大森 栄子、小沼 テル、木村 サト、木村 テル、
山本キサエ、黒沢 栄子、児玉 イワ、高橋 敏子、川又 ミサ、米村 トメ、杉江 ナカ、
山本 ミサ、山本ツルエ、山本 園子、山本 コト、川又 エイ、米田 ノリ、川又 スエ、
浅水 啓子、倍賞 正子、小田島礼子、阿部 シガ、畠山 陽子、山本 キヌ、浅水 サダ、
秋元 ミツ、石川 ヒデ、黒沢 京子、川又ハチヨ、金沢 リセ、佐藤 昭子、安保 スエ、
木村 ソワ、木村 礼子、木村マツエ



図版1 遺跡遠景 (上) 南西▶北東
(下) 南西▶北東



図版3 S1004竪穴住居跡 (上) 石組炉 (南▶北)
(下) 石組炉 (東▶西)

妻の神Ⅱ遺跡



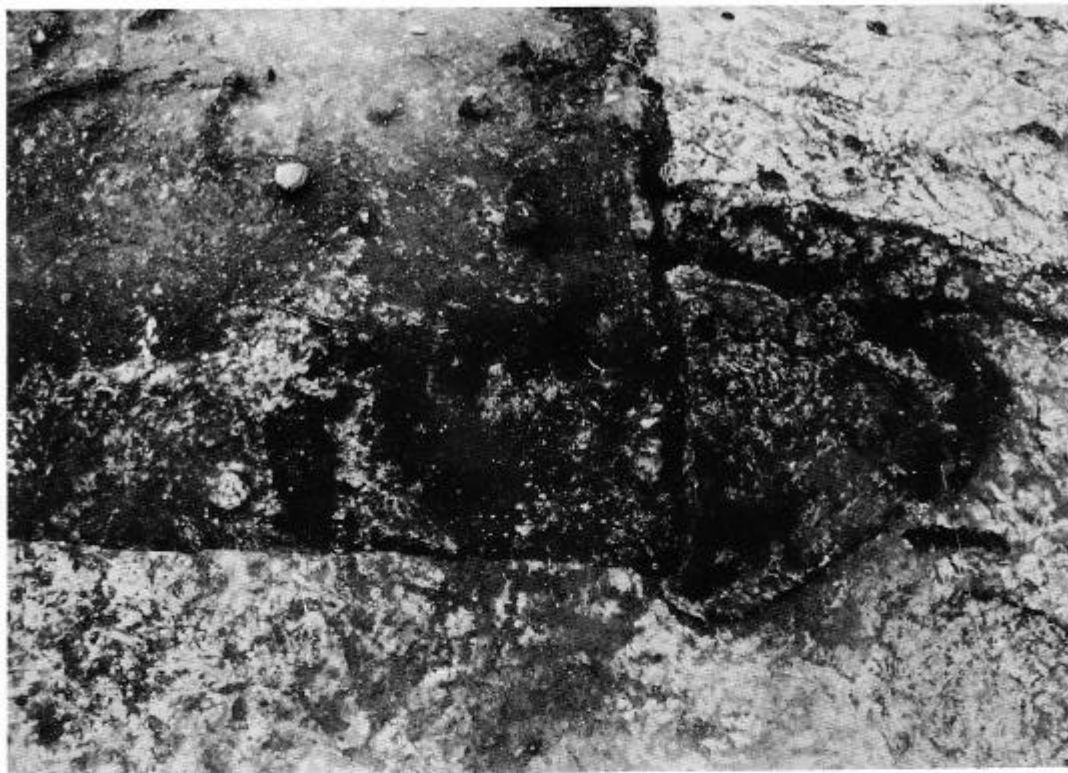
図版 4 S I 004 竪穴住居跡 (上) 石組炉 (南▶北)
(下) 石組炉 (東▶西)



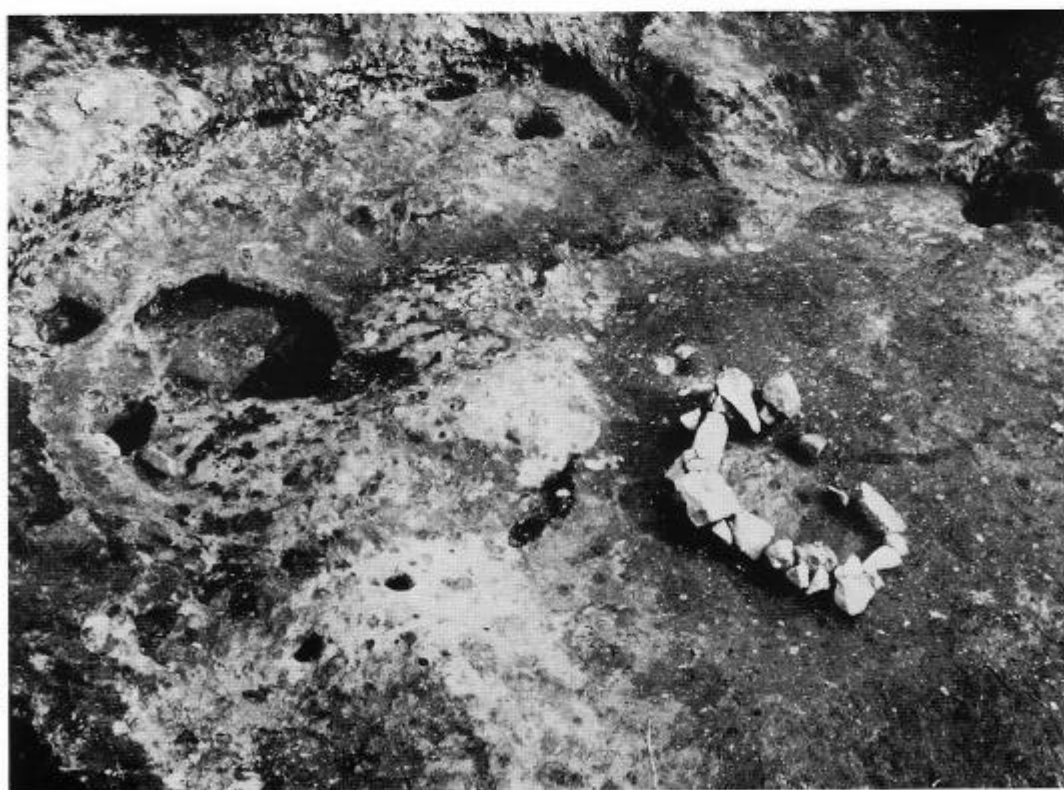
図版5 S1005 竖穴住居跡 (上) (西▶東)
(下) (南▶北)



図版6 S1005竪穴住居跡 (上) 土器出土状態 (東▶西)
(下) 石組炉 (南▶北)



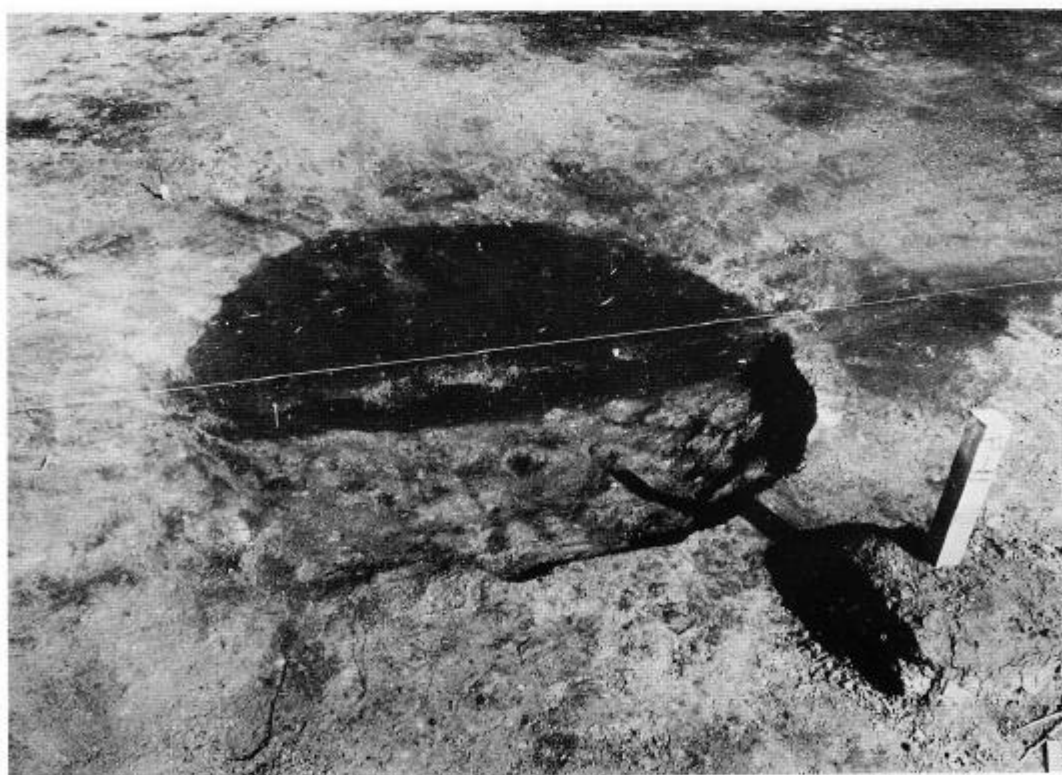
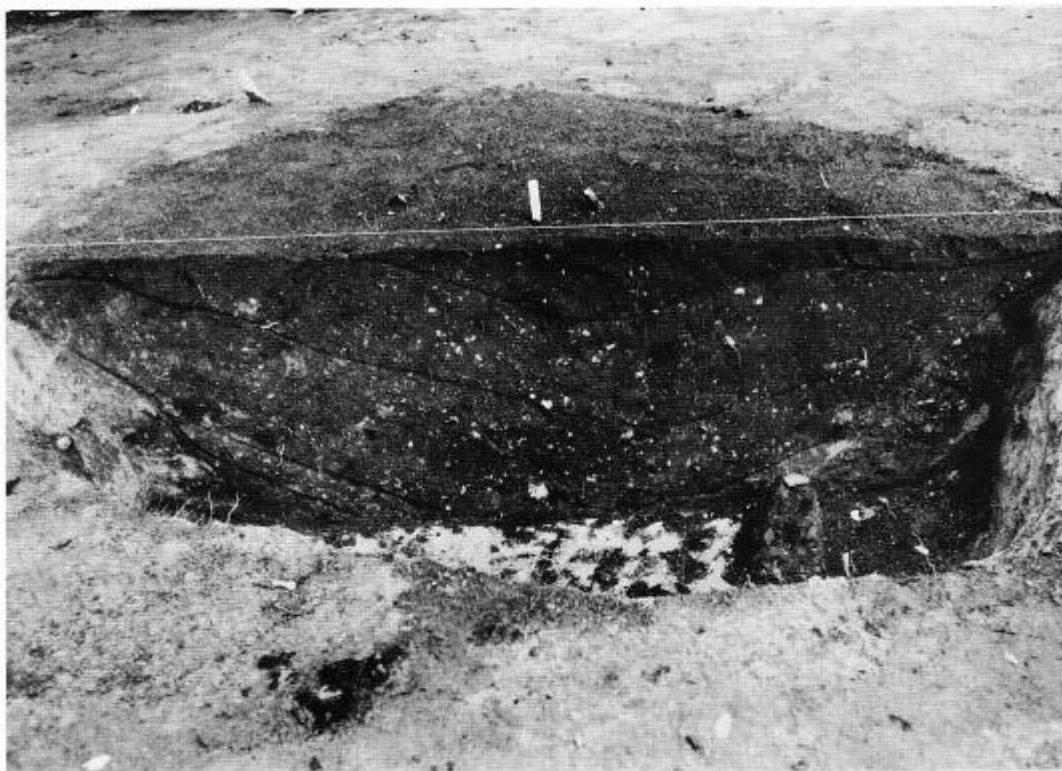
図版7 (上) S1002・S1025 竪穴住居跡 (東▶西)
(下) S1025 竪穴住居跡完掘状態 (東▶西)



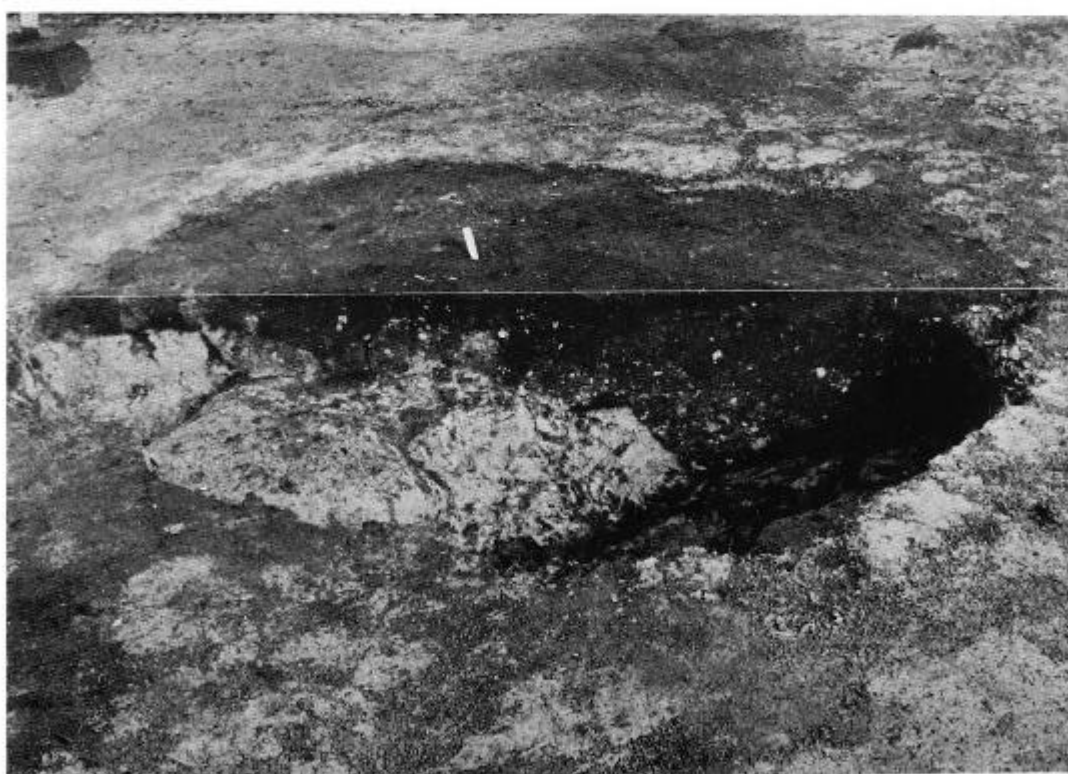
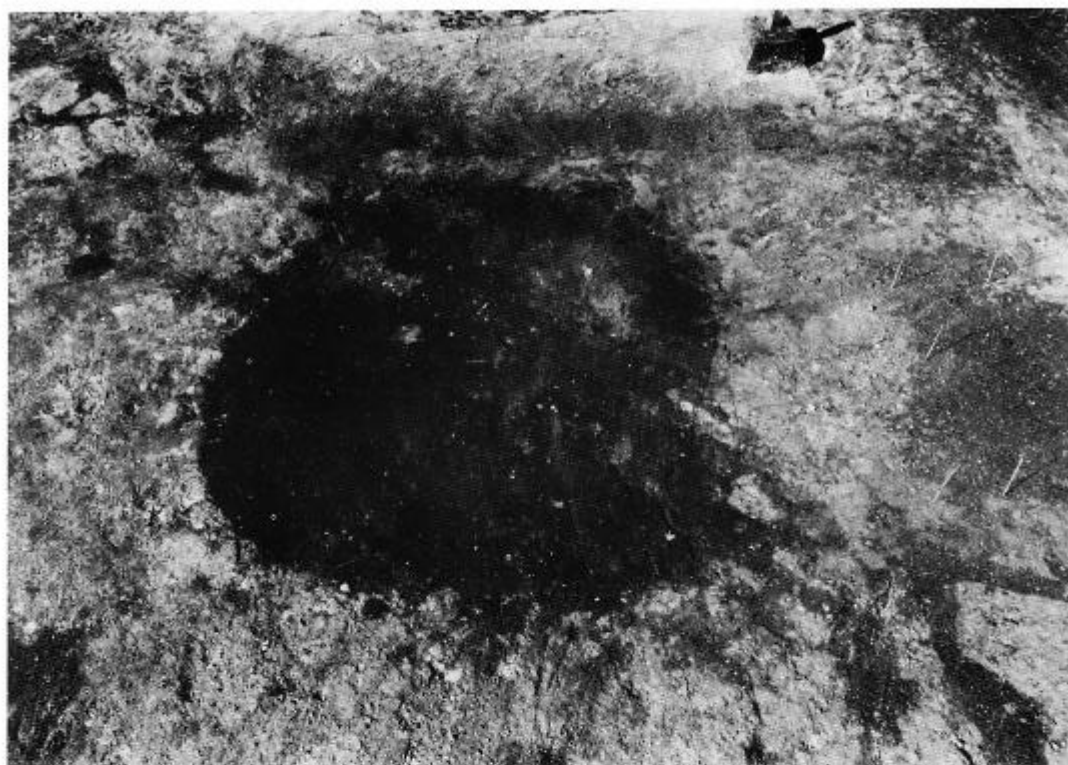
図版8 (上) S 1038 竪穴住居跡石組炉 (北 ▶ 南)
(下) S 1037・S 1038 竪穴住居跡 (東 ▶ 西)



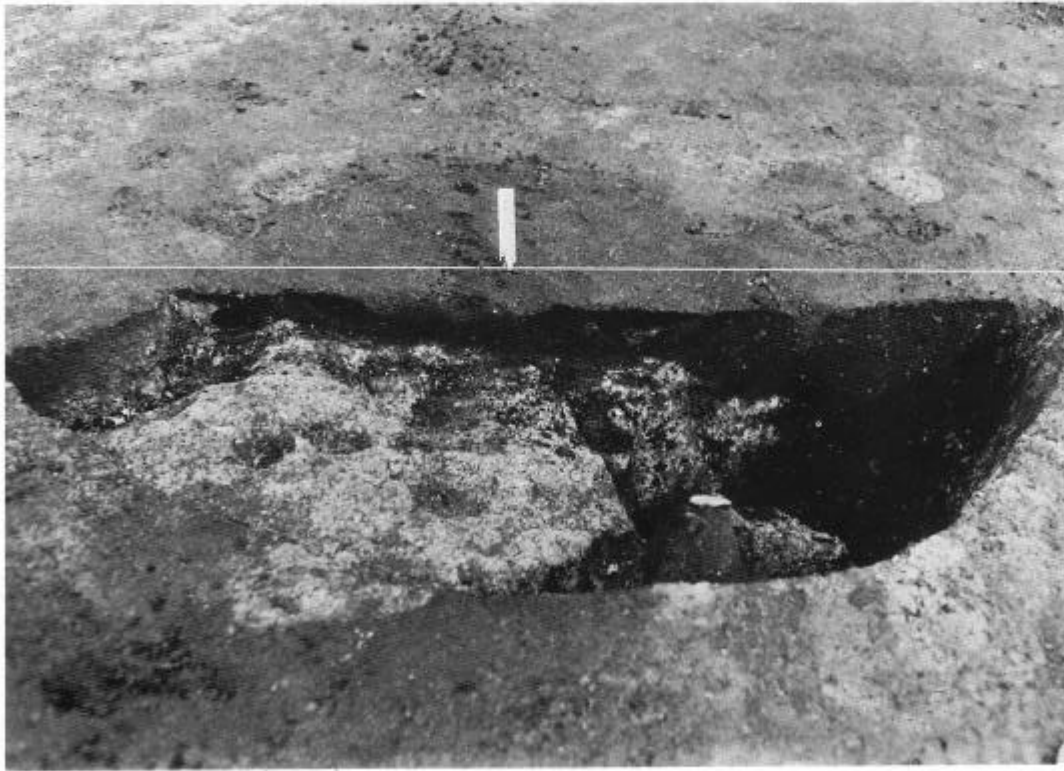
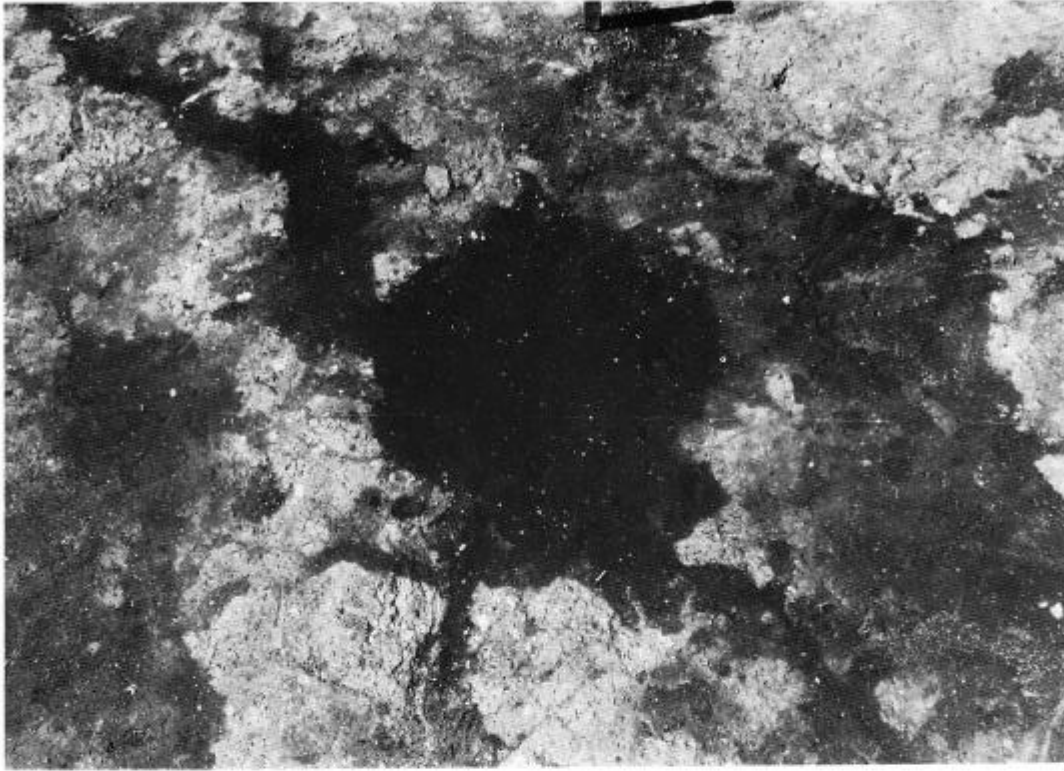
図版9 S1038 竪穴住居跡 (上) 石組炉 (北▶南)
(下) 土器出土状態



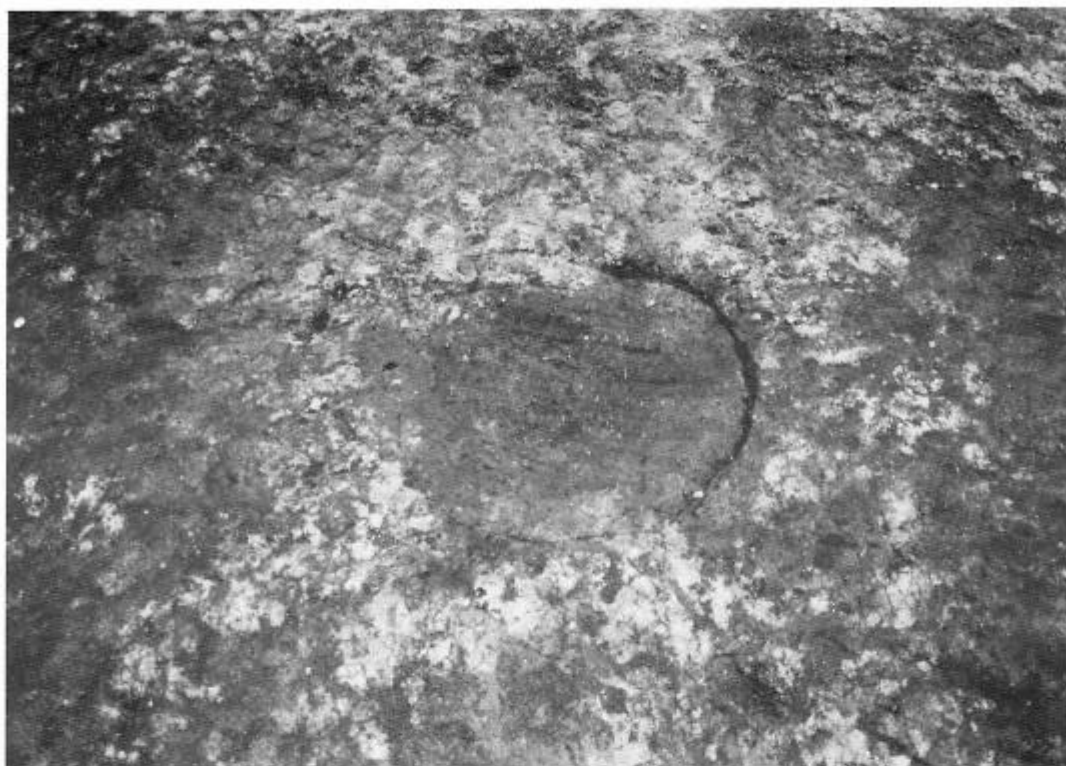
図版10 (上) S K009土壌断面 (南▶北)
(下) S K010土壌 (南西▶北東)



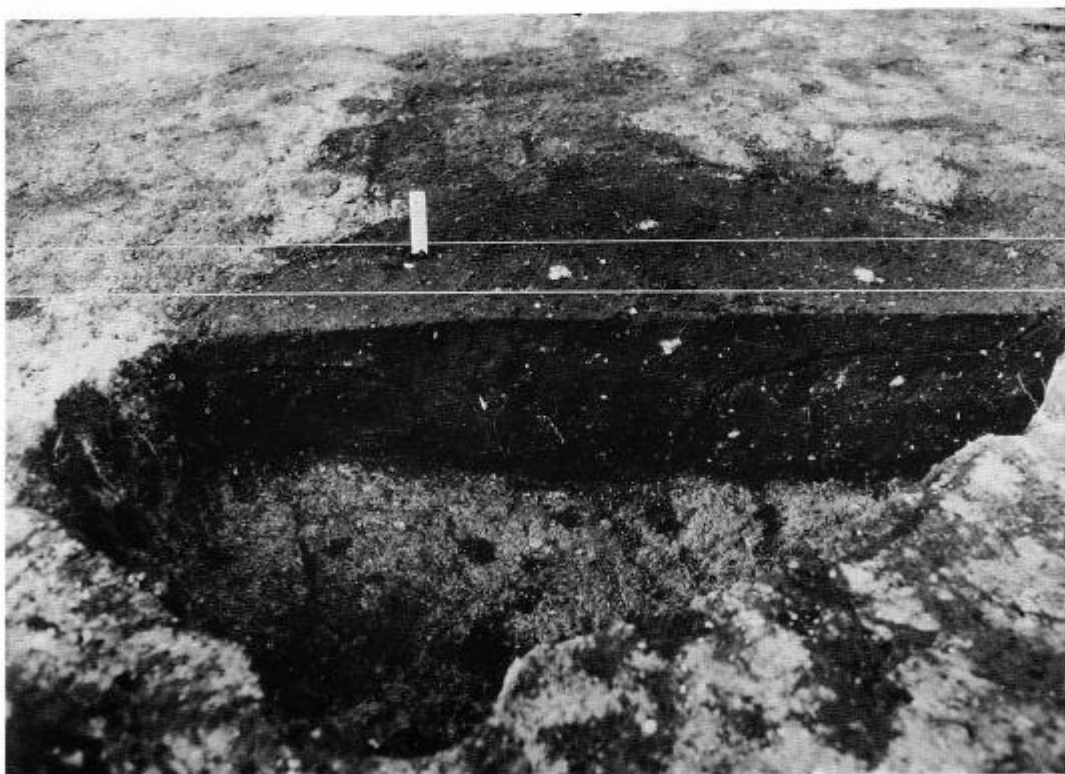
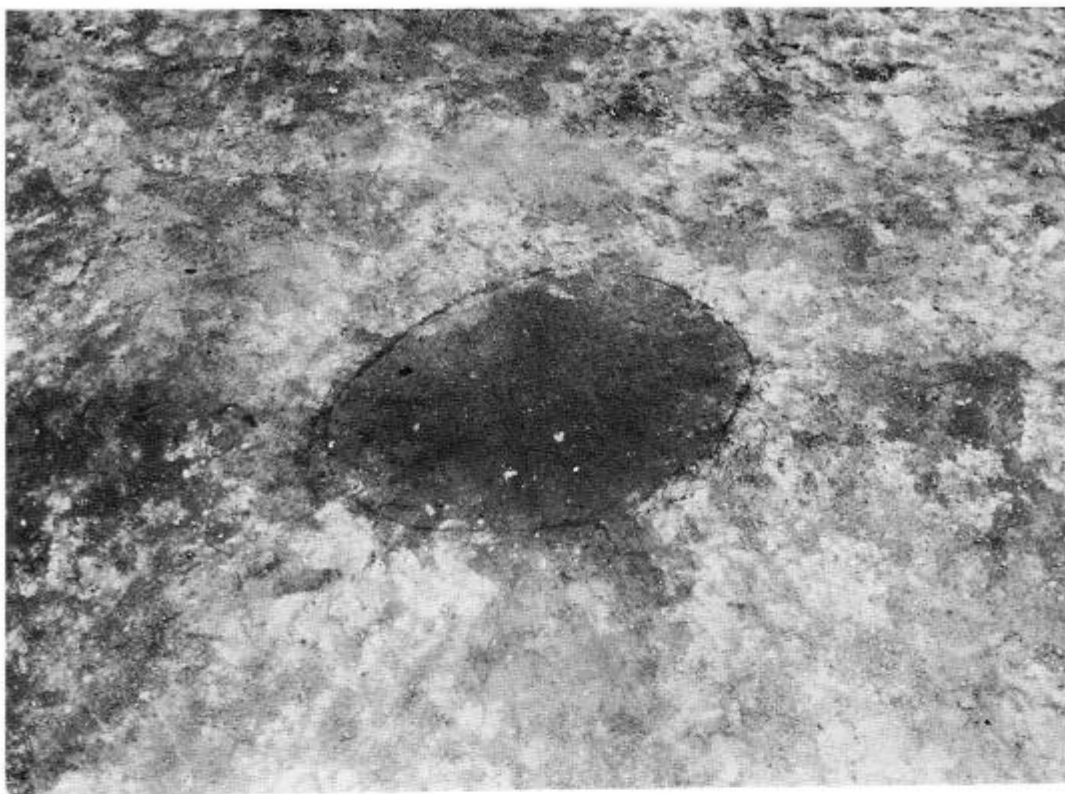
図版11 SK011土坑 (上) 確認状態 (南▶北)
(下) 断面 (南▶北)



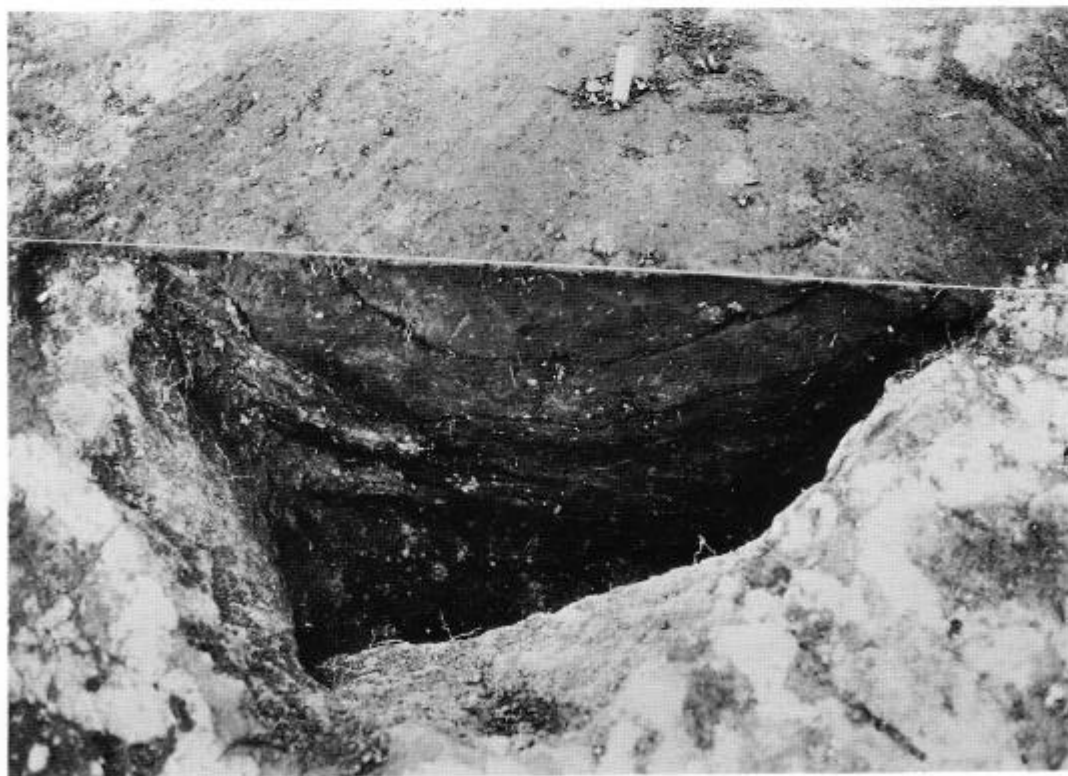
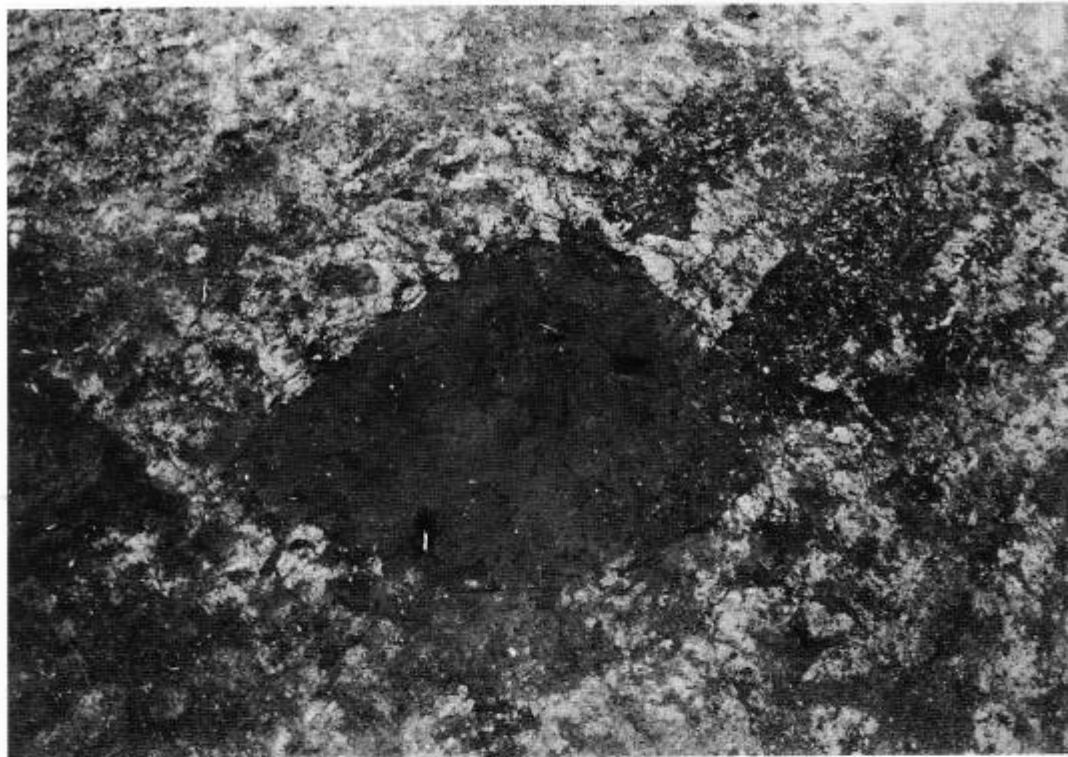
図版12 SK012土坑 (上) 確認状態 (南▶北)
(下) 断面 (南▶北)



図版13 S K 014土壇 (上) 確認状態 (南▶北)
(下) 断面 (南▶北)



図版14 SK015土壌 (上) 確認状態 (南▶北)
(下) 断面 (南▶北)

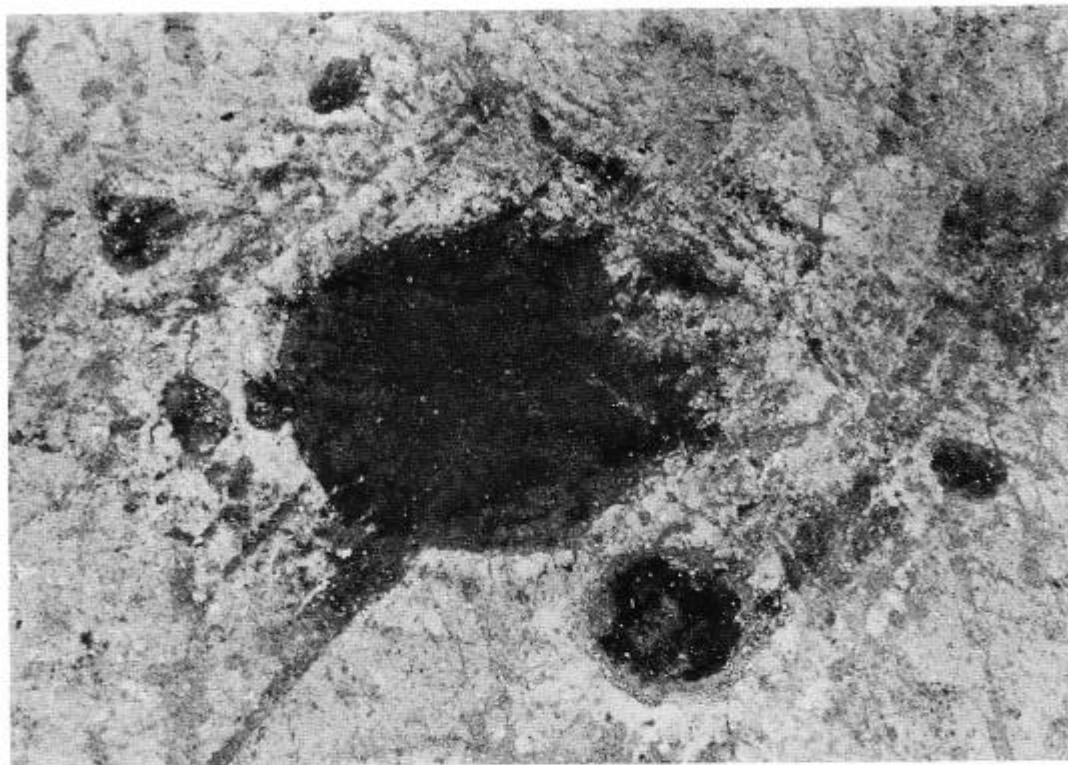


図版15 SK016土坑 (上) 確認状態 (南▶北)
(下) 断面 (南▶北)

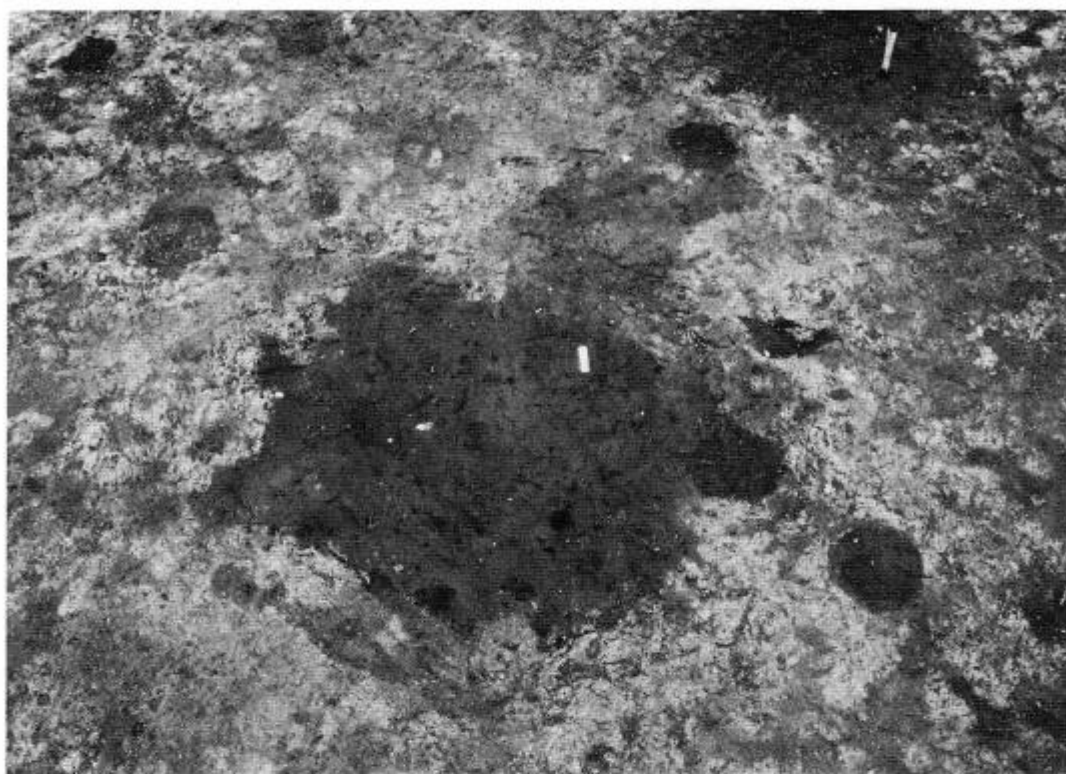


図版16 S K017土坑 (上) 確認状態 (南▶北)

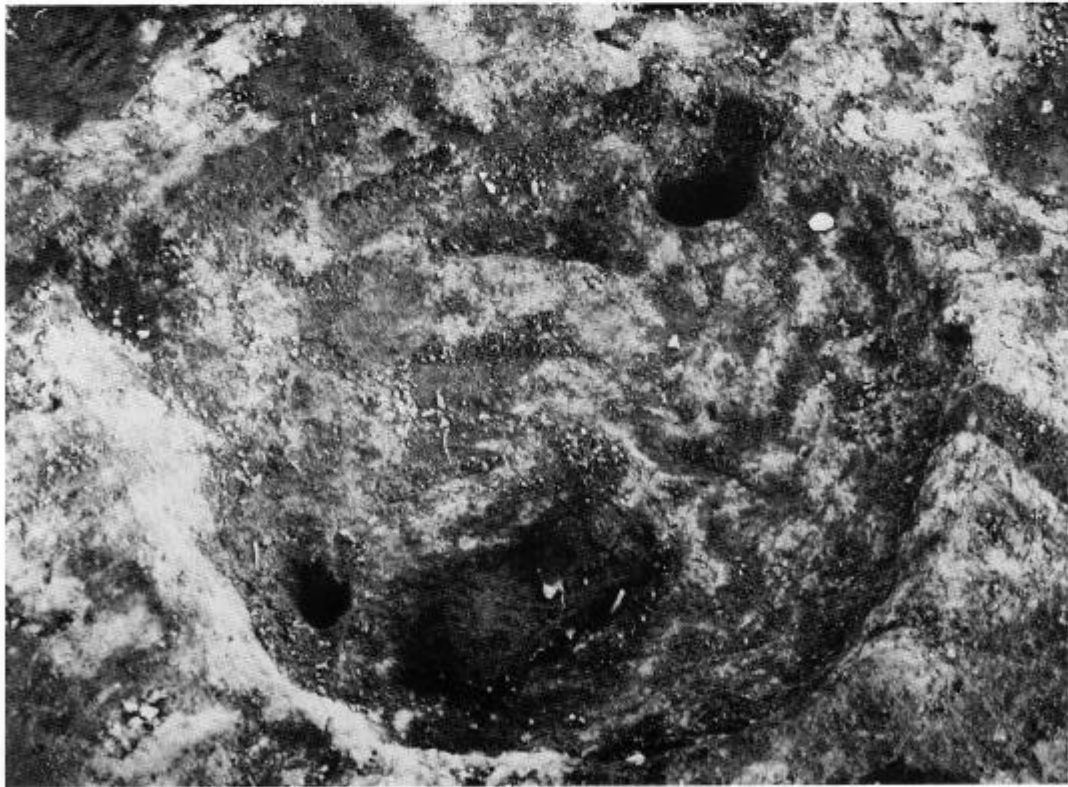
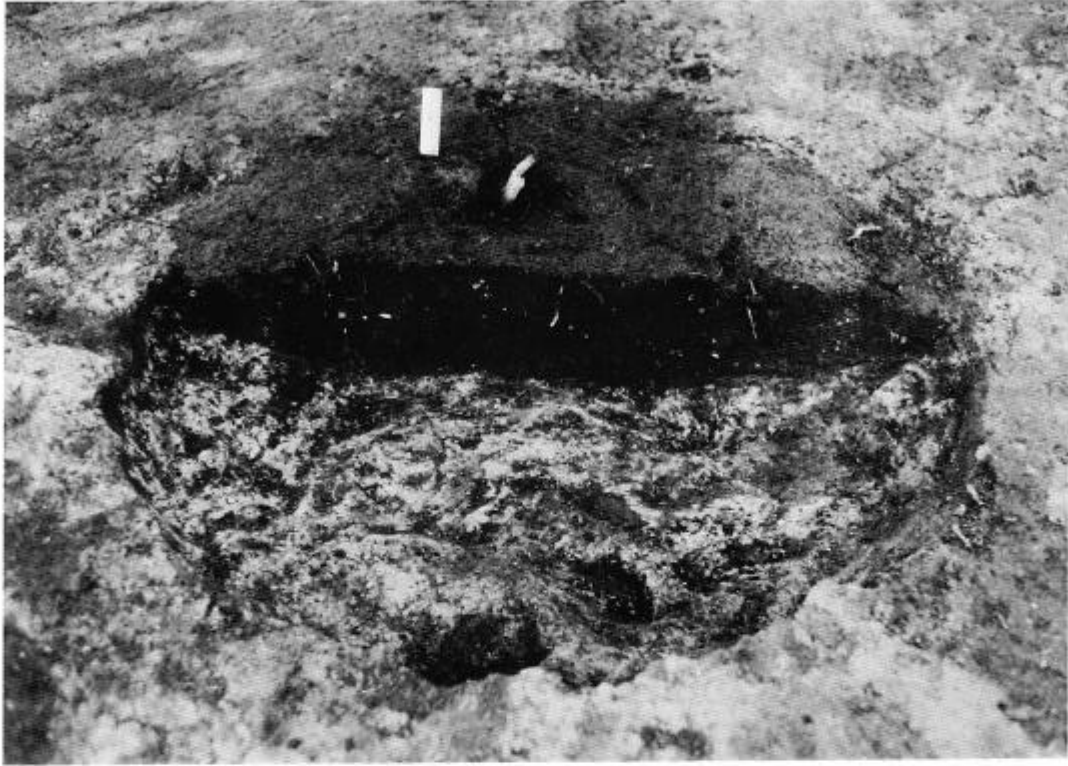
(下) 完掘状態



図版17 SK018土壙 (上) 確認状態 (南▶北)
(下) 断面 (南▶北)



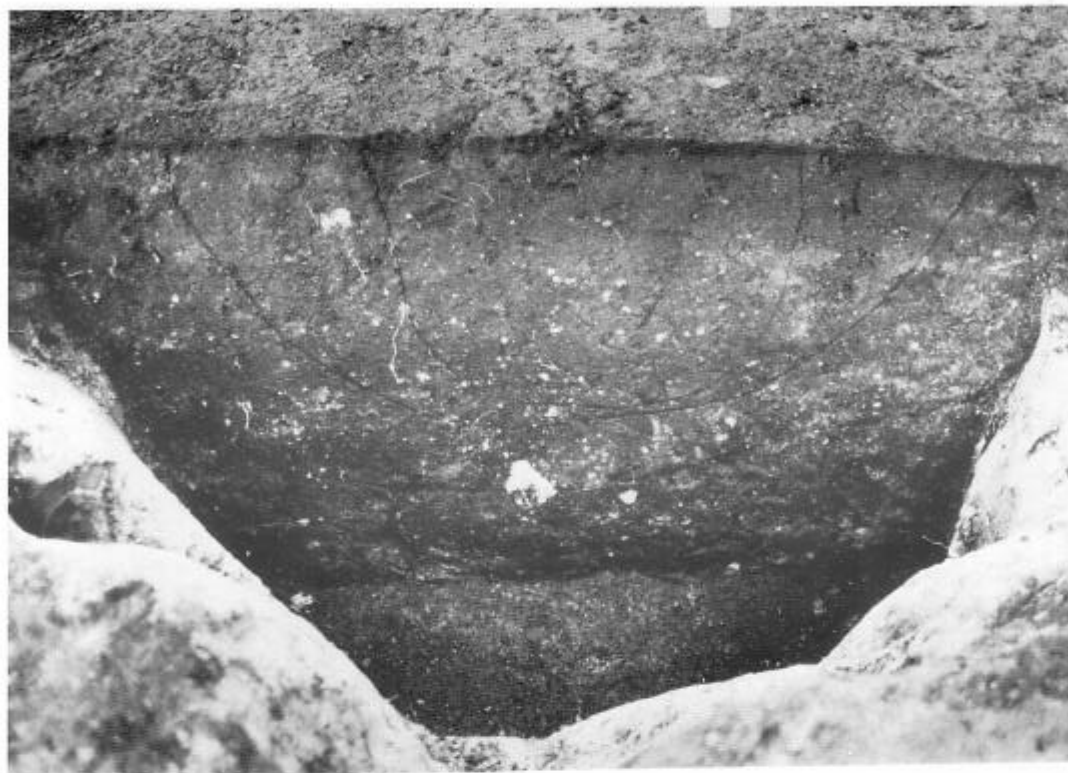
図版18 SK019土壌 (上) 確認状態 (南▶北)
(下) 断面 (南▶北)



図版19 SK020土壌 (上) 断面(南▶北)
(下) 完掘状態(南▶北)



図版20 SK021土壇 (上) 断面(南▶北)
(下) 完掘状態(南▶北)



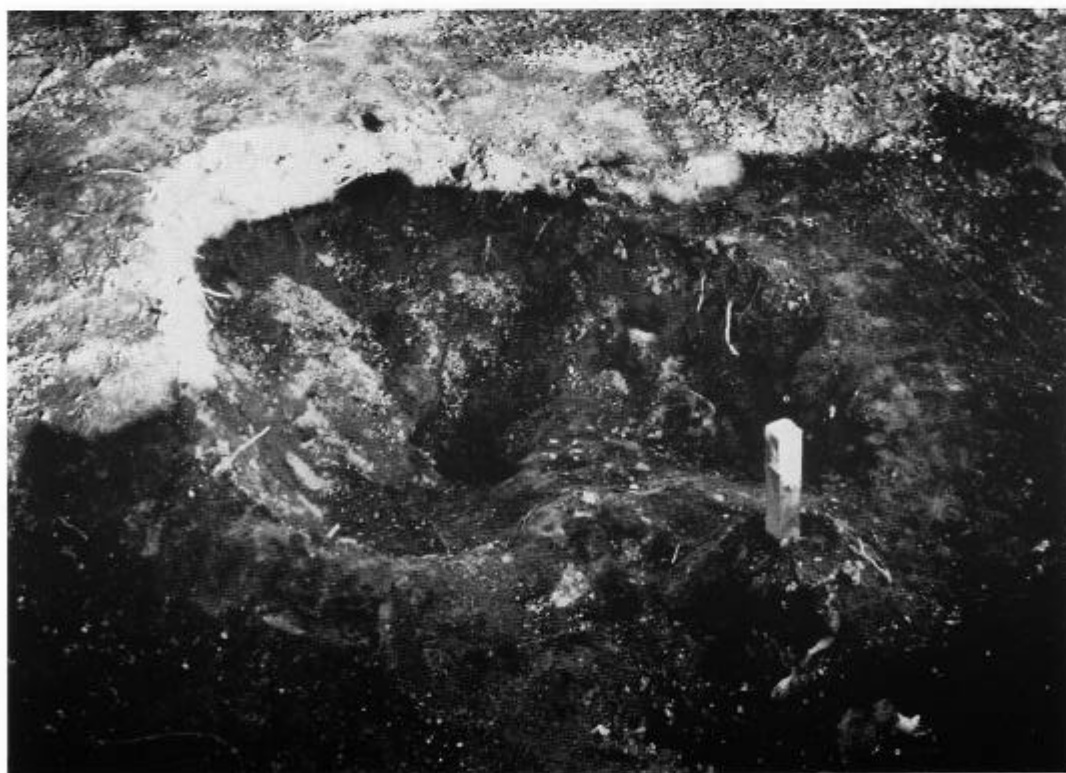
図版21 SK022土坑 (上) 断面(南▶北)
(下) 完掘状態(南▶北)



図版22 SK023土坑 (上) 断面(南▶北)
(下) 完掘状態(南▶北)



図版23 (上) S K 026土坑完掘状態 (南▶北)
(下) S K 027土坑完掘状態 (南▶北)



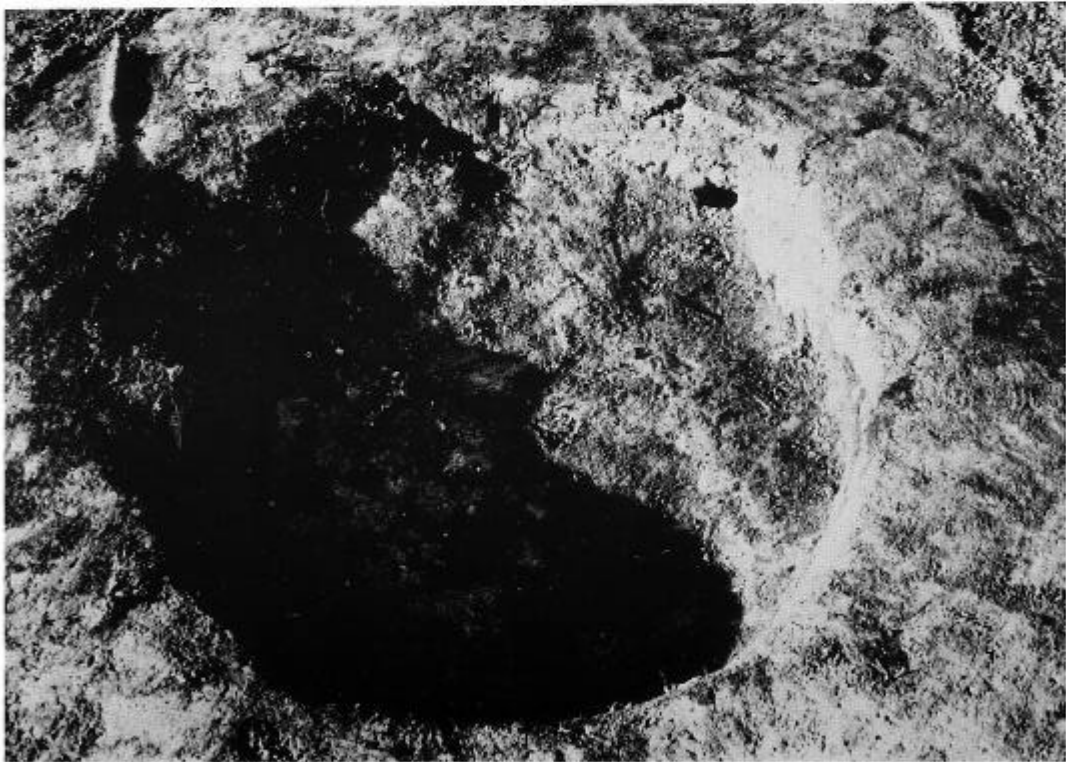
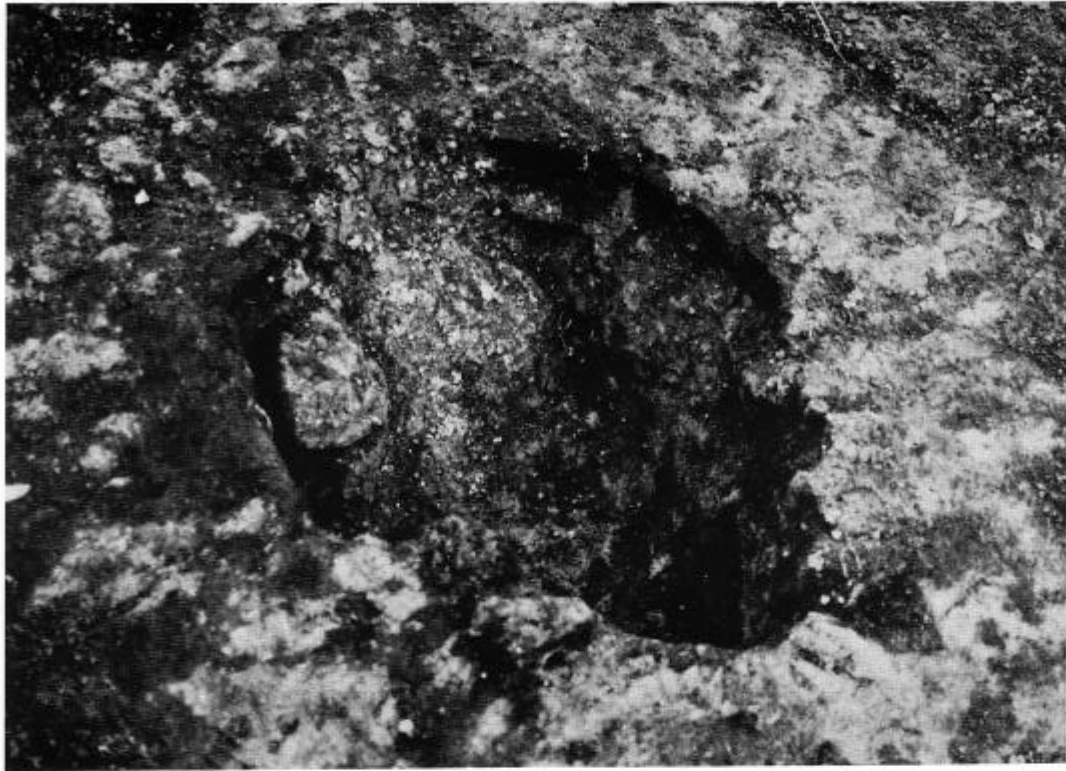
図版24 (上)SK028土坑完掘状態(北▶南)

(下)SK029土坑完掘状態(北▶南)

下 S K 031 土塊完掘状態 (南 ▶ 北)

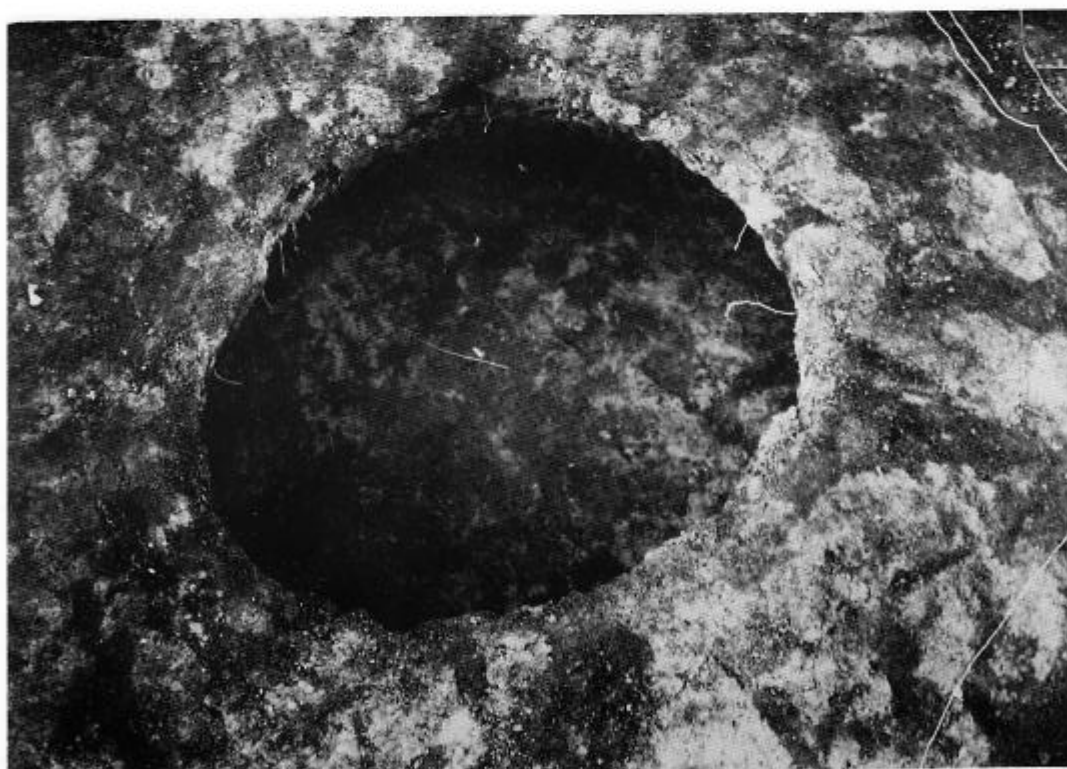
図版25 上 S K 030 土塊完掘状態 (南 ▶ 北)





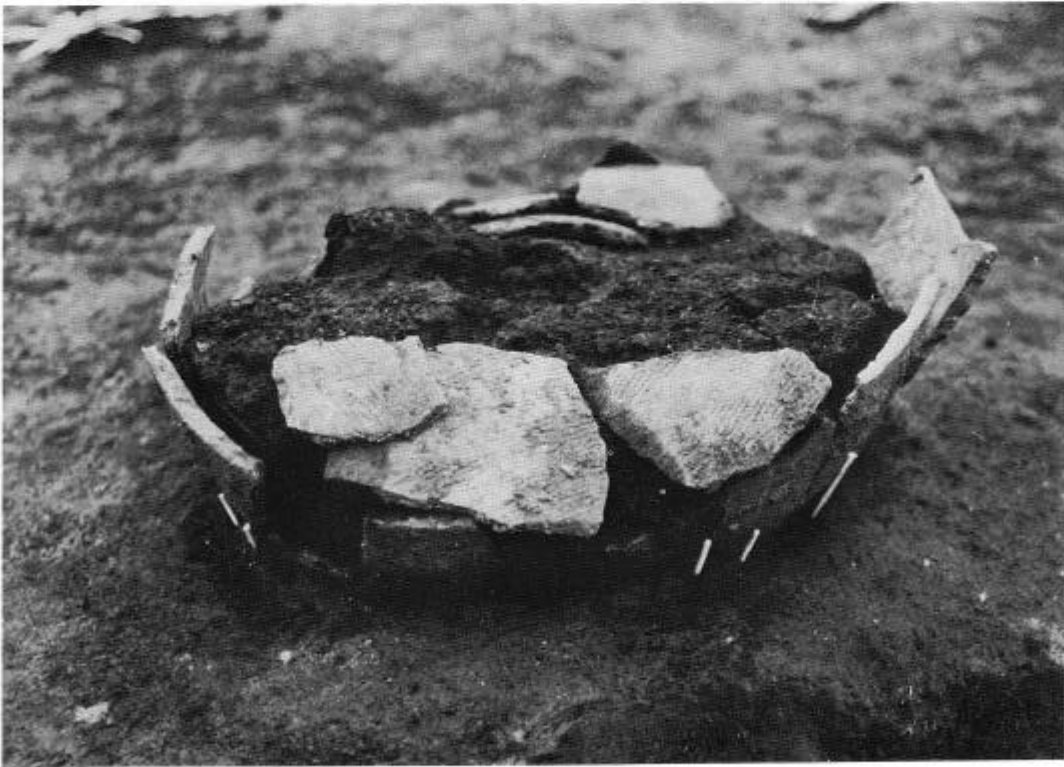
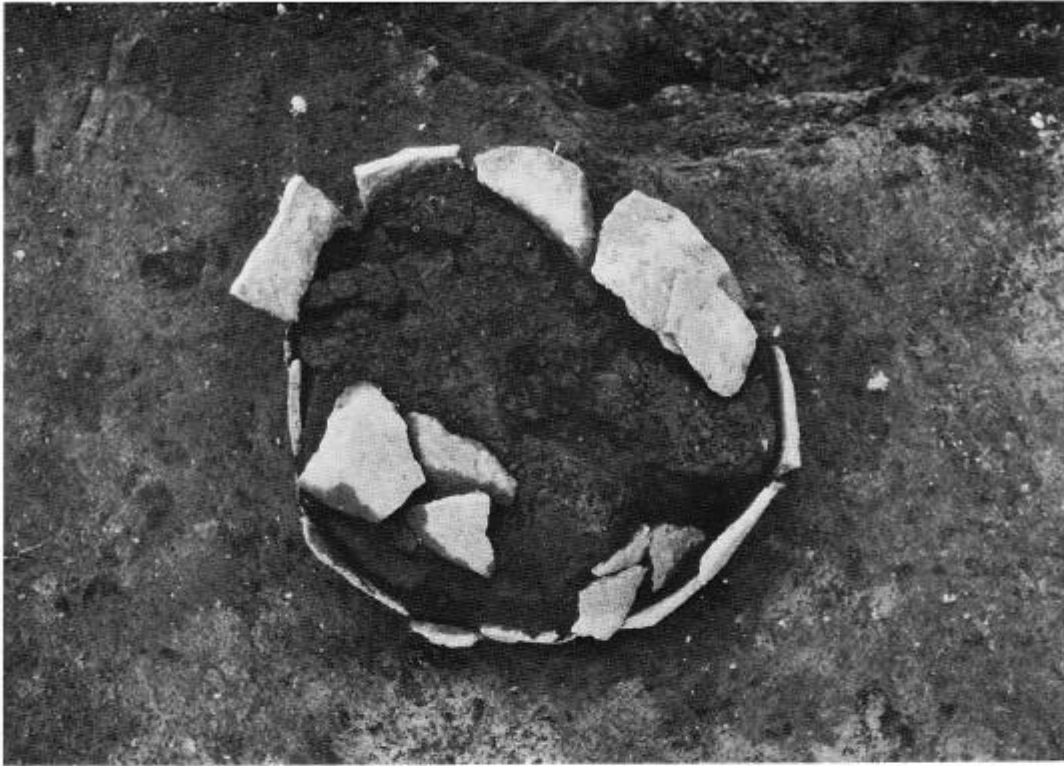
図版26 (上) S K 032 土壇完掘状態 (南 ▶ 北)

(下) S K 034 土壇完掘状態 (南 ▶ 北)

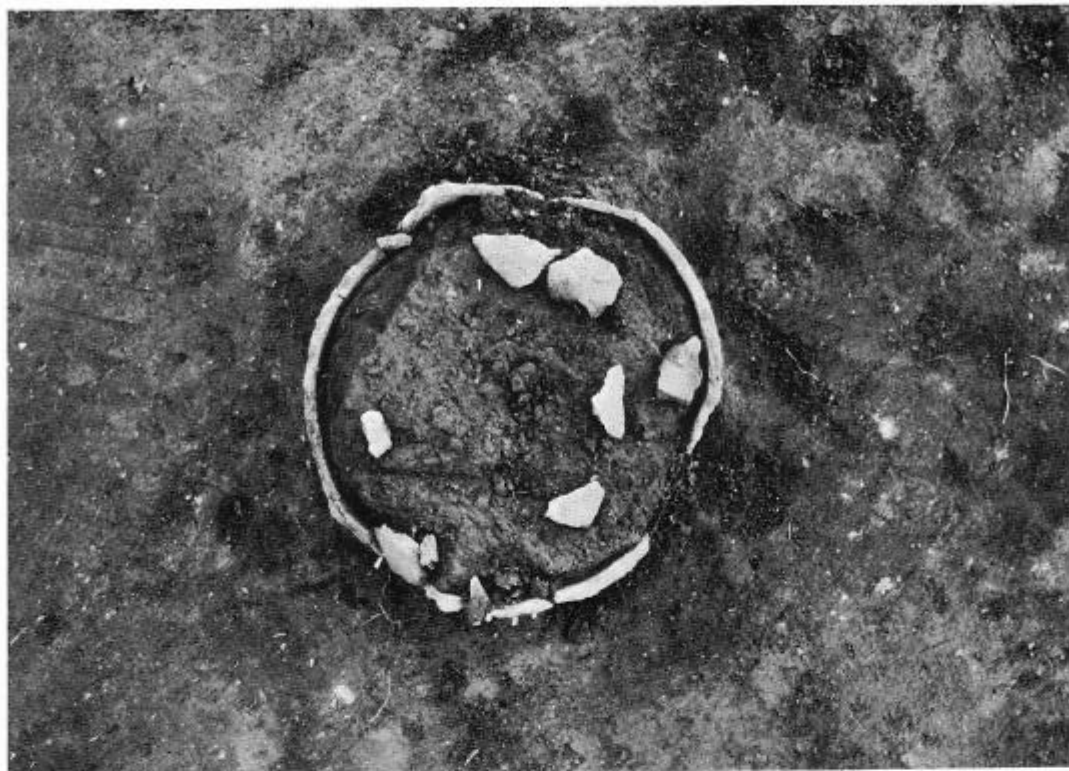


図版27 (上) S K 035 土壙完掘状態 (北 ▶ 南)

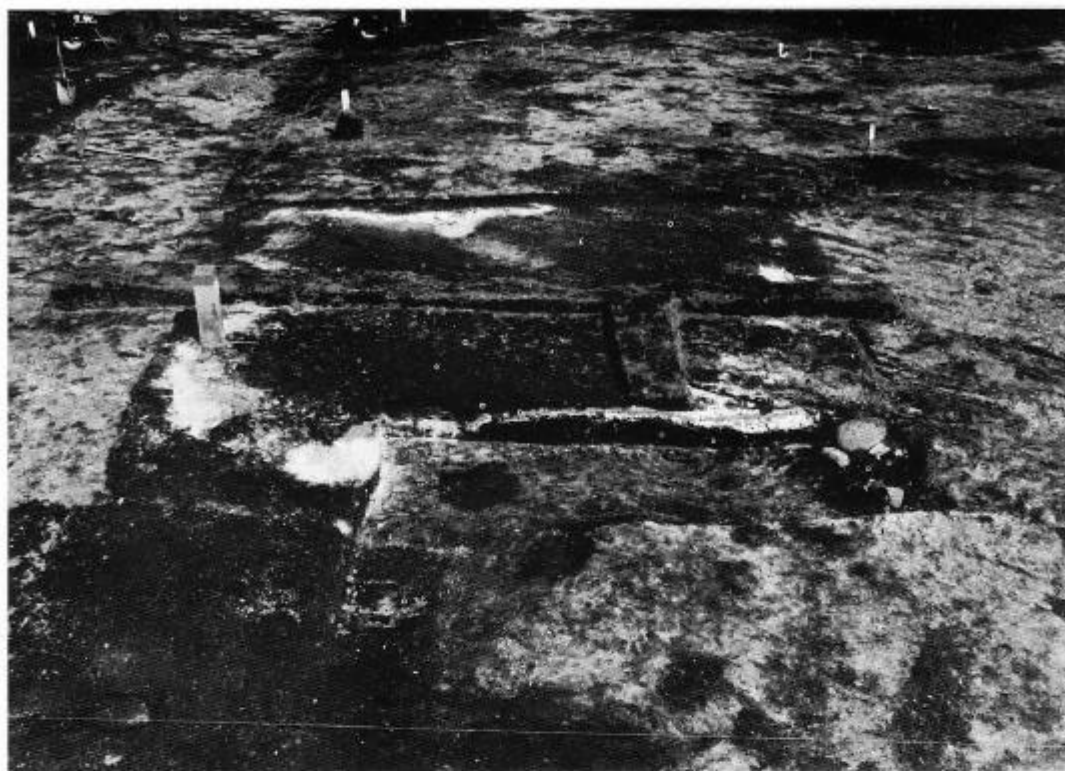
(下) S K (F) 033 フラスコ状ピット完掘状態 (南 ▶ 北)



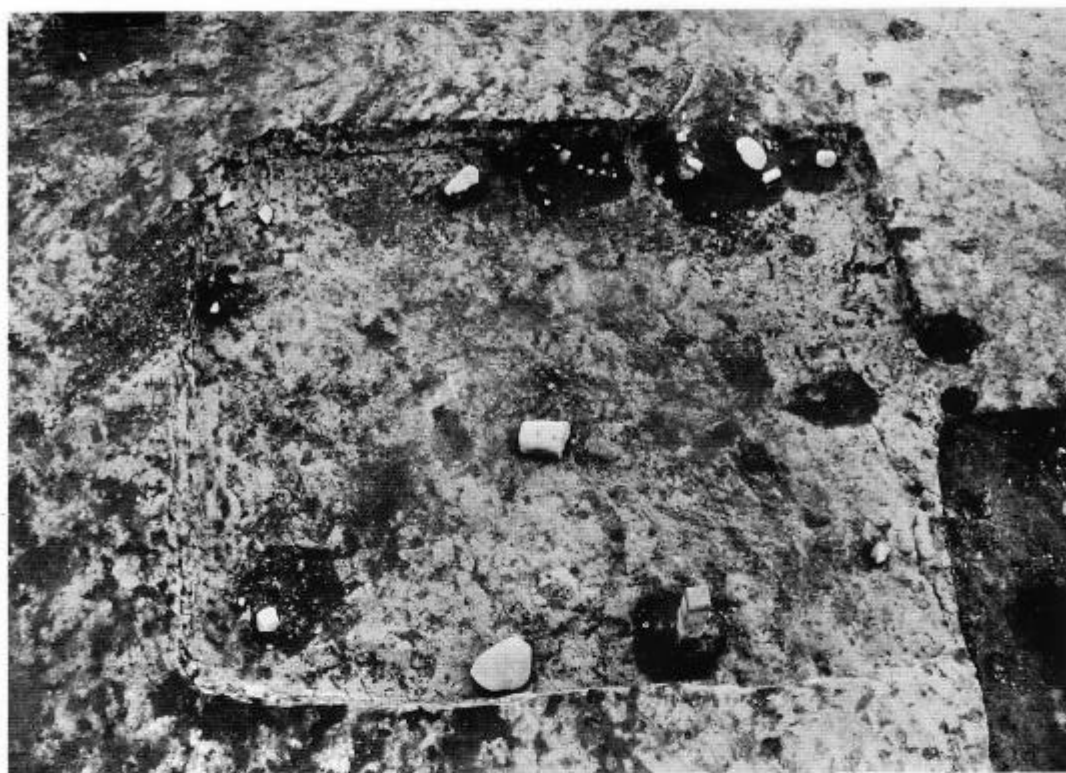
図版28 S X(U)039埋設土器 (上) 出土状態
(下) 出土状態(南▶北)



図版29 S X(U)040埋設土器 (上) 出土状態
(下) 出土状態(北▶南)



図版30 S1001竪穴住居跡 (上) (西▶東)
(下) (南東▶北西)

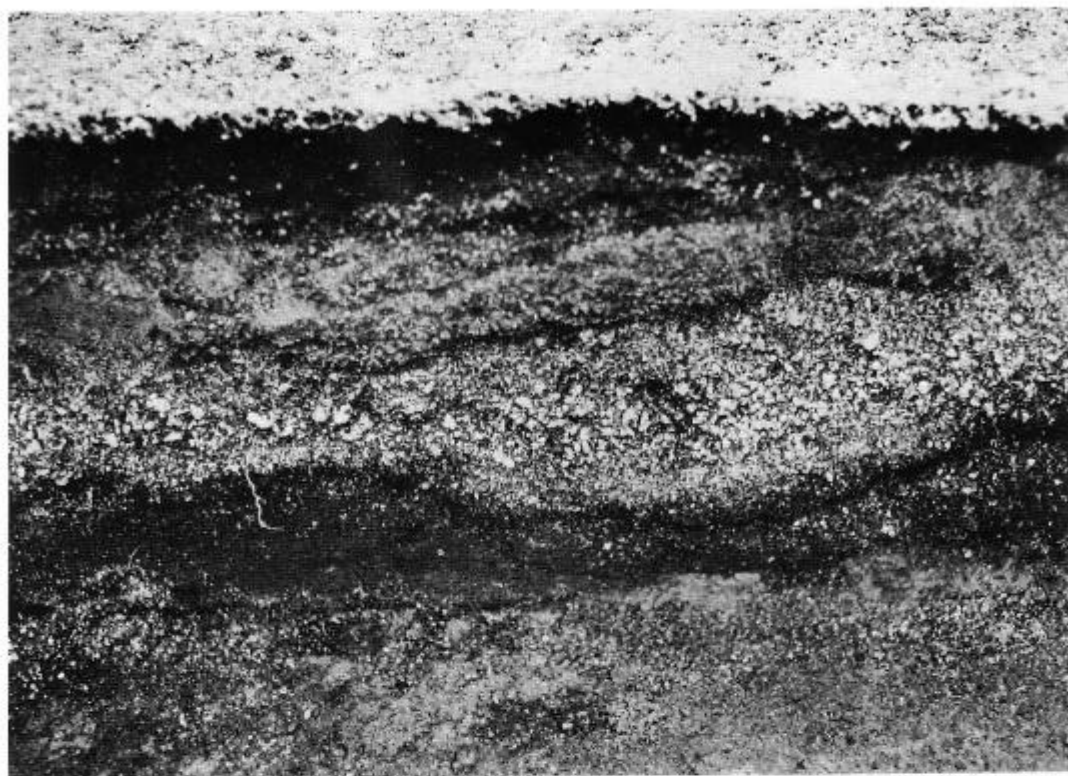


図版31 (上) S 1001 竪穴住居跡 (北▶南)
(下) S 1001 竪穴住居跡完掘状態 (北▶南)

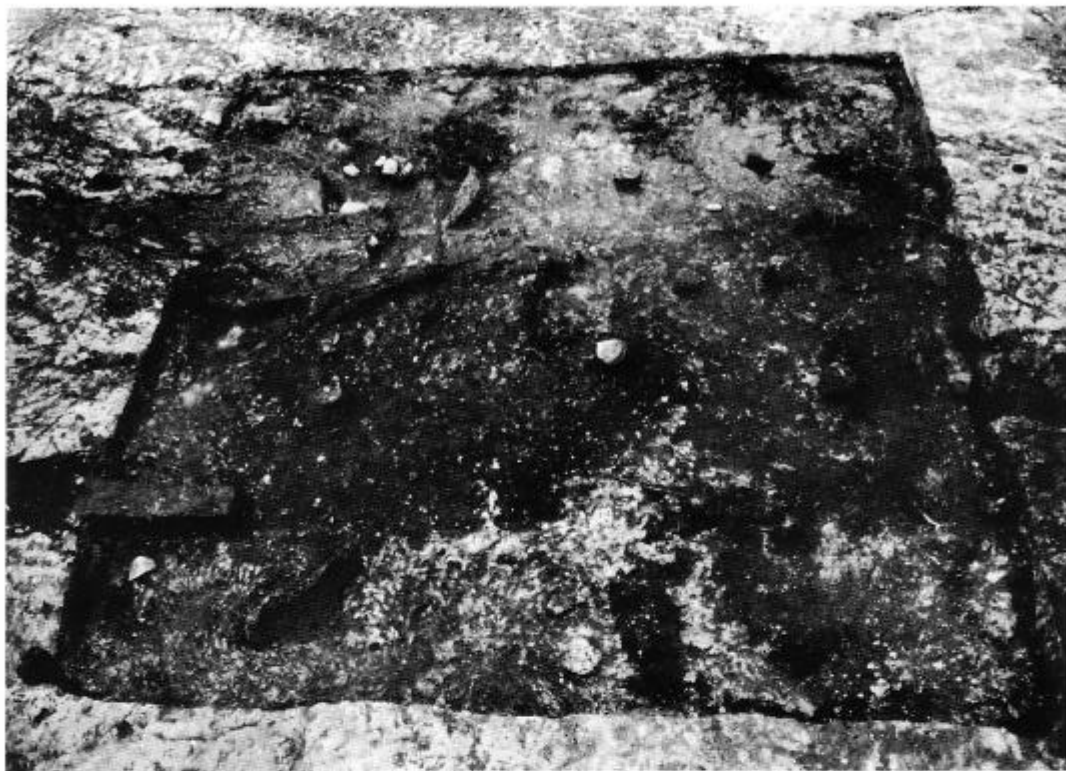


図版32 (上) S1001 竪穴住居跡カマド (北▶南)

(下) S1001 竪穴住居跡カマド完掘状態 (北▶南)



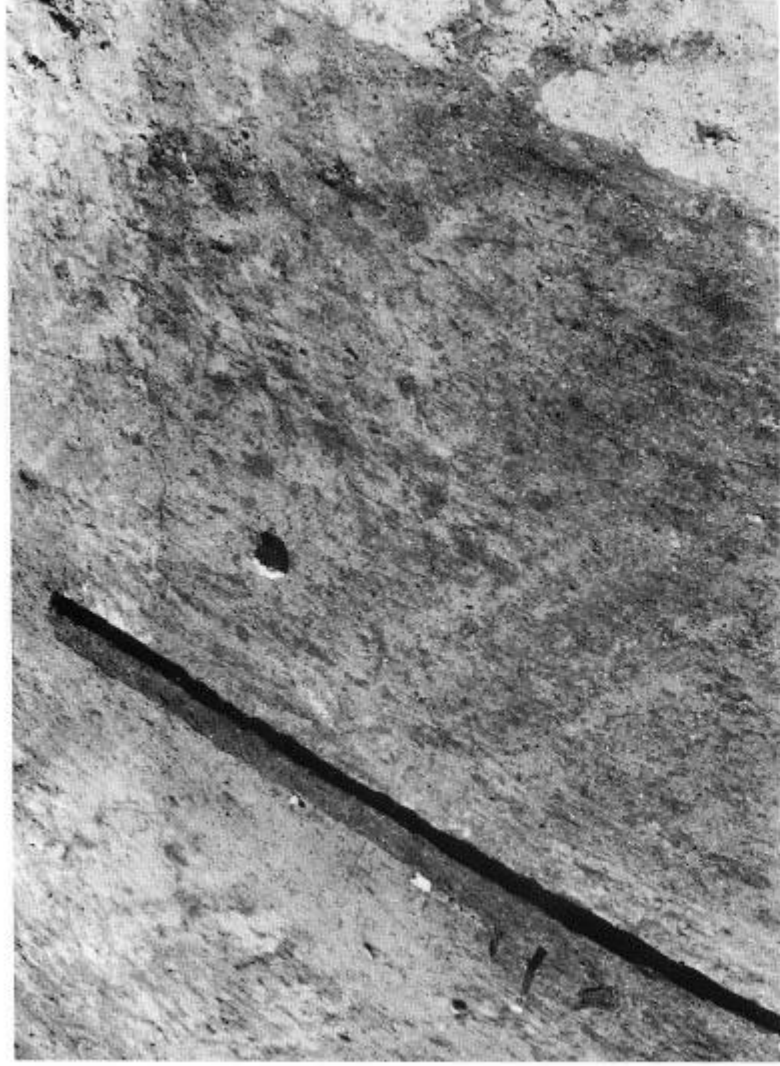
図版33 S1001 竪穴住居跡 (上) 断面 (東▶西)
(下) 断面 (北▶南)



図版34 (上) S I 002 竪穴住居跡 (東→西)

(下) S I 002 竪穴住居跡カマド完掘状態 (北→南)

妻の神工遺跡



図版35 S1002 竪穴住居跡 (上) 確認状態 (西▶東)
(下) 完掘状態 (東▶西)



図版36 S1002竪穴住居跡 (上) カマド断面(東▶西)
(下) カマド内土器出土状態(北▶南)



図版37 S1003 竪穴住居跡 (上) 炭化物出土状態 (北▶南)
(下) 炭化物出土状態 (東▶西)

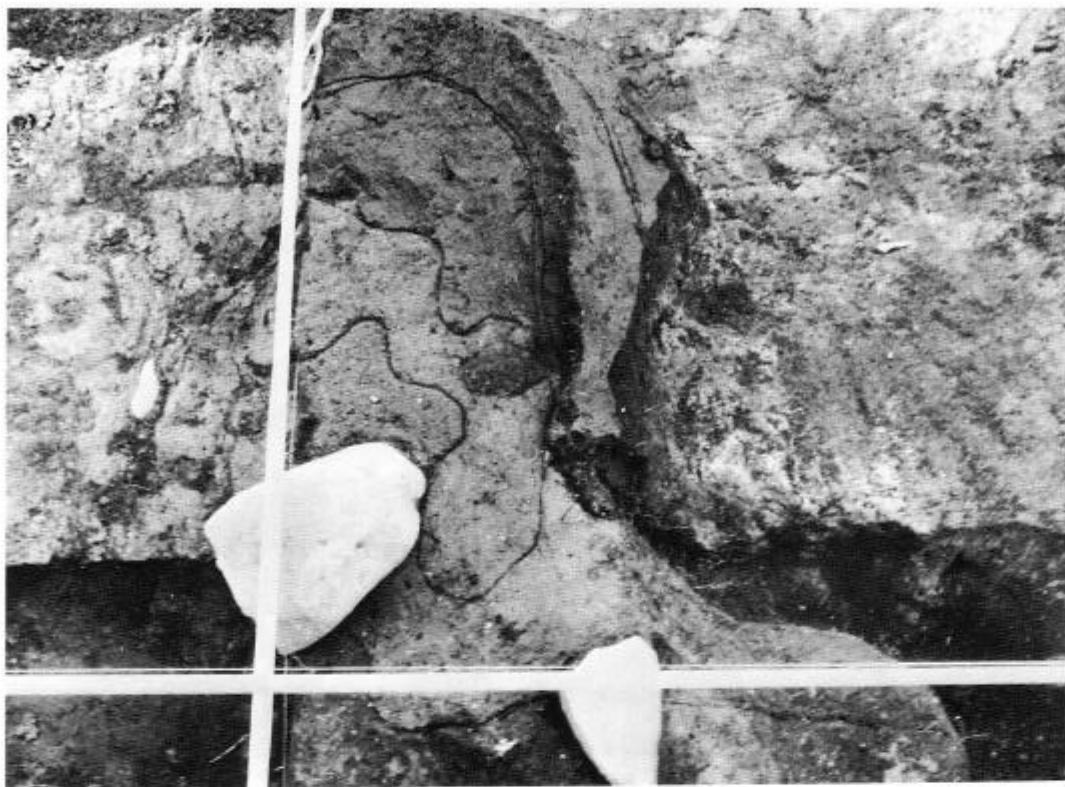


図版38 (上) S 1 003 竪穴住居跡炭化物出土状態 (北 ▶ 南)

(下) S 1 003 竪穴住居跡 (北 ▶ 南)



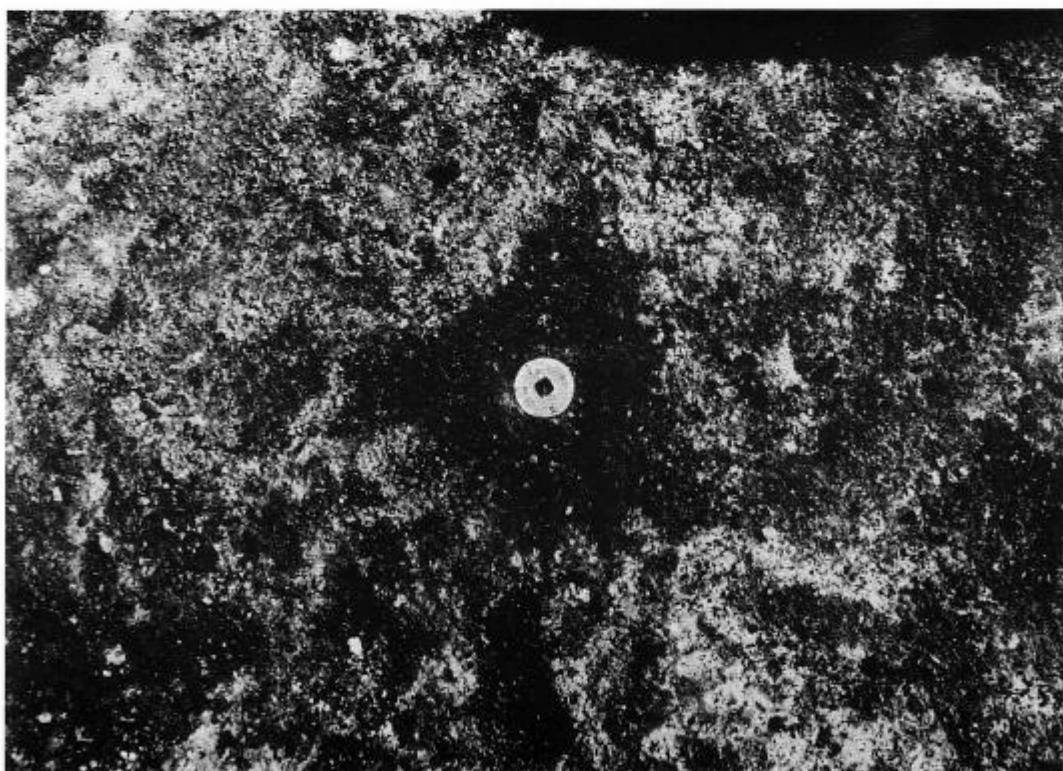
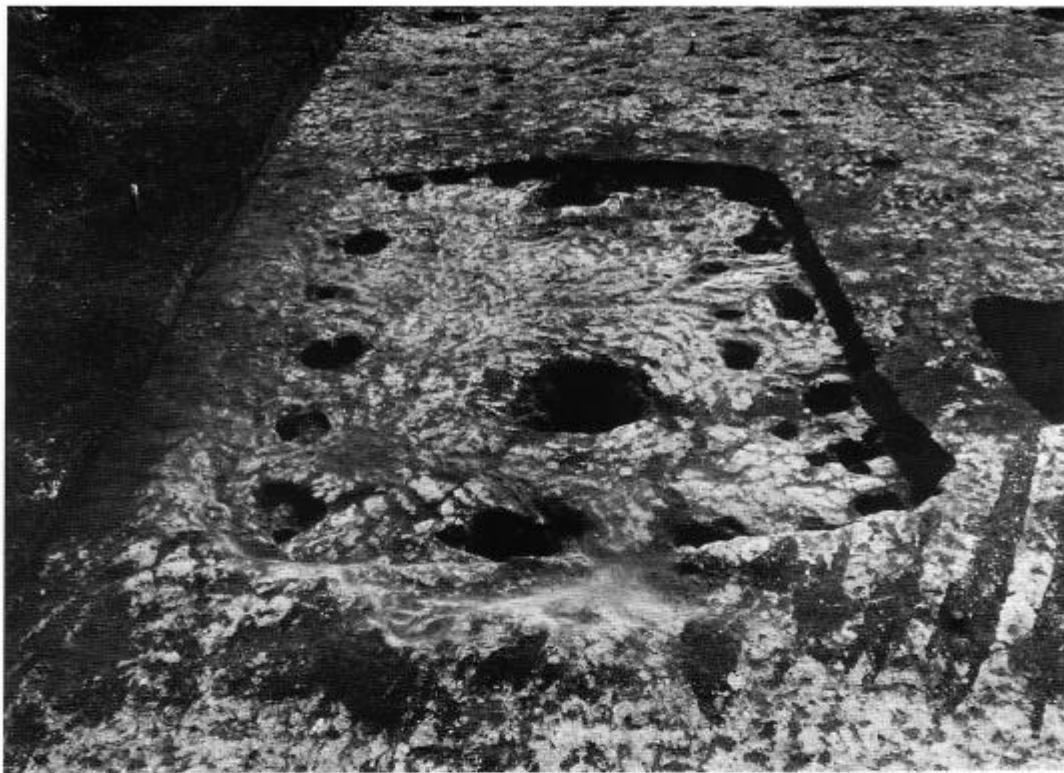
図版39 S I 003竪穴住居跡 (上) カマド (北▶南)
(下) カマド (北▶南)



図版40 S1003竪穴住居跡 (上) カマド
(下) カマド完掘状態 (北→南)

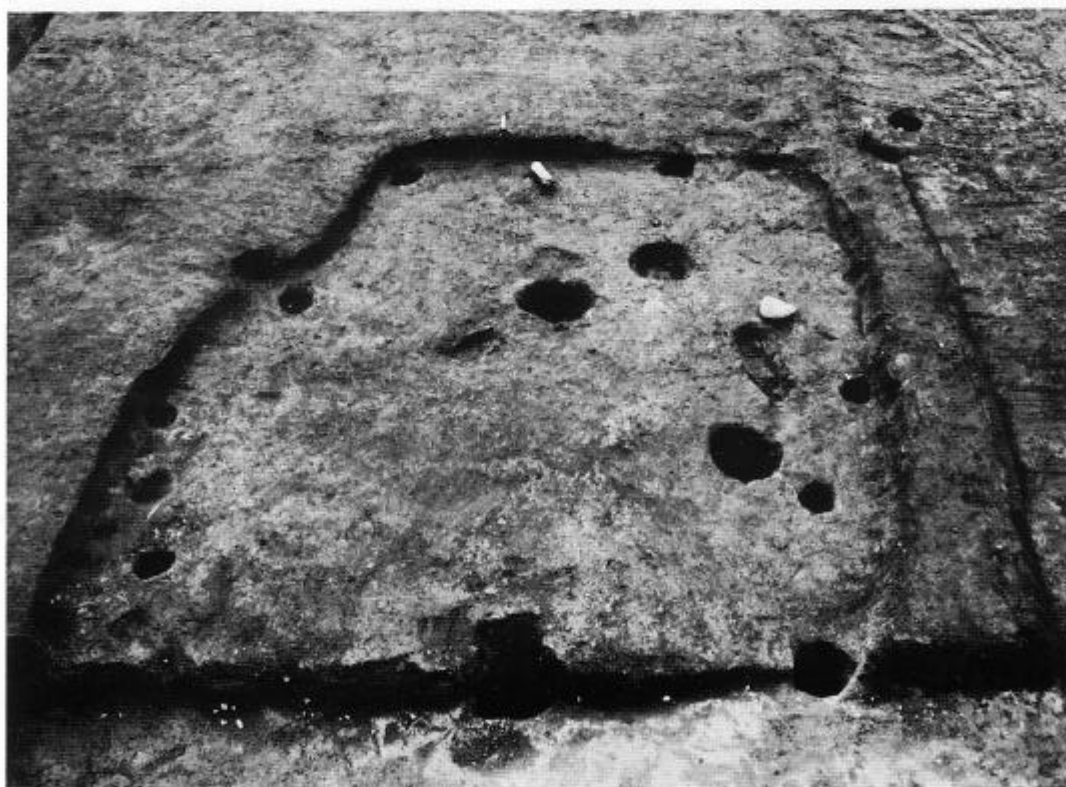
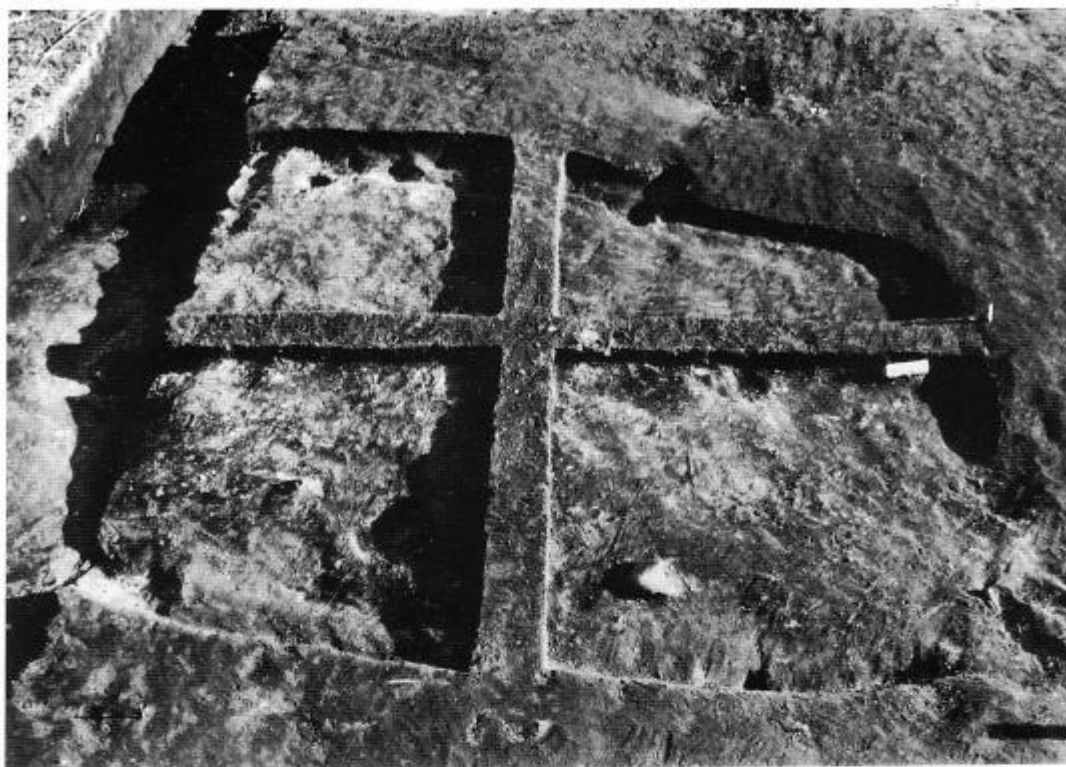


図版41 S1006 竪穴住居跡 (上) 確認状態 (西▶東)
(下) 完掘状態 (北西▶南東)



図版42 (上)S 1006 竪穴住居跡 (北▶南)

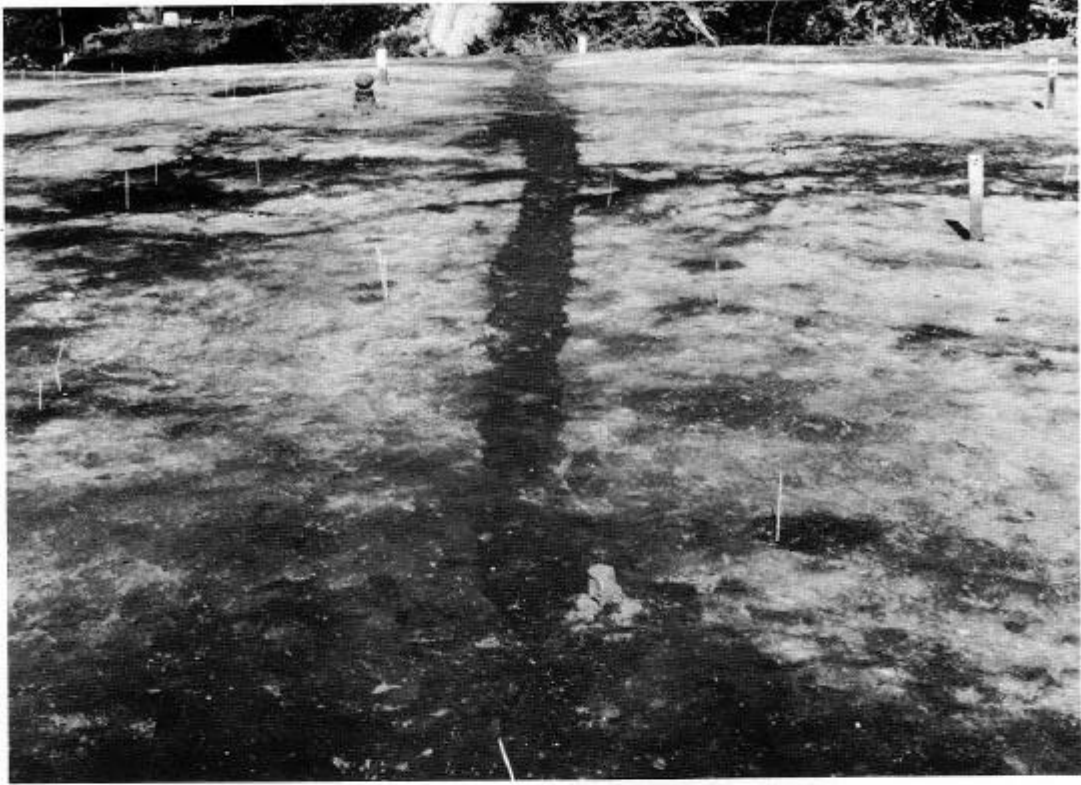
(下)S 1006 竪穴住居跡内古銭出土状態



図版43 (上)S1007竪穴住居跡(北▶南)
(下)S1007竪穴住居跡完掘状態(東▶西)

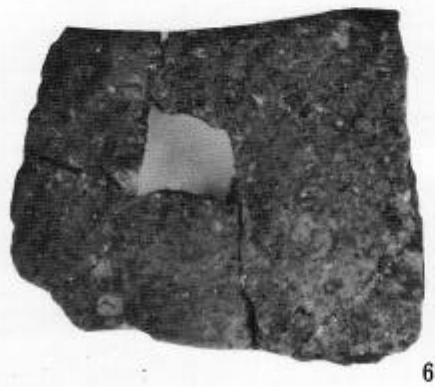


図版44 S D008溝跡 (左) 確認状態 (東▶西)
(右) 完掘状態 (西▶東)

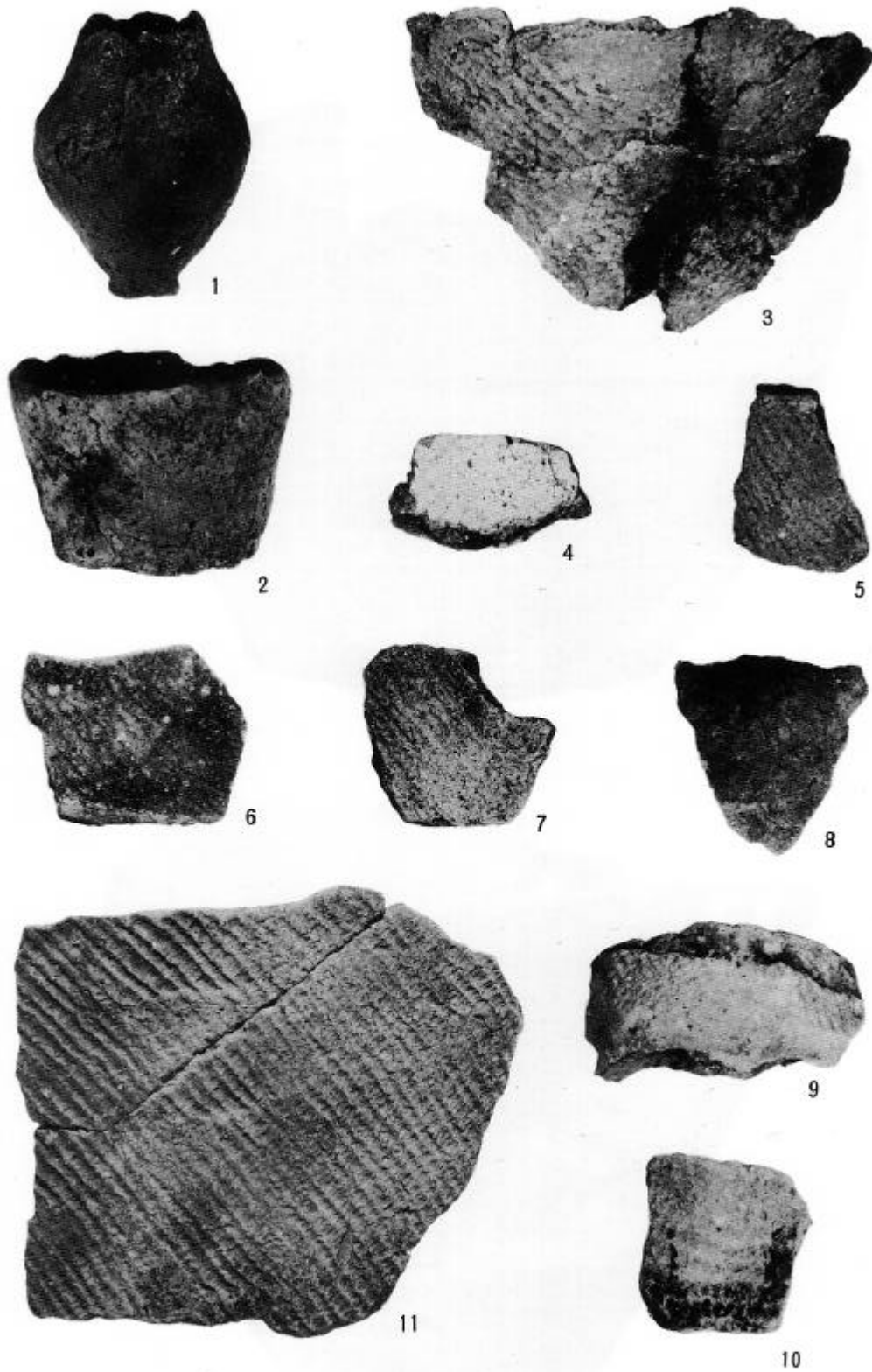


図版45 (上) S D013溝跡 (南▶北)

(下) 発掘調査風景



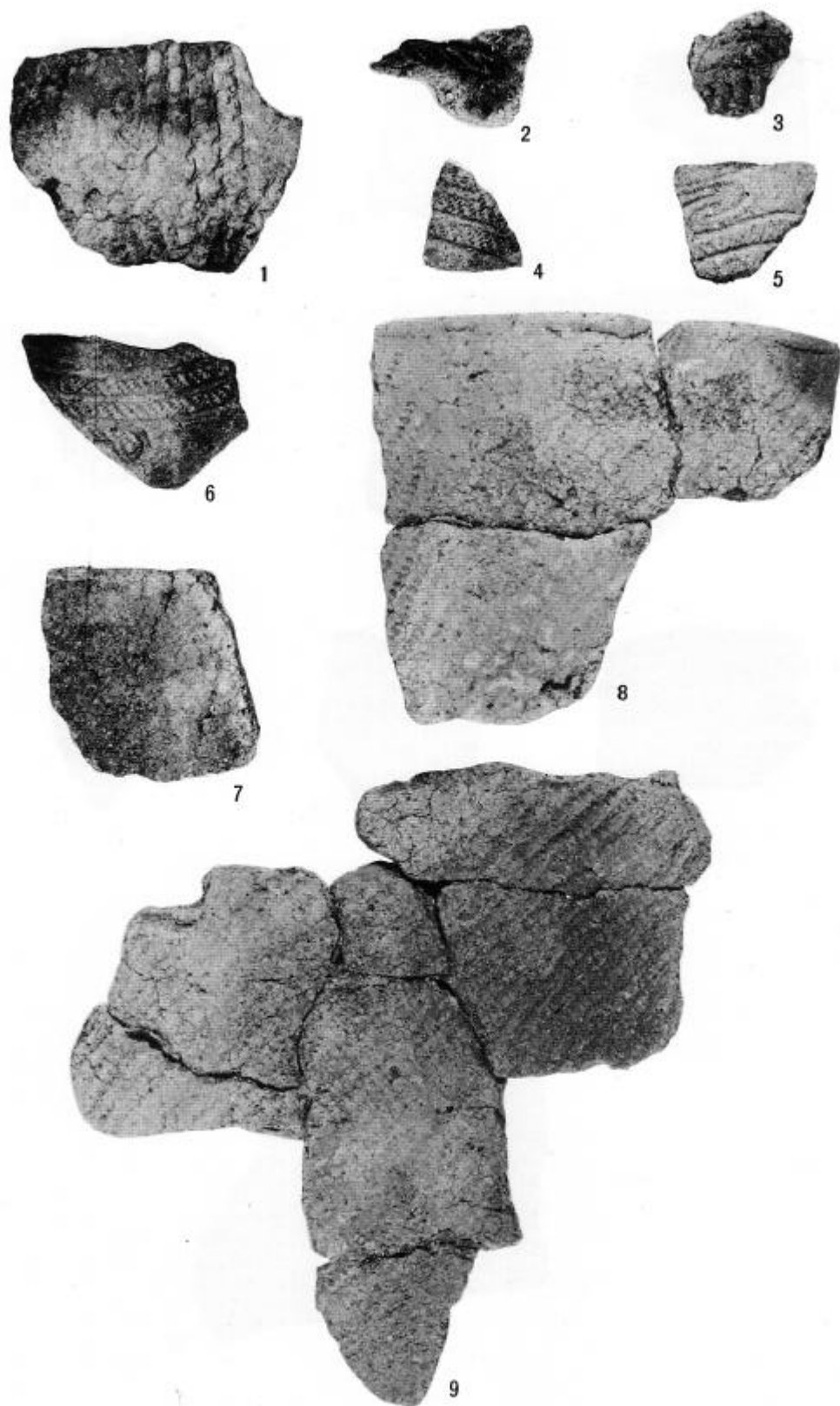
図版46 S I 025 竪穴住居跡出土土器



図版47 S I 037・038 竪穴住居跡出土土器



図版48 S X(U)039・040埋設土器



図版49 遺構外出土土器(1)



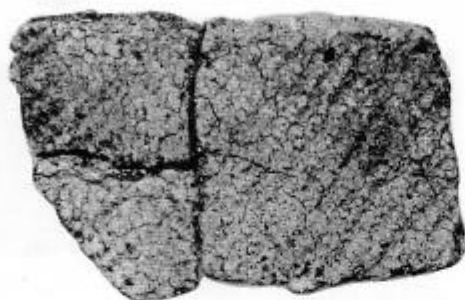
10



11



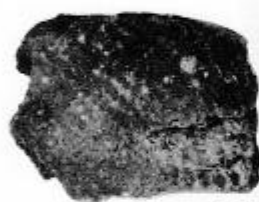
12



13



14



15



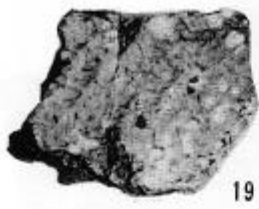
16



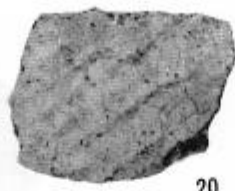
17



18



19



20



21



22



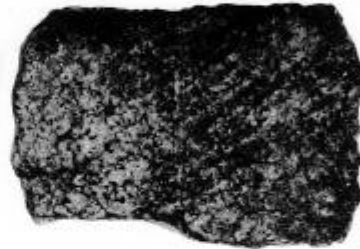
23



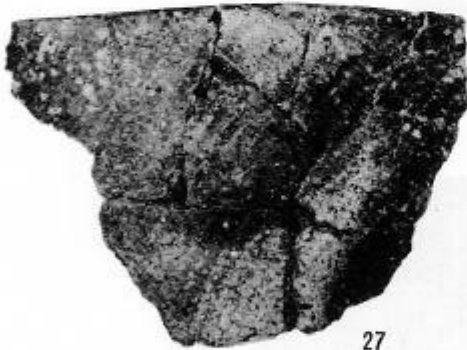
24



25



26



27



28



29



30

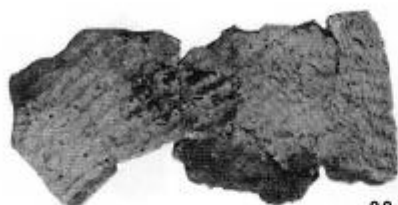
図版51 遺構外出土土器(3)



31



32



33



34



35



36



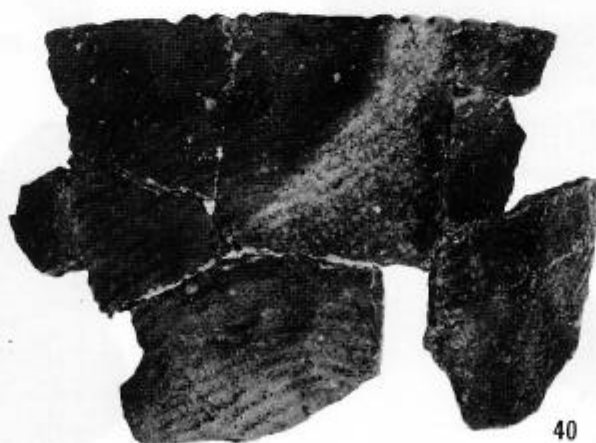
37



38

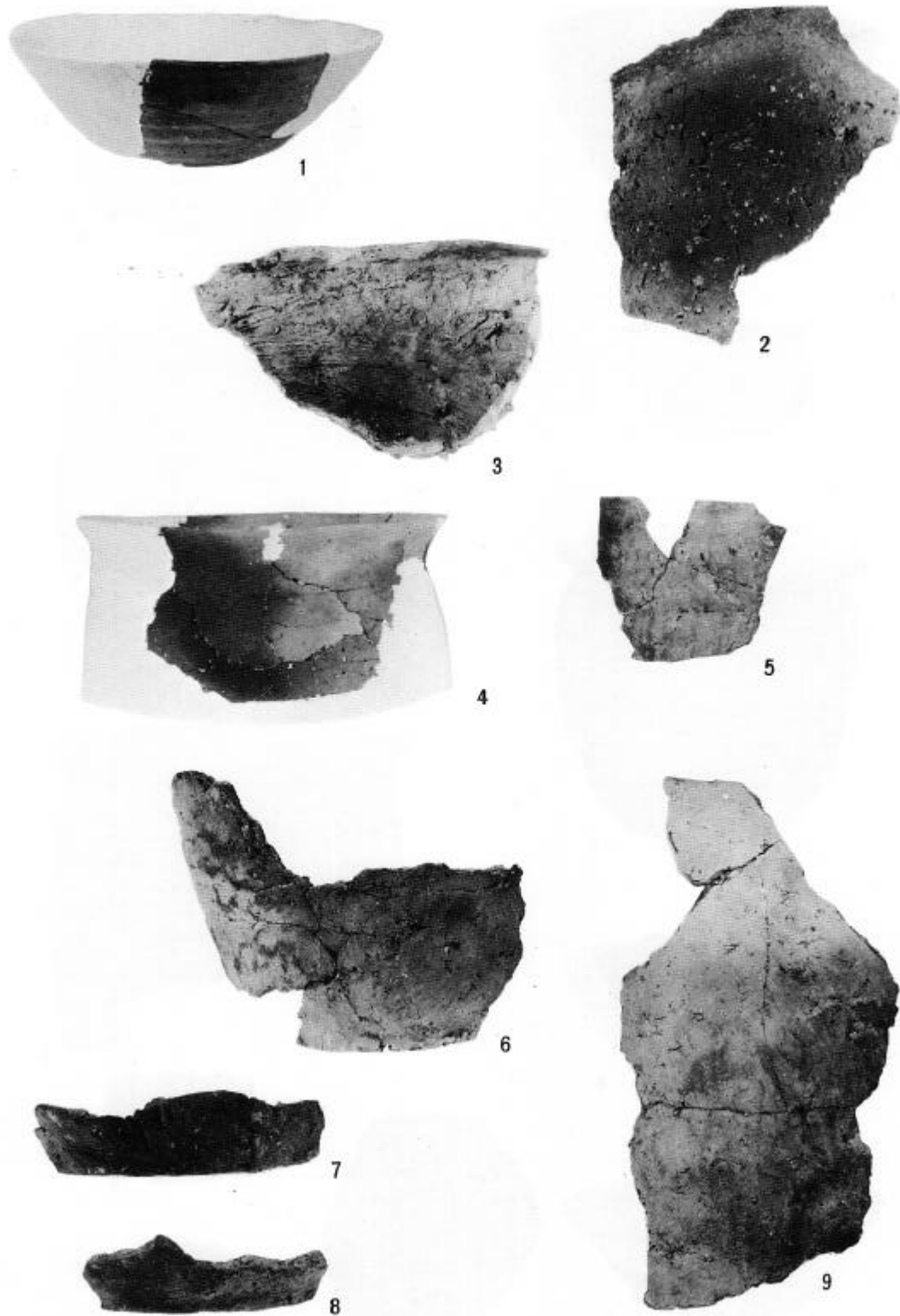


39

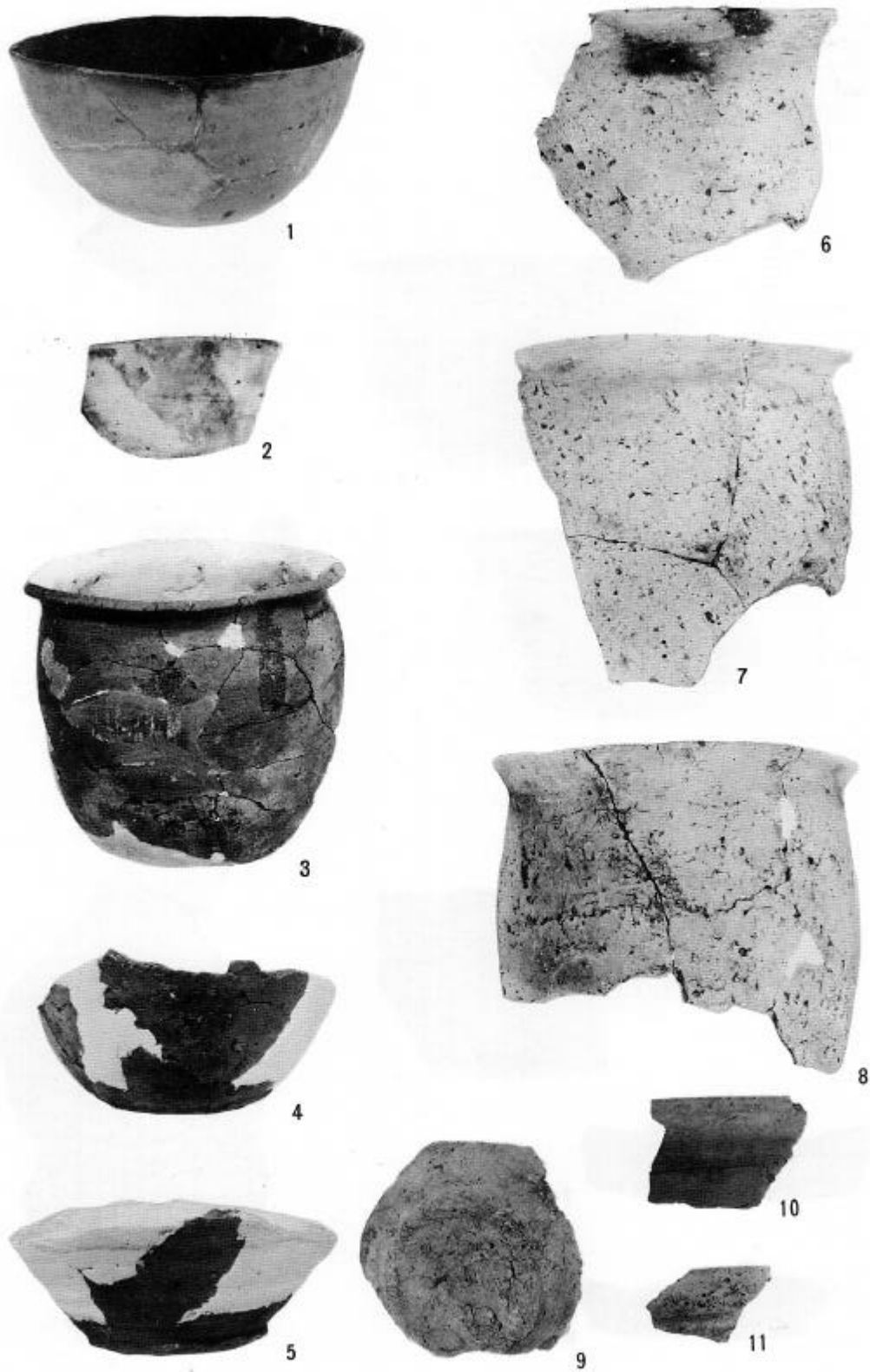


40

図版52 遺構外出土土器(4)



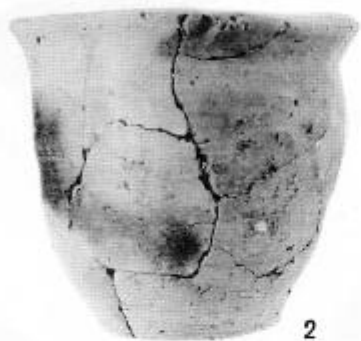
図版53 S1001竪穴住居跡出土土器



図版54 S1002竪穴住居跡出土土器



1



2



3



4



5



6



7



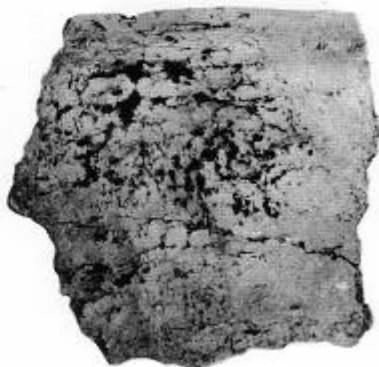
8



9

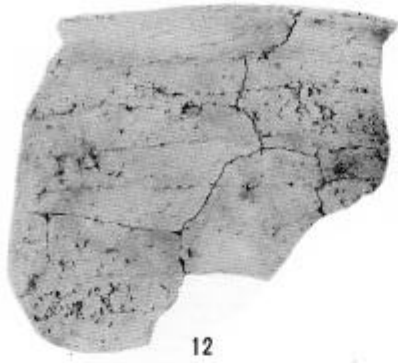


10



11

図版55 S1003竪穴住居跡出土土器(1)



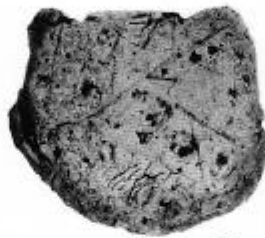
12



13



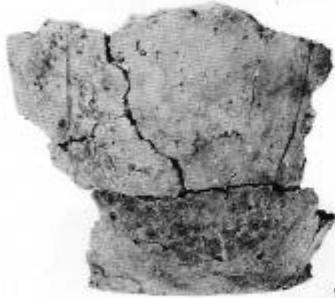
14



15



16



17



18



19

図版56 S1003竪穴住居跡出土土器(2)

下 乳 牛 遺 跡

遺 跡 番 号	No.26
所 在 地	鹿角市花輪字下乳牛 151 番地の 3 他
調 査 期 間	昭和55年 9 月24日～12月 4 日
発掘調査予定面積	1,478m ²
発掘調査面積	1,540m ²

1 遺跡の概観

岩手との県境に源を発する米代川は、県北部を横断して日本海に注ぐ全長 137 kmにも及び県内でも長い河川の一つである。この上流地域に位置する鹿角盆地は南北に長くひらけ、枝状に広がる多くの支流が盆地を貫いている。鹿角市花輪はこの盆地のほぼ中央にある。市内を流れる河川の流域には段丘が形成され、特に東部ではその発達が著しい。これらの段丘は原始から生活の場としてもさかんに利用され、中世に至っては至る所に館がつけられた。近代になると集落の多くはこの段丘下につくられ、これらを結ぶ道が長く北へのびている。遺跡はこの道を花輪から約 3.5 km北北東の所に形成された丘陵の東斜面に位置する。丘陵の東側には道をはさんでわずか 300 mの所まで段丘が迫っており、北及び南北には米代川の支流である不動川、乳牛川が裾部を流れている。これらの川は過去幾度となく氾濫をくり返し、段丘に連なっていたであろう丘陵東面は侵食され、現在は独立丘の様相を呈する。丘陵は南北に長く馬の背状を呈し、標高は 138 m、斜面は頂付近が急峻であるが、裾部になると緩やかに広がる。

2 調査の方法

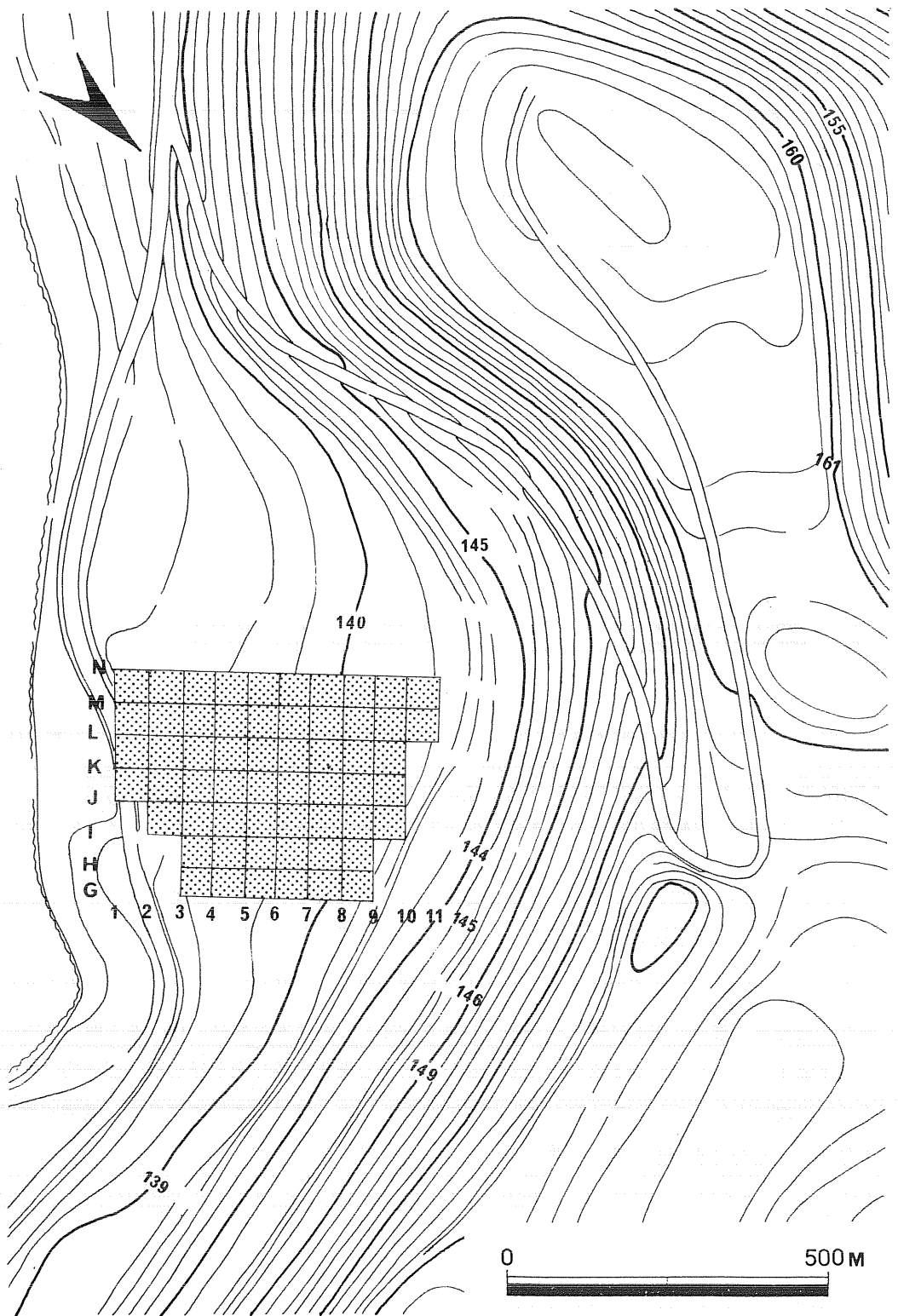
遺跡は東北縦貫自動車道の路線予定地内にあたる事から、日本道路公団設置の路線中心杭 S T A 162と S T A 163を結ぶ線を基線とし、これに直交する形で 5 m×5 mのグリッドを調査区内に設定した。したがって基線は路線方向に一致するため N-29°-W の方向に示される。

グリッドにはこの基線方向に沿い南から北にかけては算用数字 (1、2、3……11) を、東から西にかけてはアルファベット文字 (G、H、I……N) を順列させて付し、それぞれのグリッドの南東隅の合致記号を、そのグリッド名称とした。したがって調査区南西隅のグリッドの場合は M-1 グリッドとなる。

調査区は試掘の結果斜面裾部へ行く程表土の堆積が厚く、一部では 1 m 余にも達することが判明したため、東西、南北に幅 1 m のトレンチを設定し、表土層を確認の後、表土層は重機によって除土した。しかし調査区では遺構の確認に大きな要素を持つ大湯浮石層が部分的に良好な状態で確認されたため、除土には細心の注意をはらった。特に調査区南側では、遺構の検出も予想されたので当初から人力に依った。

3 調査の経過

発掘調査は昭和55年の9月24日から12月4日まで行った。



第1図 地形図およびグリッド配置図

9月24日、調査開始。調査は試掘で遺構が確認された西側の緩斜面から行う。29日、S I 01 堅穴住居跡検出。遺構内全面に大湯浮石が混入しているのを確認。10月1日、S I 01 精査開始。浮石は遺構内に深くレンズ状に堆積している。浮石を除去するにつれ多量の炭化物を検出。焼失家屋と断定する。2日、S I 01に隣接してS I 02 堅穴住居跡検出。13日、S I 01内の浮石を除去し炭化材の精査に入る。炭化材は極めて良好に残存しており、この部分で多量の坏形土師器が出土。18日、S I 02の精査開始。S I 01の南面に隣接して堅穴状遺構S K(I)01を検出、上面に炭化材の混入が認められる。21日、調査区南西部より陥し穴状遺構S K(T)01を検出。23日調査区南西部よりフラスコ状ピットS K(F)01、土壌S K 01~02を検出。25日、降雨激し。斜面のため遺構に土砂が流入する。11月4日、調査区東側の粗掘を開始する。S I 01炭化材実測開始。10日、S I 02の精査完了。15日、雪が降る。S I 01にテントを張り中で実測を続行。フラスコ状ピット、土壌、陥し穴状遺構の精査完了。25日、鹿角市教育委員会職員一行視察。S I 01の炭化材を除去し、これを保存する。12月2日、全ての遺構の実測を終了する。4日、調査完了。

4 遺跡の層位

土層の基本層序を確認するため南—北方向はKライン、東—西方向は3ラインにトレンチを設定した。試掘の結果基本土層は4層で、堆積土は斜面上部で15~25cm、裾部になるに従い厚く50~60cm、最深部では1mに達することがわかった。以下各層について記す。

1層 黒褐色表土 全体として硬くしまっており、斜面裾部ほど厚く堆積している。浮石粒子を少量混入。

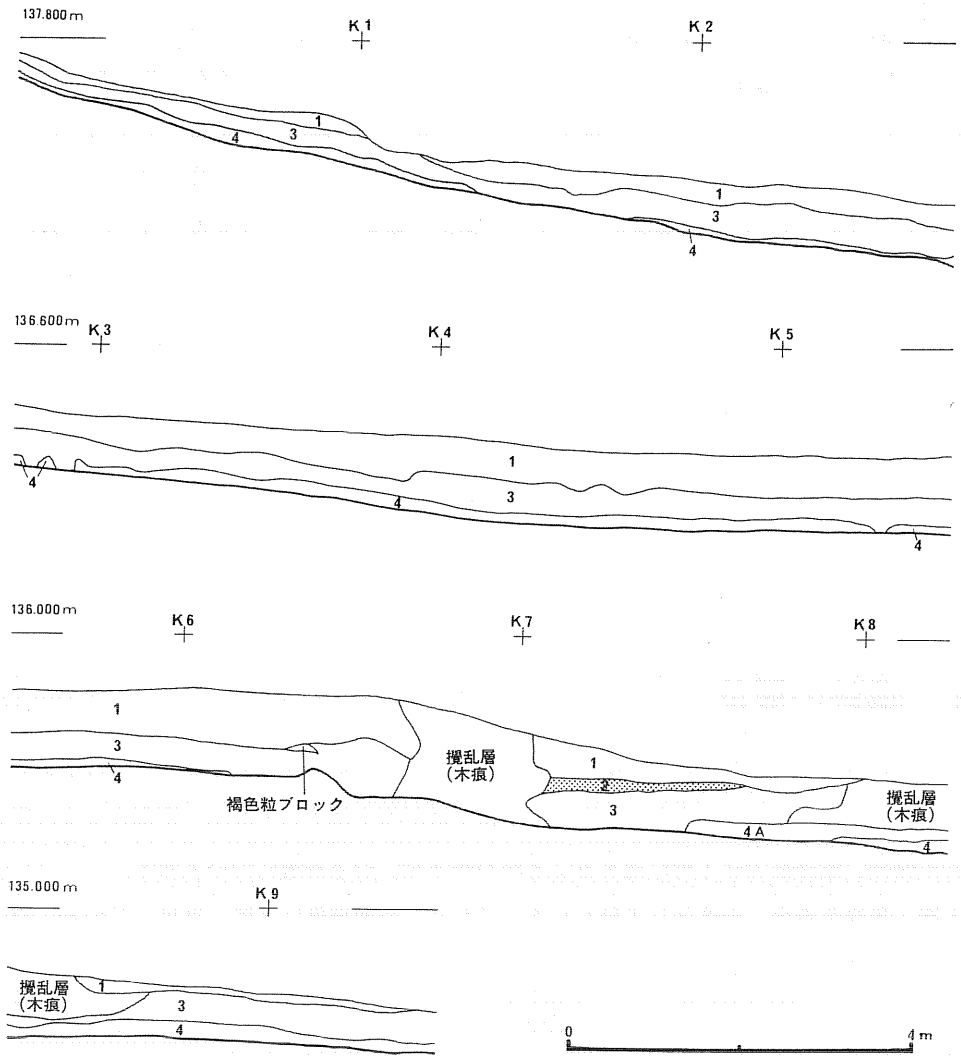
2層 いわゆる大湯浮石層である。斜面下位部分で主として検出され、上位部分ではほとんど認められない。

3層 黒色土。浮石粒子を少量混入。斜面上位部分では褐色土の混入が著しい。

4 a 層 黒褐色土
4 b 層 暗褐色土 いずれも色調、土質共類似しているが4 b 層では褐色土を比較的多く混入する。

遺構の確認は平安時代のものが3層中位面から地山にかけて、その他は主に地山上面である。遺構外出土の遺物は量が少ないが3層から4層にかけて出土している。

下乳牛遺跡



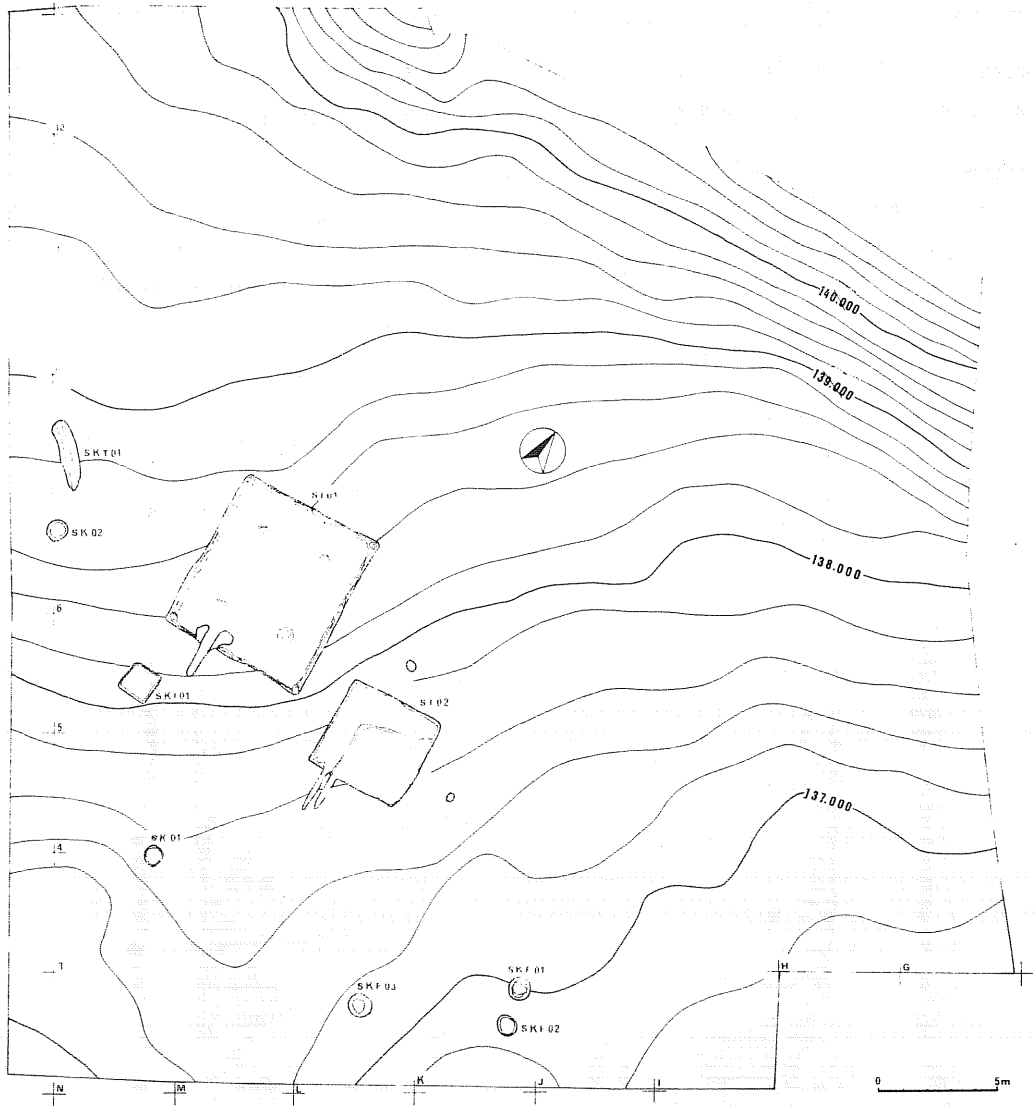
第2図 土層図

5 調査の記録

(1) 遺構と遺物

調査区南側の比較的緩やかな斜面上に2軒隣接して検出された。いずれも平安時代に属する。遺構の確認面は表土層の3層中位から地山上面にかけてである。S I 01 竪穴住居跡では、堆積土に浮石が多量に混入しており、3層の黒褐色土面でも明確にプランが確認できた。

S I 01 竪穴住居跡 (第4、5、6図 図版2、3、4、5、6、7)



第3図 遺構配置図

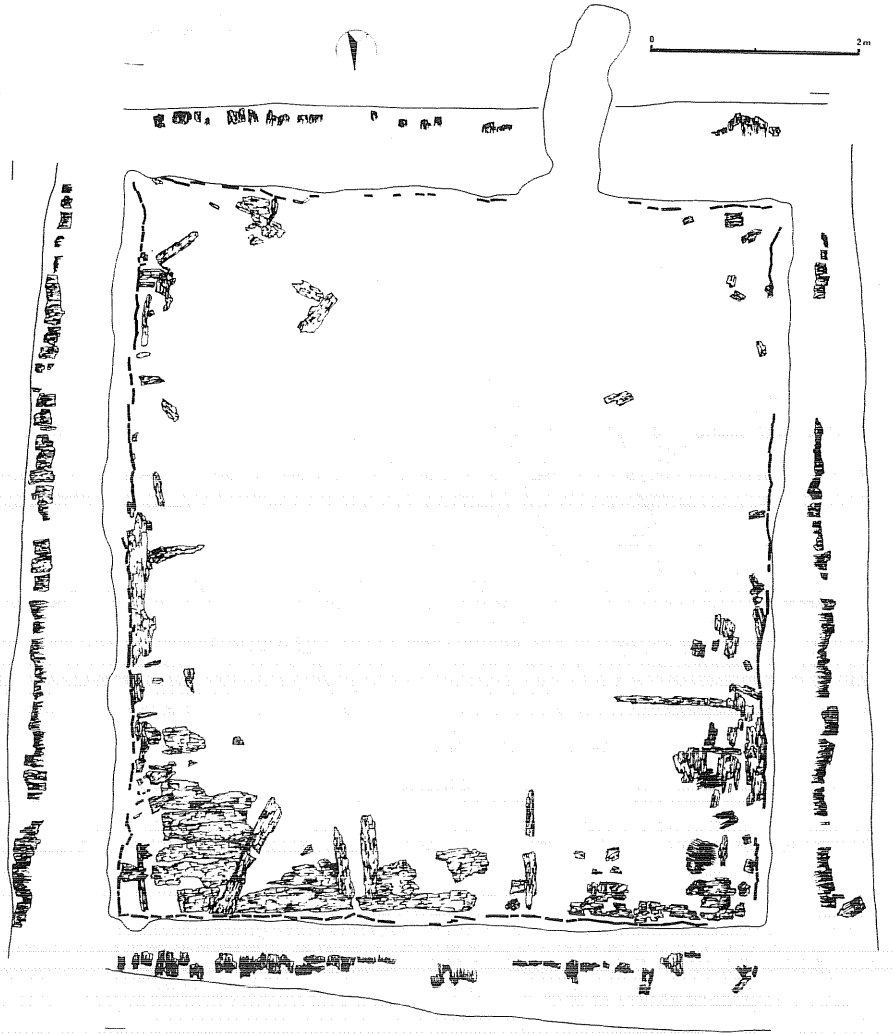
平面形 東西辺長7.8m、南北辺長8.5mで長方形を呈する。遺構の長軸方向はほぼ南—北に一致し、カマドは南壁西寄りに位置する。

堆積土 6層よりなる自然堆積、1～3層はレンズ状の堆積を示す。1層は浮石を多量に混入する軟質の黒褐色土、2層は浮石層で遺構内中央部では床面の直上まで堆積している。粒子の相違からさらに3層に細分できる。上位部分の2a層は粒子の極めて細かいものを主とし、灰白色もしくは白色の色調を呈する。2b層は細かい粒子が不規則に混在。2c層は粗く多孔質の黄褐色粒子を主とする。3層は層内下位部にかけて多量の炭化物と焼土を含む。4～6層は壁際に検出された。4a、5層は壁部崩落土である褐色土と焼土を主体とし、部分的に強く火熱を

下乳牛遺跡

受けている。この層を除去するにつれ多量の炭化材が検出された。4b層は壁溝の堆積土で比較的硬くしまっている。部分的に小片ではあるが壁板材の残存がわずかに検出された。6b層は褐色土を多く混入しており、東壁部分では壁と壁板との空間に人為的に埋めこまれたものと考えられる。

柱穴 遺構内の各隅部と各辺の中央に設定されると共に、内部には4本の支柱穴を有す。柱



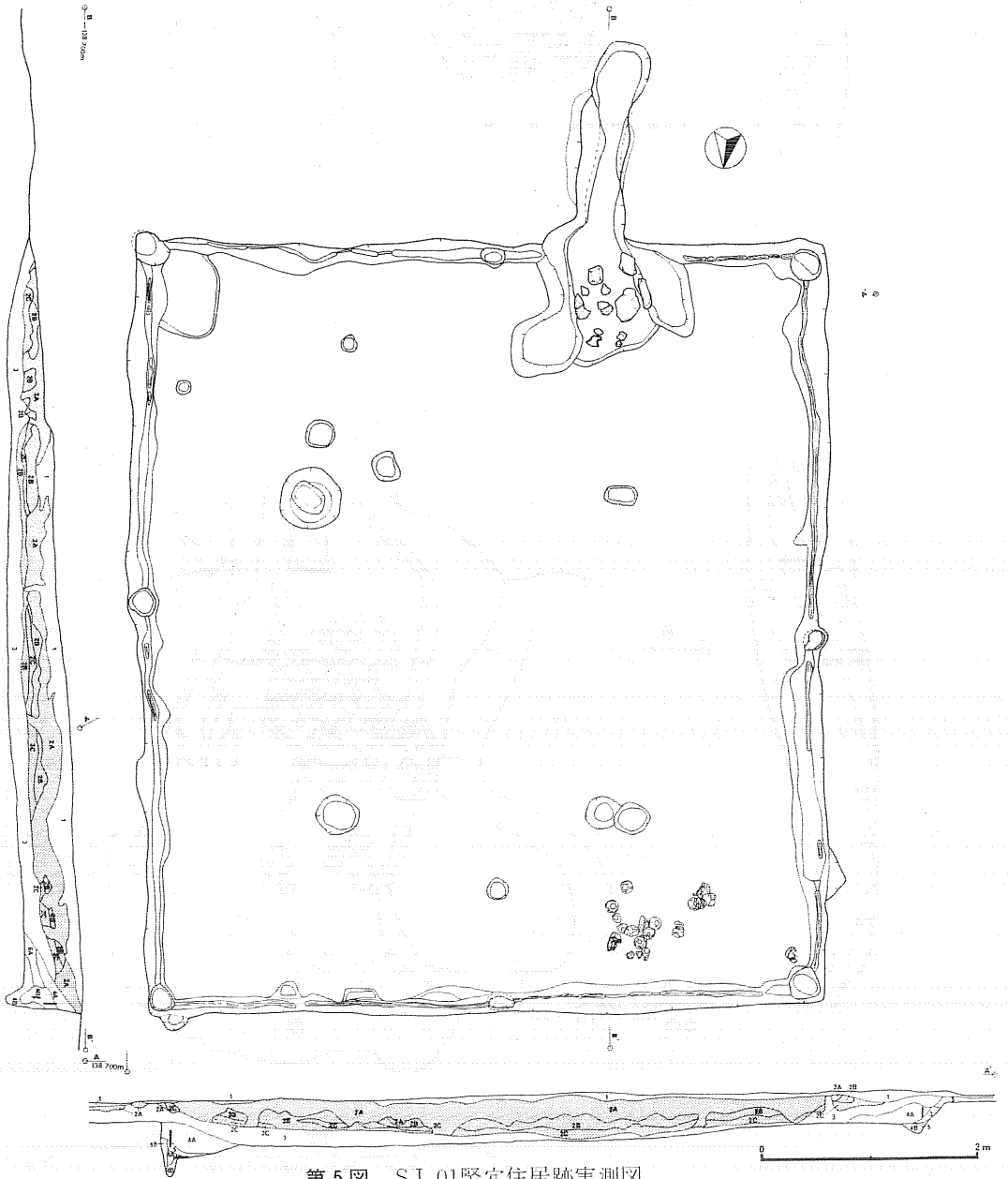
第4図 SI 01 竪穴住居跡炭化物出土状態図

穴内の堆積土は極めて軟質で、炭化物が混入している。

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は南壁が低く0.1~0.2m、他壁は0.4~0.5m、壁面に沿って壁板材が並び、その一部は壁面に付着している。

壁溝 カマド部分を除き一巡する。床面からの深さ0.13~0.17m、幅は北壁部が0.06~0.08m、他は0.03~0.05m。溝内底面の一部では直上の壁板材とほぼ同幅同長の凹みを有す。

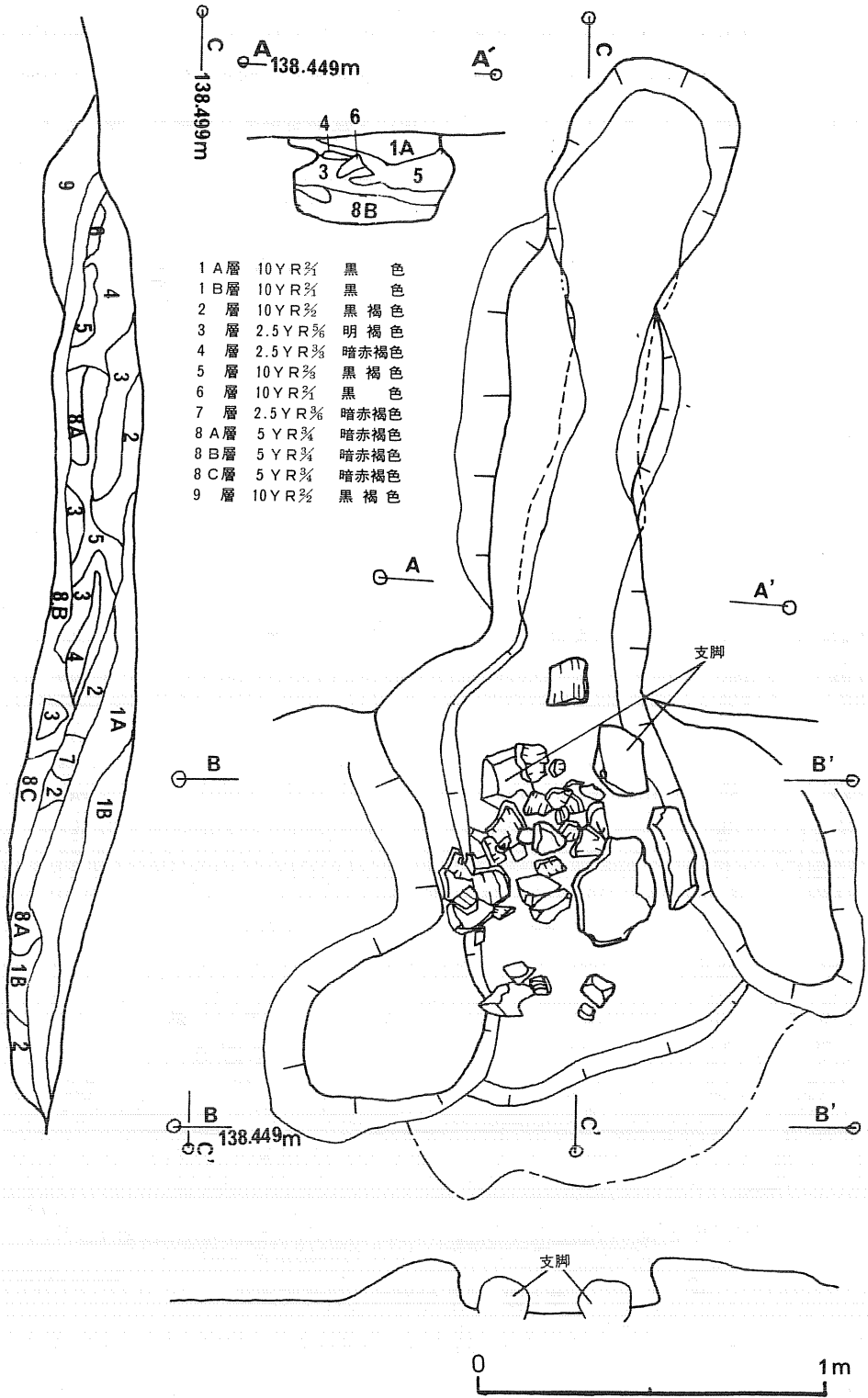
床面 遺構内北面及び西面と東面の北寄りの壁際に敷板材と考えられる炭化板材列を検出。炭化材除去後の床面は凹凸を呈し、土質がもろくボロボロと剥離しやすい。この状態は遺構内中央部から北側にかけてみられるが、カマド周辺と南面東壁寄りの部分は硬くしまっている。



第5図 SI 01 竪穴住居跡実測図

特に後者の場合灰褐色の粘土質土粒を混入し、壁部にかけてややマウンド状に盛り上がっている。

その他 本遺構からは多量の炭化物及び炭化材が検出されており、これらの大部分は2層浮



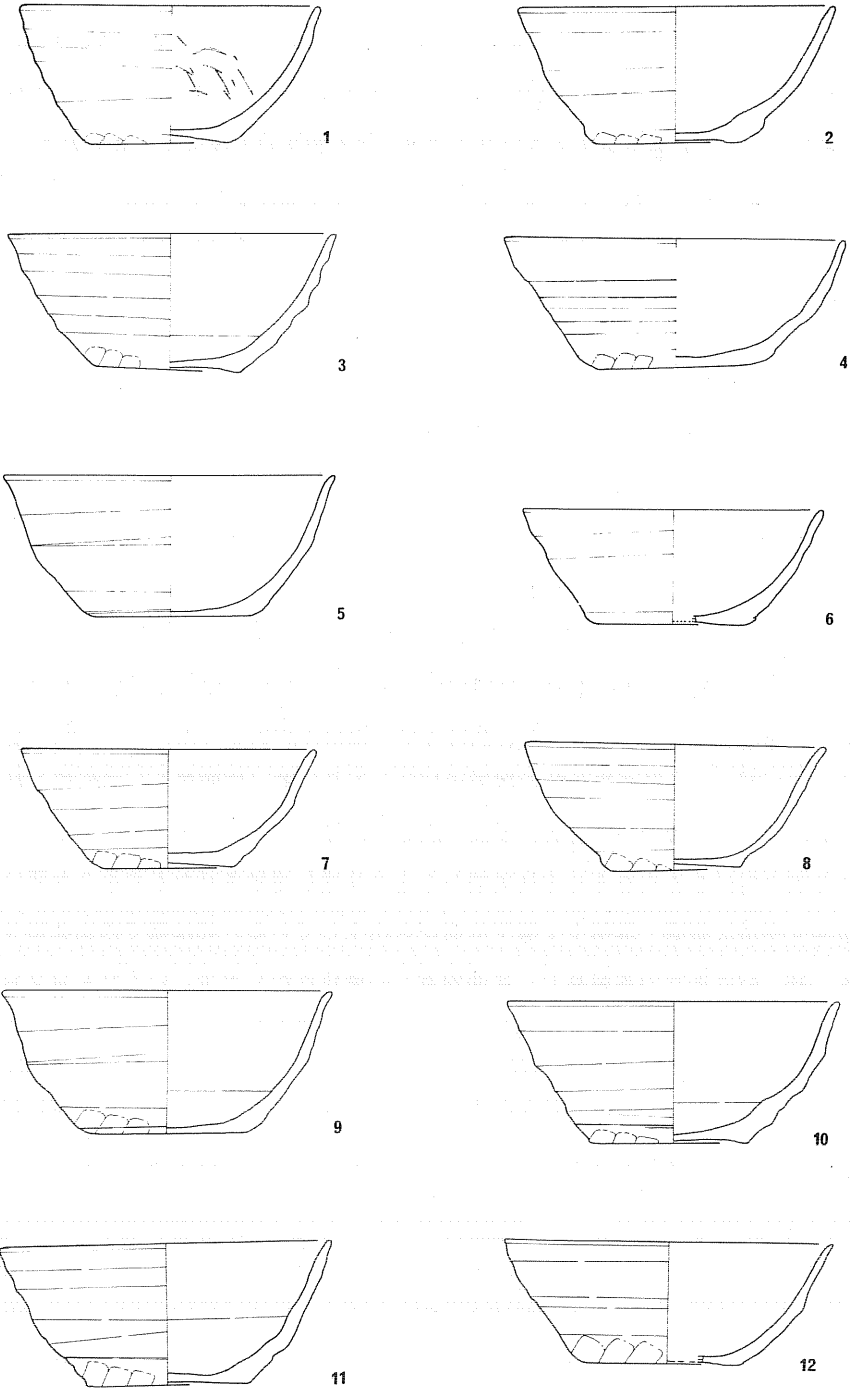
第6図 SI 01 竪穴住居跡カマド実測図

石層を除去した後、3層面であらわれ始める。3層上位面では直立した壁板材を除き主として炭化物と細片の炭化材であるが、3層下位面に至って板材の一部が検出され、壁付近にみられる火熱を受けた4 a、6層を除去するに及んで多くの炭化板材が床面上に現われた。これらは主として板材と丸太材で、板材は下面がほぼ同レベルで壁面に並行して設置されているものが多い。丸太材は良好なものが6本検出され、壁面に直交して一部は板材の下にしかれている形で検出された。

出土遺物 (第7、8、9、10、11図 図版12、13、14、15、16)

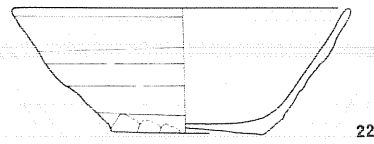
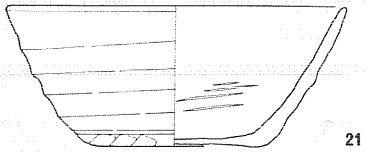
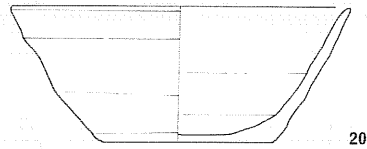
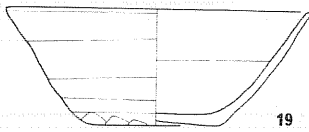
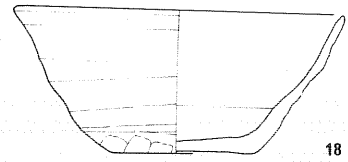
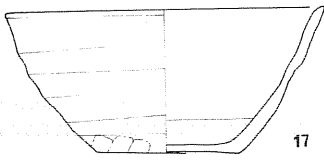
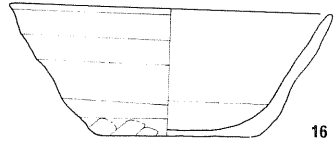
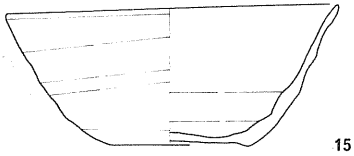
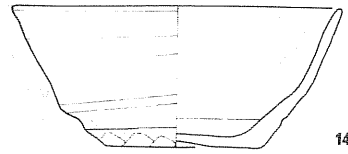
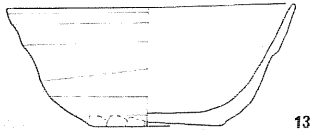
土師器は坏形土器を主体として甕、鍋形土器が出土。坏形土器は完形及び器形のほぼ判明できるもの37個で、内35個は住居跡内北面隅の一面に集中しており、その一部は6個(9、11、16、19、21、29)及び4個(3、4、17、22)がそれぞれ重なり合っている。いずれも床面上もしくは床面に配列された炭化材の上面に接して出土。また、全てが底部付近にヘラケズリ調整を施している。甕は40が住居跡内北西部の壁際で出土。他はカマド内からのものである。40、41は比較的小形で、外面にロクロによる整形痕を留める。43は鍋形土器で、輪積み成形の後、底部付近に粗いヘラケズリを施し、体部上面及び内面にはナデとハケ目を加えている。カマド燃焼部内より出土。須恵器は坏形土器が2個で、共にカマド袖部に隣接して出土。39は高台を付しており、内外面の一部にスズ状の炭化物が器面の $\frac{1}{2}$ にわたり附着、灯明皿として転用されたと思われる。土器に関しての個体別の計測、器面の調整方法等については第1表に示した。44は石帯で一面に2個の対になる穴をそれぞれ両端からえぐり通し連結させたものを3ヶ所に工作している。全面を平滑に研磨。堆積土1層下位面から出土している。45は櫛で西面北寄りの壁直下から出土。46、47は皿状の木製品で、北面西寄りの壁付近から出土。いずれもロクロを用いて製作しており、46は上面に坏形土師器がおかれ茶たくの様な状況を呈して検出された。

下乳牛遺跡



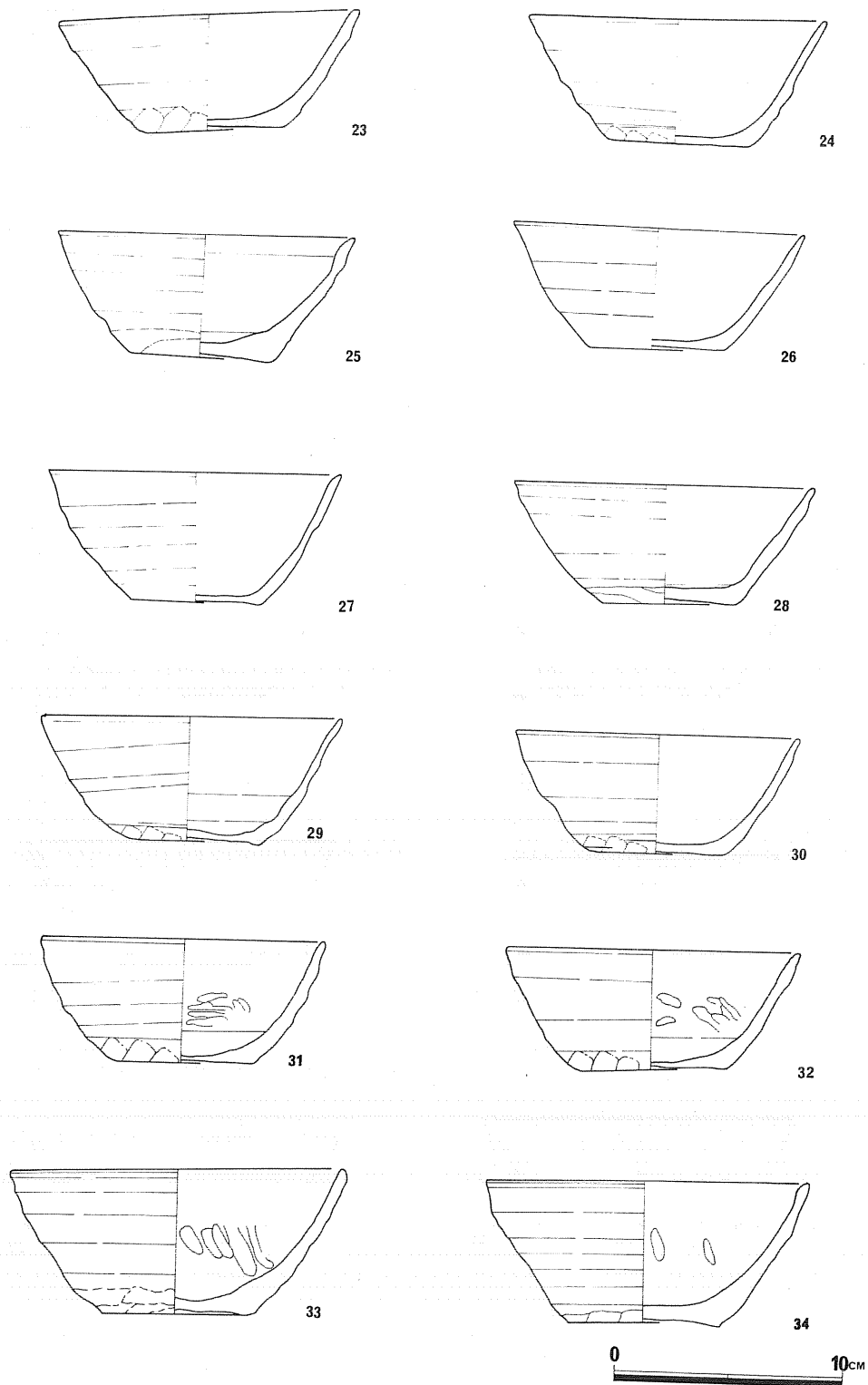
0 10cm

第7図 SI 01 竖穴住居跡出土遺物実測図(1) (坏形土師器)

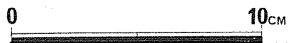
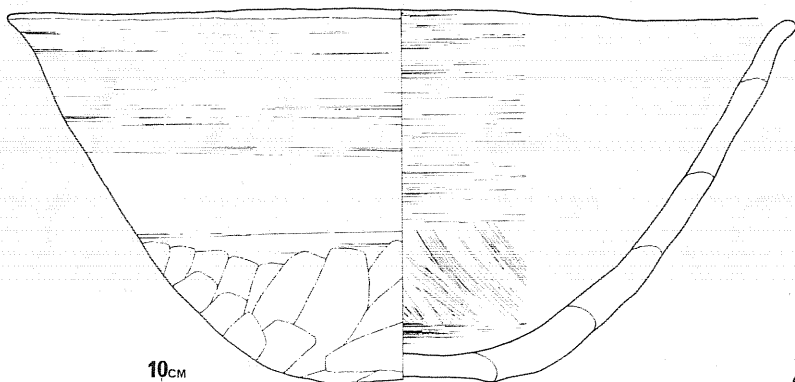
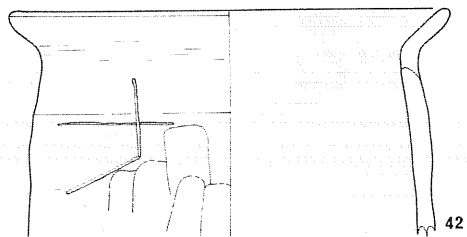
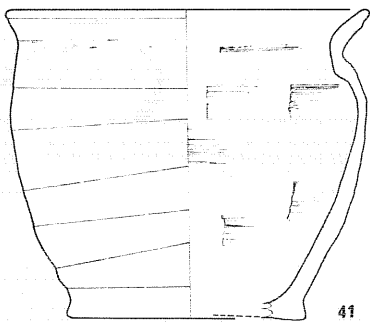
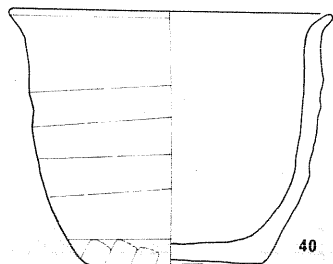
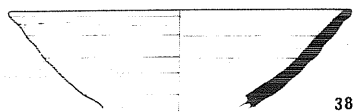
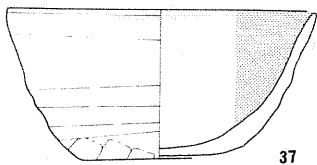
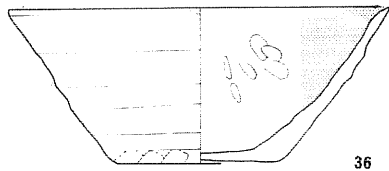
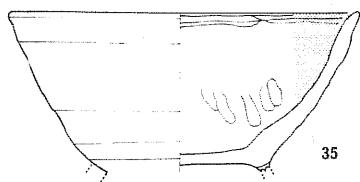


第8図 SI 01 竪穴住居跡出土遺物実測図(2) (环形土師器)

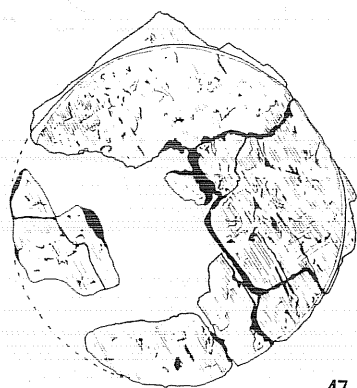
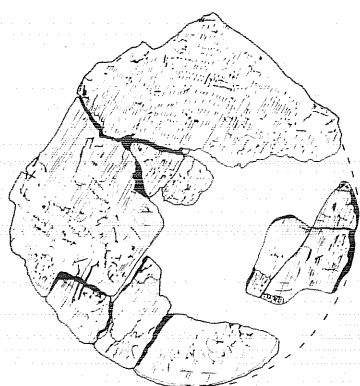
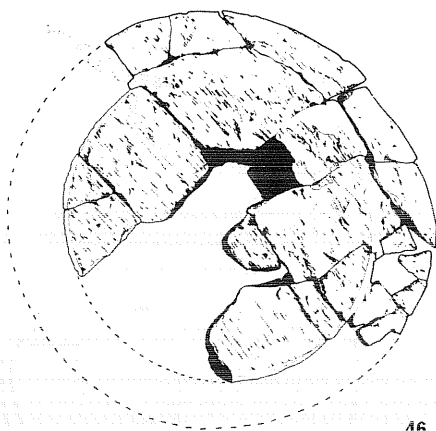
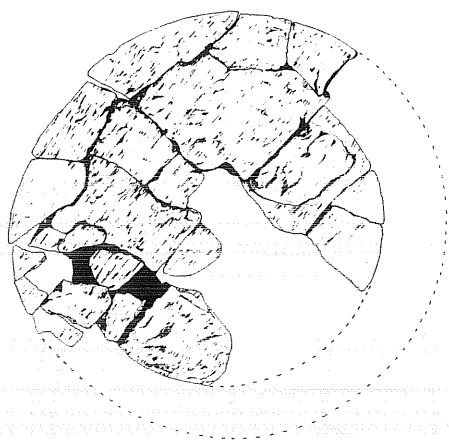
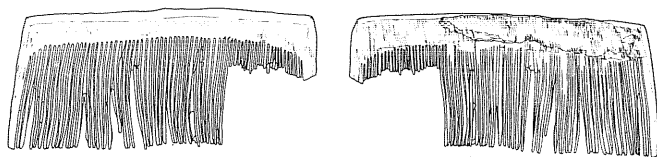
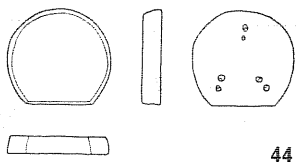
下乳牛遺跡



第9図 SI 01 竪穴住居跡出土遺物実測図(3) (环形土師器)



第10図 SI 01 竖穴住居跡出土遺物実測図(4) (坏形土師器35~37 坏形須恵器38、39)
(甕形土師器40~42 鍋形土師器43)



第11圖 SI 01豎穴住居跡出土遺物実測図(5)

(石帶44、櫛45
皿形木製品46・47)

第1表 S I 01出土土器観察表

挿 番 号	図 版 番 号	器 形	現 状	法 量 (cm)			器面調整 (外面)	器面調整(内面)	内面黒色処理	色 調	胎 土	器高	底径
				口径	底径	器高						口径	口径
7-1	12-1	坏形土師器	口縁部 一部欠損	12.1	5.5	5.5	底部ヘラケズリ			灰白色 浅黄橙色	砂粒微量含	0.45	0.45
7-2	12-2	坏形土師器	完形	12.7	5.8	5.3	底部ヘラケズリ			にぶい橙色	砂粒少量含	0.42	0.46
7-3	12-3	坏形土師器	口縁部・体部 一部欠損	13.0	5.7	5.4	底部ヘラケズリ			灰白色 橙 色	砂粒量	0.41	0.44
7-4	12-4	坏形土師器	口縁部 一部欠損	13.6	6.4	5.0	底部ヘラケズリ			明褐色 浅黄橙色	精選	0.37	0.43
7-5	12-5	坏形土師器	体部・底部 一部欠損	13.2	6.2	5.6	底部ヘラケズリ			浅黄橙色	砂粒微量含	0.39	0.47
7-6	12-6	坏形土師器	口縁部・底部 一部欠損	12.0	5.7	4.6	底部ヘラケズリ			浅黄橙色	砂粒少量含	0.38	0.48
7-7	12-7	坏形土師器	完形	11.8	5.1	4.8	底部ヘラケズリ			灰白色 浅黄橙色	砂粒微量含	0.41	0.43
7-8	12-8	坏形土師器	口縁部 一部欠損	12.0	5.1	5.0	底部ヘラケズリ			浅黄橙色	砂粒微量含	0.42	0.43
7-9		坏形土師器	完形	13.2	6.2	5.7	底部ヘラケズリ			浅黄橙色	砂粒微量含	0.42	0.47
7-10	12-10	坏形土師器	ほぼ完形	13.2	6.0	5.6	底部ヘラケズリ			灰白色 浅黄橙色	砂粒微量含	0.40	0.47
7-11	12-11	坏形土師器	ほぼ完形	13.2	6.5	5.6	底部ヘラケズリ			橙 色	砂粒少量含	0.42	0.49
7-12	13-12	坏形土師器	口縁部 一部欠損	13.0	6.0	4.9	底部ヘラケズリ			浅黄橙色	砂粒含	0.41	0.48
8-13	13-13	坏形土師器	口縁部 一部欠損	11.6	5.0	4.7	底部ヘラケズリ			浅黄橙色 褐白色	砂粒微量含	0.41	0.43
8-14	13-14	坏形土師器	口縁部 一部欠損	13.1	6.0	5.6	底部ヘラケズリ			橙 色	砂粒微量含	0.42	0.43
8-15	13-15	坏形土師器	体部 一部欠損	13.2	5.6	5.4	底部ヘラケズリ			浅黄橙色 橙 色	砂粒少量含	0.41	0.42
8-16	13-16	坏形土師器	口縁部 一部欠損	13.6	6.4	5.1	底部ヘラケズリ			明褐色 浅黄橙色	精選	0.37	0.47
8-17	13-17	坏形土師器	完形	12.7	5.6	5.8	底部ヘラケズリ			浅黄橙色	砂粒微量含	0.45	0.44
8-18	13-18	坏形土師器	ほぼ完形	13.2	5.7	5.7	底部ヘラケズリ			橙 色 灰白色	砂粒微量含	0.43	0.43
8-19	13-19	坏形土師器	完形	12.2	5.2	4.6	底部ヘラケズリ			橙 色	砂粒少量含	0.38	0.47

挿 図	図 版	器 形	現 状	法 量 (cm)			器面調整 (外面)	器面調整(内面)	内面黒色処理	色 調	胎 土	器高 底径	
				口径	底径	器高						口径	口径
8-20	13-20	坏形土師器	口縁部・体部 一部欠損	13.4	5.7	5.4	底部ヘラズリ			浅黄橙色	砂粒含	0.40	0.43
8-21	13-21	坏形土師器	口縁部 一部欠損	13.6	6.4	5.6	底部ヘラズリ			浅黄橙色	精 選	0.41	0.47
8-22	14-22	坏形土師器	体 部 一部欠損	13.5	6.0	4.8	底部ヘラズリ			浅黄橙色	砂粒含	0.36	0.44
9-23	14-23	坏形土師器	口縁部・底部 一部欠損	13.2	6.0	5.1	底部ヘラズリ			橙 色	精 選	0.39	0.44
9-24	14-24	坏形土師器	ほぼ完形	13.2	5.9	5.3	底部ヘラズリ			淡橙色 黒褐色	砂粒微量混入	0.41	0.43
9-25	14-25	坏形土師器	完 形	13.0	6.2	5.4	底部ヘラズリ			浅黄橙色 褐灰色	砂粒微量混入	0.42	0.48
9-26	14-26	坏形土師器	体部・底部 一部欠損	12.8	5.7	5.3	底部ヘラズリ			浅黄橙色	砂粒微量混入	0.39	0.47
9-27	14-27	坏形土師器	体部下半 一部欠損	12.8	5.6	5.8	底部ヘラズリ			灰白色	砂粒微量混入	0.45	0.44
9-28	14-28	坏形土師器	完 形	13.3	5.7	5.2	底部ヘラズリ			灰白色 浅黄橙色	砂粒微量混入	0.39	0.43
9-29		坏形土師器	口縁部 一部欠損	13.2	5.6	5.4	底部ヘラズリ			明褐色 浅黄橙色	精 選	0.37	0.47
9-30	14-30	坏形土師器	ほぼ完形	12.5	5.6	5.2	底部ヘラズリ			浅黄橙色	砂粒含	0.42	0.44
9-31	14-31	坏形土師器	口縁部 一部欠損	12.4	5.9	5.4	底部ヘラズリ	口縁・体部・底部 ヘラミガキ		黄橙色 灰黄褐色	精 選	0.43	0.46
9-32	14-32	坏形土師器	ほぼ完形	12.8	6.4	5.2	底部ヘラズリ	口縁・体部・底部 ヘラミガキ		灰白色 浅黄橙色	砂粒微量含	0.40	0.48
9-33	15-33	坏形土師器	完 形	14.7	6.5	6.3	底部ヘラズリ	体部・底部 ヘラミガキ		橙 色 灰黄褐色	精 選	0.43	0.44
9-34	15-34	坏形土師器	完 形	14.1	6.6	6.2	底部ヘラズリ	底部ヘラミガキ		橙 色 灰黄褐色	精 選	0.44	0.47
10-35	15-35	坏形土師器	口台部 一部欠損	14.1	6.0		底部ヘラズリ	口縁・体部・底部 ヘラミガキ	○	黄橙色 褐灰色	精 選		0.43
10-36	15-36	坏形土師器	口縁部・体部 一部欠損	15.3	6.1	6.1	底部ヘラズリ	口縁・体部 ヘラミガキ	○	灰白色 浅黄橙色	精 選	0.4	0.4
10-37		坏形土師器	口縁部・底部 一部欠損	12.4	5.4	4.9	底部ヘラズリ	口縁・体部・底部 ヘラミガキ	○	橙 色	精 選	0.39	0.43
10-38	15-38	坏形須恵器	口縁部・底部・体部 一部欠損	13.6						灰 白 色	砂粒微量含		
10-39	15-39	高台付坏形須恵器	ほぼ完形	12.0	4.9	3.5				灰 白 色	砂粒微量含		

挿 番 号	図 番 号	器 形	現 状	法 量 (cm)			器面調整 (外面)	器面調整(内面)	内面黒色処理	色 調	胎 土	器高 口径	底径 口径
				口径	底径	器高							
10-40	15-40	甗形土師器	口縁部・胴部 一部欠損	13.0	6.9	10.1	ロクロ整形 底部周辺ヘラケズリ	体部ハケ目		橙 色	砂粒含		
10-41	15-41	甗形土師器	欠損	14.5	9.6	12.4	ロクロ整形 底部周辺ヘラケズリ	体部ハケ目		淡赤褐色 褐灰色	砂粒含		
10-42		甗形土師器	胴下半欠損	17.7			口縁部指ナデ 体部ヘラナデ	口縁・体部ナデ		浅黄橙色	砂粒少量含		
10-43	16-43	鍋形土師器	ほぼ完形	31.5	6.8	14.6	口縁部・体部横位ナ デ、底部ヘラケズリ	口縁・体部横位ナ デ、底部斜位ナデ		にぶい橙色	砂粒多量含		

下乳牛遺跡

S102竪穴住居跡（第12、13、14、15図 図版8、9）

平面形 東西辺長4.2m、南北辺長4mで、ほぼ正方形を呈する。カマドは西壁を除いた3壁に計4基構築されている。

堆積土 5層よりなる自然堆積を示すが、住居跡内北面部は木根により土層が攪乱されている。1層は南西部にのみ検出され、浮石を比較的多量に混入する。他層では浮石の混入が極めて少ない。4、5層は炭化物と焼土を混入、特に層下位部にはやや多く、一部は炭化材である。

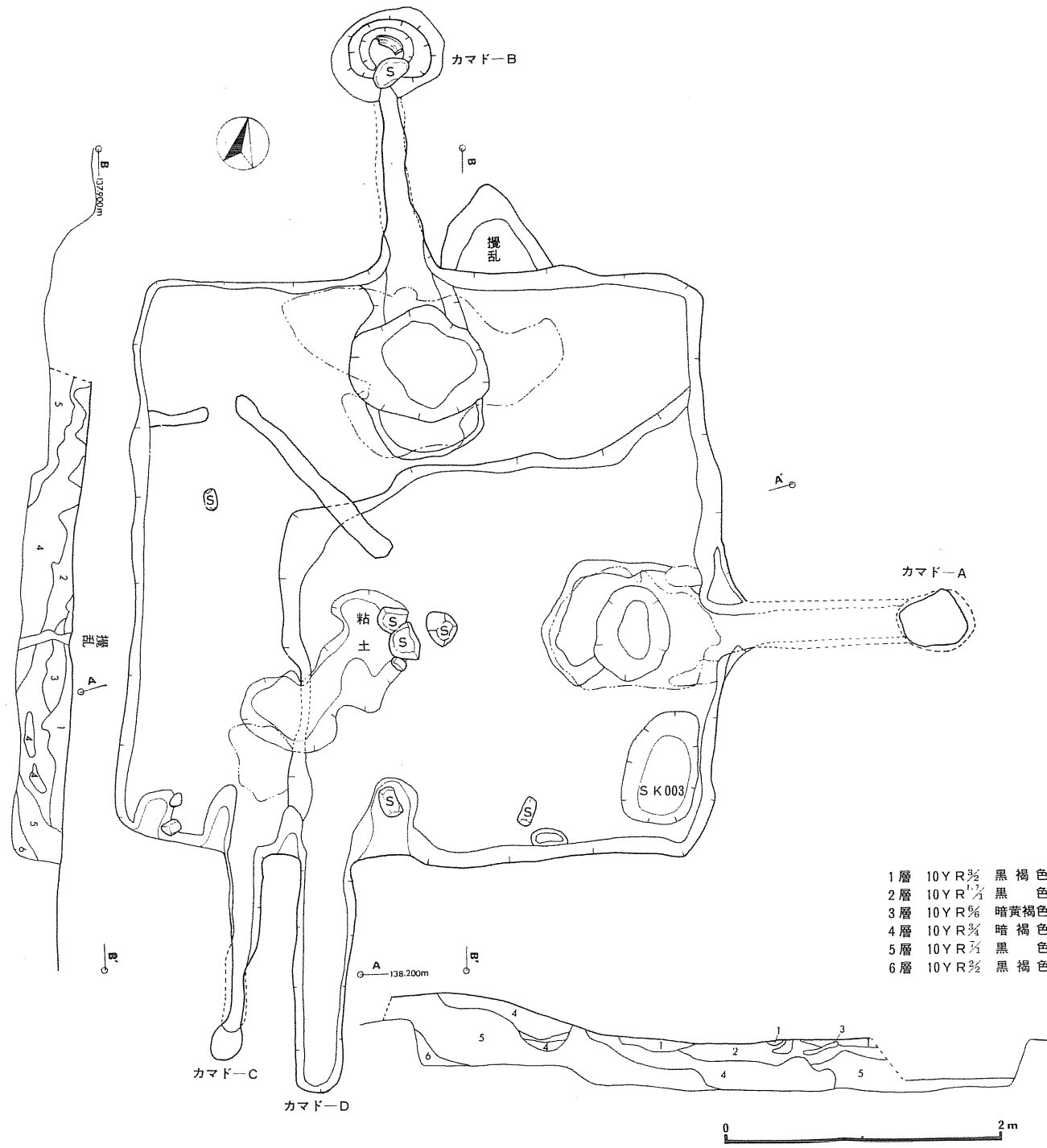
柱穴 南面西寄り壁に接して楕円形のもので一本検出されたに留まる。

壁 ほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は0.28～0.3m。北壁の西寄り部分は、木根により破壊されている。

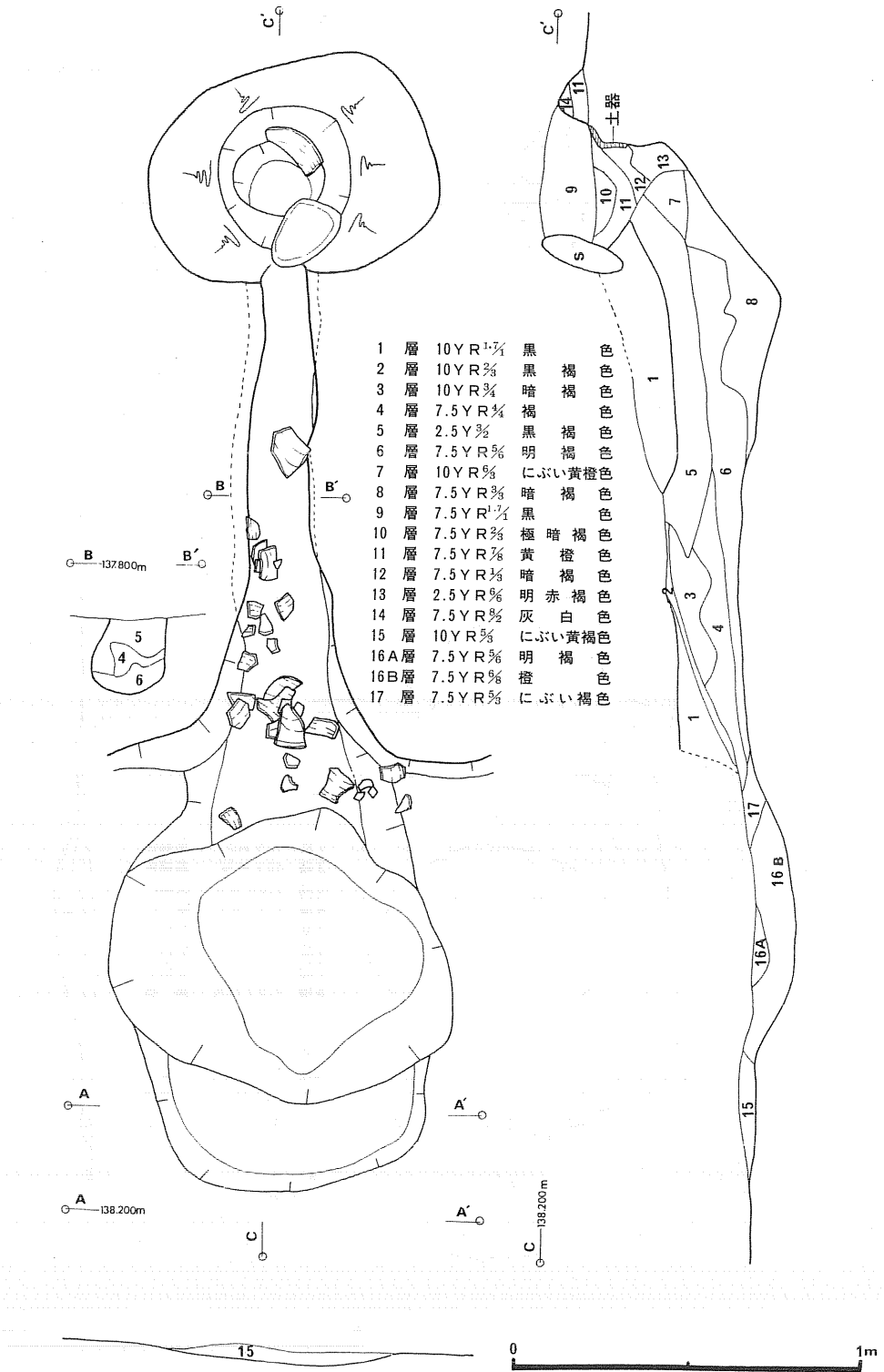
壁溝 検出されない。

床面 南東部で2.6m×2.7mの方形に、約0.12m一段深く凹んでおり、この部分の東側には白色粘土粒子が薄く散布していた。床面は全体がやや凹凸を呈し、土質は軟弱だが、カマドA、B周辺は硬くしまっている。

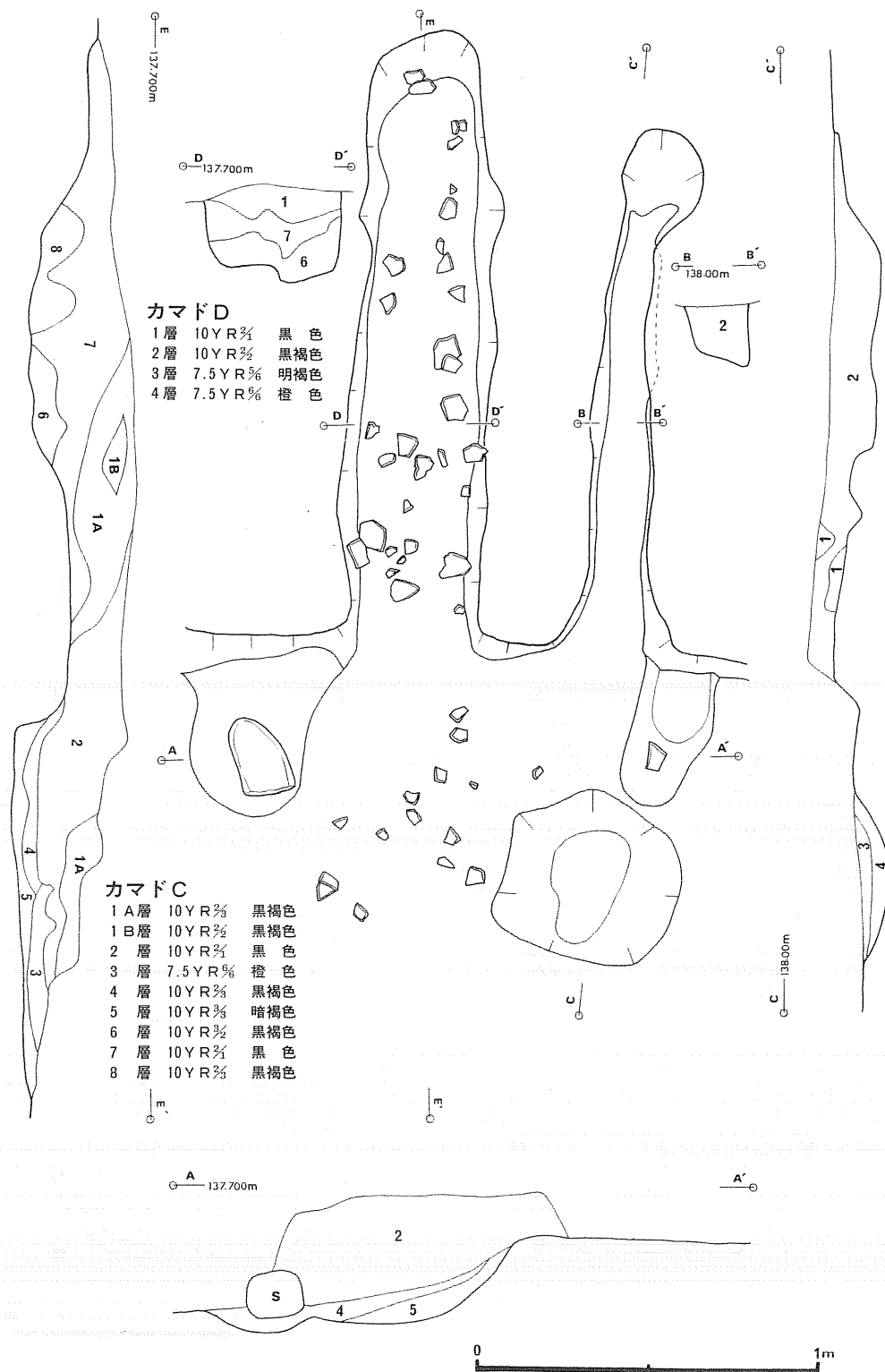
カマド 4基検出。北壁、東壁にそれぞれ1基、南壁には2基が並列。カマドAは東壁のやや南寄りに壁面に直交して構築されている。燃烧部は地山を約0.06m掘り凹めてつくられ、焼土堆積は少ない。袖部は崩壊が激しいがわずかに地山褐色土の盛り上がり痕跡としてみられ、粘土塊が付着。煙道部は地山をくり抜いたトンネル式のもので、断面は逆台形状を呈する。最大幅0.35m、深さ0.22m。底面は燃烧部末端で一段高く上昇した後、ほぼ平坦にのび、煙出し付近で緩やかに下降する。煙出し部は径0.5mの円筒状を示し、上面からの深さ0.6m、上面部に底の欠いた甕形土師器をはめこんでいる。カマドBは北壁のほぼ中央に壁面に直交して構築され、燃烧部は地山を約0.08m掘り凹めて作られ、そこに多量の焼土が堆積。底面は火熱により赤褐色に硬化している。袖部は痕跡を留めない。煙道部には焼土の他に多量の地山褐色土が堆積しているが、構築時は地山をくり抜いたトンネル式の構造であったと考えられる。断面は袋状を呈し、最大幅0.2m、深さ0.24m。底面は平坦にのび末端で緩やかに下降、煙出し部に至る。煙出し部は一旦緩く昇った後、ほぼ垂直に立ち上がり、上面部分は円筒状を呈する。上面には底部を欠いた甕形土師器をはめこんでいたと思われ、その一部が残存する。加えて周囲には粘土を厚くリング状に貼り巡らしており、その一端に拳大の石を設置。カマドC、Dは南壁東寄りに壁面に直交して2基が並列している。燃烧部はCが痕跡無く、Dは浅く掘り凹められ少量の焼土堆積をみる。袖部は痕跡なし。煙道部はいずれも地山を浅く掘り下げ、底面はCが平坦にのびた後、一段下降、やがて緩やかに立ち上がる。Dは荒れて凹凸を呈しており、緩やかに下降した後やや立ち上がる。堆積土に甕形土師器片を含む。煙出し部はいずれも不明瞭である。



第12図 SI 02竖穴住居跡実測図

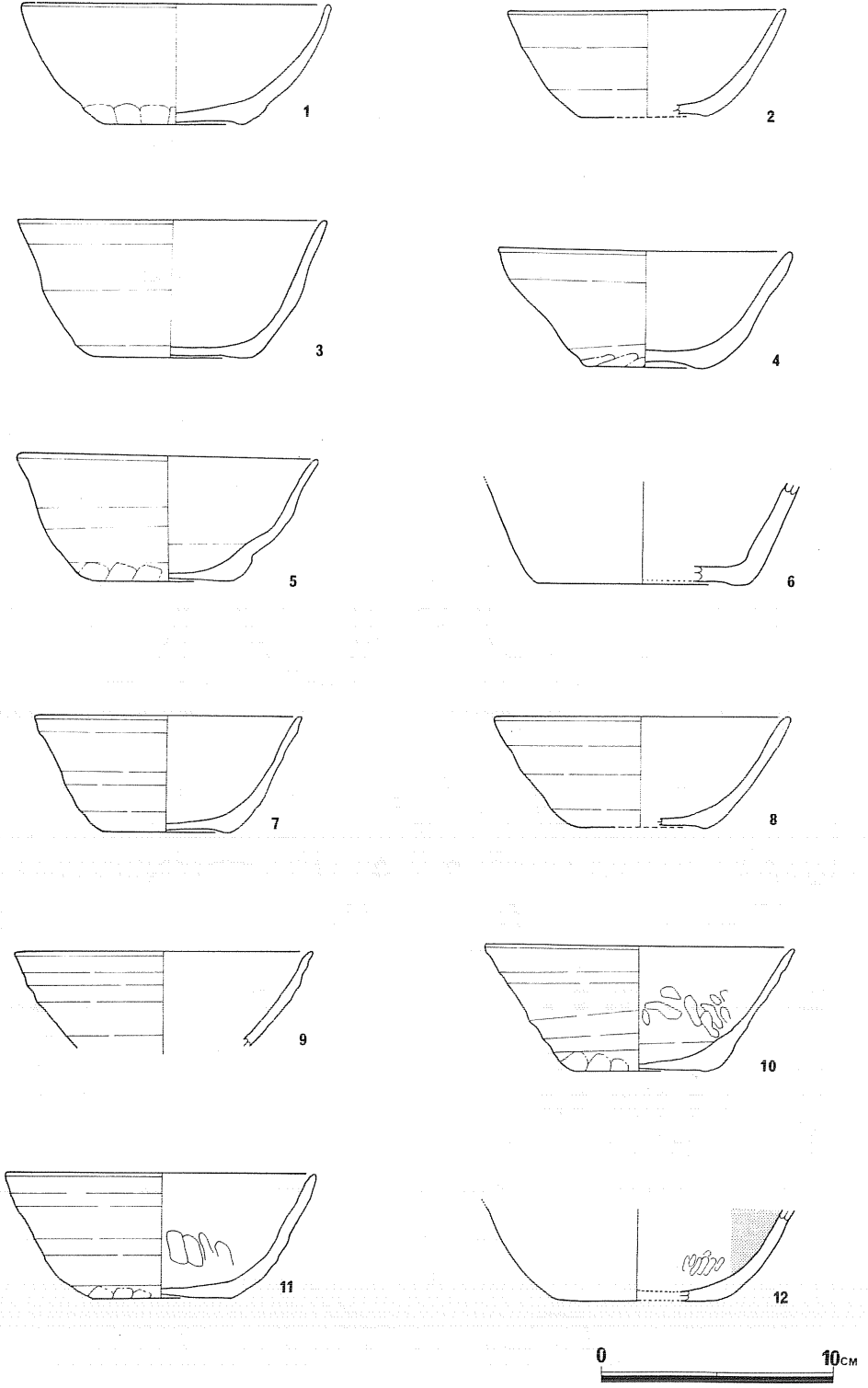


第14図 SI 02 縦穴住居跡カマド-B 実測図

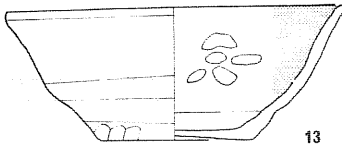


第15図 SI 02竪穴住居跡カマド-C、D実測図

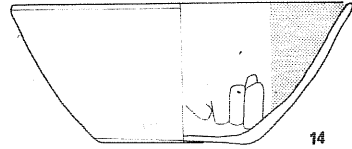
下乳牛遺跡



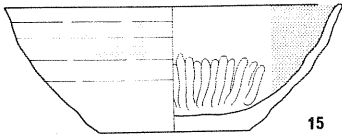
第16図 SI 02豎穴住居跡出土遺物実測図(1) (坏形土師器)



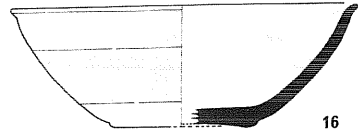
13



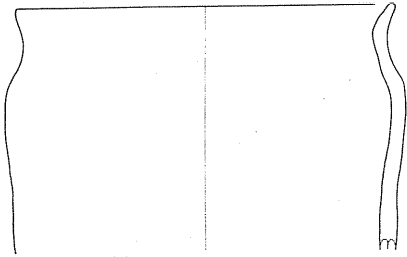
14



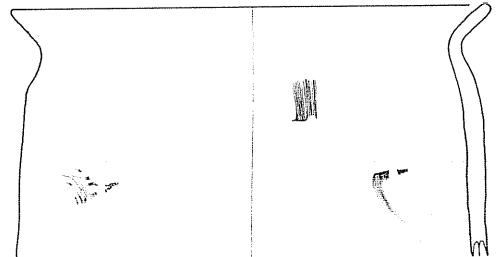
15



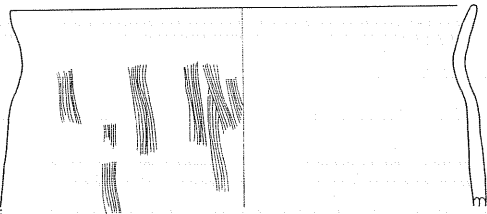
16



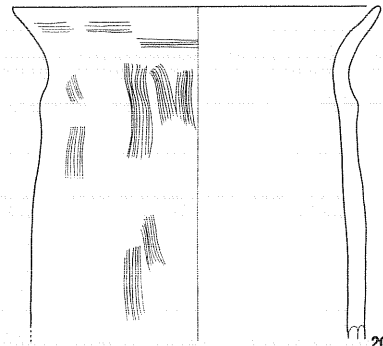
17



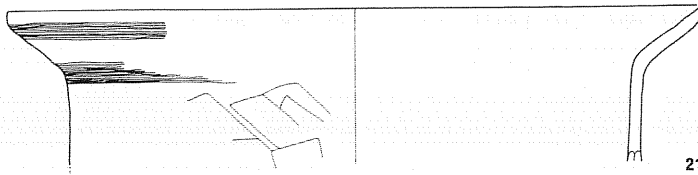
18



19



20



21

第17図 S I 02 竖穴住居跡出土遺物実測図(2)

(坏形土師器13~15 坏形須恵器16 甕形土師器17~21)





第18図 SI 02 竪穴住居跡出土遺物実測図(3) (甕形土師器)

出土遺物 (第16、17、18図 図版17、18)

土師器を主体とし、須恵器は坏形土器が1個出土。坏形土師器は堆積土2、4層から床面にかけて出土。特に住居跡内東面部、床面が一段方形に掘り凹められた部分に集中しており、その多くは破片で散乱している。形態のほぼ判別できるものは15個であり、内10個は底部周辺にヘラケズリ調整を施す。甕形土師器は21がカマドAの煙出し部上面に設置されていたもの。20は頸部に段を有し、器面には刷毛目調整が施される。カマドD煙道部先端の堆積土上面から出土。他はカマドA、Bの燃烧部及びその周囲からの出土。坏形須恵器はカマドAに隣接して床面から出土。土器に関する計測等については第2表に示した。

第2表 S I 02出土土器観察表

挿 番 号	図 番 号	版 番 号	器 形	現 状	法 量 (cm)			器面調整 (外面)	器面調整(内面)	内面黒色処理	色 調	胎 土	器高	底径
					口径	底径	器高						口径	口径
17-1			坏形土師器	口縁部・体部 一部欠損	13.4	6.1	5.2	底部周辺ヘラケズリ			浅黄橙色	砂粒含有	0.38	0.45
17-2	17-2		坏形土師器	体部底部 一部欠損	12.1		4.5				灰白色	砂粒微量混入	0.37	
17-3	17-3		坏形土師器	体部一部欠損	13.4	6.5	6.0				橙 色	砂粒含有	0.44	0.48
17-4	17-4		坏形土師器	口縁部・体部 一部欠損	12.8	5.2	5.0	底部周辺ヘラケズリ			浅黄橙色	砂粒微量混入	0.39	0.40
17-5	17-5		坏形土師器	口縁部・底部 一部欠損	13.0	5.9	5.4	底部周辺ヘラケズリ			灰黄褐色	精 選	0.41	0.45
17-6			坏形土師器	口縁部・体部・底部 一部欠損				底部周辺ヘラケズリ			浅黄橙色	砂粒微量混入		
17-7			坏形土師器	口縁部・体部・底部 一部欠損	11.6	5.6	5.0				浅黄橙色	砂粒微量混入	0.43	0.48
17-8	17-8		坏形土師器	口縁部 一部欠損	12.8	5.5	4.8				灰白色	精 選	0.37	0.42
17-9			坏形土師器	底部欠損	12.9						浅黄橙色	砂粒微量混入		
17-10	17-11		坏形土師器	口縁部・底部 一部欠損	13.6	5.8	5.4	底部周辺ヘラケズリ	ヘラミガキ		灰褐色	精 選	0.39	0.42
17-11			坏形土師器	口縁部 一部欠損	13.5	6.0	5.4	底部周辺ヘラケズリ	ヘラミガキ		灰褐色	精 選	0.40	0.44
17-12	17-12		坏形土師器	口縁部・体部・底部 一部欠損				底部周辺ヘラケズリ	ヘラミガキ	○	黄褐色	精 選		
18-13	17-13		坏形土師器	口縁部・底部 一部欠損	13.6	5.9	5.1	底部周辺ヘラケズリ	ヘラミガキ	○	灰白色	精 選	0.37	0.43
18-14	17-14		坏形土師器	口縁部 一部欠損	13.6	5.8	5.5	底部周辺ヘラケズリ	ヘラミガキ	○	橙 色	砂粒含有	0.40	0.42
18-15	17-15		坏形土師器	ほぼ完形	13.5	5.7	5.0	底部周辺ヘラケズリ	ヘラミガキ	○	浅黄橙色	砂粒少量含有	0.37	0.42
18-16	18-16		坏形須恵器	体部・底部 一部欠損	13.5		4.9				灰白色	砂粒微量混入	0.36	
18-17			甕形土師器	口縁部・胴部 $\frac{1}{4}$ 欠損 底部欠損	15.0			口縁部ナデ 胴部下半ヘラナデ	口縁部・胴部ナデ		灰褐色	砂粒少量混入		
18-18	18-18		甕形土師器	口縁部・胴部 $\frac{1}{4}$ 欠損 底部欠損	(19.3)			口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目		浅黄褐色	砂粒混入		
18-19	18-19		甕形土師器	口縁部・胴部 $\frac{3}{4}$ 欠損 底部欠損	(18.7)			口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ		橙 色	砂粒混入		
18-20			甕形土師器	口縁部・胴部 $\frac{1}{4}$ 欠損 底部欠損	(14.7)			口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ		橙 色	砂粒多量混入		
18-21			甕形土師器	口縁部 $\frac{3}{4}$ ・胴部 $\frac{1}{4}$ 欠損 底部欠損	(27.7)			口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	口縁部ナデ		灰褐色	砂粒混入		
19-22	18-22		甕形土師器	胴部一部欠損	24.0		32.6	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	口縁部ナデ 胴部ヘラナデ		浅黄橙色	砂粒多量混入		
19-23	18-23		甕形土師器	胴部一部・底部欠損	23.3			口縁部ナデ 胴部ヘラナデ	口縁部ナデ 胴部ハケ目		褐色	砂粒多量混入		

下乳牛遺跡

(2) 竪穴状遺構

S I 01竪穴住居跡南面に隣接して1棟検出。出土した2点の環形土師器小片から平安時代に属するものと考えられる。各辺長軸の方向はS I 01のそれにほぼ一致しており、本遺構も焼失の痕跡を留めている事から、S I 01に関連する施設（例、小屋等）と考えられる。

S I 01竪穴状遺構（第19図）

平面形 東西辺長1.3m、南北辺長1.4mでほぼ方形を呈する。

堆積土 5層よりなる自然堆積。1層と2層の上部部に浮石を多量に混入。2層下位部から底面にかけて多量の炭化物と焼土が混入し、一部は炭化材。

壁 垂直に立ち上がり、壁高は南、西壁で底面からの高さ0.30~0.32m。他は0.14~0.21m。遺構確認面で壁に沿い、壁板と思われる炭化材列の上端部が一巡しているのを確認したが堆積土中ではほとんどみられなく、わずかに北壁の一部で少量の壁板材が壁面に付着。

壁溝 上面幅0.04~0.07m、深さは0.03~0.05mで、壁に沿い一巡している。

底面 東面から西方向に緩く傾斜。土質は軟弱で凹凸を呈す。北東隅と中央部南寄りにそれぞれ上面径0.18m、0.22m、深さ0.09m、0.19mのピットを有す。

その他 2層下位面から底面にかけて多量の炭化材を検出。炭化材は板材と丸太材で、板材は主に遺構内南面部に多い。良好に残存するもので幅0.05~0.25m、長さ0.9m~0.9mのものがほぼ下面と同一レベルに保って並列しており、敷板材と考えられる。丸太材は直径0.03~0.04mのものを主とし、長さは0.1~0.3m、板材の上面で検出されるものが多い。

出土遺物

環形土師器の小片が2点、2層下位面より出土。

(3) 土 壙

調査区南西部の緩やかな斜面上に3基検出された。遺物は出土せず時期は不明。

S K 01土壙（第20図）

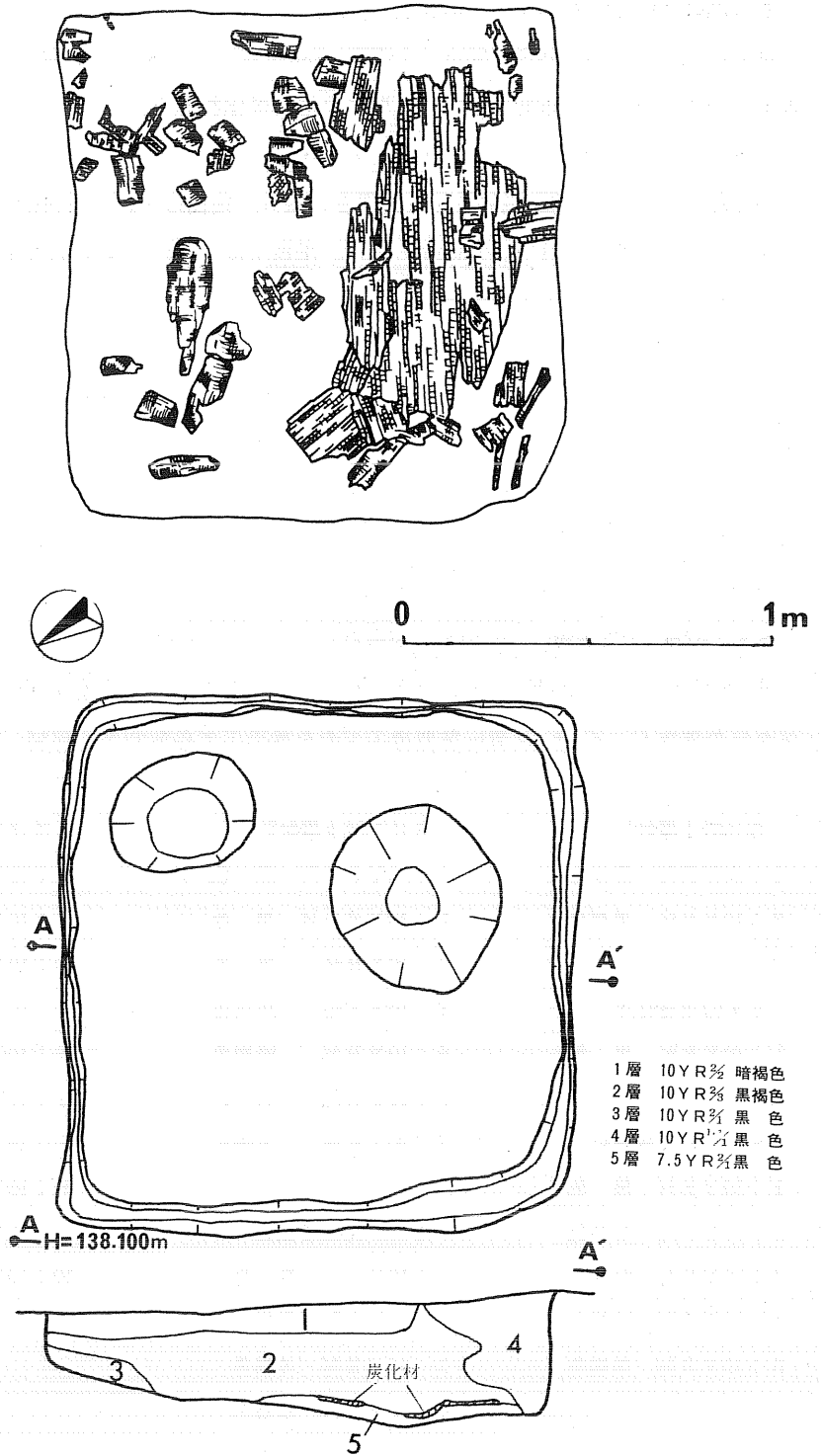
平面形状は円形を呈し、開口部径0.85m、皿状に掘り込まれ、底面壁面共なめらかで硬くしまっている。深さ0.34m、堆積土は2層よりなる自然堆積で、1層に浮石粒子を混入。

S K 02土壙（第20図）

平面プランは円形を呈し、開口部径0.88m。深さは0.15~0.2mと浅く、底面は凹凸が激しい。堆積土は1層よりなる自然堆積で、浮石粒子を少量混入。

(4) フラスコ状ピット

調査区南の極めて緩やかな斜面上に、隣接して3基検出。



第19図 SK(D01)竖穴状遺構炭化物出土状態図・実測図

下乳牛遺跡

SK(F)01フラスコ状ピット (第20図 図版10)

平面形は円形で開口部径1.06m。上面下0.6mで緩くくびれる。深さ1.07m。底面径0.7m。堆積土は5層よりなる自然堆積で、5層に少量の炭化物混入。

SK(F)02フラスコ状ピット (第20図 図版10)

平面形状は円形で、開口部径1.0m。深さ1.21m。底面は平坦で中央部に径0.17m、深さ0.1mのピット状の凹みを有す。底面径0.75m。堆積土は7層からなる自然堆積で、最下層の7層は炭化物を含み硬くしまっている。

SK(F)03フラスコ状ピット (第20図 図版11)

平面形プランは円形で、開口部径0.8m。上面下0.8mでやや強くくびれ、深さ1.2m。底面は平坦だが、やや凹凸気味、底面径0.85m。堆積土は5層よりなる自然堆積。

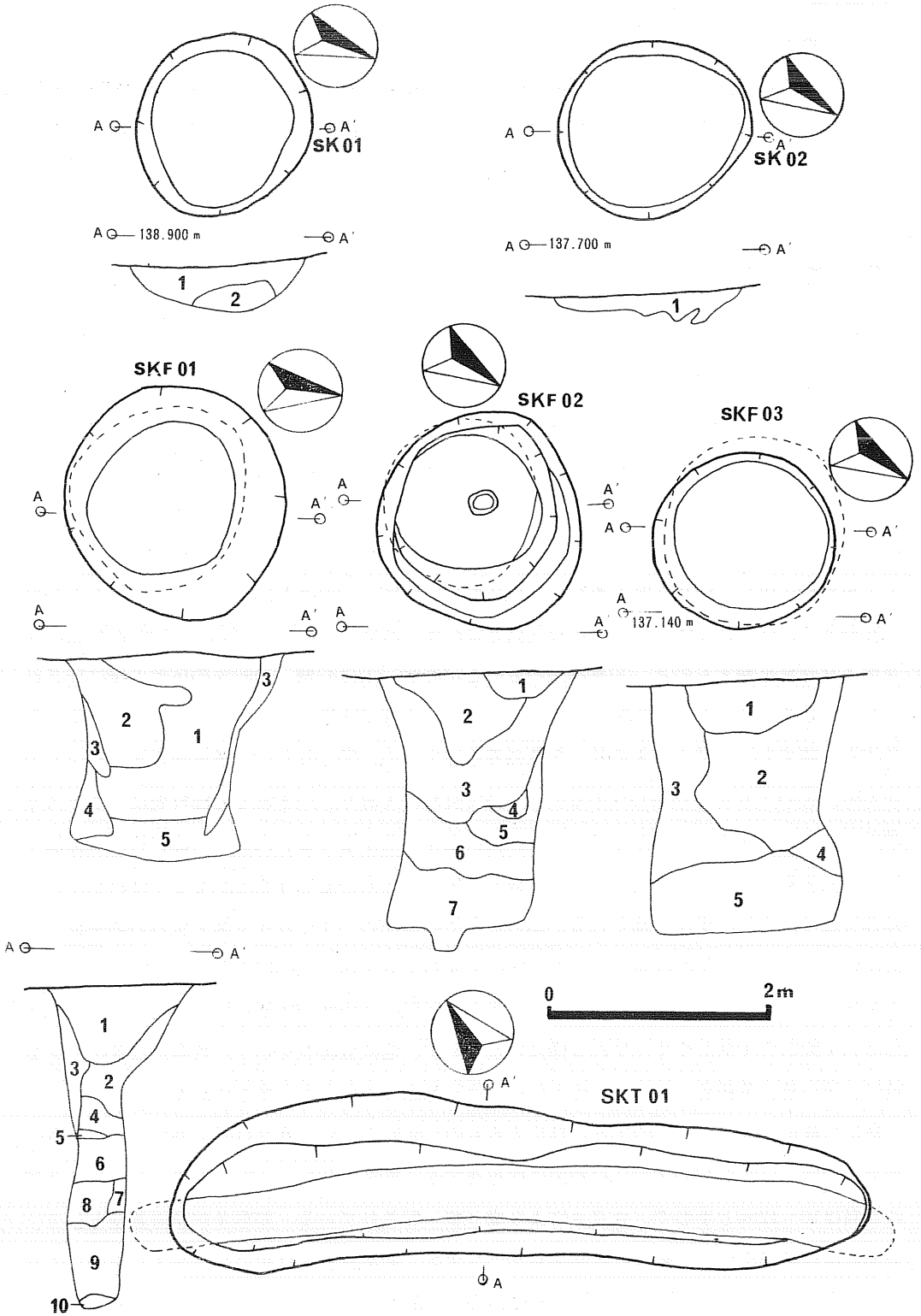
(5) 陥し穴状遺構

調査区北西の比較的急勾配の傾斜地に1基検出された。遺物は出土せず。

SK(T)01陥し穴状遺構 (第20図 図版11)

開口部長軸3.5m、短軸0.2m、深さ1.45m。断面形状はY字形を呈する。堆積土は10層よりなる自然堆積で、2、4、6層に壁崩落土である褐色土を比較的多く含む。

SK01土層註記	SK(F)02土層註記	SK(T)01土層註記
1: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色	1: 10YR $1\frac{7}{1}$ 黒色	1: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒色
2: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色	2: 10YR $1\frac{7}{1}$ 黒色	2: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色
	3: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒色	3: 10YR $\frac{2}{2}$ 褐色
	4: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色	4: 10YR $\frac{2}{2}$ 暗褐色
SK02土層註記	5: 10YR $\frac{2}{2}$ 暗褐色	5: 10YR $\frac{2}{2}$ 褐色
1: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒色	6: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒色	6: 10YR $\frac{2}{2}$ 暗褐色
	7: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色	7: 10YR $\frac{2}{2}$ 黄褐色
SK(F)01土層註記		8: 10YR $\frac{2}{2}$ 褐色
1: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒色	SK(F)03土層註記	9: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色
2: 10YR $\frac{2}{2}$ 暗褐色	1: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒色	10: 10YR $\frac{2}{2}$ 褐色
3: 10YR $\frac{2}{2}$ 暗褐色	2: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色	
4: 10YR $\frac{2}{2}$ 暗褐色	3: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色	
5: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色	4: 10YR $\frac{2}{2}$ 暗褐色	
	5: 10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色	



第20図 S K01~03、S K(F)01~03、S K(T)01実測図

(6) 遺構外の出土遺物

量的には極めて少ない。土器は縄文土器の小片で器面の風化が激しい。土師器は坏形土器の小片で、1点は底部周辺にヘラケズリ調整を施している。石器はフレーク類が5点出土。いずれも図化するには至らなかった。

6 ま と め

出土遺物について 本遺跡からの出土遺物は、土器が縄文土器、土師器、須恵器で、石器は少なく、数点の剥片石器に留まる。他に石製品として石帯、木製品として皿状のものが出土している。縄文土器はいずれも遺構外出土で量的に少なく、器面の風化が激しいが縄文時代後期に属するものと考えられる。本項では出土量の多い土師器と須恵器について記述する。

土師器と須恵器の大部分は2軒の平安時代竪穴住居跡から出土しており、中でも土師器は量的に多い。器形のほぼ判明できるものは土師器が坏形土器52個、甕形土器10個、鍋形土器1個で、須恵器は坏形土器が3個である。これら器形の判明しているものについてみると坏形土師器では、いずれも底面に回転糸切り痕を留める。器面調整は外面の場合、(1)底部付近にヘラケズリ調整を施すものと、(2)無調整のものがある。(1)は47個、約90%の坏形土器に施されており、調整は底部外周を手持ちにより、0.8～1cmの幅で平滑に行っている。内面は、①ヘラミガキを施すもの、②ミガキの後、黒色処理を施すもの、③これらの処理を一切施さないものがある。①のミガキは13個25%のものについて行われており、いずれも底部外周にヘラケズリ調整が施されている。又これらのミガキは内面全体に及ぶものと、内面の一部、特に口縁部や底面付近を集中的に行うものがあり、後者の場合、底面付近では放射状もしくは斜状に、口縁部付近では斜状か横位に施される。②の黒色処理は①のヘラミガキを施すものの約半数、7個に施されている。器形は体部がやや内湾して立ち上るものと、ほぼ直線状に立ち上るものがあり、その出土比は3：5である。又、後者の器形には内面に処理を施す場合が多い。口縁部は約1割弱の4個がややくびれる様に外反するが、他は直線状を示す。色調は浅黄橙色を基調に、灰白色、黄褐色が混ざり、焼きむらによる色調の多様さを示すものが多い。

甕は口縁部が強く「く」の字状に外反するものが80%を占め、残りは緩く外反する。前者の場合、一例は口縁部が幅広で、口頸部に段を有する。器形は比較的大形のものが多いが、2個は器高は10～12cmと小形で、ロクロにより成(整)形されている。整形及び器面調整として、外面には口縁部にナデ、胴部には刷毛目やヘラナデ、底部付近には粗いヘラケズリを施しており、内面には、いずれも横位、斜位の刷毛目痕跡を留める。

須恵器はいずれも坏形土器で、内1個は高台を付す。底部の欠損するものを除き、他は底面

に回転糸切り痕を留める。器形は体部が内湾気味に立ち上がるものと、直線状に立ち上がるものがあり口縁部は、前者の場合外反する。須恵器は土師器に比べ、出土量は極めて少ない。

次に上記に述べた土器について、それぞれ出土した2軒の住居跡毎に観察してみたい。

S I 01住居跡では器形の判明できるものは、土師器が坏形土器37個、甕形土器3個、鍋形土器1個でその他、坏形須恵器が2個である。坏形土師器はいずれも底面に回転糸切り痕を留め、底部付近にヘラケズリ調整を施している。内7個、約20%のものは内面にヘラミガキ調整を行い、その内3個については内面に黒色処理を施している。器形は体部が直線状に立ち上がるものが33個で、残りは内湾気味に立ち上がりその比は8：1である。又、前者の場合体部中半部付近でややくびれ口縁部にかけてより鋭角に立ち上がるものが約半数を占める。口径を1とした場合、底径の比率は0.42~0.49で、その内0.45以下が20例である。これらの坏形土器はいずれも床面もしくは床面上に残存する板材上からの出土であり、特に35個は住居跡内北西隅部の一面にまとまっており、その内4個及び6個はそれぞれ重なり合った状態で検出された。

甕形土師器は2個が小形のもので、ロクロにより成(整)形されており、内一例は底面に回転糸切り痕を留め、坏形土器の場合と同様、底部外周にヘラケズリ調整を施している。他の1個は胴部上半にロクロの使用痕を留めており、下半部にかけては粗いヘラケズリを施している。甕形土器はいずれも口縁部が、くの字状に外反するもので、前者の2個は西壁付近から、残りはカマド燃焼部内より出土した。

須恵器はいずれもカマド東面に隣接した床面から出土したもので、内一例は高台を付し、底面に回転糸切り痕を留める。

この様に本遺構出土の土器はいずれも床面上や、床面上に残存する炭化板材上、もしくはカマド内より検出されており、S I 01住居跡が偶発的に焼失し、その後廃棄されたと思われる状況と兼ね合わせ、ほぼ生活時の土器使用状況を最小限留めているものであり、良好な遺物のセット関係を示していると考えられる。

S I 02の場合は器形の判明できるものは、土師器が、坏形土器15個、甕形土器7個で、須恵器は坏形土器が1個である。坏形土師器はいずれも底面に回転糸切り痕を留め、その内、底部付近にヘラケズリ調整を施すものとそうでないものの比は2：1である。その他6個、40%の土器は内面にヘラミガキを施し、内4個はさらに黒色処理を施しているが、他に同住居跡内より出土している破片の場合も考慮するならば、その比率はさらに高くなると考えられる。器形は、体部が直線状に立ち上がるものと、内湾状に立ち上がるものがあり、その比率は4：1であり、内面処理を施すものは前者の器形に多い。

甕形土師器はいずれも比較的大形のもので、外面には刷毛目やヘラナデ、内面には粗い刷毛目を留める。口縁部はくの字状に外反する。

下乳牛遺跡

須恵器は坏形土器が1点である。

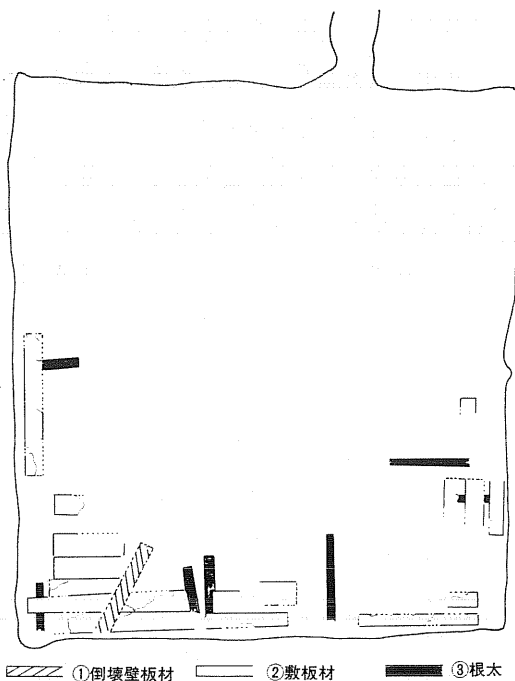
これらの遺物はカマド内から主として出土した甕形土師器を除き、他の多くは堆積土3層から床面にかけて、いずれも破片で散乱した状態を呈しており、住居跡内東部の方形に一段凹んだ一画に集中している事から、意図的に投棄されたとも考えられる。

以上の事から出土土器中、坏形土師器においてはいずれも成形にロクロを利用し、底部の切り離しは回転糸切りによるものであり、かつ須恵器を共伴しており、桜井氏による第Ⅱ型式^(註1)、及び氏家氏の表杉ノ入式の範疇に加わるものであろう。加えてロクロにより製作された土師器^(註2)は一般に時期が下るにつれ手順を省略する傾向を持ち、糸切りの後ヘラケズリにより再調整を行うものがより古い段階とみられる。この事は表杉ノ入式が10C前半を中心にかなりの幅を持った時期^(註3)と考えられる中で、ロクロ使用により成形、糸切り手法で切り離す段階を9C以降と設定しながらも、その過程として体部の一部に再調整を施すものから、これらを一括省略する変遷がみられる事である。従って本遺跡で最も多く出土した、底部にヘラケズリ調整を施す坏^(註4)については、平安時代中期を境とし、ややそれ以前の時期、9C後半～10C初頭が設定されると思われ、同時にこれらの土器を一括出土したS I 01竪穴住居跡に関しても、同様な時期設定が推察される。

遺構について 本遺跡で検出された遺構は住居跡2軒、土壇2基、フラスコ状ピット3基、及び陥し穴状遺構1基である。住居跡が平安時代に属するのを除き、他の遺構については出土遺物が無く時期は不明である。本項では平安時代の住居跡の内、焼失家屋と思われるS I 01について、特に検出された炭化材からその考えられる遺構の特色を観察してみたい。

住居跡内より多量の炭化物と炭化材が検出された。これらはいずれも堆積土2層の浮石層を除去した時点で認められ始めた。検出状況は、① 3層堆積土中で検出され、遺構内ほぼ全域に分布している。② 壁面に沿って直立しほぼ一巡する。③ 床面直上にて検出され、主として住居跡内南面部の壁付近に集中している。①の場合、その多くは細片である。しかし北面壁東寄りに検出された板材(第21図①)は、一端が壁面に近接し、その下位に、接合する板材が壁面に直立している事から、壁板材の倒壊したものである。この折存する板材は長さ1.2mで、接合する壁板材の上端は壁の上面下0.12mに残存している。この事から壁板材は、現況で壁の上端より少なくとも約1.08mの高さまですえられておいた事になり、上屋構造としては、屋根を地表から切り離れた切り上げ造りであったと考えられる。②で検出された板材は上記の事と兼ね合せ、周壁の土留めのための腰板の役目も兼ねていたろうが、むしろ壁板としての性格を主としたものと考えられる。これらはいずれも本来はそれぞれの側部を密着させ規則的に並べられておいたもので、現存する良好な例の場合幅は0.24～0.34m、中でも0.28～0.3mのもの

が多い。又、壁溝の一部では底面に長楕円状の凹みが検出され、上位に残存する炭化壁板材と極めて似かよった幅、長さを示すものもあり、さらにわずかではあるが、東壁では壁溝内堆積土中に壁板材の残存が一部にわずかながらみられる。この事から壁板材は壁溝内にその下端部を設置しその後溝内に褐色土を混入した土を埋め戻し固定したと考えられる。なお北面、北西面及び北東面では床面にしかれた板材の壁方向の端部を、壁板材に密着させており壁板材の固定をさらに強化している。壁板材は壁面に密着させて立てかけているが東面部では壁面と板材との間に幅0.7~0.1mのすき間を設け、ここに地山褐色土を封入している。③の場合は、板材及び棒材で、板材は残存の良いもので幅0.35~0.4 m、長さ0.8~0.9mである。板材の多くは



第21図 S I 01 竪穴住居跡残存炭化材概略図

壁面に平行して規則的に並べられそれぞれの、側部を互いに密着させている。敷板材(第21図②)と考えられる。丸太材は壁面及び敷板材に直交する形で検出され、その一部は板材の下にしかれた状態で検出されており根太(第21図③)と考えられる。根太は下位部分を土中に埋めこみ安定を良くしており、根太と敷板材との間に生ずる空間には褐色土をしていて、板材の固定を計っている。又、敷板材の検出された住居跡内北側では、板材除去後の床面は軟かくブサブサしており凹凸が激しい。これに対して南側はカマド周辺を中心に硬くしまって比較的平坦である。この事は本住居跡において床面の利用が土間と板敷きに分かれており、カマド周辺を土間としそれに対面する北側の空間を板敷きにし居間として使用した事がうかがえる。加えて北側の一面に、35個の环形土器が集中しており、一部は重ねられた状態で敷板上に検出された事から、居間としての利用状況の一端がうかがえよう。

次に本住居跡は、焼失により廃棄されたものと考えられ、焼失は故意に行われたものでなく、遺物の出土状況等から偶発的に生じたものと思われる。その後、住居後内の遺物、用材等については再利用する事なく直ちに廃棄されたと考えられる。しかし上屋に関しては梁、桁及び柱等に使用したであろう用材は検出されなかった。この事は用材が完全に焼失もしくは腐朽したか、あるいは再利用のため撤去されたかが考えられる。この事についての明確な痕跡はみられないが、柱に関するならば、柱穴内の堆積土は極めて軟質でブサブサしており、炭化物の細片

下乳牛遺跡

を比較的多く含む事から、焼失後に攪乱された可能性がある。この事は柱材が住居の廃棄時点
で抜き取られた事によるものとも考えられる。

火山灰（大湯浮石）と住居跡との関連について 近年発掘調査の増加により、鹿角地方にお
いても大湯浮石との関連を示す事例がふえて来た。これをみると、遺構内堆積土に浮石が一樣
に粒状やブロック状に混入している場合と、明確な層堆積を示している場合がある。前者は浮
石の降下堆積が地表に行われた後、一定期間を経て遺構が構築、廃棄されたと考えられる。

一方後者の場合は、① 浮石層が遺構内深く、床（底）面近くまで堆積しているものと、②
遺構内に堆積はしているが、①程深くまでなされていない場合がみられる。これらは遺構の廃
棄時期を基準にして、火山灰の降下が、① 廃棄後極めて短期間の後におこなわれた。② 廃
棄後一定の時間を経てからおこなわれたと考えられ、遺構の廃棄時期は、①の方が新しい。こ
れを各該当する鹿角市内の遺跡についてみると、②に相当する鳥野遺跡では遺構内上面に、浮
石層が厚くレンズ状に堆積している。出土土器は甕形土師器が主体で、頸部に段を有し、器面
調整は刷毛目を主体とする。①の場合は本遺跡で検出されたS I 01住居跡であり、鹿角市高市
向館遺跡の第31号住居跡もこれに相当する。両者に共通する点として出土土器は坏形土師器の場
合底部付近にヘラケズリ調整を施し、甕形土師器では頸部に段を有するものは無く、一部はロ
クロにより成形されている。この事は土器の形態、特に甕形土師器の場合からみても、①は②
に後続するものと考えられる。②の鳥野遺跡では、その該当する時期を報告者は8C後半と設
定している。又、大湯浮石は十和田 a 降下火山灰に連続するものであるが、十和田 a 降下火山
灰の噴出年代は「平安時代中期～末期(A D 1,000年前後)と推定」^(註7)されている。これらの事か
ら本遺跡における大湯浮石の降下年代は前述した様にS I 01竪穴住居跡廃棄の時期と大きな隔
たりが無く同住居跡出土の土器年代と兼ね合せて、平安時代中期、10C初頭に基点をおきなが
らも、やや幅を持つ時期を設定しておきたい。

註

- 1 桜井清彦 1958 『東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題』 『館址』
- 2 氏家和典 1957 『東北土師器の型式分類とその編年』 『歴史 14輯』
- 3 小笠原好彦 1980 『東北における平安時代の土器についての二、三の問題』 『東北考古学の諸
問題』
- 4 氏家和典 1967 『陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって一奈良・平安期土師器の諸問題』 『山
形県の考古と歴史』
- 5 秋田県教育委員会 1978 『鳥野遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第49集
- 6 鹿角市教育委員会 1981 『高市向館遺跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料22
- 7 大池昭二 1972 『十和田火山東麓における完新世テフラの編年』 『第4紀研究11-4』

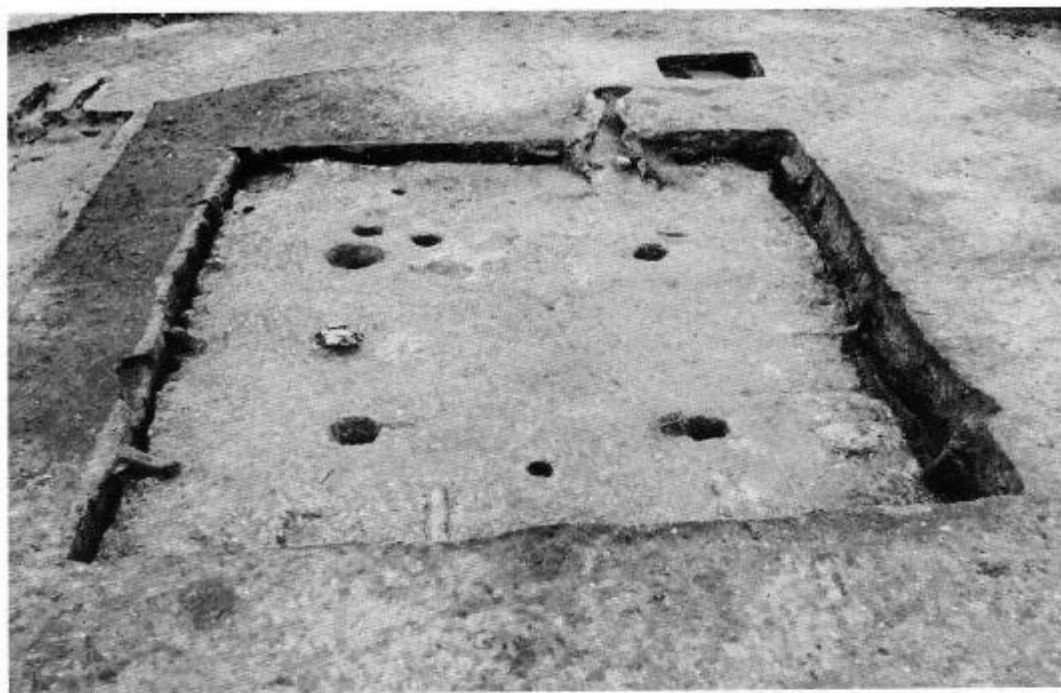


1



2

図版1 1 調査区全景(東▶西) 2 調査風景



1



2

図版2 1 S101 竪穴住居跡 (西▶東) 2 S101 竪穴住居跡カマド



1

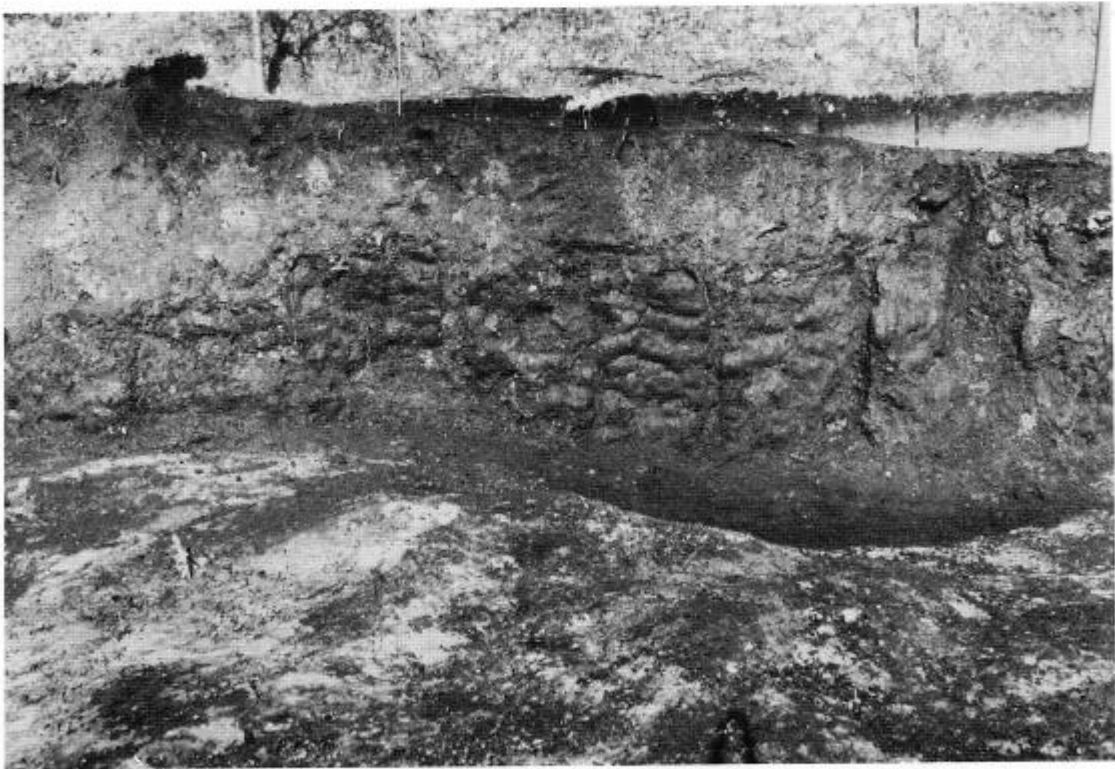


2

圖版 3 1 S101 豎穴住居跡炭化材檢出狀況 2 S101 豎穴住居跡西壁炭化壁板材



1



2

図版4 1・2 S101 竪穴住居跡北壁炭化壁板材



1



2

図版 5 1 S I 01 豎穴住居跡炭化敷板材 2 S I 01 豎穴住居跡炭化敷板材・根太



1

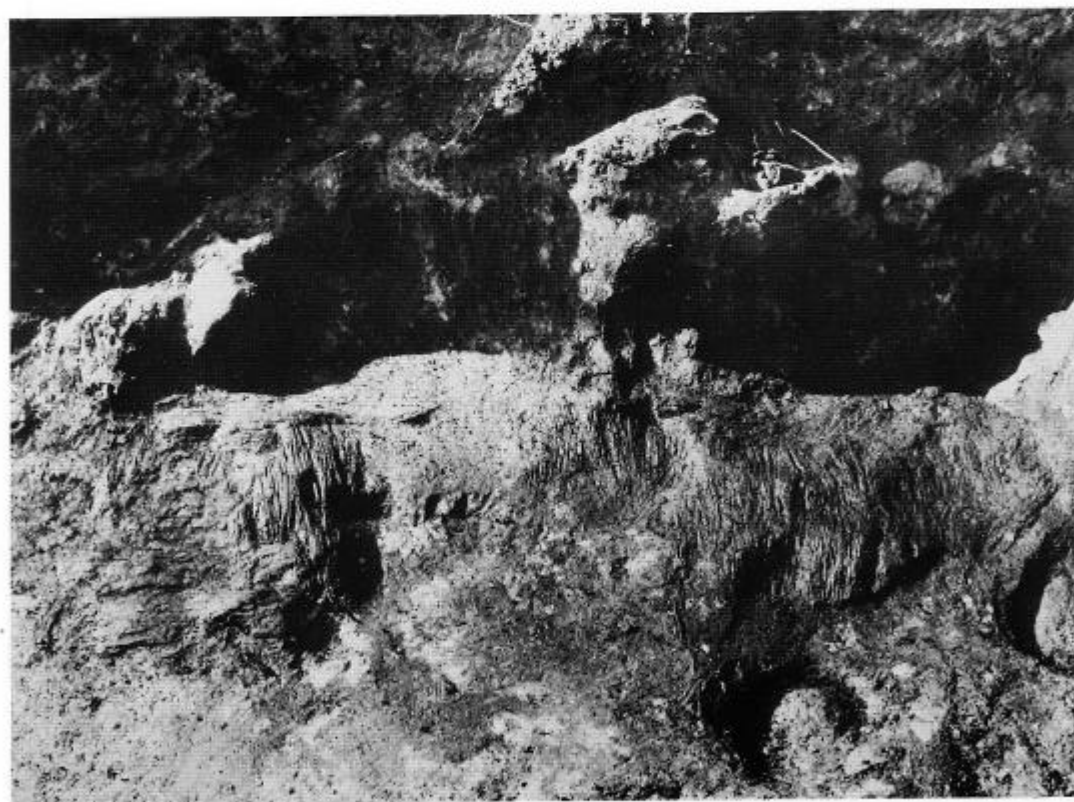


2

図版 6 1 SI 01 竪穴住居跡遺物出土状態
2 SI 01 竪穴住居跡环形土師器・皿形木製品出土状態



1

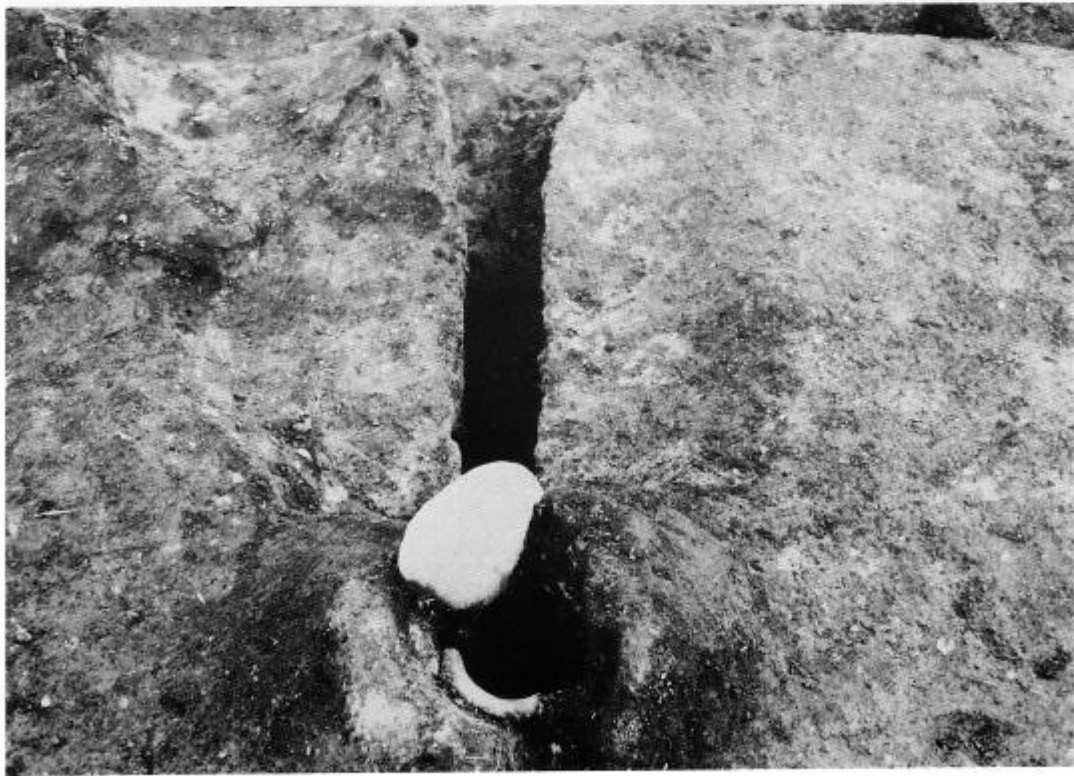


2

図版 7 1 S I 01 竪穴住居跡炭化櫛出土状態
 2 S I 01 竪穴住居跡炭化ワラ材出土状態



1

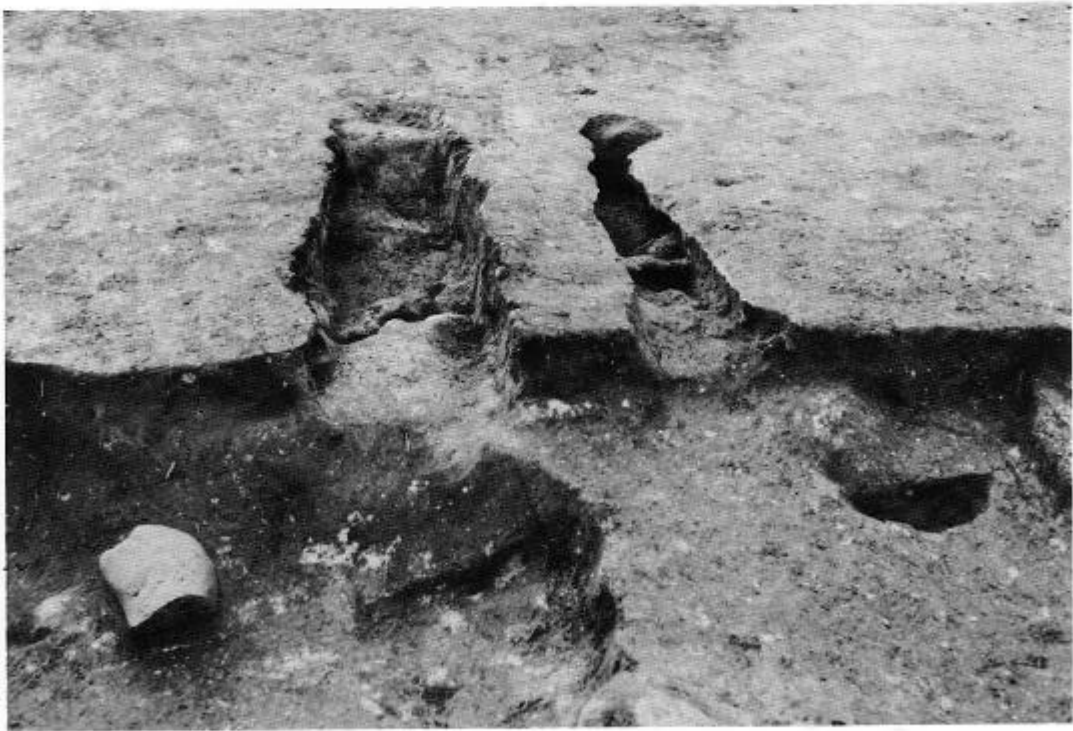


2

図版 8 1 S102 竪穴住居跡 (南▶北) 2 S102 竪穴住居跡カマドーA

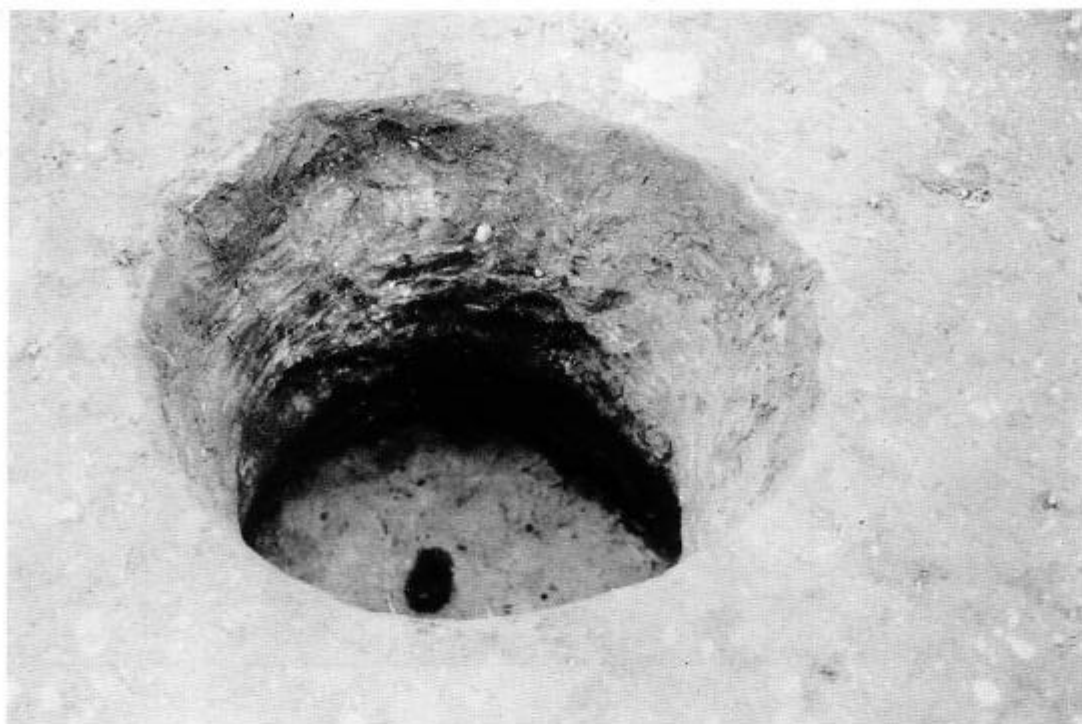


1



2

図版9 1 SI02 竪穴住居跡カマド-B 2 SI02 竪穴住居跡カマド-C、-D



1



2

図版10 1 SK(F)01フラスコ状ピット (北▶南)
2 SK(F)02フラスコ状ピット (北▶南)